GANSHO-DO BOOK STORE, LTD. TOKYO
小河滋次郎

TRAL REVIEW

中央公論

第三百五拾號

（記念號）

第三十二年第十二號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告を見て御申込の方は必ず婦人世界愛讀者なる旨御申添を乞ふ

GIFT OF
Sidney M. Ehrman



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

獨逸名譽教授 ヘッケル博士著・文學士 栗原古城譯

三版 宇宙の謎

「樹木だけ見て森を見ない實驗學者」と「森の繪を見るだけで滿足して其一々の樹木を見ない哲學者」即ち「科學と哲學との間實驗と思索との間の不自然なる矛盾」を超越して、一元論の立場から宇宙の生成、物質の本體、人類の起源、生命の現象、心靈の本質等、永遠の神秘に對して人間理智の極致を詭せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述たものが本書「宇宙のなぞ」である。苟も**智識慾**ある**讀者**には**其興味**は**小說以上**であらう。著者は現代獨逸に於ける科學界の最大大家、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるるばかりでなく、又有名の大思索家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかは、其發賣後多年を出でざる今日、獨逸本國にて既に**數十萬部**、英譯のみにて**十四萬部**の**賣行**を見たりと云ふ事實に見ても其一端が知れよう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

四六判・總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百七十頁
正價壹圓七十錢
郵稅―内地十二錢 其他十四錢

六版

ノーベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリング著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

四六判總洋布製
全一冊
正價壹圓貳拾錢
郵稅十錢

東京本郷西片町 玄黄社
電話小石川一三九番
振替東京七九五九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

長田幹彦氏著

西鶴情話

■初版再版共に發賣即日賣切 第三版出來せり

最新刊

西鶴の眞面容は、たはれ男たはれ女の情事を描破せる彼の好色本に存するも、其の公布を禁ぜられて世に行はれず。偶々讀まるゝも、字句の難解を以て其の感興を妨げらるゝこと多し。本書は西鶴の代表作と稱せらるゝ『好色一代男』『好色一代女』の二大雄篇を捉へ、幹彦氏獨特の縱横の才筆を揮つて之れを何人にも讀み易き時流の文に書き改めしもの也。此の書こそはまさしく情話中の眞情話にして亦戀物語の粹也。

■竹久夢二氏裝
■濃艶極美本
■定價金九拾錢
■郵送料八錢

近松秋江氏編

新註 近松名作集

▼布製極美本 ▼小形五百頁
▼定價八拾錢 ▼送料八錢

大近松に私淑多年、憧憬渇仰の餘近松の姓を稱するに至れる秋江氏の編に成る。時代と世話とを通じ、其代表的傑作を選び、其校合を嚴にし、其註解を密にし、且つ「近松の印象」の長論文を添へ、近松の面目を明かにせり

□眞山青果氏著 ■竹久夢二氏裝 □

西鶴 五人女

西鶴作中一代女及び一代男と並んで高名なる好色五人女を著者一流の清秀なる現代文に書き改めしもの也新たに縮刷發行す

▼再版出來 ▼價六十錢 ▼送料八錢

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二二番

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新進作家叢書

第八編
煙草と惡魔　芥川龍之介

芥川氏の作は、着眼の奇警と技巧の洗煉と且つ題材の多方面とを以て、文壇に類を絶すと稱せらる。本書は氏が新たに公にせる創作集にして、「煙草と惡魔」より「或日の大石内藏之助」「片戀」に至る最近の傑作十數篇を收む。珊々と鳴る寶玉の一匣、之を開けば燦として五彩の光、眼を打つの概あらん。

一冊價四十錢▪送料四錢

(1)新らしき家　武者小路實篤
(2)恐ろしき結婚　里見弴
(3)生あらば　豐島與志雄
(4)大津順吉　志賀直哉
(5)生と死の愛　谷崎精二
(6)結婚の前　長與善郎
(7)暴君へ　有島生馬

有島武郎著作集 第一輯

死

有島生馬氏裝

▼佛國式裝幀
▼定價五十五錢
▼郵送料六錢

豐かなる天分を藏して久しく其沈默を惜まれ居たる有島武郎氏は近來頻々其の作品を公にせられ、而も一作出づる毎に世評籍甚、世の視聽を聳かして忽ち文壇の重きをなすに至れり。本集は氏の作品を輯めて時々刊行するものにして、第一輯收むる所三篇。中に一少女の死を描いて、滿眼の涙、而も其の透明の觀察を妨げざる小說「お末の死」あり。作者が近く遭逢せる悲痛の經驗を材として描き、人間最深の悲哀に觸れ、人生最高の意義に觸れたる戯曲「死と其前後」及び小說「平凡人の手紙」あり。

東京牛込矢來中の丸　新潮社　電話番町八〇九番
振替(東京)一七四二　電話番町八九九番

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ・

▼時代の要請が生める歐洲近代文藝の代表的名著の全譯二十四册——

裝釘は雅美堅牢
會費は至廉無比

全譯完成

泰西近代名著文庫

天下の書籍何ぞ限りあらむ。而も斯の生の短かく、斯の時の貴き、吾人が讀書の範圍も著しき制限の下にあるを免れじ。讀書子の大に意を用ふるところ茲に在り。いま本文庫収むる所の諸篇の如き、泰西の各國がそれぞれ自國の誇りとする近代文藝の精髓、永世不磨の名著、更に云へば新時代に於ける人生の最高教科書として、苟も讀書子の書齋には必ず缺く可らざる不朽の珍襲に非ずして何ぞ。

再版 會員募集

●第一部（小說）拾貳册

量に於て二十世紀の最大小說たるは勿論、其國際評論的權威…

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

界に於ける最も高貴なる作物」と呼ばしめたるジヤン・クリストフ六冊【著者ロマン・ロオランは昨冬本社のた
めにノベル賞金を贈らる】の浩瀚を始めとし、近代文藝の代表的名著の全譯十二冊を收む。

譯者 後藤末雄 平田禿木 森田草平 （イロハ順）

●第二部（論文）拾貳冊

杜翁も愛誦し、ニイチエも耽讀し、世界の有ゆる思想家といふ思想家の愛誦措かざる古今論文集中の冠冕たる米のエマアソンの論文全集八冊と、英の文豪カアライルの最傑作にして無限の興味と活教訓とに充てる古今の名著佛國革命史の全譯四冊を收む。

譯者 戸川秋骨 平田禿木（以上二氏エマアソン） 高橋五郎（カアライル） （イロハ順）

▼『余は良き飜譯書の得られる場合、如何なる書物でも原文では滅多に讀むことをしない。抑も或る書物が母國語に譯されてゐるのに、原文でその書物を讀まうとするのは、恰もボストンに行かうとするに、チヤアルス河を泳いで渡らうとするのと同じである』――エマアソン書籍論（社交及孤獨の中）中の一節

●全二十四冊 津田青楓氏装釘意匠、四六判總クロース製天金、一冊平均約五百七十頁

●入會申込十一月三十日限（非賣品）

略規

◎第一部、第二部とも各部毎月の會費は金壹圓四拾錢とす
◎兩部揃へての會費は毎月金貳圓七拾錢全部一時金參拾圓
◎來る一月より各部毎月一册宛配本し一ケ年を以て完結す
◎入會金各部金壹圓を要す。但是は最終の會費中に補充す

▼内容装釘 詳細見本は御申越次第贈呈

東京市神田區小川町一番地
電話本局七三二二番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

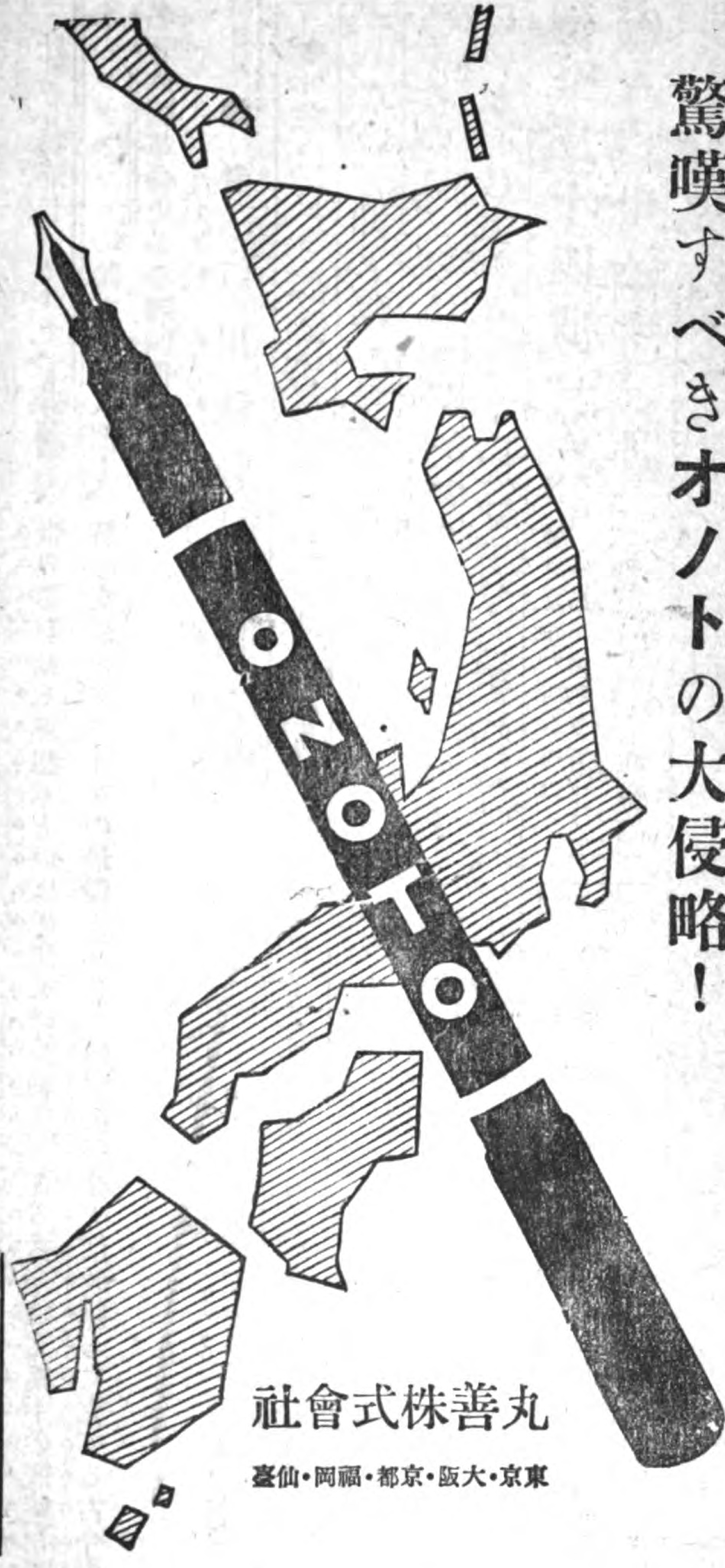
信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

驚嘆すべきオノトの大侵略！

歐洲戰の勝利者は容易に豫測し難けれども**オノト**の前進は日に益々顯著にして總ての操觚界、知識界、敎育界、軍人界、交通界、商工業界、學生界其他一切のビジネス界は皆**オノト**に占領されて殆んど全部がオノトの勢力圈たらんとす。



丸善株式會社

東京・大阪・京都・福岡・仙臺

オノト萬年筆
無飾金七圓
飾付金八圓以上

萬年筆用特製
アテナ・インキ
金參拾錢
送料各金拾二錢

信用ある店と細及小[illegible]なる賣[illegible]は[illegible]絶

ドクトル
湊謙治著

「信」の内村鑑三と「力」のニイチエ

「我れ穢らざらんか、我れ死せる也」と内村鑑三は謂へり。「我れ登るに從つて愈、寂寥に、攀ぢるに連れて益、孤獨に……然れども(思想)高山の登攀は我が生活の意義也。眞理探求の眞義也」とニイチエは謂へり。——數世紀未來の思想傾向を先覺せる豫言者——近代日本と獨逸との思想界に於ける代表的天才者を相對照して、吾人の思想との逕庭を覺知し、以て吾人が内生活を充實向上せしめんとの眞率にして、熱烈なる勇者以外の者は、乞ふ本書を讀むこと勿れ。

■最新刊■
▼菊判三百四十頁▲
▼定價壹圓三十錢▲
▼送料金八錢▲

在米
今井三郎著

宗教と民主思想

露國の大革命、米合衆國の參戰は共に世界驚異の的、均しく意外とする處。而して露國の革命は、デモクラシーの發露だと稱せられ、米國の參戰も亦デモクラシーの爲なりと謂ふ。眞に果して然る乎。何れにせよ、現代は洵に由々敷時代である。時かくの如き時代に處して最も大切なことは、何よりも其時代を知ることである。現代人心共通の思想傾向を正しく了解することである。著者は先づ宗教と民主思想を論じ、進んで新社會哲學を提唱し、更に社會奉仕を說き、最後に猶太人の研究を發表してゐる。苟も現代を知悉せんと欲する者の見逃すべからざる書である。

▼四六判四百八十頁▲
▼定價壹圓五十錢▲
▼送料金八錢▲
■最新刊■

東京京橋尾張町　警醒社書店　振替東京五五參番

信用ある店舗及卑猥ならざる賣品の廣告の外は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

卑野なる滑稽と諧謔に代ふるに奇警なる諷刺とを以てせるお札博士の大正膝栗毛

エフ・スタール博士新著

▲三版出來

●七大畫伯書畫 ●木版精畫十葉
●玻璃版七葉 ●凸版百三十面
●山陽圖繪二葉 ●紙數約八百頁

▲木版絹表紙
▲縮刷形美本
▲正價一圓八十錢 送料十二錢

山陽行脚

附東海道行脚

市俄古大學教授エフ・スタール博士が曩に獨特の哲學的眼孔を以て縱横に巡遊觀察せる山陽行脚及東海道行脚を大坂朝日紙上に連載するや其天來の妙想奇驚の筆に成る諷刺と皮肉は全篇高級なるユーモア氣分を漂はして讀者をして啞然として失笑せしめ懼然として三嘆せしむ。本書名を山陽及東海道行脚に借るもこれ外人の觀たる現代の自然と生活を赤裸々に解剖せる辛棘なる文明批判なり。卷中挿む處の七大畫伯の作品は隨所に錦上一段の花を添ゆ、若夫れ我邦文壇に缺如せる諷刺文學は雷名嘖々たるお札博士の此大正膝栗毛によりて初めて渇望を充たされたりと言ふべし。

▲發兌元 東京市麴町區平河町五丁目 金尾文淵堂 振替東京三八一七

▲發賣元 東京市本郷區本郷四丁目 文武堂 振替東京八五二七

市河彦太郎著

小說 小さき芽

▲全一冊四六判美本 紙數三百五十餘頁

▲正價金一圓 小包料八錢

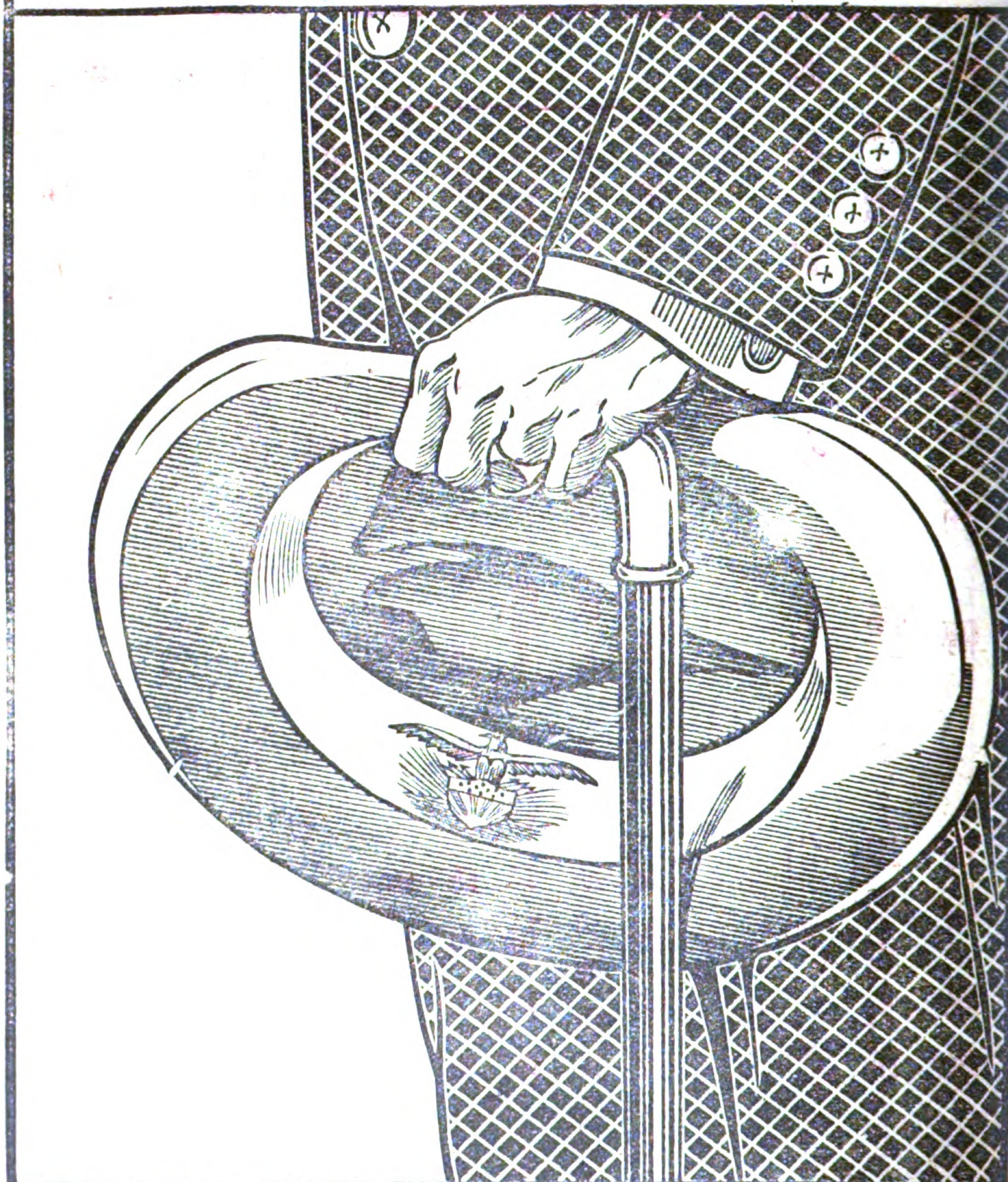
高等學校に入つてゐる一人の青年のまはりにあつまつたなつかしい一群の人達のある冬から春にかけての生活を描いたのが本書である。若々しい自由の空氣を呼吸して育つた嫩草が愛と智慧の美しい花をひらく明るい光りのみちみちた春のやうな感じを基調としてゐるこの小說のかげに力づよく快いリズムをなして流れてゐる暖かな凡てをつゝむやうな愛をみいだす人はまたたとへこの小說の中にかぞへきれない程の缺點と不滿足を發見するとしてもきつとそのどこかに萌え出でた小さき芽の纖な生長のいきほひと遂には偉大にまで到達すべき未來とジユウル・ルメエトルの所謂大なる善為力のひそんでゐることを同時に感じさせられるであらう。この一卷の處女作のいたるところにみちみちてゐる至醇な情熱と眞實の高い香りに醉ふ人はきつとこの小さいしかも貴い芽を哺むことをねがふにいたるであらうと信じる。

發行所 東京本郷四丁目 文武堂 電話下谷一五一三 振替東京九五二七

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

紳士の帽子は鷹(タカ)印

(到る處の帽子店に販賣す)



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

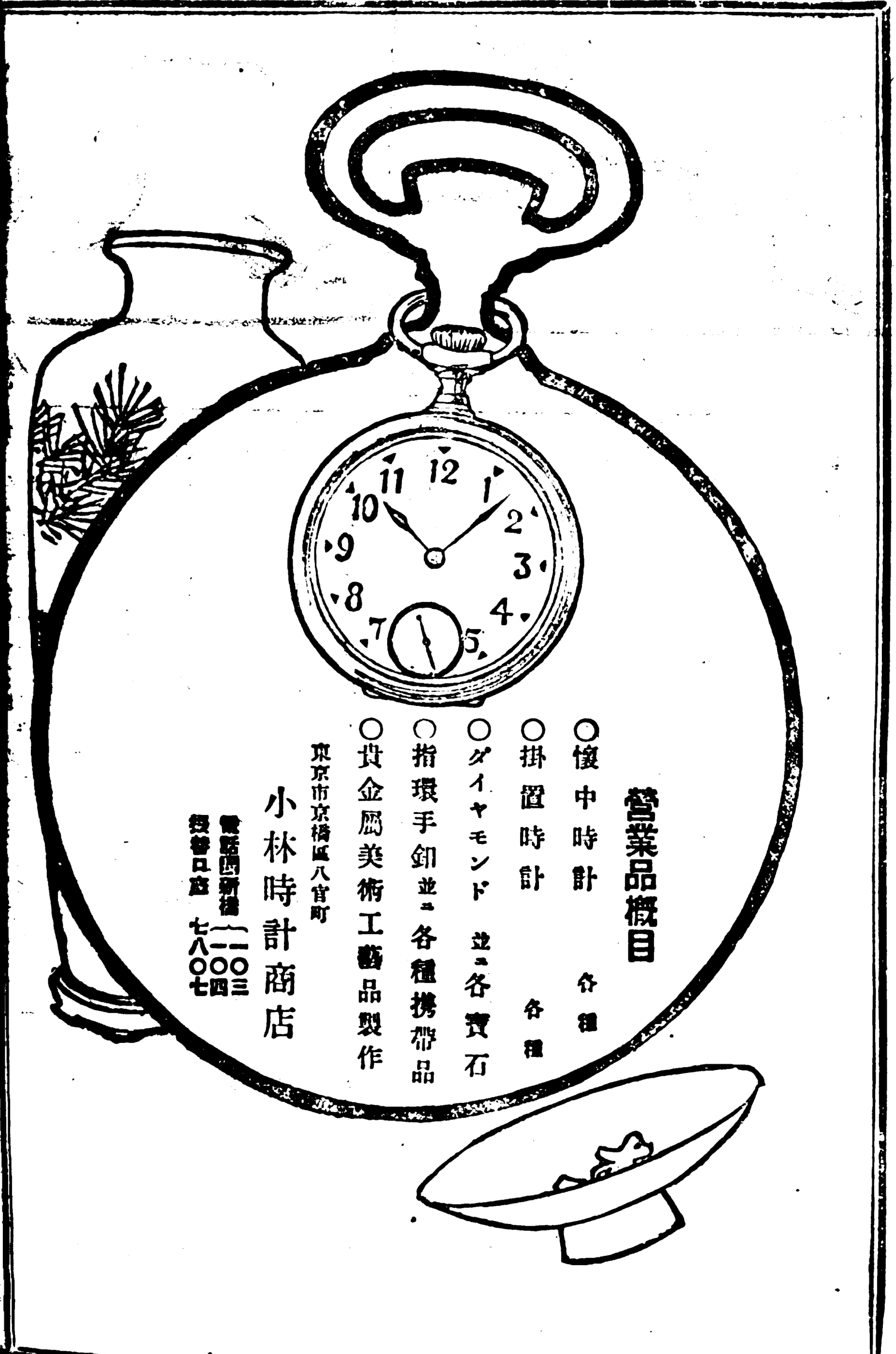
Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▼說苑

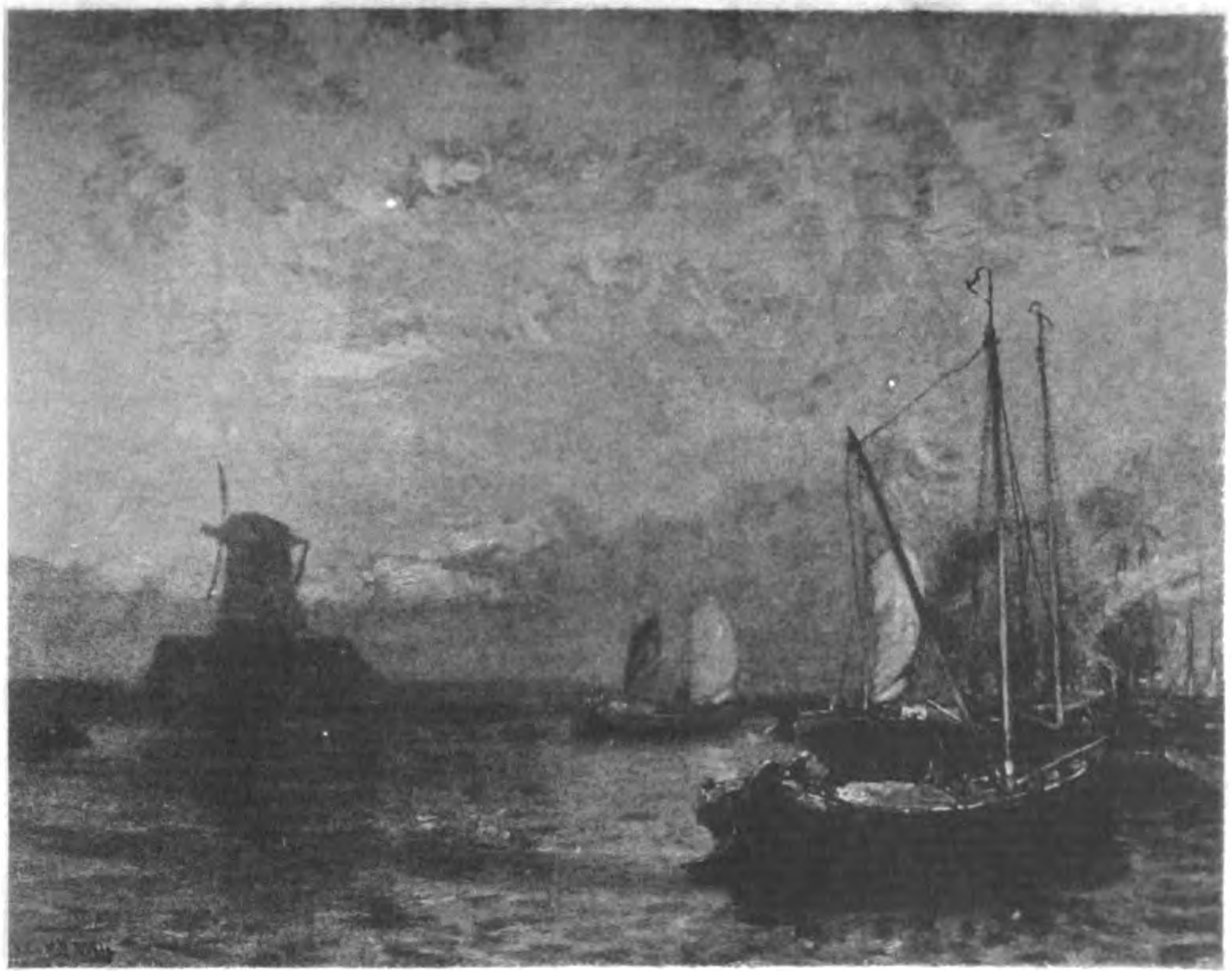


今秋美術界の新収穫（文展評）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



I. CAMPBELL NOBLE, R. S. A.

"EVENING"

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第卅二年第十二號
第三百五十號
(記念號)

戰後の世界

——が。どうなるか
——を。どうするか

文學博士 姉崎正治

人生の運命實に測るべからず、征服を目的としたアレキサンダ大王の遠征は、東西文明の間に橋梁を架けて、深大の印象を後世に殘した。ローマの富を採奪の目的としてアルプを越え、イタリア半島を荒ら

したチュートン民族は、終にキリスト教に化せられて、後に宗教改革の勇者になつた。平民に對する復讐を動機として蹶起した頼朝は、進んで七百年の政治を支配する基を開いた。

人心の機微亦不測の奧に不盡の神祕を蓄へて居る。初は茶税に對する不平で勃發した反亂は、天賦人權說の實行に轉進して合衆國の基を開き、ドイツの階級政治を呪咀したニーチエの哲學は、却てドイツ帝國主義の燃料となるに至つた。羊の如く愚にして直なるロシヤのムジクも終には革命を遂行し、藝術の人ダヌンチオも國民的勇者となつて戰場に驅逐する。

人生は純樂の天國でもなければ、又極惡の地獄でもなく、人間は天使にもなれば、又惡魔にもなり得る。人生の舞臺には競爭もあれば調和もあり、憎惡の荒れすさぶと共に、愛情が濃に人を結びもする。國と國とも干戈相戰ひもするが、又互に和親し尊敬し得る。人生には、運命の支配があると共に、我々自らが之を變形し創造し得る自由もある。

十九世紀を通じて國際關係には、競爭が段々激烈になり、其極、今日廿世紀の初に未曾有の大戰亂を惹き起した。此に於て人は多く生存競爭を高唱し、競爭のみが人生の原動力であるかの如く考へ、而して之を說明しては、一知半解の生物進化論に基いた適者生存の一語を金科玉條とし、而して適者といひ强者といふ標準を單に富の力や武力に求め、その極、個人間には道德はあつても、國際間には道德はないとすら斷言、否信仰して、熱心に國際競爭を高唱する。此に於て戰後經營といふ事は、內にあつては、富國强兵と、外に向つては帝國主義又は侵略主義の外何物をも容れずといふ樣な思潮が流行する。

此の如き思想も一應の理由はある。暴風雨の最中には、その晴れた後の快晴靜穩の天地を想像する事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は難く、火山の大破裂を眼前に見ては、天地も轉覆する樣に感ずる。其の場合には、他の事を考へる遑はない。此は實に人間の弱點であるが、此の弱點があるだけ、それだけ、眼前現實以上に眼を馳せる事が人生の指導には必要である。戰亂の最中にも、達見の人は、戰亂から脫け出た新な世界を望むで、之を指導する。之に反して戰後經營などと唱へつゝも、現實に捕はれた人々は、戰後の世界をも、やはり今までの舊世界の標準で判斷する。然るに、戰後といはず、戰亂の現在にも、既に世界新局面は其面影を見はしつゝある。戰場の血潮の中には、人間は猛獸の惡性を發揮しつゝあるが、其と共に菩薩の善心もその中に一層强烈に現はれ、國家競爭の慘劇が其の極端の慘禍を逞しうつゝある今日、既に國際協同、人道正義の理想は其の力を現はしつゝある。我々は現實に對して目をつぶつてはならぬ。然し其と同時に理想に對する遠望を失はない樣に勉めなければならぬ。而して戰後の世界には、戰前に似た競爭も行はれる事を承認すると同時に、此の如き大禍亂の後には必ず新局面が開けて、今までに見ない新傾向、新勢力の生ずる事をも覺悟すべしである。元龜天正の際に、人は互に殺戮を事とし、主從も父子も互に信ずる事が出來なかつた間にも、藤原惺窩等は、靜に來るべき元和偃武の新天地を迎ふべき修養を積むで居たではないか。

現代の世界を以て單に競爭の世の中と見、而して今後も亦さうだと考へる人は、今世界の大勢を支配して居る西洋文明が常に十九世紀の如き競爭のみで進んで來たのかと考へ見るべきである。十九世紀は、商工業の國際競爭、又資本と勞働との衝突を主題として來たが、その前の十八世紀には、人類天賦の權利を高潮した理性主義を實行した時代もあつた。文明は常に變轉し又は發達する。十九世紀の競

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爭時代の行き詰りが今の戰爭に破裂したのを見て、二十世紀の文明が必ず十九世紀と同軌道を走ると考へるのは、人間の思想と文明とには運動のある事を無視した考である。

* * * * *

十七世紀の三十年戰爭は、ヨーロッパ大陸を焦土にした。數百の諸侯が入り亂つて、戰ひ戰つた結局は、大體フランス文明が世を支配するに至つた。然し國勢の消長といふ事よりも、——今日から顧みて——重大事であつたのは、三十年の戰亂に、或は驚き、或は悲み、或は又深く考へた思想界に、二大勢力の出た事である。卽ち一は「人間と人間とはやはり狼と狼だ」Homo homini lupusだといふ暴力謳歌と、一は戰鬪殺戮の慘に拘らず、人道には義もあり理もあるといふ思想と、此二つ。一はホッブスが之を代表し、一はグロチウスが之を代表した。ホッブスの思想は、十九世紀になつて、ダーウヰンの進化說を誤解し曲解した勢力本位の帝國主義となり、グロチウスの正義は、その後の戰亂每に、主義と條規とを充實して、正義尊重の流となつて、今日に及むだ。

ウエストフアリア條約が幕を下して開いた新舞臺は、フランス文明の華となり、十八世紀の理性主義を生み出した。人間社會の事、盡く理性と正義とで之を律し得るとして、思想界も社會生活も、理性に隨ふ再建を經、人の理性が活動する新天地を現出した。その後、ホッブス的の威力主義が如何にダーウヰンを濫用して、誤つた生存競爭を人心に撒いたにしても、又國民的國家の考が如何に十九世紀の我利我利帝國主義に轉じたにしても、十八世紀に行はれた、理性を振りかざしての人道的文明の世界といふ理想は、兎に角滅び行いた封建の舊社會に代はつて世を支配した。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰爭が此の新文明を生むだのでなく、戰爭は舊文明の弊を極端に推しつめて、終に之を破壞し、而して新文明が人心の奧、人道の要求から湧き出たのである。一六四八年ウエストフアリアの條約は、封建社會の舊世界を打破する大轉機を示したものである。

そこで、今度戰後の世界はどうならうか。世界の大勢は、隨分多くの場合に人の意想外の方に走り、又個人の意志慾望で直に左右し得る者でない點から見れば、戰後どうならうといふ問ひは、必しも不要でない。然し、其と共に考ふべき事は、人間世界の事は人間自らの作り出す所で、人事は、少くとも一部は人間自らの創造する所、又少くとも人間の志望と努力とで支配し得る事である。此點から見れば、戰後の世界が、どうならうかといつて、恰も世界の趨勢が我々人間の志望努力と無關係に動いて來て、我々は只之に乘ずる外ないかの如く考へるのは誤である。此の如き態度で此の如き問を出し、而してその所謂る世界の大勢に順應する事だけを知つて、之を支配する事を考へないのは、恰も自分の運命を易者に問ふのみで、自ら運命を開拓し、又は左右する事を試みないと同じく、人生活動の原動力は人間自らにある事を忘れて、自分自らを蔑視する者である。

されば、一方、戰後の世界がどうならうといふ問題も全く無益でないとしても、一層重要な點は、我々が世界をどうしやう、どう向けやうといふ問題にある。先に述べたグロチウスとホッブスとの對照も、單に人生がどう云ふ者である、世界がどうならうといふ事だけで濟まないで、その思潮は各々流れて人生を動かす力となり、正義の指導で人生を動かすべきか、將た又狼の如く嚙み合の人生とすべきかといふ、思想、理想、努力、行動となつて、二百年來の世界を支配し、而して現在の戰爭にも此の二潮

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の流爭が明に現はれて居る。我々は、戰後の世界に處して、此の二潮流の何れに加擔し、それを如何に變發し、若くは變形し、實行すべきか、此に問題が存在する。

それ故、戰後如何なる世界が現はれるかと云ふ問題は、如何なる世界を現出しやうかといふ、我々自らの理想と努力とから離すべからざる事になる。但し此處で注意すべき事は、戰後といふ問題を必しも戰役終結後と限る要のない事、否戰爭最中の今日にも、將來の形勢を推測すべき材料もあれば、又將來を指導する力も現はれて居る事である。戰後の世界といふ問題は、戰役の最中にもどし〳〵解決の途を急ぎつゝある。一歩を進めて云はゞ、戰役最中の傾向、思想、努力が、即ち戰後の世界に對する解釋に基礎を据えつゝある。フランスに於ける人道的精神の覺醒、イギリスに於ける社會再建の研究、熱心、努力、アメリカに於ける正義自由の提唱、實行、此等と相併んで又經濟戰爭、文化競爭、人種競爭などの考や事實も諸方に起りつゝある。要するに、戰後の世界如何といふ問題は、我々が個人としても、國としても、又世界の一員としても、此等諸種の勢力傾向に對して、如何の批判を下し、如何なる主義理想に據つて將來を支配すべきかといふ事になる。

然るに、世人の多くは、此の如き主義の問題をもやはり大勢に動かされてそれを利用するといふ方に考へ、且つ大勢といふ事についても人生の複雑を無視しては居ないか。或は云く、戰後には經濟戰爭が一層激しくなるから、我々も之に應じて自給策を講じなければならぬ。或は云く、戰後の世界は、要するに黄白二人種、東西兩洋の衝突といふ舞臺に轉ずるから、それに處して日本はアジアの盟主になるべし。或は又反對に云く、戰後には軍備縮少の必要が生じ、平和の時代が來るであらう。その他色々あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るが、要するに、競爭か然らずば調和、戰爭か若くは平和、國家主義か然らずば世界主義といふ樣に、一方に片附けて見て、それで今後の世界を想像して居るだけで、此の如き反對の潮流が相激して居る間に立つて、如何に去就を決し、而して如何に其の理想に向つて努力すべきやといふ問題に觸れない。此の如き態度には、第一、先に述べた人生を我々自らの舞臺として之を支配するといふ觀念を缺き、第二に人間の精神、世界の大勢なる者は、常に複雜で、善惡正邪美醜が混合して相爭ふ舞臺であるから、其間に立つには、理想に對する熱心を要するを忘れた者である。要するに、形勢觀望的態度と、然らずば十九世紀の舊夢を繰返す意見と、此の二つが行はれて居る。

戰後の世界如何といふ問題に對して、只成行に委せ、而して其に對應する策を講ずるといふ如きは、人間世界の力を自覺しない見解である。又、今のまゝで成行に委せておけば、經濟戰爭もそのまゝに續き、戰爭も又々發生するに違ひない。或は又、世界の國々人々が、人生は競爭の場だとのみ考へ、調和といふ方に着目せずに進めば、現在戰役の終結も畢竟一時の休戰に止まるかも知れない。之に反して、現在戰爭の遠因が、人生を競爭とのみ見た偏見にあり、商工競爭の極此に至つたとして、此の如き誤見に對して奮戰し、十九世紀文明の行詰りを轉じて、新世界の建設に努力するならば、正義平和の世界も生じて來やう。戰爭か若くは平和、是れ事實の發現であつて、末の問題である。此より一歩を進めて、人類が自らの運命、自らの天職、自らの目的に關して、如何なる思想を抱き、その思想からして如何なる理想を構成し、如何なる努力で之を實行するやといふ一事、此が問題の根本である。

問題を押しつめて來れば、下の如くなる。世界全體といはずとも、少くとも聯合國の主腦者、指導者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間には、此の如き人生に對する如何なる思想が生じつゝあるか。且つ又、何か思想上の一傾向たる主導力が生じつゝあるとすれば、それと現在の戰爭とが如何に聯結し、其の思想が戰役の成行をどう支配して居るか。又その主張理想が、戰役の終結に、如何に影響し、從つて戰後の世界に如何の勢力を及ぼさうか。此間に處して我々の去就如何。

此の事を考へるに當つて、見遁すべからざる宣言は、大統領ウヰルソンが宣戰の宣言にある。此は、アメリカの建國を作り出した獨立の宣言に一歩を進めた「人類獨立の宣言」として世界の大部分が深い感動感化を受けた大宣言である。その言に曰く

* * * * * * *

「現在ドイツが行ひつゝある潛航艇戰は、實に人類に對する戰鬪である。あらゆる國民に對する戰鬪。……全人類に對する挑戰である。何れの國民も、各々之に對する態度を決すべきである。我が國の之に對して執るべき道は、此國の國性と此國の國是とに副ひて、溫健の考慮を旋し、中正の判斷を下すにあるのみ。……

我國は復讐を動機とすべからず、勝利に依て國の武力を主張すべからず、只權利、人類の權利を主張して立つべし。

我國の目的とする所は、我利專制の暴力に對して、世界の生活に於ける平和と正義との主義を主張し、以て眞に自由に自治の實ある人民の間に、目算と實行との一致を建設し此に依りて此等の主義を守るべき保證を確立するにある。

不義を遂行したる者ある場合、之に對する行動と、之に對する責任とが、文明國民の個人間に行はるゝと同じ標準を以て、諸國民政府の間にも行はるゝに至るべきを要求する。而して此の要求が、實行せらるゝに至るべき新時代は近づきつゝある。

我等はドイツの人民と爭ふのでない。

平和に對する鞏固な一致は、自由の民より成る國民が聯合して之を確立する外に道はない。此の如き結合の內で信義を保ち、又その約束を守る資格は、專制政府にはない。平和の一致は、名譽の同盟、輿論の結合に依る外ない。……

我等には求むべき私利はない。我等の願ふ所は征服にあらず、又領土にあらず。償金を得る爲にあらず、我等が供する犧牲は、我れ等の好んで捧ぐる所であつて、之に對する報酬を求めない。人類の權利の爲に戰ふ勇者の一員たる外に、我等の求むる所はない。諸の國民が相信じて、各々自由を確保し、此に依つて人類の權利が確立すれば、それで我等は滿足する。

此の平和の人民を驅つて戰に參せしめ、文明の運命を危からしめる此の未曾有の恐るべき慘禍に加入せしめるは、實に忍びない事である。然し權利は、平和よりも貴重である、此を以て我等は我等の心情に最も秘藏し來つた事物の爲に戰はう、——人民の自由の爲に、自治の實あり政治に發言權を有する人民の權利の爲に、小國民の自由と權利との爲に、自由ある人民の一致結合の力で、權利が何れの處にも行はれる爲に戰はう。此の如くにしてあらゆる國民の上に自由と安全とを確立し、全世界が自由を獲得するに至る樣に、此が戰の目的である。」

此中で最も重要な點は、あらゆる國民の自由といふ事と、國際關係の道德にも、個人良心の判斷と制裁とを伸張すべしといふ事とにある。人間人格の尊嚴と、此を基礎にした國際の正義といふ事、此は今回の戰爭に依つて一層痛切に聯合國の指導者を刺激しつゝある理想である。此の如き理想が將來に行はれるや否やと危ぶみ、躊躇し遲疑し、形勢を觀望するよりも、我々は此に對する去就を決すべき時期に際會して居る。單に去就を決するだけでない。將來の世界に對して我々の理想を如何に實行すべきか、如何なる貢献をなすべきかといふにある。此の時に際して尙ほ遲疑するのは、一は現在世界の趨勢を明にしないのと、一は理想に對する確信、人間に關する自信の缺乏して居る爲でないか。

* * * * *

世界戰爭の進行につれて、ドイツの軍國主義に對する對抗は、聯合國の主義となり宣言となり、inspiration となり revelation となつて、現在既に世界を風靡する一大勢力となつて居る。然るに日本人の眼が此に對して十分に開けないのは、第一には、現在戰爭の刺激原因と、それから戰爭進行中に生じて來た新問題、戰爭が齎らした新覺醒と、此の二つを分別して將來に對する見解が不十分な爲である。一言にして云はゞ、人心の機微と人生の意義とに徹底して事物を觀察しないで、只目前の利害に拘泥し、既往の舊夢に捕はれて居る爲である。少しくその意味を說明せしめよ。

イギリスがドイツに對して、戰ふ動機については、ベルジク中立問題は口實に過ぎず、實質はドイツの商工業を倒す爲だといふ解釋が、日本には多く行はれて居る。アメリカの參戰についても、同様實利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的の解釋乃自邪推が日本には多い。而して此等の論者は、其の解釋を以て事實の眞因とするのみならず、國際關係に利害以外の力がある筈はないとまで主張する。成るほど、人間の行動には、自利の動機から出る事も少なからず、又場合によつては、自利の動機を公義で解釋し或は修飾する事もある。然し人間には利害以外の動機が存在し、假令ひ始は利益問題から起つた爭議でも、その進展の間には、段々他の方面の消息、道義德義の問題に移つて、眞に主義理想の爭になる事も、決して少くない。

十九世紀の世界には、商工競爭から出た國際爭議が多く現はれたのであるから、其極端の結果を示し、最後の破綻を干戈に訴へた現在の大戰には、利益競爭の動機が存在する事は、自然の勢である。然しそれであるからといつて、此の戰爭がどこまでも利益競爭の動機のみで動くといふのは、人事の複雜を無視し、人心の微を看過した偏見でなからうか。ベルジクの滅亡はイギリスにとつては直に喉に劍を擬せられる危險である。イギリスの蹶起が自衞といふ利害問題を動機とするといふのは、此の方面から見て正當の解釋である。然し、それと共に條約の神聖といふ事が、イギリス國民の心に與へた影響も亦看過すべからざる勢力であり、その上、開戰以後、ドイツ人の作戰、その他萬般の亂暴な行動が、イギリス人のみならず、アメリカ人の義憤を激發した事は、社會心理上の事實である。

ウヰルソン大統領は、その心情に於ては始めから聯合國に同情しながらも、尙ほ自國民の心狀態を顧慮し、彼等の感情を尊重して、二年有半中立を守らうと勉めて來た。而して自國民がドイツに反對して、ドイツの軍國主義を恐れ且憎む心が十分に熱するのを待つて、始めて宣戰した。此間の經過を觀察すれば、アメリカの參戰に、德義上の判斷、道德的情操が有力の力となつた事は明白である。アメリカ參

の動機を實利的にのみ解釋する論者は、此間に於けるアメリカ輿論の趨向を事實に基いて研究して居るのであらうか。二年餘の經過と、其間に現はれた輿論指導者の言論努力（例へば、ベック、エリオット、ラッド諸氏の戰爭に對する道德的評論、チャーチのドイツ學者に對する返答ガーデナーの軍備論等）を、ウヰルソン氏が宣戰の宣言と對照すれば、その間に一貫した精神、卽人類の自由、國際の正義に對する道德的判斷の勢力は明白である。のみならず、宣戰以前にあつてすら、義憤の爲に、自ら進んで聯合軍を助け來つたアメリカ市民の數が如何に多いかを見ても、若くは宣戰以後、合衆國の輿論が一致して軍事に從事しつゝある精神狀態に見ても、アメリカの宣戰には、ドイツの軍國主義に對する道義的義憤が如何に有力であるかを知るに足る。此等の事實を無視して、別の解釋を下しても、それは解釋者自身の獨斷構造であつて、戰爭の問題、戰後の問題を解釋する上に實質の根據を與へ得るものではない。但しかくいふ自分も、此間の變化運動の中に全然利害問題の動機が存在しないといふのではない。人性は、しかく單純でなく、德義心と共に自利心も其の行動の中に存在する事は、十分に之を認める。人間精神の複雜を見るが故に、右に述べた如き實利論者の獨斷構造を非とし、而して他方事實上の材料に基いて、アメリカ參戰の動機には、道義感情が大勢力たる事を斷定するのである。

獨りイギリス宣戰の動機に關してのみならず、戰爭の進行につれて段々に現はれて來た國際正義の問題に關しても、日本には懷疑論、否冷笑論が多く見える。曰く、聯合國、特にアメリカは、國際の德義とか、人類の自由とか、世界の平和とかいふが、多くは虛僞又は表面の口實に過ぎない、內實の動機は自利にあると。此等の論者は、如何にも他人の心胸を見透した如くにその斷言を公布し、而して公衆

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、十九世紀の國際競爭に目馴れた心持を以て之を迎へ、如何にもさうだと思ふ。此の如き輕卒浮薄の判斷は、事實の眞相を誤り、延いては、日本が今後の世界に處する針路をも誤らしめる恐るべき謬見である。

* * * * *

凡そ人事の紛擾動亂は、その進行するにつれて、最初の動機或は爭點以外に種々新方面を開展し、新問題、new issues が事件の進行に有力の變化を與へ、事件の發展に大勢力を占め、事件の解決に最後の力となる事、決して珍らしとしない。試に思へ、安政初年、開國の事迫るに當つて、どれだけの人が――開國論者、鎖國論者共に――此の爭點の究竟結末 ultimate issue が幕府の滅亡、王政の復古に至らざるべからずと先見したか。然るに、問題は開國鎖國の爭から、尊王攘夷の問題となり、公武合體の試みとなり、轉じて勤王と佐幕との對抗となつて來た。此れ問題自然の開展であるが、始めの動機が條約締結の問題にあつたからといつて、後の勤王佐幕の爭は僞だ口實だと片附け得やうか。然るに、現在の戰爭に伴つて現はれて來た新問題に對して、日本の論者には、此と同樣に、新局面の爭點を口實に過ぎないと觀察する者が多い。

又文久、元治の際、勤佐の爭が全國を沸騰させた時、三百諸侯各藩の向背を決するについては、各自利害の考慮は、大義の問題と共に、人心を動かす力であつた。現に薩長すら、その間には利害感情の衝突もあつたではないか。然らば、その際に處した人々で、勤王家と云へども、王政復古が維新となり、その結果が廢藩置縣にまで進まうと考へた人は幾何もなかつたに違ひない。のみならず尊王と攘夷とを

一つに見た人も少なからず、彼等は開國進取など夢想だにしなかつたのである。勤王佐幕の向背に關して藩の利害問題、又一藩の中では黨派爭ひが纏綿して居たからといつて、勤王の大義が虚僞の口實だといへるか。始は攘夷の考で蹶起した志士であるからといつて、彼等の後に開國進取に轉じたのを僞善だと稱し得るか。

然るに、現在の戰爭に關しては、日本の思想家には、此と同樣の判斷を、聯合國の主張に對して下す人が少なからず存在する。而して彼等は曰く、聯合國の正義呼ばはりは僞善だ、合衆國の軍國主義打破論は口實に過ぎないと。人事の變遷、問題の必然開展に對して盲目極まる此かる判斷が、衆愚を迷はし、國家の方針が之に左右せらるゝならば、その結果は、元治慶應の際に、王政維新開國進取の意義を看取し得なかつた諸藩が遭遇したと同じ運命あるのみ。

尚一例を擧げて見やう。宗教改革の中軸ルーテルが、罪障消滅切符に關して抗議を提出した時、彼は、只教會の腐敗を攻擊するを目的とし、自らが法王に背き又教會を脱するといふ結末になるとは夢想しなかつた。然るに、事件の進行と共に、特にはライプチヒ大學でエックとの討論の結果、彼の主張は、實質教會を脱して新宗を樹立する主義を含蓄する事を自覺するに至つた。彼は、始めから教會の神聖を破壞する考へでなく、新教の樹立者として立つたのではない。然し、事件と共に問題は行き着くべき處まで進んで、彼は宗教改革の大立者となつたのである。始めから此の自覺がなかつたといふ理由で、ルーテルは宗教改革者にあらずと稱し得やうか。人事の動亂は、常に、當事者自らも始めは十分に自覺しない新問題を惹起し、而して事件の眞底まで徹底する解釋を要求する。現在の戰爭に於ても、此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の消息は明白に現はれてゐる。

* * * * * *

戰爭の起りはバルガン問題にあり、イギリスとドイツとの衝突は確に商工業の競爭から生じた。然るに、その開戰の始めに當つて、ベルジク中立問題に關し、ドイツ宰相の「一片の紙屑」言明が、早くも既に條約の神聖、國際信義の意義に關聯する問題を生じた。即ちドイツが條約を破壞し、國際の道義を蹂躙した爲に、却つて國際道義に關する觀念を他の國民に深く刻み込んだのである。ベルジク人民の虐待、毒ガス問題、封鎖問題から、終には潜航艇戰に發展して、茲に中立國の權利、公海の自由、人命の尊重といふ問題が新なる色彩と强烈とを加へて來た。のみならず、ドイツの文化主張、Deutschland über Alles の主義は、世界各國民をして、自立の根據に關する問題を深く考へしめ、ドイツの軍國主義に對する感情並に批評は、更に新にドイツ主義の危險に關して、世界の現在と將來とに關する考慮を促し、アメリカ國民の義憤を激發した。

此等は、皆開戰の始には人々の意識しなかつた處、又開戰の動機として、其の始めには有力なものではなかつた。然るに事件の進行、問題の開展につれて、此等が痛切の問題となり、人を動かし世界を支配する力となつて來た。敵味方共に、今日まで忍耐し奮激し、最後まで戰はうといふ意氣を持續して居るのは、單に始に動機として立つたバルガン問題だけの爲でなく、又戰爭の刺激原因たる商工業競爭の爲のみでない。最初には利害觀念で蹶起した者も、今は義憤で戰つて居る。最初問題でなかつた點も、現在の戰役を支持する力となり、又將來の解決に對して重要の勢力となりつゝある。而して此等の動機、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主義、主張、理想、努力は、日本の或論者の考へる如く、虚僞でもなければ口實でもなく、眞面目の主義となり、眞劍の信仰熱情、inspiration, revelation となりつゝある。

此眞心の熱情、生死を賭しての主張（敵味方共に）を冷笑的に口實だ虚僞だと觀察し去り、而して戰爭の動機もその解決も、從つて又世界の將來も、利害競爭、武力勝負でのみ決せられると考ふる如きは、實に表面は怜悧に似て、實質は迂愚の觀察である。此の如く人心の機微、人事の意義に通じないのは、畢竟、目前の利害のみを考へ、鎖國的迷想、十九世紀の舊夢に捕はれて居る爲ではなからうか。

戰爭の發端動機は何處にあつにしても、その延長は世界的となり、その實質は、國際道義の問題、世界人類生存の意義、人類自由の理想に關する深い點に進んで來た。その間に利害の感情、經濟の問題もあるが、利害以上の主義主張も亦、敵味方を分別し對抗せしめる有力の動機となつて來た。戰爭としては、國家と國家との對抗であるが、敵味方の國々が各々聯合して立つ上に於て、今日は世界的聯合の意義を有するに至つた。一國の利害だけでなく、世界の將來を、如何なる主義の支配に歸しやうかといふ生死の戰爭となつて來た。日本が去就を決すべき樣子は、單に自國の利害だけでなく、又某々の國と政治的に同盟するとかしないとかだけの問題でなく、思想、主義、理想の問題にある。人類の運命、世界の道德的生命に關して、利害か正義かといふ岐路に立つての去就問題にある。

日本は開戰の始に、日英同盟の義務を重んじて參戰した。是は確に立派な事、信義を重んじた處置である。然し大戰は爾後三年の間に、その延長をも内容をも擴張して來たのに、日本のみが三年前の立場に留まり得やうか。然るに、その三年前の立場に對してさへ、今日は或は之を非議し或は後悔する者が

あり、當初に利害分配の約束を固めなかつたのは失策だとして、同盟國を恨む者すらある。最近になつで海軍の地中海活動についても、同樣、利益分配の確かならざる事に參加するを非難する聲も中々出て來た。加之、段々説明し來つた通り、戰爭の開展に伴つて世界的問題を生じ、利害以上更に主義理想の問題に進んで居る今日、聯合國の此等の主張を冷笑するのみならず、甚しきは敵國ドイツとの同盟を唱へる者すらある。此の如くにして、有形の上では、如何に戰爭に參加して居ても、それは所謂る義理一片、形式の參加に過ぎない樣に自ら仕向けつゝある。如何に物資を供給して聯合國を助けても、それが單に商賣上の利益打算に過ぎないとの感を與國に與へるのは、彼等が誤解の罪にのみ歸すべきでなく、自ら招く禍でなからうか。日本の有形的參戰は、此の如くにして効果日々に薄く、精神主義の上に於ては、日本は疑はしい中立國として洞ヶ峠に立て籠もつて居るのではないか。此の如くにして、戰局の進展に伴ふ新問題、新局面に對して、日本は日々に與國と疎隔し、日本の世界に於ける位置は、有形無形共に孤立となりつゝある。

兎に角、時運は、利害か正義かといふ去就を世界一々の國に迫りつゝある。聯合國、特に英、佛、米はその始には明白に意識しなかつたにしても、今は此の分岐點、此の ultimate issue を自覺して、その力で戰ひ、又その力で精神的に覺醒し、その方針で戰後の世界に處し、其の主義に基いて社會を改造しやうと努力して居る。イギリスに起つて居る社會再建 Social reconstruction の問題は、獨り彼國一國の問題でなく、世界の問題である。而して合衆國の大統領は、人類の自由と國際的良心の制裁として之を宣言して居る。戰爭の進行と共に段々明白になつて來た此の大問題、great issue は、將來の世界に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する大宿題を提供して居る。

此に於て、戰後の世界といふ問題は、單にそれがどうなるといふだけでなく、それをどうする、すべきかといふ事に結着する。一國の問題は、單に富國强兵だけで滿足すべきでない。その富强を如何なる目的に用ひるか、之を單に力として用ゐるか、義の爲に之を用ふべきかといふ點に歸着する。「世界を敵として戰ふ覺悟と準備」といふ事を唱へる人がある。それも宜しい、その位の勇氣なかるべからず。然しながら、何の爲に、何の目的で、如何なる主義で、世界を敵としなければならぬか。此を考へずして、只覺悟と準備をするのは、愚の極。辨慶は七つ道具を用意しても、若衆の牛若丸に負けた。之を力負けと稱する。「覺悟と準備」だけ出來ても、その富强を用ふる主義理想、目的方向に於て、正當の判斷を下さなければ、富强は畢竟成金の富、力負けをするか、然らずは濫費悪用の災を招くに過ぎない。其の場合には、富强は畢竟亡國を早める要素となるのみである。

將來の世界をどうするか。此の問題に對して、日本は覺醒を要する。覺醒の結果、現在の岐路に於て去就を決し、而して將來の世界に對する有力の貢献をなすべし。然らずば、國の存在する意義は無である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

わが日本をして産業國たらしむるの第一歩

——工業教育の自由化——

田中王堂

一、先づ産業を國民化せよ

今日からすると、もう十年以上にもなることであらう。嘗て、わたくしは當時東京帝國大學の教師であつた或る外國の學者が、東京商業會議所の請に應じて試みたといふ演説を讀んだことがある。『日本は、智力に於ても、金力に於ても、到底、西洋の産業國の敵たることは覺束ない。されば、近世に發達した大工業に依つて、彼等と競爭しようとするやうな無謀な事は止めて、宜しくわが國に固有の手工に依つて競爭するのが、其の當を得たものである』と云ふのが、其れの大意であつた。そして、この演説を報じた新聞紙の語るところに憑ると、(無論、この場合が要求した至當の辭令であつたらうが)、彼れの紹介者であつた某博士は、彼れのこの意見をわが國の商工業者の服膺すべき眞實にして適切なる忠言であると言明したと云ふことであつた。わたくしは、この演説を讀んで、彼れの忠言の卒直に感謝すると同時に、其れに含まれた見解の不明には痛く失望したのであつた。この獨逸の經濟學者は、眞に、わが國は其れが過去に於て養成した手工に依つて、富の競爭に於て、世界の大國と對峙することが出來ると信じたのであらうか、又、彼れは、どうして、わが同胞は未來永劫に大工業を運用し發展する能力の無いものと判斷し得たのであらうか。わたくし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、前の想像が全く架空のものたるを知ると同時に、後の假定の一つの頑冥なる僻見に過ぎないことを知るものである。

實を云ふと、わたくし共日本人の大工業に對する態度は、わたくし共がこの外國教師より、その善意に基ける、然し、極めて不通の忠言を聽いた四十年も前に於て、既に、可なり、遠き將來に向つて、變改しないやうに決定されたのであつた。其れは、わたくし共の父老達が、西方の三四の雄邦に依つて『死か、否れば、近世文明か、其の一つを選べ』と宣告され、そして、彼等は死を避ける唯一の手段として、近世文明を選んだ時であつたのである。わたくし共が、一度、死活の分岐點に置かれ、死中に活を求める唯一の手段としてわたくし共が尠なくも、わが國の產業の主體として大工業制度を採用しようと志してより以後、わたくし共が、どのくらゐに、驚くべき無經驗と併せて稱讃すべき勇氣を以て、之れが實現と發展とに努めて來たかは實に人類史上空前にして恐らく絕後たるべき一事件である。

『萬事險を冒さゞれば功を爲し難し米國の水師提督ペルリが日本に來りしも米國人の冒險にして我日本が之に應じて國を開きたるも日本人の冒險なり王政維新も冒險なれば廢藩置縣も冒險にして今の立憲政體の實行は正に冒險の最中なり虎穴に入らざれば虎子を得ず政治上に非常の危險を冒して平氣なるものが實業上の運動を見て驚くの理由なかる可し兎に角に我製造國たり貿易國たる可きの事實を得て其空想ならざるを證する上は國民運動の大方針は唯進むの一法あるのみと我輩の敢て斷言して躊躇せざる所なり』

是れは、福澤諭吉氏が彼れの『實業論』に於て說いて居るところの一節である。この論文は、多分、明治二十四五年より三十年前後までの間に物せられたのであると思はれる。當時、わが國が、まだ將來、大工業國として立つて行く見込の十分に付かないに拘らず、わが國の生存を保障する必要條件として、是非共、其れの產業を大工業化しなければならぬと、堅く決心し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居たわが同胞の意氣は、この福澤氏の觀察の中にも容易に窺はれるのである。

斯のやうな事情と必要との下に、大工業はわが國に依つて渇求され移植されたのである。歐洲に於て文藝復興に際して、其れが工夫されたのは、彼等が自己の欲望の尊貴と自己の力量の權威とに覺醒した結果であつた。わが國に於て、維新前後に方つて、其れが採用されたのは、わたくし共が自己の生存の權利と、自己の發動の價値とに奮起した結果であつた。されば、俗人のするやうに、强ひて是等二つの場合の間に相違を求めて、一方を內的とし、他の一方を外的としようとするならば、さう出來ないこともない。然し、わたくし共にして、一層深く、一層純に、兩方の底に橫はる根本意義を搜索することになると、其れの機會の異なるだけ、其れの動機の異なつて居ないことを會得して來るのである。

或の物が、その初め、何處に、如何なるはづみで發見されたかと云ふことは決して一つの問題たる意義を有たぬものである。然し、その初め、其れが如何なる國民に依つて、如何なる目的に使用されたかと云ふことになつて、始めて問題とされる價値を有つて來るのである。されば、火藥は何千年の昔に方つて、支那に於て、發見されたと云ふことは事實ではない。其れは近世の歐洲に於て、其れが在來の兵制と戰術とを變する時に於て、始めて發明されたと云ふことゝだけが事實である。かゝる見地より、かゝる洞察より、大工業の性質を觀察して來ると、其れの意義、又は價値は其れの起源に屬しないで、全然、其れの機能に屬することゝ、其れの機能を發揮して居る目的に屬することが解かるのである。大工業に關して、誰れが其れの主人公たり、所有者たるかは、誰れが其れの最初の考案者であつたかと云ふ事實からは決せられないで、誰れが現在に於て、其れの最優の運用者であるかと云ふの一事からして決せらるべきものである。この意味に於て、わたくし共、日本人は、今日までの實績よりして、將來に向つて、誰れが大工業の主人公たり、所有

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者たり得るかの國際間の問題の解決に優に仲間入りする權利を獲得したやうである。

産業の進歩とは如何なることを意味するか。一口に云つて見れば、其れは、同じ時間と費用とならば、其の製品を量に於て勝るものとするか、或は、量と併せて質に於て勝るものとするかの二つに限られて居る。そして、謂ふところの大工業なるものは、其れが、特殊の意味に於て、機械の構造を精密にし、組織の整齊を的確にしたがために、是れまでには、實現することが出來なかつた風に、程度に、自然の征服と人と人との協同を實現することが出來たのである。こゝに大工業の光榮があるのである。

儼然たる一大事實として、日本は英國があるやうに、獨逸があるやうに、はた、米國があるやうに、獨自の地理を有ち、獨自の社會組織を有つて居る。されば、わたくし共が、自然を征服し、人と人との協同を圖るためには、必要なだけに獨自の大工業を工夫せねばならぬ。即ち、獨自に其れの機械の構造を精密にし、獨自に其れの組織の整齊を的確にせねばならぬ。丁度、英國が、獨逸が、乃至、米國が、其等を獨自にせねばならぬやうに。斯くして、その結果より觀て、産業を優良の狀態に保つて置くと云ふことは、その方便より觀れば、其れを國民化して行くと云ふことになるのである。其れならば、産業を國民化するとは、一體どう云ふことであるか。如何にしたならば、わたくし共は、産業を國民化することが出來るか。こゝに重大なる、そして、異なる人々が、異なる解答を與へ得る一つの問題が生じて來る。

二、産業の國民化の先決方針

定義に從つて、産業を國民化すると云へば、或る國民が置かれた特殊の地理と、其れが有てる特殊の歷史とを最もよく尊重し、利用して、産業に從事することに依つて、其れを取り扱ふ上に、特殊の方法を創造することである。さうすると、何人に取つても、先づ彼れの念頭に浮ぶものは、若し一つでもわが國の過去に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て出現したあらゆる文明の機關を通じてその特徴が見出だされるならば、其れが如何なる風に有効に、大工業に應用され得るかを試みることであると想像する。それならば、さう云ふものが果してあるかどうか。わたくしは確かに一つあると信ずる。其れは、他ではない。勞力節約の知見と、熟練とである。言ひ換へれば、比較的に簡單な方便に依つて比較的に複雜な目的を達して來た國民性である。わが國の宗教、哲學、文藝、政治、美術等、この努力に成り、この形跡を現はして居らぬものは一つとしてない。わが國の文明及び生活の魅力と强みとは全くこゝから發して居ると思はれる。この特色は、其れが、徒らに過去の文明を憧憬し、其れに執着するの具として取られずして、其れが如何に巧に、未來の産業生活に應用され得、活用され得るかを反省して見る具として取られる限り、この特色は、確かにわたくし共が産業を國民化するに方つて、決して無視することの出來ぬ一大要素であるに相違ない。然し、バアクの用語を借りるならば、わたし共がこの貴重な"Prejudice"を尊重し、利用すると云ふことの前に、先決方針たるべきものが一つある。其れは大工業の性質より自然に來たるところのものである。其れは新時代の勳爵士たる産業の技師と監督者とを養成し、後年に向つて、彼等の技倆と其識見とを決定する工業教育を自由化することである。

三、自由化とは何ぞや

特殊の意味で、産業の時代と呼ばれ得る現代に於て、世界の雄國の間に介在して、意義あり、勢力ある一國を成すには、孰づれの邦家にしても、産業の發達を圖らねばならぬ。この極めて平明な理由からして、今日に於ては、是れまで、主として立國の根柢を農業に置いた國是を變改して、尠なくも、農業と合せて工業の上に、立國の根柢を置くことにした。斯くして、多くは西洋文明からの移植と適用とではあるが、外形だけは、現代生活に依つて創造され、享樂されて居るあらゆる種類の工業は、悉とく、わが國に於て、其し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が養成が試みられ、努力されて居る。そして、多くの失敗は重ねられたには相違ないが、大局の上から觀れば、可なりの成功を收めて居ることは疑がはれない。特に、現下、なほ繼續されつゝある大戰に際し、海外貿易の變調よりして、消極の意味よりしても、又は、積極の意味よりしても、多くの種類の工業は獨立する程度にまでに發達させ、完成させることの急務であることが一般に自覺されることになつた。之れがために、國産奬勵と云ふことも呼號された。又理化學研究所と云ふものの建設にも著手された。

わたくしは、この大勢、これ等の計畫を以て、至當なものと信じて居る。文明の進程と云ふ點から見ても、わが國の繁榮と云ふ點から見ても、わたくし共が、工業の發達と改善とを圖ると云ふことに就いては、何等の非難さる可き側面は含まれて居らぬのであるから、わたくし共はこの大勢、これ等の計畫を是認するのみならず、又奬勵しなければならぬ。然し、たゞ、わたくしの疑惧の念に禁へないことは、この大勢を促進し、これ等の計畫を遂行しようとして居る人々が、どれ程までに、謂ふところの産業主義の意義を理會し、其れの結果を計算して居るか、どうかと云ふことの一事である。わたくしは、彼等の理會と計算との徹底して居る程度に從つて、彼等の努力の効果にも、非常な相違が生じ、産業が生活全體の幸福に及ぼす利益と弊害との關係にも非常な相違が生ずると信ずるからである。わたくしには、彼等の中の最も聰明なものに至つても、産業を其れの起源と意義と、作用とから考察して、其れの上に、大して徹底した鑑賞又は、評價を造つて居るものは極めて尠くないやうであると想はれてならない、否、殆ど無いやうに想はれてならない。彼等をして徹底した鑑賞、又は、評價を産業の上に有たせる爲めに、わたくしはこゝに、其れの自由化を提唱するものである。

人間の欲望の發現たり、分化たる總べての活動は、其れが生活の機關として正當に、有効にはたらくためには、自由化されることを必要とする。今、工業も其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等の一つである理由で、自由化されることを必要とする。が、其れの特徴からして、他のあらゆる活動に卓越して、自由化されることを必要とするのである。其れならば、工業は、どう云ふ意味で自由化され、どう云ふ風に自由化されねばならぬか。わたくしは、この特殊の問題の説明に進む前に、先づ、あらゆる活動の必要とする自由化の意義と方法とに就いて少しく語らねばならぬ。

こゝに、生物上の法則と名づけらる可き一つの傾向がある。そして、其れは、人間の生活に於て、特に顯著にはたらいて居る。一口に其れの特徴を云つて見れば、或るものが生活の繼續體より分化して一つの機關となると、其れは、おのれの作用に精緻ならんがために、其れの存在が當然其れと、並立することを假定する他の機關より孤立し、場合に依つては、其等を無視し、若しくは、其等と矛盾しようとすることである。この孤立の傾向は或る種の分化の存在するところには必らず發見される傾向である。わたくし共の生活の中に釀され、そして發見される殆どあらゆる種の矛盾と、爭鬪と、消耗とは、この一つの傾向から生じ來たるのである。宗教より、藝術より、科學より、乃至、道德より生じ來たる弊害は、皆、其等の各に特有な孤立の傾向より生じ來たつたものである。

孤立の結果は、其れの現在持つて居る樣式を固定させるのであるが、是れは、其れと他の機關との關係の形を以つて來たる生活全體の要求する改造に反抗することになるから、そこに弊害は生ずるのである。其れが、初め取つた樣式は生活全體の必要と經濟とより劃されたのであるから、其れの樣式は、どこどこまでも、生活全體の要求に依つて變更されねばならぬ筈である。然るに、今、其れが他の機關の期待に背いて、わがまゝに自分の樣式を勝手の方角に發展することを固守すると云ふことは、其れの存在の意義をも沒却することであるから、この位、不合理なことはない。然し、是れはわたくし共が生活の特に人間の生活に於て最も普通に發見する傾向であつて、どんな機關でも、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其れが一つの系統をなして來るや、否や、さきに手段であつたものが、其れ自身に、一つの目的とまでならないものは殆どない。『藝術のための藝術』、『宗教の爲めの宗教』と云ふやうな成語は、皆、この傾向を言明するために造られたものである。この弊害を矯正し、豫防する方法の最も深い、最も合理なものは其れを自由化することとである。

其れでは、自由化するとは一體どうすることとであるか。簡單に云つて見れば、或るものを自由化するとは、起源と作用との兩面より、其れの意義を深化することに依つて、其れをして、自づから、他の活動に對して、其れの態度を改整せしめることとである。若し或るものが其れに特有の組織を持つて居るならば、其れの組織は生活全體に依つて、卽ち、他の機關との關係に依つて制限され、構成されたものに相違ないから、其れの組織がこの見地より十分に觀察されるならば、その中には必らず其れをして他の機關と關係せしめる或る意義が發見されるに相違ない。この要素を摑んで、其れを必要な程度と風とに闡明し、開展することを名づけて、其れを自由化すると云ふのである。さうすることに依つて、其れの孤立は有機化され、其れの固定は流動化されて來るのである。

大體、自由化の効果が斯う云ふものであるとすると、漠然ながら、世人も一般に其れの價値は認めて居るやうである。彼等に依て、一般に自由の人、或は、自由の制度と呼ばれて居るものは、絶えず、或る程度にまで、自づから自由化を行つて居る人、又は、制度の謂である。其等の特徴は、必要に應じて己れを改造し、他のものの要求に順應して居るもののことであも。一層適切に云へば、他のものに順應するために、己れを改造して居るもののことである。そしてかゝる人、又は、制度は、さう云ふことをなさざる、若しくは、なすことを欲しない人、又は、制度よりも、一層價値あるものと見做されて居るのである。して見れば、生活に於て、事柄が重大になればなる程、其れを自由化することの必要はますます增して來るわけであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。

四、產業の自由化の必要

今、最廣義に解釋して、產業なるものは何んであるか。其れは、人間が置かれた地球の上に在つて、彼れが生活を持續するために、そこに發見される要素を利用して、其れの方便と化し行くことである。この意味に於ては、產業は人間の生活と同時に出現し、其れと終始して來たものである。そして、其れは人間の聰明と德性との進步するに伴れて徐々と進步して來たものである。其れが數千年に亙つて、そこに發見される要素を利用することに依つて、どれだけ永久に地球の表面を變更し、又、變更し行く方法を建設したかは、わたくし共が容易に目認することの出來ることである。是れは、二千年、三千年前に於て、既に驚く可き程度に發達して居たことは、其等の年代の遺物に依つても容易に推測することが出來る。そして時勢の異なるに從つて、多少の消長はあつたが、概して云ふと、神話の時代、宗教の時代、戰爭の時代を通じて、絶えず發達して來たところのものである。然し、不思議な機會と衝動とに依て、嚴義に於ける產業の起つたのは、今より僅かに五百年前のことである。そして、其れは文藝復興期に於てであつた。この嚴義に於ける產業とは、一層正確な方法に依つて、一層滿足な風に、(總ての種類ではなく、或る種類の)欲望を滿たし行くことである。是れは、自然の勢力を利用することに關して、人間が一段の成長を遂げたと云ふことに歸する。其れが爲めに、彼れの欲望、その者の性質が變化したのでもなく、其れを滿たす方法が更改されたのでもない。たゞ、其等が發展した自然の結果として、必然に、或る變形を閲したゞけである。然し、分析的に觀れば、この事實の中には、二つの成分が包含される。欲望の尊重と智力の增加とが是等である

小兒の謎の一つとして、鷄が先に生れたか、卵が先に現はれたかと云ふのがある。產業の勃興の由來に關する説明も、惡くするとこの謎のやうな者になる。今日、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世間一般に行なはれて居る見解に從ふと、科學の發達が產業の勃興の基礎をなしたと云ふのである。科學とは正確に外界の要素を整頓する方法に過ぎないのであるが、其等にして正確に整頓されないならば、其等はどうしても欲望を滿たす方便となされない譯であるから、科學の發達を以て產業の勃興の動力と觀ることには確かに一分の理由はある。然し、人間は何故に是れまでよりも一層正確に外界の要素を整頓することの必要を感ずるやうになつたか。其れは是れまでよりも、欲望の尊貴なること、隨つて、其れを滿たすことの價値を一層意識して來たからではないか。この見方よりすれば、欲望の尊貴の意識が產業の勃興の基礎となつたとも云へる。然し、事實はどちらでもなかつたのである。つまり、人間の根本性よりして、彼れの全人格の成長は、同時に、同理由で、彼れをして彼れの欲望の尊貴を意識させ、其れを滿たす方便たる外界の勢力の整頓に努力せしめたのである。事實、其れに相違なかつたといふことは、生活に於て非常に異り、非常にかけ離れた中心點に於て、同じ志向を持つた運動が、色々な形に於て起つて居つたのを見ても解かることである。近世文明の初期に於て、其れの共調となつて居たものは、調和されたる運動、又たは、動搖の中の平衡と云ふことであつた。この理想をこの世の中に立するためにガリレオは天體の運行の中に其れを求め、ルウテルは人間の良心の中に其れを求めて居たのであつた。是等はちよつと見ると、非常に異なつた考察のやうに見えるが、その實術世の桎梏を破つて新たに自由を得た、若しくは、將に自由を得ようとして居た人間が、或る生活の方針を見出さうとした努力の二つの發露に過ぎない。

產業は其れの本質からしては、他の種の活動に比して、特に、孤立し、固定すべき性質を有つたものではない。他の種の活動に比して、反つて其等の處の勢なくなければならぬ性質を有つたものである。其れであるのに拘らず、世人が孤立し、固定するのを產業に獨特の性質であるものゝやうに思惟して居るのは、畢竟

するに、彼等は事實の眞相を究める前に勝手な想像を造り、産業の表明し、且つは暗示する意味を、尠しも理會しないことから來たつて居るのである。其れに對する責任は産業の當事者と併せて其れの享樂者の等しく負ふ可きものである。彼等の謬見は科學の意義と、産業の性質とに關して二重に生じて居るのである。

わたくしは、先づ、科學の意義に對する彼等の謬見を吟味し、次ぎに、産業の性質に對する彼等の謬見を吟味して見ようと思ふ。

科學の目的は經驗の一般化であると云ふことは科學者の力說するところである。如何にも其れに相違ない。然し、わたくし共は經驗の一般化の動機と意義とをよく理會しなければならぬ。實際に存在し、實際にわたくし共が價値を置いて居るものは、悉ごとく特殊の經驗である。わたくし共に依つて取り扱はれ、統一される必要のある經驗は悉ごとく特殊のものである。特殊の食物、特殊の家屋、特殊の友人、特殊の名譽、是等がわたくし共の實際に遭遇し若しくは、實現して居る經驗の總てである。わたくし共が是等を獲得し、享樂しようとして、或は、改造しようとして、こゝに科學は生ずるのである。

わたくし共の遭遇する若しくは、實現して居る經驗にして、決して二つと同じものはない。又、一つの經驗にしても、決して異つた時期に、或は、異なつた場所で、全然、同じて存するものはない。皆感覺の事件としてはヘラクライタスが夙に宣言した通り、わたくし共の經驗に入り來たる總べてのものは絕えず流轉して居ると云ふのが事實である。然し、其等のものを材料として、其等に依つてわたくし共の生活を築き上げるのには、どうかして其等の中に共通の要素を見出さねばならぬ。幸にして、わたくし共の性情は絕えず變化するが決して激變しないと云ふ特徴を有つて居るために、わたくし共の經驗の中には、色々の共通性の階統の工夫され得る要素が堆積されて居る。其れで生活を持續するに役立つ方便は、常識にしても、何んにしても、既に其れの共通化を始めて居るのである

學のして居ることはこの仕事を取り上げ、一層深い、一層汎い基礎の上に、この努力を擴充して居るだけのことである。そして、經驗の共通化が深くなればなる程、廣くなればなる程、其れの色彩の要素は段々に不問に附せられて、其れの關係の要素のみが段々に力說されることになる。然し、共通化が正當に行はれる時には、言ひ換へれば、實際の興味が尊重されながら行なはれる時には、經驗はますます正確に統一されることになるのである。

經驗一般と科學との關係は狹い範圍に於て、算術と代數との關係のやうなものである。代數の符號の合理性は其れが實際の數より出立し、又、最後には實際の數に復歸することの假定の下に於てのみ成立する。この假定を離れては、其れは全然、無意味のものである。然し、一度この假定が絕えず代數を取扱ふ人々の念頭に置かれる以上は、其れの過程が、どの位、實際の數字に依つて言ひ表はされることの出來ない程、抽象のものとなり、複雜のものとなつても其れは一つの意義ある系統たることを失はぬものである。然し、其れの內容が實際の數より遙かに、豐富であり、幽遠であるがために、實際の數の世界を離れて、その外に、その上に、別に代數の世界が獨立して在ると考へることになると、其れは一つの誤謬となつて了ふ。是れ同樣に、科學が、どの位、微妙な概念や想像力に依つて、不思議な世界を假定しても、其れは、たゞ普通の經驗を統一し、豐富にする中間の手段に過ぎないと云ふとをわたくし共は一瞬間と雖も忘れてはならぬ。科學の創造するものは、元素にしても、原理にしても、又は、法則にしても、其等は實際の生活を支配するために工夫された道具に過ぎない。其等の助けに依つて、わたくし共は、日常の經驗から色彩、感情、其の他、種々な溷濁した要素を取り去つて、一層直截に明晰に(實行生活の上から觀て)其れの根柢たる恆久性を把持することが出來る。然し、是れだけでは、其れがわたくし共に取つて直接の經驗たるには、あまりに冷酷なものである。あまりに貧寒なものである。され

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば、理窟から云へば、科學の眞と誤謬とを分かつ標準は、其れが或る方法に依つて再び實際生活に還元され得るか、どうかと云ふことであらねばならぬ。されば、わたくしは、或る科學が產業の發達を助成するの効果の如何は、其れの眞理と誤謬とを判定する上に於て、唯一でないにしても、最も重要なる標準の一つであると信じて居る。然し、不思議なことには、日夜、科學の方法に依つて、產業に從事して居る人々にして猶、この眞理を十分に會得するに到つて居ない。

　ハックスレエは、或る論文に於て、科學の正當な目的は天地の深奥な法則を發見するのにある。其れを以て欲望を滿たす道具としようとするのは、科學の誤用である、濫用であると激語して居る。然しながら、彼れは、その同じ論文の中で、科學が發達して以來、倫敦に於て、火災の度數の尠なくなつたこと、流行病の災惡の減じたことを力說して居る。そして、彼れは彼れが認めて科學の正當な目的として居るものと偶然の副產物として居るものとの間に、何等の內具の關係を認めて居らぬのである。彼れの意見に從へば、科學は人間の直接の利害の觀念を超越して、終局の、普遍の眞理を闡明することを目的として居る。然し、どう云ふ具合か解らないが、其れは、又、其れの輕蔑し、排斥する、卑しき日常生活の方便となると云ふだけのことである。是れは、ハックスレエがこの問題に關して、徹底した理會を全然闕如して居た結果に過ぎぬ。

　徹底した見識を以て、科學と云ふものを生活に對照するときは、是等の二つのものは、ハックスレエが想像したやうに、決して懸け離れたものではなくして、同一の動機と原理とに依つて支配されて居るものである。そして、兩方のものゝ比較價値は、日常生活の道具となる方が主であつて、天地の理法を發見する方が從であるのである。

　畢竟するに、人間の考慮の中に來たり、人間の興味を惹き起し得るところのものは、一つとして彼れの欲望、若しくは、其れの所產でないものはない。この點に於て、眞有と人生と、神と人間との間に何等の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

途もある可きではない。隨つて、經驗のどんな部分、どんな種類を、どんな風に認識し、若しくは、統一して、其れの結果に普遍、絕對、恆久等の形容詞を與へるにしても、究意するに、其れは、たゞ想像に過ぎないのであつて、實際に、其れの動機となり、中核となつて居るものは、人間として、彼れの生活に統一と幸福とを齎さうとする彼れの欲求に他ならない。其れであるから、その實、是等のものは、特殊であり、相對であり、時處に限られたものである。ハックスレエが引いた實例を借りて云つて見れば、直接にしても、間接にしても、火災の度數を尠なくし、流行病の害毒を減じようとする欲求が先にあつて、而して、後、始めて天地の理法を發見しようとする興味が生ずるのである。若し前者の刺激と支持とがなかつたならば、後者はどんな事があらうとも、決して、人間の心靈の中に生ずる機會はあるものではない。わたくしのこの言明に尠しでも不審を懷くものがあるならば、彼れをして、試みに、自然、宇宙、客觀、神と云ふやうなものが、彼等をして人間の意識と、理會と、經驗とを離れて、暫時と雖も、獨立出來るものであるか、どうかの疑問を提出せしめ、そして、之れが解答を求めしめるだけで十分である。

　不幸にして、科學の方法に依つて、產業の持續と改造とに從事して居る技師や監理者等はこの重大な眞理を十分に理會して居らない。彼等の事業の動機と方法と結果との間には理會の上で何等の聯絡もないのである。されば、彼等に取つては、事實の上に於ける是等の三つのもの丶間の聯絡は純然たる奇蹟に過ぎない。彼等は初めより終りに至るまで、人間の欲望の統一と改善とを圖つて居るのである。事實と云ひ、假設と云ひ、主觀の解釋と云ひ、客觀の性質と云つても、畢竟するに、是等のものは、彼れが欲望を分析し總合する間にかはるがはる現はれて來る側面に過ぎないのである。然し、この明白な眞理が、彼等に依つては尠しも理會されて居らない。彼等の仕事の性質に關する彼等のこの無理會は專門的に、社會的に、さまざまな障礙

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を來して居るのである。

宗教の弊害の起るのは、其れが人間の欲求に依つて工夫されたものであるから、其れの理想は人間の欲求に依つて支配されなければならぬことを忘れた時に於てである。藝術の弊害の起るのは、其れが人間の欲求に依つて創造されたものであるから、其れの樣式は人間の欲求に依つて支配されなければならぬことを忘れた時に於てである。産業に於ても、理窟は全然同一であらねばならぬ。そして、わたくし共が、現に見るところの弊害は、確かに、こゝから起つて居るのである。大觀すれば、この弊害はたゞ一種であるが、其れの發現からすれば、二型とするのが便利である。便宜の爲めに、わたくしはその一方を專門的と名づけ、他の一方を社會的と名づけよう。

法則とは經驗に入り來たる事物を取り扱ふ方法に過ぎない。科學の方法は其れが取つた興味から經驗の事物を取り扱ふ方法である。其れであるから、理論的に云へば、一つの科學にしても多くの法則は造られ得る譯である。たゞ、今日に於ては、色々の行き掛りと勞力の經濟より、非常な必要のない限りは、是れまで永い間に亙つて組織されて來た取り扱ひ方を破壞するよりも、其れを洗練じて行く方が賢い道と考へられて居るが爲めに、或る一つの科學に依つて法則と取られて居るものは、其れに對しては普遍にして恒久のものであると考へられることになつて居る。然し、斯の如きものは、其れが實際に役立たせられる場合には、その場合、場で合、或る變更を受けなければ役立たないに定つて居る。何故ならば、斯くして出來た法則なるものは、事實、そのものゝ表現ではなくして、たゞ、便宜上恒久性を持つて居ると認められる其れの一部の關係の表現に過ぎないからである。科學が法則を創造する必要から、暫らく無視するところのものは、攪亂の要素、個人差異等の名稱を附せられて居るが、その實は、實際の事實にあつては、法則と同格に其れの實在性を形造つて居るものである。

科學の創造する法則なるものが、既に、このやうな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

性質のものであるならば、其れを用ゐて產業に從事する人々は、十分に其れの意義を理會して掛らねばならぬ。異なる國に於て、異なる時代に於て、產業に必要なる人物の性格も、材料の素質も、政治や道德や經濟やの事情も、決して二つと同じものはない。隨つて、彼等は必要に應じて、自由に、大膽に、先きの法則、卽ち、取り扱いの方法を變更して、最もよく彼等の直接の要求を滿たさせようとする見識と覺悟とを持たねばならぬ。一口に云へば、其れを地方化し、國民化する見識と覺悟とがなければならぬ。然し、さう云ふものを持つて居る技師や監督者が現に幾人あるであらうか。或るは永い經驗と失敗との賜として不知、不識の間に多少其れに類したものを持つて居る者がままあるにしても、其れに對して、十分な理會を持つて居るものが幾人あるであらうか。わたくしは、彼等の極めて稀有であることを信ずるものである。この結果はどうであらうか。其れは產業の異なる部分の間の不統一、產業上に於ける獨創の缺乏と云ふ形を持つて現はれる。財力と、時間と勞力との消耗である。今日、國產奬勵と云ふことが大分叫ばれて居るが、其れも、わたくしがこゝに云つて居るやうな境地に到着しなければ大した意味も効果もあるものでない。

產業は人間の生活に極めて重要なものではある。然し、其れが高尙になり、複雜になつた後に到つては、決して其れの興味の總てではない。產業以外に其れの洗練とし、或は、其れの塡補として起つた種々の機關がある。政治、宗敎、藝術、哲學等が其等である。是等のものは、それぞれ、或る役目を持つて人間の完全な幸福と發達とに必要なものであるのであるから、產業は其等のものを凌壓したり、其等から孤立したりしないのみならず、其等と協同して其等の助長を圖らねばならぬ役目を持つて居る。然し、この重大な目的が、今日の產業に於て達せられて居るか、又、達せられる望みがあるか。わたくしは今日のまゝでは其れは極めて覺束ないことゝ思ふ。

今日、世界の强國に依つて、各々先を競うて產業の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發達が奬勵されて居るのは、主として、自國の富と强さとを增す方便としてである。そして、列强が今日の如く戰爭の狀態、若しくは、休戰の狀態に於て、互に對峙して居る間は、多くの場合に於て、一國の幸福は其れの獨立と强大とを根柢とするものであるから、わたくしは人類の永遠の幸福の爲めに、この政策に多大の意味を認める。然し、わたくしは、近世文明の當初に於て、當時の先覺者等が産業の發達より如何なることを期待したかを回想し、そして、現に産業があの彼等の期待に副うて、正當な道を步んで居るか、どうかを總べての人々と共に考察して見たいのである。基督敎や其れの侍女であつたスコラ哲學が生活の幸福を保障する道具として、如何にも空疎にして無力であつたことに失望もし、憤慨もした彼等は、其等に代はつて、もつと適切に、有効に、生活を支配し、改善する道具を他に求めた。そして、其れは日常の經驗に立脚しながら、尊重することに依つて、其れを統一する歸納法に基ける學問、即ち、科學でなければならぬことを覺つた。彼等は科學さへ隆盛になれば、黃金時代は容易に出現するものと想像した。彼等は幸福の鍵は獨り科學の掌握するところであると速了した。然し、今日の實際の有様はどうであるか。

完全なる幸福の一大條件は、個人の生活に於て、彼れの持てる總ての欲望が正當に滿たされると共に、社會に於て異なる階級を形造る總ての個人の利害が公平に調和されて居ることでなければならぬ。究極、産業の發達と云ふものも、是等の二つの目的に對して貢獻するところがないならば、大して價値のあるものとは云はれない。

わたくしは、産業の價値を十分に認識したいと思ひ、又相應に認識して居るものの一人である。科學は確かに廉價に或る種の欲望を滿たす方便を普及させた。又、異なれる階級の間に、同情と理會とを成り立たせるに必要な道具を創造した。是れは人類の永遠の幸福の爲めに最も祝す可きことである。是等は不完全ながら、末來に於て、科學が生活に齎し得る偉大な光

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明を豫示するものと見られ得る。然しながら、不幸にして、產業に從事する技師と監督者とは、科學の含蓄する使命を正當に理會して居らない。其れを正當に發達することを努めて居らない。彼等は、無智にして無識な政治家や資本家の貪欲の驅使に甘んじて、たゞ、如何にして少額の費用を以て、多額の物品を產出し得るかと云ふ問題の解決にだけ齷齪として居る。さうして彼等のさうすることが、人間の欲望を中心として、一つの種の產業と他の種の產業との間に、若しくは、產業一般と他の活動との間に、どんな矛盾が生ずるも、どんな分裂が生ずるも、一向に頓着しない。實に人類解放の使命を持つてこの世に出でながら、其れを辱しめて居るもの、辱しめて居ることを知らずに居るものは、確かに彼等、產業の技師と監督者とである。

五、工業學校卒業式に於ける訓辭

わたくしは、是れまで、幾度となく、工業學校の卒業式に列席するの機會を有つた。隨つて其れの光景はよく知つて居る。他事は姑らく措き、そこに披露される訓辭に就いて、わたくしが感じて居るところのものを一言して見たい。文部大臣の祝辭、來賓の演說、校長の訓辭等、年々平凡な思想が蕪雜な言辭に依つて言ひ表はされるのである。

が、特に、わたくしの不思議に禁へないのは、是等の言說の總べてが、揃いも、揃つて、型に嵌めたやうに、技術の練磨と云ふことゝ、品性の修養と云ふことを對立的に說くことである。そして、この傾向は、最近に至つて一層烈しくなつて居るやうである。彼等が技術の練磨と品性の修養とを言葉に現す以上は、たとひ彼等の多數は只雷同からして、さうすることが無難であり、均齊を得た注意であると想像するに過ぎないのであらうが、尠なくも、其れを始めた、若しくは、理會を持つて其れを襲套して居る少數者に取つては、社會生活の協同者であると同時に、專門の修業者である卒業生は、社會的と專門的との二つの資格を併有しなければならぬのであると云ふ淺薄な理會から、社會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的の資格を得る爲めには、品性の修養を奬勵し、專門的の資格を得るためには、技術の練磨を奬勵して居るであらう。然し、わたくしとしては、兩者を斯く對立せしめることが、既に現代に於ける産業の性質、産業家の資格に關する彼等の理會の不徹底を暴露して居るものであるとしか思はれない。わたくしに取つては、彼等の言説は、たゞ、空洞の響を傳えるだけである。若し、彼等にして、技術の練磨と品性の修養とを二つのものとして併擧しないで、唯一つ人格の完成を力説したならば、彼等は、眞に、現代に於ける産業と産業家との意義を理會したものとして、一層頼母しく思はれたであらう。

如何なる時代に於ても、その時代の要求する人物を造る最大勢力は、現にそこにはたらいて居る諸の社會の勢力である。其等に勝つた大なる教育機關はない。されば、今日に於て、眞に産業がわが國の安全と幸福とに大切なものであるならば、そこには、わが國の要求する産業の技師、若しくは、監督者を造り又、彼等をして、おのれの職分に對して、必要な程度に自覺と實力とを持たしむるに必要な勢力ははたらいて居る譯である。然しながら、其等の勢力の結晶とし、中心點として、工業學校なるものが出現し發展して居る以上は、其れが當然の役目として、最も有効に社會の要求する技師と監督者とを養成することを心懸けねばならぬ筈である。然し、今日の工業學校は果して、この役目を盡して居るか、どうか。

今日、工業學校に於て行なはれて居る學科の課目に含まれた缺陷は、さきに、わたくしが擧げた卒業式場の訓辭に含まれた概念に依つて見てもわかる。なる程、形式の上からだけ見て、其等の質や量の關係から見ることをしないならば、品性を造るつもりの倫理と、技術を造るつもりの諸學科とがある。然し、是等の學科は實際に於ては互に何等の照應とも塡補ともなつて居らない。兩方のものは、全く交渉なき根柢の上に教へられて居るのみならず、多くの場合には、相殺する精神に依つて説かれて居るのである。專門學科を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會化する力のない倫理と、倫理を實質化する力のない專門學科とは、たゞ、想像と無理會とで並置されて居るのである。

わたくしは、工業學校に於て、專門學科の外に倫理と云ふやうな學科があるにしても、或はないにしても、そんなことは大した問題ではないと思ふ。兎に角、工業學校の存在する最初の、そして、最終の目的は、聰明な、有効な、產業の技師と監督者とを養成することにあるのである。されば、高專の施設はこの目的に依つて計畫されなければならぬ。其れには產業の特徴よりして、精しく云へば、其れの外的關係と內的組織との特徴よりして、他のあらゆる種の專門よりも、一層も二層も、其れを自由化することが必要であると考へる。この目的が十分に達せられるならば、學科の課目や、其等の編製の方法の如きは、どうでもよいのである。

理想から云へば、總べての專門は其れ自身の効力を發揮するがために、社會に於て其れと並立する他の活動との關係を圓滑ならしめるために、其れの孤立と固定とを豫防する用心は備ふ可きである。專門にして、若しこの用心を缺くならば、（其れが孤立と固定とに陷つては、專門たるの意義を沒却して了うと云ふ單純なる理由に依つて）、其れは、すでに、完全な意味に於て專門とは云はれないのである。そして、今日に於ては、生活の全體と、文明の全經路とに對照して、科學や產業の意義が大分明瞭になつて來た爲めに、卓越した科學の、若しくは、產業の教師は、皆彼等の專門を自由化して、其れの孤立し固定することを防ぐことを知り且つ努めて居る。是れだけのことは、彼等が學生を專門の理會と取り扱いとに導く際に於てにしても、彼等をして、少しく其れの底に橫はる歷史と論理とを體認せしむるだけで十分である。さうして、學生をして彼等の專門に對してこの種の省察を有たせることは、技術の方面に於て、彼等の能力を減殺することにはならないで、反つて、其れを緊張することになるのである。然しながら、不幸にして、今日の專門學科の教師

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には、この見識と手腕とを有つたものは殆んどない。或は、有つて居るものが稀にはあるにしても、其れを教場に於て、學生に頒與することの必要を感じて居るものは殆どない。然し、さうすることの大切なことは、産業教育の大切なことに依つて儼として證明されて居るのであるから、如何なる方法に依つてなりとも、この目的は實現されねばならぬ。わたくしは、之れが最も有効な方法として、こゝに一つの案件を提供して見たい。

六、科學の論理と文明史との編入

今日、工業學生の中でも、一層眞面目で、そして、思慮あるものが、宗教、若しくは、文藝を追求して居ることは顯著な事實である。畢竟、是れは何を意味するであらうか。其れは、兎角、孤立と固定とに陥り易い、或は、現に陥つて居る彼等の日常の學科からは到底滿たすことの出來ない彼等の社會感情、若しくは、宇宙感情を滿さうとする氣分の發動である。そして、どんなに安價な宗教や文藝にしても、其れが現に存在し、又、現に其れを追求するものゝ在る以上は、尠なくとも、想像の上になりと或る感化を與へ得るに相違ない。然しながら、今日、在るやうな宗教や、文藝であつては、又、彼等が求める方法では、彼等の生活を中心として、彼等の社會感情、若しくは、宇宙感情を滿たすことの出來ないことは明らかである。彼等が意識するにせよ、しないにせよ、彼等が眞に求めて居るところのものは、彼等の專門を自由化して、彼等がどれだけ、深く、精しく、其れの專攻に進んで行くにしても、其れが孤立し、固定する傾向を豫防する見識と理會である。が、彼等が現に求め、且つ、得て居る宗教や文藝は、この目的に對しては、大した効能のないものである。

彼等は專門の研究者であると同時に社會生活の團員である。彼等には、その理由も關係も明らかには解らないかも知れぬが、一個の專門家として劃された職業の中に彼等の活動と感情とを限ると云ふこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何んとなく、人間としての活動と感情とに取り殘されるところの多いやうに想像するのである。そこで、彼等はこの物足らぬさの氣分を補ふ爲めに、宗教と文藝とに趨るのである。然しながら、彼等の生活を中心として考へる時には、事實、宗教はあまりに漠然たる調和の情操を養成するだけに止まり、文藝はあまりに生滅し易き色彩の感覺を刺激するだけに止まるから、是等は、彼等が擇んでおのれの職業とした立體の活動と感情との末梢とに對して、纔かに稀薄の關係しか持ち得ない。其れの根柢に滲透し、其れ其れをして其れの中核より醱酵させる力は尠しもない。彼等は社會生活の經濟と、彼等に賦與された特性とよりして、彼等の職業を擇んだのである。されば、其れが動もすれば孤立し、固定する虞があるところから、其れに對する不滿の情操が生じて來るものならば、(宗教も、文藝も、全然、無用であると云ふのでは、無論ないが、)彼等が眞に要求して居るもの、又、しなければならぬところのものは、何よりも先きに、彼等の專門を自由化することに依つて、彼等の社會感情と、宇宙感情とを滿すものでなければならぬ。

わたくしが工業教育の當局者に尋ねて見たいことは、彼等は如何にこの傾向を觀て居るかと云ふことである。彼等の偏狹な、淺薄な見解では、こんなことは尠しも工業教育の本體に觸れて居らない事柄であると考へて居るかも知れない。彼等はこの傾向は學生の趣味の涵養の上からは、あながち非難す可きことではないが、然し、彼等を善良な、有効な技師とするのには、大した關係のある事柄ではないと觀て居るかも知れない。然し、わたくしとしては、是れは、尠なくも工業教育に取つて、最も重大なる問題の一つを形造るものである。

わたくしは、宗教と文藝とを要求する彼等の心事を十分に諒とする。然し、彼等の不徹底な理會に至つては大に惘まざるを得ない。彼れは、或るものを求めて居ることに於て正しくある。然し、彼等は其れが何んであるかを判斷することに於て誤つて居る。わたく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しは、こゝに、是非共眞に、彼等が求むるところのもの、種子となるものを提供したいと思ふ。彼れ等にして、先づ是れを持つて居るならば、宗敎も文藝も多少の効果はあらう。然し、彼れにして、先づ是れを持たないならば、宗敎も文藝も彼等に取つて大した効果のあるものではない。其れならば、わたくしが提供しようとするものは、何んであるか。其れは二つである。その一つは生活に於て、産業の發生を敎へるところのものであり、他の一つは科學の內にあつて、其れの組織を敎へるところのものである。わたくしは便宜の爲めに、前者を呼んで文明史とし後者を呼んで科學の論理としようと思ふ。詳しく云へば、前者は産業を中心としたる近世文明史であり、後者は近世の産業の說明を主とした科學の論理である。

是等の二つの學科の目的とするところは、共に産業を自由化することの一點にあることは云ふまでもない。然し、文明史の方は外的に其れの孤立を豫防して其れを自由化しようとし、科學の論理の方は、內的に其れの固定を豫防して其れを自由化しようとするのである。

産業が世間より物質的と非難されるのは、其れが他の活動より孤立する傾きありとされるが爲めである。然しながら、近世に於て、全體として産業が生活の一つの機關としてはたらいて來た跡を見ると、其れは決して孤立して來ては居らぬ。其れが孤立して來て居らないところにわたくし共に取つて産業の重大なる意義が存ずるのである。多少の理會を持つて、近世の文明を考察するものは、そこに、一つの普遍の精神が動き、其れの發現は、信仰に於て、政治に於て、道德に於て、産業組織に於て實現されたと見るのでなければ、是等の孰づれも、何んの意義をもなさない程に是等の各々は密接な關係を持つて居る。そして、社會生活の發達は、其れの總べての方面に於て、同時に現はれるものではなくして、先づ其れの一局部に現はれ、其れの刺激に依つて、他の局部は其れに隨化して行くのであり、次には、斯くして隨化した局部は、其れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

順番として、一歩先きへ進んで、他の局部を牽引して行くのである。かう云ふ理由で、政治の發達が産業の發達を促し、産業の發達は信仰と藝術との發達を促すことになる。是れは、大體に於て、有機的と呼ばれて居る社會生活に在つては、いつの時代に方つても、さうでなければならぬ。又、事實、さうであつた。たとひ、當時に於ては、異なる職業に從事する人々は、互に他の者のして居ることには頓着せず、一向に己れの職業の遂行と完成とに沒頭して居るやうに見えても、共等の間に、交渉と經濟とが成り立つて居る限りは、同一理想に向つて動いて居るのである。今日より見て、わたくし共がアテンスの哲學と、藝術と、社會組織との間に、共通性の多くを認めるのは、畢竟、是れが爲めである。

然し、この道理は、人間がおのれの生活の組織と運命とに關して、特殊の意味で、自覺と理會とを持つやうになつた近世に於ては、生活の如何なる局部に、如何なる變動が生ずるにしても、其れは、その局部に特有な形式を取つた生活全體の變動である。啻に其れが他のあらゆる局部に感化を及ぼすのみならず、その變動そのものが間接に他の局部の要求から沈澱されたものである。この事實は、近世文明の初當に於ける先覺者の意氣と事業とに依つて優に證明されて居るところである。レオナルド・ダヴンチやジョルダノ・ブルノオの生涯の如きは、たまたまこの事實の說明に過ぎない。

産業は人間の生活の機關のたゞ一つであつて、其れの存在は、他の機關の存在を假定して始めて一つの意義をなし、其れの變化は他の活動の變化を假定して始めて一つの價値を持つことの眞理が明瞭に理會されたならば、産業は自由化さるゝと同時に、其れに從事する技師と監督者との生活も自由化されて來るとわたくしは考へる。考へざるを得ない。そして、この眞理を敎へるところのものは、産業を中心とした文明史である。

産業が機械的であると世人より非難を受けるのは其

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れが取り扱はれる精神の眞相が理會されて居らない結果である。ベエコンは自然を支配する爲めには、先づ其れに事へねばならぬと云つた。是れは、自然に對して科學者の執る無私な、冷靜な、態度を言ひ表はすつもりで造られた格言である。が、是の格言は、惡くすると人を誤らせるところのものとなる。自然なるものも、其れの成り立ちから云へば、人間に依つて、時々刻々に生滅し、變化し行く與料から選擇し、醇化し、組織して始めて創造されたものである。されば、自然に事へると云ふことは、その實、永久の幸福の爲に、冷靜に感覺を統御することなのである。一般に、淺薄に、非人格と解せられて居るものは、その實、白熱した人格であるのである。人間は多くの苦い經驗からして、時々、刻々に流轉し、生滅し行く色彩に眩惑され、誘惑されて居ては、何等まで經つても、生活の方針は定らないことを覺つたために、一時の放恣と享樂とを節抑して、この色彩の中に含まれた恒久の實在を發揮し、尊重して、自然、若しくは、客觀を建設したのである。から云ふことをする人間は、既に、自然に對して自由の一君主たることを立證して居るのである。如何なる主權者にしても、彼れにして、一度、憲法を制定した上は、彼れは自づから進んで其れの約束に服從しなければならぬ。然し、其れを制定し其れに服從することは獨り自由を有し、自由を解する主權者のみの能くするところのものである。そして、科學はつまりこの驚くべき創造の頂點を飾る華冠として出現したものである。

常識と科學との間に、其れの精神に於ても、其れの方法に於ても、截然たる區別の立たないのは、すでに、科學の諸大家の言明して居るところである。然し是等兩者の間に、少しでも區別が立ち得るならば、其れは、感覺を統一する上に於て、科學は常識のしたことを一層正確に、一層經濟の方法に依つてするところにあらねばならぬ。さうすると、人間の自由は、常識より科學に進むに随つて、一層、其れの權威を增進し、其の範圍を擴大したものとら觀るべきである。宗教と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雖も、哲學と雖も、決して常識の建設された世界以外に何等の世界をも啓示しようとはしないのであるが、特に科學に至つては常識の蓄積した自然以外に、何等の世界をも發見しようとしては居らない。生活の必要上、彼れの經驗が實行の目的のために、感覺を統一し、洗練することが、段々に正確になり、精微になつて行くにつれて、常識は、何時か科學となつて居るのである。淺薄な科學者が、淺薄に考へるやうに、若し科學にして、常識が用ゐるのと全然別種の方法に依つて別種の實在を發見するものならば、これまで常識にのみ依つて生活して居た少年、青年を取つて、僅かの歲月の間に、彼等をしてどうして科學に特有の境地の風光を會得せしむることが出來ようか。この事實からしても、科學の實在は常識の其れの延長と充塡とに過ぎないのであつて、兩者の內容は兩者の名稱の相違する程に相違しないことが解かるのである。されば、科學は何を其れに特有の仕事として居るかと云へば、其れは感覺的、概念的、想像的、實行的、審美的の諸要素が紛糾し、錯綜して居る直接與料を基本としながら、時々の興味又は目的より重要と不重要との二要素に分つことに依つて其等を整頓して居る常識の仕事た取り上げ、更に、系統ある興味、又は、目的より、更に廣汎なる範圍と正確なる標準との下に、さきに常識の分けた重要と不重要との二要素を批判し、洗練することにあるのである。かうして出來た成果は、卽ち、科學の法則である。是れを外にして、科學の法則なるものはないのである。して見ると、常識の世界が自由なる靈の自由の創造であるごとく、科學の自然は、更に一層奔放なる靈の奔放の工夫であらねばならぬ。

このやうに、極めて簡單に、そして、不完全に科學の性質を說明しただけでも、經驗を統一する上に於て、科學が、宗教や藝術と同様に、――宗教や藝術以上でないにしても、決して、其等以下ではなく――自由にして奔放なる人間の精神の發動として、如何にその權威を逞うして居るかが會得されねばならぬと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

科學の論理は、科學の動機と經過とを發生的に、且つ、批判的に說明することを其れの役目とする。そして、科學の論理がさうした結果はこゝにわたくしが考察しようと試みたところのものであるとすると、其れが如何に重大な關係を工業の諸學科に對して有つかが自づから知れるであらう。科學の論理がさうした結果は、さきに非人間的であつた科學の對象は人間的となり、超功利的であつた科學の方法は功利的となつて、こゝに、科學は其れの內面の意義よりして解放されることになるのである。今日、工業の仕事が科學の原理に依つて居ることは天下周知の事實である。然し畢竟するに、科學の原理なるものにして、もと、人間が彼れの直接與料を整頓し、取り扱ふ便宜に過ぎないならば、歐米人も日本人も等しく多くの共通性を有する人間である以上、たとひわたくし共、日本人は今日、猶ほ、大工業の學生として、其れの先輩たり、敎師たる歐米人の失敗と成績とを十分に尊重しなければならぬにしても、其れと同時に、わたくし共は特殊の地理と特殊の國民性とを有ち、是等に對する考慮が指示する限り、大膽に彼等の窠臼を脫却して、自由に獨特の行路を工夫するの抱負と意氣とを持つに到るべきである。工業の研究者にして一度この見地に到達して來れば、どうして產業と其れに從業する人々の考へ方とが機械的であるとの誹を受ける機會も理由も一切無くなるではないか。

七、わが國に於ける產業敎育に關して緊要なる特殊の用意

この頃、わたくしが眼に觸れたものの一つに八田三郞氏の談話に係る「現大戰と英獨敎育の改革」と云ふ表題を持つた談話がある。その中に、次のことが云はれて居る。

　高等專門敎育の改革は無論獨逸でも英吉利でも大々的に企てられてある。之に頗る面白い一致が兩國の間にある。專門敎育の改革には無論基礎學科の改革も伴ふが、人間を作る學科を出來得る限り排除

して、理化學を盛んにやる、殆んど全力を集中して凄まじい勢ひを以つて其の方に向ひつゝあるのである、文學も歴史も古代語學も悉く犠牲にして理化學一點張りでやり通さうといふ意氣込であるらしい。此點に於て互に一致して居る。（丁酉倫理講演集本年九月號）

英國と獨逸とに於ける最近の教育思潮に就いて、知るところの尠ないわたくしは、この博士の觀察が、どれだけ正當なものであるか、どうかを判斷する證據も、標準も持たぬものである。わたくしとしては、彼れの言をその儘受け取るより外にない。是等の二大國が、カアライルが嘗て云つたやうに、「爾吾を殺さずんば、吾爾を殺さん」との意氣込みを以て、一大爭鬪に沒頭して居る。相方共に、この戰爭の中に於て、理化學の知識の優劣は、一國の運命の消長に關することの大なることを認取し、この戰爭の後に於ては更に一層なる可きを豫想して居ることとて、是等の二大國が、國民教育の重大なる要素として、理化學の科目を重大視して居ることには一應尤もな道理があると思はれる。一體のこの談話は極めて簡單なものである。隨つて、深く立ち入つて、其れが就いて語るものの事情や精神の説明に關して缺けるところが極めて多いものである。が、兎に角、最後の事實として、眞に、彼れがこゝに、報告して居る通りに「文學も歴史も古代語學も悉く犠牲にして理化學一點張りでやり通さうといふ意氣込であるらしい」ならば、是等の兩國の教育者の血迷ひ方には、確かに噴飯に値するものがあると謂はねばならぬ。一時の發作なりとも、どうして、教育の事柄に關してこんな短見淺慮が出現したかわたくしには不思議でならない。

或る國が、其れの獨立と安全との保障を得ると云ふことは、その他のあらゆる望ましきもの、價値あるものを獲得するに先だつべき必要條件である。されば、刻下の戰爭に於て、今後の國際競爭に於て、理化學の隆替が國家の盛衰に密接なる關係のあることが或は證明されたがために、或は推測されるがために、是等の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兩大國に依つて、其れが重大視されるに至つたと云ふことに對して、わたくしには大した異議はない。然し、複雜なる要求を有し、複雜な機關を有する近世國家は、其れの强大を期するがためだけにしても、事實を語ると、苟も近世國家たるには、孰づれのものもたゞ、强大なる以外に、多くの高貴な目的を有つて居ることは勿論であるが、其の敎育をさう片方付けて了ふと云ふことは、決して其れが當面の目的とするところのものさへをも達する適當な方法ではないとわたくしは信ずる。そんな方針で、戰爭に於て、平時に於て、いづれの意味からしても、有用な、有爲な人物の決して造り出される道理はない。一步を進めて、狹い範圍で考へて見てもそんな方針で事實才幹ある、識見ある產業の技師、若しくは、監督者の決して造り出だされる道理ない。されば、是等の兩大國の敎育の方針が理化學を學科の眼目とし、中心とするにしても、否、さうすれば、する程、反つて、必然に、他の一方に於て、其れをして生活全體に對して生命ある關係を有たしめるために、あらゆる工夫と努力とに依つて、其れを自由化するの用意を缺いてはならぬとわたくしは信ずるものである。然し英國と獨逸とは敎育と人才經濟との事柄に關して、世界の先進國である。其等が、長い間に蓄積し、醇化して來た貴き經驗は、こゝにわくしの疑惧して居るやうな結果に就いては、既に十分に考慮を費して居ることであらうとわたくしは想ふ。然し、八田博士の報告のまゝであつて、「人間を作る學科を出來得る限り排除して、理化學を盛んにやる」「文學も歷史も古代語學も悉く犧牲にして理化學一點張りでやり通さう」として居るのだとすると、わたくしはこの計畫の失敗の偉大なるべきを明らかに逆睹し得て、戰慄するものである。

英國や獨逸のことは差し當たりどうでもよい。わたくしは、戰後の經營に關して特に其れの產業方面に關して、高邁の見識と、遠大なる方策との一向に見るべきなきわが國に於て、この種の報道の及ぼさないとは限らぬ惡感化を氣遣ふところのものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こゝに更めて云ふまでもなく、西洋に於ては、其れの產業は、其れの信仰や、藝術と同じやうに、其れの國民生活の分化に過ぎない。其れであるから、其れがどの位片方附いても、國民全體の生活に對して、有機的の關係を失ふには至らない。其れの孤立と固定との傾向は久しい間、蓄積された道德と情操とに依つて豫防されて居る。然しながら、わが國に於ては、大に事情を異にする。大工業は僅かな四十年、若しくは、五十年前に於て、わが同胞が死活の岐路に立つた時に、無理會に沒批判に移植され模倣されたものである。勿論、わが國の固有の文明と雖も、人間の生活の造り出したものであるし、西洋の產業と雖も人間の造り出したものであるから、その間に關係のないと云ふことはない。特にわが同胞に依つて、其れを採用することの必要が感じられ、そして、一度、採用された後には、其れが相應な成功を以つて使用されて居る以上は、第二義に於ては、わが同胞自身が其れを創造したのであるとも云へないことはない。然しながら、現に行はれて居る西洋のとは全く別の道德や信仰や藝術や社會感情が行なはれ、其れが猶可なりの勢力を有つて居る以上は、その初め西洋に於て出現し、發展した產業に對するわたくし共の覺悟は、西洋人の其れと大に異ならなければならない譯である。異ならなければ、何時まで經つても、其れを地方化し、國民化して、わが藥籠中のものとすることは出來ない譯である。

かう云ふ事情があるにも拘らず、わが國の敎育界に於ては、西洋の敎育界に於ける十分の一ほども、產業と其他の活動との關係を考へ、產業そのものの組織を考へて、其れを自由化しようとする見識のあるもの、其れを自由化し得るの力量あるものが殆どない。そして、徒にその聲を大にして、國產奬勵とか、理化學研究所の設立とか叫んで居るのである。わたくしはこゝに斷言する。わたくし共は、日本人として日本人のための產業を振興する第一の、否、唯一の方法は先づ其れを自由化するにあると。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

浮田博士の新聞紙論を讀むで其の猛省を促す

東京朝日新聞記者　杉村廣太郎

序論

雑誌『新時代』の創刊號に、法學博士浮田和民氏の『新聞紙及新聞記者論』といふのが出てゐる。近來希に見る勇壮活潑なもので、傍若無人に新聞紙と新聞記者とを罵倒してある。從來この種の論議は屢々世に現はれたが、大抵は或る一部の新聞紙又は新聞記者を罵つたもので、今度のやうに斯う一網打盡に一切の新聞紙及新聞記者を擧げて罵つたのは、餘り見たことがない。又今迄は如何に口汚く罵つても、その心の底の何處かに新聞紙又は新聞記者に對する多少の同情は潜んでゐたものであつたが、今回の浮田博士のやうに、同情どころか、憎惡嫌厭の情を以て終始一貫新聞紙を呪咀するに止めたのも亦頗る珍しい。憶ひ起せば、前年倫敦タイムスの外報部次長ブラーム氏が日本に來た時、東京朝日新聞社では例に依つて一夕之を芝の紅葉館に招いて歡迎の小宴を張つたことがある。その折社内の者許りでは興が薄からうといふので、別に知名の士兩三を招いたが、その中にわが親愛なる浮田和民博士もあつた。その時快く朝日新聞社の招に應じ、快くタイムス記者と談を交へて、快く歡を盡して歸られたその人の口から、今日斯ういふ恐ろしい新聞紙及新聞記者の罵倒を聞かうといふは、誠に奇異の感に堪へない。

いや、奇異の感に堪へぬのは、只是ばかりでない。他にもいろ／＼ある。私がこの文を讀んで、第一に念頭に浮んだ所のものは、この文が浮田博士の書いたものであるまいといふ疑念であつた。それほど私は奇異

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の感に打たれたのである。先づそれから言はう。

第一にその文章が以ての外の下手糞である。中學あたりの生徒でも氣の利いた者は、こんな拙い書き方はしない。重複がある、矛盾がある、措辭が冗漫であつて語句が晦澁である。その劈頭第一に『現代文明の特長は善惡兩方面なるが、其善き方では人道上の進歩、社會改良事業の發達、科學の進歩及其應用、大工業の發展、戰術及戰爭の大革命等殆ど枚擧するに遑がない。就中、古往今來恐くは比類なき現象で現代の一大奇績ともいふべきは、卽ち新聞紙の發達及其勢力の猖獗を極むることとこれである』とあるが如き、何等不透明の書き振りぞや。之れだけで見るとどうしても『其善き方』とやらんの中へ『新聞紙の勢力の猖獗』もはひつて來なければならぬことになる。更に其の次の項の起手に『今日世界中に於ける有りと有らゆる新聞紙及之に等しき雜誌の分量を計算したならば、或はヒマラヤ山にも平衡すべく、或は小さき星の如き幾つも出來るかも知れぬ』といふに至つては愈出で丶愈惡文を極めてゐる。私は之まであまり博士の文を讀んだ はないが、苟も一時は『太陽』の主筆を勤め、法學博士として聲名文壇に聞えた博士位の人が、何が何でもまさかに斯んな下手糞な文は書くまいと思つた。夫れ文章とは思想である。文章の拙いのは思想の混亂してゐる何よりの證據である。

第二に事實の眞相を得て居らぬ事が大分ある。私は博士を信ずるの餘り、博士が故意に事實を曲ぐるやうな人でないことを信じたい。隨つて、この文に現はれた事實の間違は曲筆の結果に非ずして、不明の結果であると信じたい。例へば『美人の顏を掲げ、美人の珍談奇聞を掲ぐると、人は之を愛讀し、新聞紙は飛ぶが如くに、賣れるのである。現に醜婦であつても新聞記事の標題には「美人云々」と掲げらるゝでないか』とあるが、美人の珍談奇聞を掲げた位で、そればかりで、新聞紙は飛ぶが如くに賣れるものでない。誇張も大概にして貰ひたい。それは只形容に過ぎぬ事で、强て咎めだてをするにも及ぶまいと言ふ人があるかも知れぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か、全篇を通じて博士の調子がすべて是である。一例として特に擧げておく必要がある。又醜婦を美人と書くが如きは、或る新聞紙が或る場合にしたこともあらうが、凡ての新聞紙が凡ての場合に、そんな馬鹿な事をするものでない。それを左も〱新聞記事の標題には必ず醜婦を美人と書くもの丶如く說くのは、誣ふるも甚しい。十八頁の上段に『新聞紙に書いてある事は十中八九迄は嘘である、針小棒大の記事であると見るべきは正當である』とある。十中八九迄嘘とは、書きも書いたりだが、さういふ博士の言こそ嘘であつて、針小棒大である。博士は之に關して、『東京朝日』の紙上に辯解してゐるが、あんなものは辯解にも何にもならない。十九頁の下段に『今の世に新聞記者程厭み嫌はれてゐるものはない』とあるが、是なども世間知らずの言ふ事であつて、新聞記者よりも嫌はれてゐる者はいくらもある。又新聞記者だからと言つて嫌はれてゐる者許りに限らぬ。斯ういふ事は、誰が見ても一見事實に非ざるを知り得るに拘はらず、博士は如何にも之を事實らしく書き立てゝある。若し博士が曲筆を敢てする人でないとするなら博士はこの見易き事をも見得ざる沒分曉漢であるとしなければならぬ。併しそれは博士に對してすまぬ。そこで私はこの文が博士の手に成つたものであるまいと疑つたのである。

第三には論理が全く滅茶苦茶である。博士の論據は何等根據ある事實から歸納し來れるに非ずして、殆ど凡ての場合、自分の勝手に定めた前提から演繹し來つたものに過ぎぬ。而してその演繹の方法に於て、初歩の論理學が敎ふる所の方則をさへ無視してゐる。『新聞紙は嘘を書くもの』『新聞記者は善良ならざるもの』とは篇中處々に出て來る斷定であるが、之は、只或る新聞紙は嘘を書き、或る新聞記者が善良ならざるを推定して、夫から割り出した不完全なる二重の推定たるに過ぎぬ。卽ちその『或る物』を說くにだに事實の根據に依つて論證せられざる上、その土臺の据らぬ『或る物』から『すべての物』を推度しやうとしてゐるのである。是は尙後段本論を評する時に詳述する事とし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、此には只二三の簡短な例を擧げて見る。十五頁の下段に

「新聞紙を讀まぬ國民必ずしも文明國民ではないが、併し新聞紙の必要を感ぜぬほど文化の程度が低級なるものにしても、其處には道德上潔白なる人間の多い事は疑なき所である、之に反し文化の程度如何に高くとも、新聞紙を愛讀する時代は墮落の時代である。學識はあつても新聞紙を愛讀する間は決して高潔なる國民といふことは出來ない」。

とある。隨分亂暴な議論であるが、姑らく目を瞑つてその亂暴は看過するとしても、看過すべからざるは、博士が文化と道德とを殆ど沒交渉なるかの如く解してゐる甚しい時代後れの思想である。文明とか文化とかいふ事は只「學識」とやらでのみ成り立つべきものでない。道德が進まねば文化は決して進まぬ。夫をどう穿き違へたか、文化が低級でも人間が潔白であり、文化が高くとも墮落であると說くのは、矛盾の甚しいものである。其他十六頁では、新聞紙の特長たり使命たるものが、一に社會の好奇心に觸れ、多數人の同情又は憎惡心を挑發すべき記事を掲ぐるに在つて、「それ以上の事を求むるのは求むる者の無理であり、又求めても事實不可能である」と言ひながら、十八頁には新聞改革の可能的方面とか說いて、改革の三方法を擧げてある。始に改革の餘地のないものゝやうに罵りおきながら、忽ち飜つてその改革を策するといふは、矛盾に非ずして何だらうか。

第四には博士の態度が不作法を極めて居る。私は假に「勇壯活潑」と言つておいたが、書生の劍舞でゞもあらうことか、博士の勇壯活潑は亂暴に近い。丸で陋巷の匹夫が酒にでも醉つ拂つて互にわめき合てゐるやうな口調である。餘程興奮して居られる。冷靜なる評論家の漫に口にすべきものでない事を平氣で口にしてゐる。今改めて實例を擧げずとも、今迄に引用し來つた所、及び之から追々に引用し來るべき所を見て、讀者は博士の惡口雜言の如何に甚しきかを知られるだらうと思ふが、尙讀者の心證を一層強うせんが爲に左に三四例を引いておく。

新聞紙なるものは見方によつて嘘を書く爲の機關なりともいひ得やう。（中略）若し社會の眞相を知らんと欲せば、新聞紙を讀んではなら

ない。新聞紙に書かぬ事が事實で、書いてある事は、嘘に非ざれば、通常有り得べからざる非常識的なことのみである。』(十四頁)

『新聞紙は道德家には不必要なものである。何となれば之を讀む毎に多少精神上の潔白を害されるからである。新聞紙は學者にも無用なものである。何となれば之を讀んでも一つも眞理を發見することが出來ないからである。又政治家にも新聞紙は不必要なものである。眞に天下國家を思ふ政治家には新聞紙の必要がない。何となれば新聞紙に依つて確な政治が行はれるものでないからであつて、眞の政治家は多忙なるが爲に新聞紙を讀む暇さへない筈である。(十六頁)

『善良なる記者を求むることは、或る意味に於ては矛盾であつて、これ恰かも善良なる泥棒を求むると一般である。今日の新聞記者たるには正直な事を書くやうな者は役に立たない。人の名譽を毀け、財産を掠め取ることの出來ぬやうな者は無能記者と看做されてゐる。これが爲に善良なる記者は驅逐せられ、惡辣なる記者のみ殘存してゐる。(十九頁)

以上四個の理由に依つて、私はこの文が實際博士自身の書いたものであるか否かを疑つた。而して、博士の名譽の爲にもこの文が博士の筆でなからんことを、中心から希望したのである。此に於て自分は本論に關係なき、いはゞ揚足取りの質問四個條を『東京朝日』に掲げて、一には事の實否を確め、一には夫となく博士にこの暴論全部を取り消すの機會を與へんとしたが、博士は唯その一部に半取消的の陳辯を加ふるに止めて、本論は飽くまでもその自作なることを認めた。今は是非に及ばぬ。博士に對してはお氣の毒であるが、以下本論に入つて審かに點檢を加へる。

本論

誤解を避くる爲に、最初に明に斷つておくが、若し博士の新聞紙論にして、單に現在の新聞紙中の或るもの(若くは多數)に關して其の有害無益なるを説き、新聞紙なるものは其の性質上から言へば、誠に人生に缺くべからざる必要のものであるが、併し今日多數の新聞紙のやうに公明を缺き信實を缺いて居るやうでは全く困るといふが如き意であつたならば、我等は正に滿腹の同意を表して、博士と共に新聞紙攻撃の義軍に加はつたに相違ない。我等と雖も今日の多くの新聞紙に幾多の弊害あることは、遺憾ながら認めざるを得

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からである。現に私が『朝日』の紙上で博士に四個の質問を提出して以來接手した幾通かの投書中には、博士の論旨をさういふ意味に誤解して、私を攻擊して來た者が大分あつた。誤解を避けたいといふのは此處である。博士の論據は決して右のやうな同情あるものでない。博士は現在新聞紙中の或る物又は多數に就て云々するに非ずして、新聞紙は其の性質上噓を書くやうに出來てゐる有害無益のもので、その改革は到底不可能事であるといふのである。而して不可能事ではあるが、成るべく其の害毒を少くせんが爲に、叶はぬ迄もその改革に盡すのは人間の義務であると迄、憎まれ口を叩いてゐる。卽ち博士は新聞紙を政治家にも道德家にも學者にも必要なき、何等取り所のないものと排斥してゐるのである。是がそも〳〵甚しく我等の癪にさはる。博士は『東京朝日』の紙上で頻に、文章の連絡を推察せよとか、全文の意を翫味して呉れとか辯じて居られるが、如何に文章の連絡を見ても、如何に全文の意を翫味しても、博士が新聞紙に何等同情を有せずして、頭ごなしに罵りつけた點は到底打消し得べきでない。博士は『惡辣なる記者のみ殘存し』と明言しながら、私の質問に會つて、倉皇として、それは『惡辣なる記者多く殘存する傾向がある』の意であると改め、『新聞紙に書いてある事は十中八九迄は噓である』と放言しておきながら、私が其の實證を擧げよと迫れば、卑怯にも『數字は形容詞であつて、正確に非ず』と逃げて居る。この調子で、私が巨細に博士の暴言を追窮したなら、恐らく博士は全文を取り消したかも知れぬ。博士の爲に謀るに、私は寧ろその全文を取り消さんことを希望するのである。併し司法官の法廷に立つや一に法律の正文に遵據せんことを勉めるが、立法者の意志如何に迄立ち入つて忖度することは出來ない。今博士の新聞紙論を評するに當つても、博士の內心に立ち入つて、文字以外の解釋を加ふることは出來ぬ。文字に現はれた所で見れば、博士は明に新聞紙の性質任務から論じて、ひとしなみに一切の新聞紙を有害無益と斷じてゐるのである。博士に反省を求めんとする

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所は、主としてこの點に在る。

博士は先づ新聞紙なるものが嘘を書くものと初手から極めてかゝる。曰く

『事實を報道する事が新聞紙の任務である時は、新聞紙の營業は到底持續し得るものでない。何となれば事實は通常平凡なものであるから、之を知つた所で、何等面白味がないからである。(中略)故にこれらをのみ材料としては新聞紙が成り立たざるのみならず、新聞營業者の利益となるものでない。(中略)故に事實の中で新聞らしきものあれば之を掲載し、新聞らしきものなければ事實を捏造して讀者を五里霧中に迷はしめ、購讀欲を挑發して新聞紙の發行部數を増加し以て新聞營業者の利益を謀るものである』云々。

是が博士の新聞紙論の大主旨である。卽ち事實は平凡なものであるから、之を知つた所が面白くない。そこで新聞紙は讀者を面白がらせる爲に嘘ばかり書くといふのである。何處で聞いて來られた事かは知らぬが、博士はこの『事實は平凡なものである』といふ事を、鬼の首でも取つたやうに珍重して、何處でも此處でも之を振り廻して、是でもか／＼と許り、讀者の納得を強制してゐる。果して夫が鬼の首であるか、夫とも博士自身の首であるか、今これを三段に分つて調べて見る。第一、事實は果して平凡なものであるか、第二、假に平凡なるものとすれば、平凡なるものは果して之を知つた所が面白くないものである乎、第三、又假に平凡な者は面白くないものとすれば、新聞紙は讀者を面白がらせる爲に事實を捏造しなければならぬ乎。順々に御意得たい。

一、

先づ伺ふが、事實は果して博士の言はるゝ如く平凡なものであるか。博士は十六頁の下段に於て『凡そ人間の行爲は種々ありとしても、事實は極めて平凡なものである』と殆ど無條件に斷言してゐる。今更そんな事を言つた覺えはないと言はせない。そこで更に一歩を進めて伺ふが、一體事實とはどんなものであるか、是が問題になつて來る。元來『事實』といふが如き世俗に慣用されて居る言葉は、場合によつて幾種の異なる意味に流用されるから、場合を言はずして一定の意義を掲ぐる事は難い。手近くは博士自身が之を『事

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

件」の意と「ニュース」の意と報道の意と又「眞實」の意と四樣に使ひ分けてある。(博士が斯く四樣に使ひ分けておいて或る結論に讀者を釣り込まうとした形跡のある事は後に說く)。斯く色々の意味に用ふるにしても、「事實」の語本來の意義から言へば、其の最大要素として、「存在が證定せられ、若くは證定せられ得べき」事が必要である。古い言葉であるが、主觀が客觀とぴつかり一致しなければならぬ。併し之を嚴重に解して了へば、事實を得るといふは神樣一人の出來る事で、到底人間に出來る事でない。卽ち人間の間には迚も絕對的の事實が有り得ない。あるかも知れぬが、有無の見通しがつかない。此に於て、今日普通に使つてゐる「事實」の意味は、第二義に落ちて、たゞ「或る時代若くは或る場所の一般の智識が其の存在を承認したる事」でありさへすれば宜いとなつてある。相對的事實之を我等は事實と認めてゐるのである。さうして見ると、世俗の所謂「事實」は時と處と人とに依つて幾遷もし、異同も起る。或る時代に於ては、太陽が東から出て西に沒するといふが事實であつた。所が今日では太陽が東から西に沒するとは、修辭の上に於てこそ許されて居れ、事實は地球が西から東に向つて廻轉してゐるのである。卽ち第二義に於ける事實は時と處と若くは人によつてかはる。斯くかはるが故に、或る事實は或る時代に平凡であつて、或る時代に平凡でない事もあれば、或る地方では平凡であつて、他の地方では平凡でない事もある。更に前に擧げた定義に立ち戾つていふと「一般の智識が承認したる」といふ以上、件の時代智識より拔んでた智識を持つた人には極めて平凡な事が、夫より智識の程度の低い人に珍しいと思はれる事もある。今場處によつて、平凡と否とが分るゝ例を言へば、誰某が自働車を一輛買つたといふ事實は、東京や大阪でこそ平凡であるが、山間僻地の小村で初めて起つた事とすれば珍しい事である。東京では新聞紙の種にならぬが、田舍では結構な種になる。要するに事實に平凡なものと平凡ならざるものと、同じ平凡不平凡の中にも平凡不平凡の度の強弱大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小いろ〳〵ある事は、之で分る。其處の所を見分けて、事實の間に平凡ならぬ事實を採取するのが一に新聞記者の働きである。「事實は平凡なり」などいふは、事實とは何、平凡とは何なるかを確と考へぬ者の言ふ事である。

斯く事實の間に平凡ならぬ事實を看取するのは新聞記者の努力を要する所であるが、是は一切の人類が盡く多少とも努めてゐる所で、この點から言へば、一切の人間は皆新聞記者であるとも言へる。今日世間で人間と人間とが相會して交換する日常の會話にでも、自覺的と否とを問はず、必ず平凡不平凡の選擇をして、成るべく問題にも話術にも平凡を避けんとしてゐる。平凡で通るのは「お早う」「よいお天氣」の挨拶位で、如何にぺちや〳〵した夫婦の間でも、會ふ毎に「お前は可愛い」とばかり言ひ續けられるものでない。歴史家が歴史を書くにも、事實中の平凡なる者は棄てゝ、平凡ならざる材料を採擇する。事實を報道する任務の者は是非とも平凡な事迄書かなければならぬと言ふなら、レオニダスが屁を放つた事も、ネブカドネザーが嚏(くしやみ)をした事も一々書かなければならぬ。アントニー・トロロープが「歴史家又は小説家がその書中の男女主人公の口にした事を一々聞いて居らぬといふは有り難い事である。左あらずば三卷は愚か二十卷を以てするとも事足るまい」と言つたのは此處の事である。科學者の科學上の著書にだに、決して事實だからとて平凡な事は書かない。一寸見て平凡に見ゆる事の中にも、其見方に平凡ならぬ所があつて初めて書物が成立する。日が出れば明るくなり、入れば暗くなるといふ位の平凡な事は、物理學の教科書にも出てゐない。若し出てゐれば太陽と光線との關係に關して、生徒の未だ知らざる、即ち生徒に取つて平凡ならぬ或種の説明が加はつてゐるからである。今日我々が毎日日記を認むるに、朝眼を覺して、蒲團を出て、起き上つて、衣を着替へて、揚子を啣へて齒磨を使つた事まで一々書き入れる馬鹿が何處にあらうぞ。日記の中と雖も日々定まつて起る所の出來事は決して書かない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如何に況んや新聞紙が平凡な尋常事を書かぬのは當然である。博士は十七頁の上段に『事實を報道するのが新聞紙の任務であるとせば、世の中に有りと有ゆる常人の事をも掲げなければならぬ』と書いてあるが、丁度之は歴史にも日記にもありとあらゆる日々の尋常事を書き入れなければならぬといふと同論である。

二

假に事實は平凡なるものと讓つて見て、さて平凡なるものは果して之を知つた所が面白くないものであると言ひ得るだらうか。『例へば親孝行の如きは普通の事で、之を掲げても何等興味を惹くものでないが、唯親が極惡非道なものとか、繼母が殘忍冷酷であつて、初めて新聞記事として興味があるのである』(十七頁)と博士は言はれるが、果してさうであらうか。親孝行が普通の事であるや否やも、研究の餘地はあるが、姑く普通の事としておいて果して之が何等興味を惹かぬか、極惡非道殘忍冷酷な親が出て來て、初めて興味があるのであらうか。

博士は平凡の事は『之を知つた所が』面白味がないと言つて居るが、さうぞんざいな議論をされては困ります。齊しく知つたと言つても、之を知る知り方に色々ある。深く知ると淺く知ると興味は自ら違ふ。個條書きに列べたやうなものを讀んで知るのと、一々時宜に適した説明が加はつてゐるものを讀んで知るのとは、其の間に自ら注意の向け方が違つて來る。事件の輪廓だけ知つたのと、事件に關係ある者の心理狀態に迄立ち入つて、知つたのとは、之を知つた効果に於いて、甚しい相違がある。博士の如き學者に向つて講釋でもするやうで相すまぬが、私は博士が『知る』といふが如き廣汎な意義を有する言葉を輕々に用ひて、格別用語の詮索をしない一般讀者を早合點に終らしめやうとする博士の態度を甚だ不親切と斷じたいのである。

知り方にも色々あるが如く、之を知らせる側にも、その知らせ方に色々ある事を博士は全然忘れてゐる。即ち新聞紙の材料の扱ひ方、記事の書き方が、新聞紙

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

始まつて以來幾變遷を經て如何ばかり陶冶選錬され來つて居るか、博士は丸で御存知ないらしい。昔の新聞紙の粗大な膚淺な扱ひ方では、平凡な事は何處迄も平凡で終つたが、今日の新聞紙はそんなものではない。平凡の裡に面白味を見出さんことを勉めてゐる。觀察が精緻を極めて來たのである。取材が廣汎に涉つて來たのである。鹽梅が纖巧になつて來たのである。常人の見得ざるを見、取り得ざるを取つて、之を常人の扱ひ得ざる扱ひ方に扱ふのが今日の新聞記者の技能である。平凡事であるからとて、棄てゝは置かない。面白味がないとて棄てゝは置かない。況んや面白い事實がないから、直に面白げに事實を捏造するといふが如きは能く〳〵低級の惡德新聞でなければせぬ事である。天氣が續く、雨が續くといふは、誠に平凡な事實である。昔はそれを平凡事として棄て去つた。併し今日ではその晴雨の續く所以が、何處其處に何(どう)いふ風に存する氣壓の關係であつて、之が何時頃如何に變化し來るかを調べて、新聞紙に載せる。人殺しがある、情死があるとする。之とても太した非常の出來事ではない。昔は只何某が何處で何して死んだとか殺されたとかの、一通りの裸體事實を叙するに止つたが、今日では其殺傷の動機の微を穿ち、死狀の描寫に巧緻を極めたものが出て來る。其點は頗る藝術的になつて來てゐる。前年女優澄子が橫濱で其母を殺さんとした時、彼の心事が如何に深刻に描き出されたか、又神近市子が其の情夫を刺さんとした時、如何に纏綿せる事情の其間に存するかゞ、常人には看過さるべきことの新聞紙に看過されずに、報ぜられたか。此等の事實を思ひ合せても分る。同じ事を同じ場處で見ても新聞記者と常人とは目のつけ所が違ふのは、翌日の新聞紙に出た所を見て、饜人の驚く所である。それを平凡だからとて面白くないと棄てるやうな智慧のない新聞記者許りと心得てゐるのは、餘りに新聞記者を侮蔑し、餘りに現代新聞紙の發達を無視したものである。

三

以上述べ來つた通り、事實が必ずしも平凡ならず、

平凡なものが必ずしも面白くないものでないとすれば、博士が議論の前提は既に根抵から崩されたことになる。さりながら今假に讓るべからざる數歩を讓つて、すべての事實は平凡であり、すべての平凡なるものは興味なきものとするとも、其の場合に、新聞紙及新聞記者は讀者を喜ばせる爲にニユースを揑造しなければならぬ、乎どうか。博士は十五頁に『これ等（事實を指す）のみを材料としては新聞紙が成り立たざるのみならず、新聞營業者の利益となるものでない。新聞紙が社會の爲に爲し得る所の任務は、其名の如く事實を報道するに非ずして、社會にニユースを供給するに在る。（中略）事實の中で新聞らしきものあれは之を掲載し、新聞らしきもの無ければ事實を揑造して讀者を五里霧中に迷はしめ』云々といひ、十八頁には、『新聞紙に書いてある事は十中八九迄は嘘である、針小棒大の記事であると見るべきは正當である』と說き、更に進んで『新聞紙は何も自分の關知して居る事件に就てのみ嘘を書くのではなく、凡百の事皆嘘を書き誤謬を傳へて居るのである』と極言してゐる。卽ち博士は讀者の興を惹くべきニユースがない時、新聞紙は『事實を揑造し』、『凡百の事皆嘘を書く』ものとしたのである。過言も此に至つて極まると言はざるを得ない。

頭腦の粗笨なる者は、兎もすれば『兩斷辯（オルタネチヴイズム）』といふものに陷りたがる。卽ち、あらゆる天下の事物を截然と二つに割つて、斯うでなければ斯うと、何事をも有無、善惡といふが如き二つの範疇に入れて了はうとするのである。斯ういふ人は、人間を見ると、善人に非ずんば惡人と定めて了ひ、才能を評すれば、賢か愚か二つの中の一つに限るものゝ如く心得る。私は博士の頭腦を粗笨とは決して申さぬが、其の新聞紙に面白い材料がなければ必ずありもせぬ事を揑造するやうに考へて居る所は、明に兩斷辯に陷つて居る。

如何さま世の中には、析あしく新聞紙の好材料となるべき事件の絕ゆる時がある。卽ちニユースの缺乏する事はある。昔はさういふ時に、馬鹿々々しい、世に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あり得べからざる事を作り出して書き立てた事もあるので、今でも斯ういふ材料の少い季節をシリー・シーズンと唱へてゐる。併しシリー・シーズンの名こそ今に殘つて居れ、今日の新聞紙はそんな馬鹿な事をするほど愚でもなければ惡でもない。ニユースの少い時之を補充するの道は記者の新聞眼（ニユース・センス）の働き如何によつて如何やうにも開かれる。今迄ニユースとして扱はれなかつた或る種の事件又は狀態の中から立派に新聞素（ニユース・エレメント）を發見して、ちやんと其處にニユースが出來上ることもある。平生は新聞價値（ニユース・ヴアリユー）の少いものとして、棄て置かれた材料を斯ういふ際に採用して、存外新聞價値の豐かなるものを發見することもある。この故に新聞材料の少かるべき時に、却つて面白い讀物が出來て、宜い新聞紙の出來ることが屢ある。是は新聞紙に注意する者の誰しも心づく所で、丁度獨逸が戰爭の爲に國外から物資の供給を杜絕された時、窮餘に各種の有益な發見發明をしたのと同じ事である。材料がないから、捏造しなければなるまいなどいふ心配は斷々乎として御無用である。

この故に報道すべき事實がなければ必ず虛僞を傳へるものゝやうに言ふのは、「事實」なる語の「實」の字義に拘泥して、之に相對する對語が「虛僞」であると誤解した兩斷癖の結果である。若しさうでないとしたら、博士が「事實」なる語を多くの場合「事件」又は「ニユース」の意に用ひたるものゝ如く思はせて、その間に一種言語上のジヤグラリーを行つたものと解せられても、恐らく辯解の辭はあるまい。

更に進んで考ふるに、新聞紙は必ずしもニユース許りを唯一の材料として居らぬ。ニユースは大切な材料たるに相違ないが、ニユース許りで、新聞紙が出來て行くべきものゝやうに考へるのは、ニユースペーパーの字義に囚はれた愚說であつて、丁度三越や白木屋が呉服店と稱しながら、何故呉服以外のものを賣るかとて、屁理窟をいふと同じである。博士の如き歷史學者に向つて、初歩の新聞紙史の講釋をするでもあるまいが、新聞紙の材料がニユース許りで行かなくなつた事は隨

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分古い話である。私は博士に敬意を表して、さうなつた事情來歴を一々此に說明するの無禮を敢てせぬが、事實が何よりも明白に是を說明してゐる事を言つておきたい。即ち今日の何處の國の新聞紙を見ても、その紙上にはニユース以外の樣々のものがある。之を日本の新聞紙で見ると、續き物の小說がある、講談がある、衞生談がある、家庭料理がある、詩歌俳句がある、文藝論がある、社說論說がある。此等は一々してニユースといふべきものでない。社說の如きもデイレーン時代のタイムスはニユースを掲ぐるを主としたものださうだが、今日多くの新聞紙の社說はニユースよりも寧ろニユースに對する註解となつて居る。斯樣にニユース以外のものが澤山あつて、それで新聞紙の役目が勤まるかといふと、元來新聞紙の任務はニユースを與ふることも勿論その一であるが、別に新聞紙の特質の一たる定讀性（リーヂング・ハビツト）を利用して讀物を供給するといふ事もその一になつて居る。而してニユース許りでは、交通機關の發達したる今日、兎角一社が或るニユースを獨占して他社の鼻毛を拔くのはむづかしいから、自然新聞紙はその社〳〵の特色をニユース以外のものに求める。今日日本の新聞紙中或る希なる場合の成功を除き、不斷にニユースで特色を發揮してゐるものは兩三指を屈するに過ぎぬ。されば材料の如何に乏しい時でも、ニユースの方は有り合せのニユースをお坐なりに列べるに止めて、ニユース以外のもので其の缺を補ふことは格別困難な事ではない。この意味から言つても、材料のない時、事實を捏造する必要はないのである。博士が『新聞紙に書いてある事は十中八九迄は嘘である』と言つたのは、新聞紙に何が書いてあるか、確と取り調べずに言つた出鱈目である。

更に又一歩を進めて、博士が屢口汚く『事實を捏造する』とか『嘘を書く』と罵つて居る事に就て一言を進めたい。斯くの如き倫理的の判斷に涉る言說は餘程明確なる證據を握つた上でなければ、漫に口にすべきことでない。凡そ人の行爲に對して道德上の判斷を加ふる者は、嚴正にして公明なる態度に出て欲しい。博士の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

態度は不幸にして全然之に反して居る。

今日の新聞紙が常に眞實をのみ傳へ得ずして、時に不實の報を公にすると少からぬは、我等も常に遺憾とする所である。此點は自他互に相戒めて大に改良を加ふべき點であると私共は思つてゐる。如何にも殘念である。それは快く認める。併しながら之をすべての新聞紙がすべての場合に盡く行ふもの丶やうに論ずるのは酷も亦甚しい。同時に又新聞紙に不實の報が現はれるからとて、直ちに新聞紙が『事實を揑造』するとか『嘘を書く』とかいふのは、甚しく早まり過ぎた結論である。書く事に間違があるとて、直に嘘を書くとは言はさぬ。今日新聞紙に掲載さる丶事が必ずしも眞實の事のみに非ずして、往々不實に渉る事のあるのは、如何にしても辯解の辭のない所であるが、さりとて斯く不實の傳はるに至る迄には各般の事情がある。記者の錯覺もあれば誤解もある。十分に精査を遂げて萬間違なしと信じた事が、思ひがけず間違つてゐた事もある。如何に密偵を凝らしても何うしても滿足し得るだけに突き留め得なかつた事もある。此等は同じく不注意又は不精密と言つても、罪は輕い。この外に全然調査を加ふるの意のなかつたのもあれば、うかとして調査を忘れたといふやうな事もある。兎に角その大多數は無意の失策か不注意の結果であつて、故意に不實を傳へんとする目的を以て、事實を揑造するが如きは、名もなき小新聞ならば知らぬ事、相當の地位あり名聲ある新聞紙に在つては、極めて希に存する事例である。故意だに尙珍し、如何に況や特に惡意を以て嘘を書くといふが如きは例外中の例外に屬し、斯の如き惡徳を敢てする新聞紙は決して永く存立し得る者でない。此等の事情を一切考慮の中に加へずして、記事に間違があつたとて、直に嘘を書き事實を揑造するなどと罵るのは、人を殺した以上、其の動機が正當防衞なると、過失殺なると、强盜殺人なると、謀殺なると故殺なるとを問はず、一律に之を極重惡人なるが如く裁斷すると、其の趣は同じい。識者の取らざる所である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以上論駁し來れる所に據つて、新聞紙はその性質上、博士の言ふが如く「噓を書き」「事實を捏造」するものに非ざる事をほゞ辯じ得たと信ずる。只世に偶博士の罵るが如き惡新聞紙あることは否むべからざる事であるが、それは畢竟論理學の所謂アクシデントであつて、之を捉へて直下に新聞紙全體を評せんとするは、以ての外の過である。博士はこのアクシデントを見て、之を新聞紙の要素なるかの如く曲解し、之を說明するに『事實は平凡なり』などいへる誤れる前提を擔ぎ出し來り、以て、强ひて橫車を押し通さうと試みたのである。博士が私の此の文を虛心坦壞に精讀したならば、博士が如何に新聞紙を誤解し又は曲解し居たかは博士にも又博士の讀者にも必ず分明に分ることだらうと思ふ。

尙博士の新聞改革論、新聞記者論、記者改革論等に就ても、色々言ひたい事はあるが、餘り長文に涉るから、此等は他日を期して、此には只大本旨なる新聞紙論を評するに止める。

餘論

最後に更に數言を加へて、博士の反省を促したい事が三つある。

博士が『東京朝日』に寄せた辯解に依ると、博士は頻に言葉の足りなかつた由を陳じてゐるが事實は言葉が足りなかつたといふよりも、寧ろ多ほ過ぎたのである。如何に敬意を拂つて、博士の文を讀んでも、博士の新聞紙論は過言の二語に盡きてゐる。博士にして今少し同情を以て新聞紙を觀察し、一方に新聞紙及記者の用と功とを認めながら、その一方に其の劣惡なる部分に對して例の勇壯活潑なる攻擊の筆を揮つたのであつたならば、誰れ故障を言ふ筈はなかつた。所が新聞紙に對して些の同情なき博士は、薄弱なる論據の下に頭から新聞紙なる者全體を罵倒せんとした爲に、折角の博士の議論は一片の暴言と見做されるに至つた。而かも其の暴言は博士が古くは自殺問題、近くは早稻田問題に關して多數新聞紙の攻擊を受けたるに激して、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思はず本心の平衡を失して發したものと說く者さへある。私は斷じてその然らざるを信ずるが、兎も角博士の味噌糞論は博士の爲に甚惜しむべしとする。今になつて「朝日」の紙上で私の宥恕を求めらるるなどは時既に遲い。あれ位手ひどい事を言つておいて、今更取消めいた口調に出でんとするは卑怯である。是が一つ。

これが法律とか教育とか乃至文藝美術などに渉る問題であつたら、世間では門外漢の喙を容るべき筋でない思つてゐる。獨り新聞紙の事になると、何等新聞紙に關する智識も素養もない者でも勝手に議論し得るものゝやうに心得てゐるらしい。即ち新聞紙の事を法律や敎育などの如く專門的に考へてゐない。此に於てか、平生僅に一二枚の新聞紙を手にするを賴みて、何等新聞紙の何たるかを知りもしない者迄が、したり顏に新聞紙に對する見當違ひの議論を試みる。だから今日一知半解の徒に、新聞紙ほど論じ易きはなく、又新聞紙を惡口するほど衆愚の喝采を博し易きはないと心得られてゐる。博士がまさかこんな心得で新聞紙を論じたとは申さぬが、讀んで見た所、博士もあまり新聞紙の事は御存知ないらしい。每日讀んでゐるから知つてゐる筈だなど思ふのは、自惚の甚しきもので、丁度夫は日々夜々に自分の身體を持ち扱つてゐる人間が、誰でも生理や解剖に關する議論が出來ると思ふのと同じである。博士今回の新聞紙論がどれほど博士の名を傷つけたかは、私が誠實に博士の省みられんことを希望する點である。是が二つ。

『人間は久しき間文字に囚はれて、文字に對する迷信を懷いて來る居る』と博士は言つてゐるが、この言移して以て『博士號』に用ふべしと思ふ。人間は久しい間博士號に囚はれて之に對する迷信を懷いてゐる。博士の書いたものと言へば、直に『神聖なるが如く畏敬し信用する傾』がある。田舍の人などは博士とさへ言へば何でも知つてゐる人のやうに心得て、醫學博士が法律を論じても、法學博士が生理を談じても、博士の言ふことならば問題違ひの事でも、兎角感服して了ひ易い。浮田博士が法學博士たるは、その政治史

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學の造詣に由るのであつて、新聞紙には全然關係のないものであるに拘はらず、世間には法學博士の新聞紙論なるが故にとて、特に傾聽する人が必ずある。隨つて博士がさしもの暴論も存外の隨喜渇仰者を何處に得て居るか分らぬ。私は是を恐れるのである。私はこの如き迷信の爲に博士の論が世を誤ることの多く且つ深からんことを恐れるのである。是れ即ち同業の先輩が輕く一笑に附し去つた博士の議論に、くど／＼しく辯明を加ふるに至つた所以である。是が三つ。

私は新聞紙及新聞記者全體の權威の爲に默視するに忍びずして起つたのである。文を行るに當つて勉めて平靜を保つて、惡言を避けんことを欲したが、博士の議論の餘りに亂暴なるに激して、我知らず博士の暴言を咎めながら、自身も亦賣言葉に買言葉の暴言を弄した所がある。深く自ら愧ぢ且つ謝して博士の『宥恕』を祈る次第である。(十月十三日大森にて)

現代畫の情趣主義的傾向

澤村胡夷

(一)

事象の外面的描寫を以て繪畫の歸極となすやうな考は、可成に古い頃から反對を受けてゐるに拘らず、依然として一部の作家と觀賞家との間に於て是認せられてゐる。特に日本畫に於ては、此種の方面が餘りに著しく發達せなかつただけに、一層力強く主張せられやうとするやうな場合がないでも無かつた。けれどもその目的は充分に達せられなかつたから、此種の主張の甚だしい缺點も亦暴露せられなかつた。元來、日本畫の此方面の運動は、西洋畫の移入に依つて、甚深なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

影響を受けてゐるのである。即ち西洋畫の寫實的なる長所が刺戟となつて、それが大に日本畫を脅かしたものである。西洋畫の此種の長所に驚いた事は、德川中期以後に於ける第二の西洋畫移入の際に於て、殊に多數の作家が告白してゐる所に依つても知れる。而して此問題は爲めに二個の全く異つた方向に分裂した。

その一は、日本畫が到底洋畫の長所には及ぶべからざるを認め、かゝる事象の外面的描寫に即する事を避けて、他の方向に自己の前途を認めて行かうとした事である。而して殊にこの方向を取るのは日本畫の歷史的方面から云つても、好都合であるのみならず、主張の理由自身も充足してゐた。然るに其二は、西洋畫の長所を學んで、更に日本畫の短所を補ひ、以て日本畫の爲めに新領域を作らんとした事である。是は日本畫の技巧上の發展と材料上の工夫とに依つて勇往邁進し、遂には洋畫と日本畫との區別を取去るの機會を得べしと云ふやうな見解をも有つてゐたのである。かかる全く異つた二方向に問題が展開してゐる間に、西洋畫自體に於ては、舊い外面描寫の桎梏から脫せんとする運動が高まつて來て、新舊の爭が可成に強くなされた。かくて新風潮は保守派の多くの冷罵を後眼にかけて、強い步武を進めて行つた。この風潮は、如上日本畫に於て洋畫に併行して進んで來た所の第二の一派をして、其方向を一轉せしむべく餘義なくした。かくて第一と第二との二方面に於て日本畫が外面的描寫のほかに進んで行かうと欲する大きな傾向を形成するに至つてゐる。而して是れが近時に於ける日本畫の一つの大なる風潮である。

日本畫が單純な外面的描寫の上から、一層深い何物かに邁進するに就いては、種々な方面がある事は云ふ迄も無い。が、外面描寫の單純から脫する爲めに、技巧上の態度だけは外面描寫に在りながら、內實は寧ろ一種の氣分を表示せんとするやうな企ても亦一個の方法たるに相異ない。此種の運動は、數年來少壯作家の頻りに試みつゝあつた所であつて、その製作に就いても可成に成功したものもあつた。殊にかくの如き寫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實的態度より、一轉して氣分本位にその立脚地を求めて來ただけに、日本畫としては頗る新らしい味を有つてゐた。此方面に於て最も多く試みられた圖様は、草花の類を特に精細に描寫し、之れに配するに蟲類若くば鳥獸の類を以てしてゐるやうなもので、一見所謂花鳥畫と選ぶ所が無い。けれども此種の製作に於ては、その着眼點が從來の畫家には思ひもよらなかつた所の自然の閑寂境か、或は全く忘れられてゐた所の自然生活の實相を暗示するやうなものであつた。即ち題材を自然に求め、その深き生活に指を觸れてみやうとしてゐるのである。その個物の描寫法の如きも、出來得るだけ寫實的にやつてゐるけれども、その色調の如きは、餘りに烈しい變化を示さずして、一種の和らかな調和を表示してゐる。意想の上から見てもさうであるが、特に色調上から感受する印象に至つては、一種の靜かな音樂的の律動である。かくの如く、その形式は努めて精細緻密でありながら、その内容が單純なる外面描寫から離脫してゐる事は、てふど現代畫の內面描寫に入らうとする要求に對して、適當な落附場所だとも云はれる。この種の描寫上の態度と內容上の特調とから之を見ると、是れ明かに情趣主義の製作と認むべきものであるが、而かもその技巧上の態度より見ると、寫實的情趣主義と云ふを適當とする。

　此寫實的情趣主義の運動は、その技巧上の形式こそ異へ、また其意想上の內容こそ異へ、その精神上の上からはかの四條派の運動に似た所がある。四條派は圓山派の眞面目な寫生から離脫して、洒脫な世界に新天地を求めやうとしたに拘らず、その寫實的態度だけは採つて離さなかつた。而して淸新な生々した閃きを製作の上に見せやうとしたのであつた。即ち如上の新情趣主義は、此四條派に見る傾向が、新時代に於ける意想と形式とに換へられたものとも見られる。從つてその缺點に於ても亦彼此同一なものがある。かの四條派は吳春、景文、豐彦以下の數家がその創作的の頭腦を誠實に働らかしてゐた間は、兎も角も見るに足つたのが、後には全く形式的反復に陷つて了つて、甚だ單調

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にして無味乾燥となつて了つた。てふど之れと等しく、此寫實的情趣主義も、一部に於て形式的反復を試みる者が多く現はれ、爲めにその本來の深い意義を失ひかゝつてゐる。此種の製作は、畢竟形式上に於ても單調に陷り、千篇一律となり易いのみならず、その內容が靜的であるだけに、精神性の潤澤を失ひ、平凡に歸し易いものである。

(二)

一體、寫實的技巧は、日本畫の得意とせなかつただけに、上述の如く、寫實主義の運動が甚だ重要なものと考へられた時代が無いでも無かつた。が、大體の上からは、矢張り非寫實的な製作が進步してゐたのである。この非寫實的なものにも種々の方向がある。近代の狩野派の如きは、寫實主義に源泉を發してゐながら、遂に寫實主義から離れて、一種の意志的な性質のものとなつてゐる。而して具象的なものから、抽象的な力の觀念や、運動の觀念を誘致し、之れを圍繞して繪畫の本質を認めて行かうとしてゐる。かやうな主義から發して、舊時の形式主義を打破して新らしい時代に新らしい旗幟を樹立したのが、橋本雅邦氏一派の運動であつた。この派は所謂『心持』を尊重し、無形の觀念を現はさうと努めた結果、遂には觀念派と呼ばるゝに至つてゐるのだが、是れが一步を轉ずると、情趣主義的な方向に入り得るのである。

有體に云ふと、情趣主義的運動は、一時中斷せられたかと思はれる程、その勢力を失つてゐた。尤も之を主義とする畫派のある物は、その命脈だけを傳へてゐたけれども、要するにそは多く其眞の精神を失つて了つてゐたものである。然るに此主義の運動は、前に述べた所の寫實的情趣主義と併行して、近時著しく其頭角を擡げて來た。此運動に就いては畫法上の問題にも關係がある。即ちこの運動の一層徹底的な實行は、古い畫法の復興運動とも結合してゐるのである。

少壯作家に對しては勿論、老大家に對しても亦新らしい技巧と云ふ問題が、現時諸種の展覽會的設備の發展に伴つて、最も痛切に適つて來てゐる。この方面の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爲めに古畫を研究して、その畫法を復活し、之に依つて技巧上に新生面を開かんとする風潮が、數年來最も隆盛となつて來た。而して此新技巧の問題に結合して、情趣主義の新運動が一層强く高まつて來たのである。もと此新技巧の問題に關係ある古畫法は一二に止まら無いが、その著しいものを求めると、大和繪と南宗畫とに歸する。

大和畫はその起原も古く、その歴史も長いだけに、その性質上に雜多なる變化を有つてゐる。此派の技巧は徳川時代以來頗る傳統的病弊に陷つて、殆ど見るに足らなくなつてゐるのだが、わが新時代の作家の研究的對象となつたのは、要するに其根源に遡つて、大和繪の盛時に於ける畫法であつたのである。卽ち藤原時代より鎌倉時代に亘れる此種の遺品が研究せられ、之に基いて新技巧の問題の一つが解決せられやうとしたのである。固よりその復興運動の最初に當つては、雜多なる問題に接觸したのであつて、此畫法を驅使して單純な實自然の描寫に供したものもあり、或は史實の說明を第一義とするやうな態度のものもあつた。が、その間に何時しか情趣主義的傾向が醞釀せられて來たのである。而して、それが概ね自然景描寫の一面に結合して現はれて來た。橫山大觀氏の「山路」、前田靑邨氏の「湯治場」等の如きは、この情趣主義的傾向を有する者であつたが、此種の傾向は漸次に强くなつて來て、最近に至つて甚だ濃厚となつて來てゐるのである。

かく情趣主義的製作の多くが、自然景を題材としてゐるのには、多少の理由がある。例へば史的若くは物語的な事實を畫いたものは、之を賞鑑するに於ても、製作するに於ても、內容の說明的な多くの負擔に妨げられて、純粹な情趣生活を感受し、または流露するに多少の困難がある。卽ち史傳小說の如き內容を有するものを取扱ひ、而かも充分に情趣的要素を盛らんとするには、雜多な他の要素に拒まれ、情趣的一面に依つて統理せられる事が不充分となる。それが爲めに例へばその內容に對しても著しき想化を加へると共に、技巧

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上に於ても寫實的効果を極端に無視するやうな態度に出づるの必要がある。然らざれば普通の説明的繪畫と選ぶ所がなくなる。また實際に於ても情趣的ならんとして、不知不識の間に説明的な世界に彷徨してゐる樣な製作も少くないのである。之れに比べると、自然景は特殊な内容上の制約から離れて、自由な世界に出入し、心ゆくばかり作家の投現した情趣生活を感受する事が出來るのである。

(三)

大和繪のほかに於て、南畫はわが畫壇の近世的運命を殆ど背負つて立つてゐたと云つて可い程、徳川後半期に於て行はれた。その本來の主義とする所も、大に情趣主義的のものであつて、特に南畫に文人畫が結合して、兩者が不二のものたるに及んで、愈々情趣主義的色彩を濃厚にした。けれども此種の畫は徳川末葉から明治の初半期に亘つて著しくその特色を失ひ、その本質から遠ざかつて行つた。一はその爲めもあるが、他に此流派を壓するやうな運動が現はれたが爲めに此の派は忽ち衰微して、顧みる者が無くなつたのである。

然るに十年前このかた、此種の畫法を能くする少壯作家も現はれて來たのみならず、此畫法を咀嚼して新技巧の上に用ひんとする風潮も加はつて來てゐる。特に寺崎廣業氏の「溪四題」が文展に現はれて以來、此種の技法の驅使せらるる事が、大に行はれて來た。而して此種の技巧の復活運動に伴つて、また情趣主義的要素がわが畫壇に漸次にその根を深く廣く伸ばして來たのである。この南畫的技法と、之れに伴へる一種の情趣主義的要素とが、かく急激にその力を復活して來た事は、さきに説いた所の非寫實的運動にも歸すべきものがある事は無論だが、別にまた反動的勢力に驅られてゐる事も爭はれない。何れにするも事象を自己の情趣生活の上から觀察し、その成果を投現して、一切の事象に對する描寫法を内面的になさんとするの風潮が、漸次に高まつて來たのである。元來この運動には二樣の別がある。その一は南畫の技巧と共に其内容をも復活しやうとするものである。他の一は其技巧を學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぶもその內容は必ずしも舊時のものを採らずして、新內容となさんとするものである。此二樣のもの丶中にて、前者よりも後者が一層切實に新らしい情趣主義的運動に適合するものだが、然し前者にも多少の情趣主義的要素が無いとは云はれない。さりながら此新情趣主義の運動をして、一層有意義の世界に導く爲には、矢張り新內容の上に立脚するもの丶方の發育を最も必要とするのである。

とにかく大和繪と南畫との二種の技巧の復活に結合して、情趣主義の運動が漸次に勢力を示して來たのであるが、この二種の以外に於て、尙ほ新技巧上の問題が情趣主義的傾向と結合してゐる事を知らねばならぬ。それは洋畫の技法と古壁畫の技法とである。就中、洋畫に就いては後期印象派の作家が用ひてゐる所の一種の片暈ある弧狀線を、日本畫に驅使する事が行はれて來た事で、最近日本美術院の一派が喜んで用ひてゐる所の描法是れである。此技法はそれ自體の製作上の價値に於て寫實には左程適切のものとは認められない。從つて此種の技巧を驅使する爲めには、作外面的に誠實な描寫をなすよりも、寧ろ內面的な描寫に於て、作法の長所を確實にするに如かないものがある。かくて此種の描法は、尙ほ寫實的な目的の上から用ゐられてゐる場合が無いでもないが、概して反寫實的方面に向つて、製作を誘導せんとするものがある。かくてその一端が情趣主義的運動に接觸するに至つてゐるのである。最近この描法は漸くそれ自體の價値を決定するの運に近づいてゐるのであつて、新情趣主義の運動がこの描法に結合して、新運命を開拓するだけの可能性は、充分に之を認める事が出來る。

此描法と前後して現はれて來たのは、例の印度のアヂャンターの壁畫を始として、中央亞細亞の發掘壁畫、乃至朝鮮古墳の壁畫等に於て見る所の描法を用ひて、新技巧の問題に觸れんとした運動である。此運動も亦非寫實的なる態度を示してゐたから、その一端が情趣主義に接觸して、之れに依つて新意義を立せんとするに至つてゐる事も怪しむに足らない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此二様の技巧上の問題は、强ち情趣主義の一面にのみ發展してゐるとは云はれないが、少壯作家の中には、是等の新技巧に基いて、漸次頭角を擡げ來りつゝある所の情趣主義的要求に合致せんとするの態度を示してゐる者も少くない。特に人物描寫の問題に於て、此種の新技巧が驅使せられ、如上の新主義を肯定し、助長して行かうとする風潮が認められる。卽ち史的人物を描寫するに於ても、その形式上の說明的なる分子は更に顧みる所なく、作家の情趣生活に基いて、心の儘に書上げて行かうとする態度を云ふのだが、此種の態度に依ると從來の人物描寫が多く外面的であつたのを、內面的に深めて行き、同時に作者の主觀的なる色彩が濃厚に作物全體の上に流露せられて行く。その結果として在來の說明的人物描寫とは多少異つた世界を打開する事となる譯である。

けれども强ちかゝる新描法に基かずして、人物描寫上に此種の新主義を試みて行かうとする作家も無いでは無い。鏑木淸方氏の最近の傾向の如きは、此種の方向に進みつゝある事を示すものである。この外浮世繪の新研究の結果として、版畫の特色を肉筆上に轉じて一味淸新の表現法となすものもあるが、此方面に於てはその題材自身も亦江戶生活殊に當時の感情的な生活を想起せしめるものであるから、此點などが、かの作家と一部の鑑賞家との時代殘象的趣味を滿足せしめてゐるのであらう。これまた情趣主義的傾向のやゝ特殊なる一方向と認めねばならぬものである。

要するに情趣主義的傾向は、今や一歩づゝ、日本畫の技巧上の問題と結合して、內面的に深い生命を捜らうとしてゐる。此運動はかの寫實的情趣主義のほかに、非寫實的情趣主義の方面に於ても、發展してゐる事は、上述に於て略ぼ之を明かにする事が出來やう。けれども最近の狀態に於ては未だ此新傾向が其到達すべき場所に到達してゐるとは認められない。寧ろ此主義の眞の意義は、更に今後の展開如何に依立する案件である。但だこの主義の運動は、餘りに多量の理智的要素が加はると、その特訓を失ひ、墮落に近づき易

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。而かも此種のものには此要素が流入し易いのである。同時にまた餘りに放漫に流れると、その眞生命を失ふに至らしむることは、わが近代の南畫史上に於ける多くの實例に之を徴する事が出來る。

專門的災害救護機關の民設を望む

法學博士　小河滋次郎

一

蓮如上人の口傳抄下の巻に、「凡夫に死の縁まち〱なり火にやけても死し水にながれても死し乃至は刀劍にあたりても死しねぶりのうちにも死せんこれみな先業の所感さらにのがるべからず云々」とあるが如くに、實にも災害なるものは、その自然的なると人爲的なるとに論なく、卒爾として、何時吾々の頭の上に墜ち來るやも知るべからず。是れ皆先業の所感更に遁るべからざるの運命としてあきらむればそれまでのことなるが、然もとゞめんと欲してとゞむる能はざるは人間の生存慾であつて、この生物共通の本能性の最も旺盛なるものあればこそ、こゝに人生の意義を認め、尚ほまた文明の發達進歩を期待することも能きるのである。人は病の器なりと謂ふことがあるが、若し自然の成行にまかせて之に人事を竭す所なしとなれば、病の起つたときは即ち死の運命を待つの時である。人間の壽命は、恰も彼の朝に生れて暮に死するかげらふの一日の短き命と相選ぶ所なしと謂ふべく、かくの如くんば吾々は人生の上に終に何等の意義をも見出し能はずして夢の如くに死んで仕舞はなければならぬ。然るに吾々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人類には幸にして生存慾の他のすべての欲望に比して最も優勢なるものあるが爲めに、こゝに天命を待つの前に先づ人事を竭して到らざるなからんことを計る努力がある次第である。

二

社會文明史の上に、常に文明の先驅をなすものは醫術であり、また何れの時代に於ても、依然として文明的活動の中心點たる地位を占むる所のものも醫學である。其の此くの如くなるを得る所以の上より之を見ても、如何に吾人々類に生存慾なるものゝ旺盛でありまた之に依て如何に社會文運の開發を促したるの大なるかを知ることが能きる。内科にしても外科にしても、今日に於ける醫術の進步の著るしきことは、實に人をして驚嘆に堪へざらしむる所であつて、昔しに不治の疾病若くは致命の負傷として匙を投ぜられたる所のものも、今日に於ては、苟くも之が應急手當の時機を誤まらざる以上、容易に回春の效を奏し得らるゝことになつて居る。また昔者疱瘡とか熱病とか其他種々の疫病の流行するを見るの場合に於ては、唯だ其の猖獗を逞ふするにまかせて之を奈何ともするに由なく、忽ち幾萬幾十萬の人命を之が犧牲たらしむるに至るを免かれざる次第なりしも、今日にあつては、縱令時に色々な傳染病の或る一地方に流行するとあるにしても、之を未前に豫防することも能きれば、また既發の後に於ても、其の甚しく害毒を擴大せしめざるの前に能く之が撲滅の目的を全ふし得ることにもなつて居る。文明の先進國たる歐米に於ては、今や衞生的施設の益々完備周到するを見るの結果、或る種類の傳染病の如きはすでに全く其の迹を絕ち、コレラやペストの如きも最近數十年間を通じて之が發生を見たることなしと云ひ、赤痢とか窒扶斯とか云ふやうなものも、年々著るしく其の數を減じ、文明的國民病と稱せられて、一時非常に蔓延の徵候を呈したる所の結核病も、一たび其の病原の發見と共に之が豫防撲滅に社會の全力を傾注する所あるや、結核病者及び其の死亡者の數は、恰も檢溫器を冷水に投じたるが如くに、近く二三十年以

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來、各國殊に英獨等に於て、最も急速なる低下の現象を示めしつゝあるを見る所である。從前にあつては、戰亂に伴ふて傳染病の起ると云ふことをば、殆んど避くべからざる必然の出來事にてもあるかに信ぜられ、實際また戰亂中又は戰亂の後に必ず傳染病の猖獗を極めたるの例を見る所なりしも、今日に於ては、あれだけの有史以來未曾有と稱せらるゝ程の大きな戰爭の、而も三年以上の長きに渉つて歐羅巴の一角に行はれつつある際なるにも拘はらず、何百萬何千萬と云ふ夥しい軍人々夫を聚めて居る戰場に於てすらも、尙ほ未だ傳染病と云ふやうなものゝ流行を見て居らぬやうである。亦た以て文明先進國に於ては、如何に公衆及び軍隊衞生の上に、文明の使命が遺憾なく發揮せられ活動せられつゝあるかを察することが能きる。之に反し泰平無事の我國にあつては、一年を通じて都鄙到る所に、赤痢窒扶斯等の殆んど終熄を告ぐるの期なきのみならず、屢々また恐るべきコレラやペストの襲ふ所となつて、之が爲めに民衆一日も其の堵に安んずる能はずと云ふの事實なるが、實に東西文明の懸隔もまた甚しと謂ふべく、一等國の名に對しても如何にも慙愧措く能はざる次第である。

三

同じ都會地に於ても、富裕區と貧民區に住める者の死亡率を比較して見ると、例へば富裕區にあつては、千人に對し僅に一一・六なるに反して、貧民區の方は其の割合三十五卽ち約三倍以上の死亡率を有すと云ふやうな譯で、誠に驚くべき非常の相異である。而してこの相異は卽ち同一地方に住んで居る者であつても、貧乏人が餘計に死んで富有者が少なく死ぬ、詰り貧富に依つて人の壽命に著るしき長短の差別ありと云ふことを說明すると共に、人智の力によつて或る程度までは自然の運命を支配し、進んで能く吾々の健康能率を高めまた壽命を延長し得ることを證據立つるものなりと云ふことが能きる。先進文明國に於ては、年々傳染病の減少、防災施設の普及其他公衆衞生法の發達等の爲めに漸次人の享年數を高め、すでに英國の如きは人生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五十の通り相場を超へて終に平均五十四歳前後までに向上するを見るに至れりと云ふに反し、我國に於ては、文明の進歩と共に反て比年益々平均壽命の低下を來たし、嘗て蓮如上人の時代に「夫れ人間の壽命を數ふれば今の時の定命は五十六歳なり」と稱せられし所のもの、大正の御代の今日にあつては我が帝國民の享年數を有すること僅に三十二三歳に過ぎずと云ふことになつてをる。若しこの世界を以て一都會と之を假定せば、先進文明國所在の歐洲又は米國は富裕區にして、帝國所在の東洋方面の如きは正しく貧民窟地域に相當すと評せらるゝことも亦た已むを得ざる所である。

四

吾人々類の生存慾は、啻に疾病と云ふやうな限定的自然の運命に對して之に抵抗し之に打勝つべく、今日の醫學及び醫術のやうな大なる威力を發揮し得るに至らしめたるのみならず、天災地變たる例へば風火震水等の自然的出來事に對しても、最も古き時代にすでに之が自衞の警策を施すを怠らざりしこと、例へば「三代而上、有荒歳而無荒民」と云ふやうな語ある所を以て見ても明かである。殊に我が東洋に於ては、すべての時代を通じて、天災地變に處する謂ゆる荒政なるものの上に、爲政家の心を留むること最も深く、從て荒歳を轉じて樂歳と爲すと謂ふが如くに、凶年饑歳さてはまた水災震害に逢遭する場合に於て、兎も角民衆を塗炭の苦みより賑濟救恤するの道を竭すに到らざるなきの歴史を有つて居る。然も其の實、志餘りあつて力足らず智作はずとも稱すべきか、災民を賑恤せんとするの精神と努力と而してまた其の法制の上には敢て甚しく間然する所なきが如くなるも、時勢に推移して變通の宜しきを制するの道を知らず、組織的且つ統一的行動を全ふするの法を辨へず、事に處して常に遲緩、煩雜、不周到、不徹底の弊に陷るを免かれざるが爲に、救恤の行はるゝの下、尚ほ到る所に餓殍枕藉の慘を見ると共に一方にはまた反て徒らに奸人の腹を飽かしめ惰民の快を貪らしむるの結果を見るやうなことになる。文明先進國の今日に於ては、是等の自然的災害に對して

も、すでに科學的知識を基礎としたる合理的且つ組織的救護法及び救護機關の具備せるものあるが爲めに、獨り或る程度までは災害を未前に豫防し得るばかりでなく、昔しの如くに慘害の甚しきを見るに至らしめずして能く人命及び財産の救護の効果を奏し得るの道が立つて居り、實際また大小幾多の天災事變に遭遇するの例に乏しからざる所なるも、少くも人命救護の上に就ては、常に最善の努力が災害の可能的最少限度にとゞむることに實現せられて遺憾なしである。翻つて之に對する我國の實況如何と見るに、是れまた歐米に比して非常の遜色あるを免かれざる所であつて、論より證據、這回我が帝都及び其の接續町村に實驗したる風水害の慘況に就て見るも明である。關係ある官公署を始め公私各種の團體及び有志家に於て、この稀有の災傷に對して最善の努力を試みたりと言ふに敢て異議なしと雖も、然も此を以て果して缺陷あり統一ありまた徹底的且つ合理的現代式の救護運動なりと言ひ得らるべきかと云ふに、識者は斷じて之を否定せざるを得ざるを遺憾とする。

五

我國には、一般的賑濟に關する法制としては、明治七年發布の恤救規則、明治三十二年改正の行旅病人取扱規則等があり、救荒即ち不時の天災事變に對するの救護法としては、さきに備荒儲蓄法と稱し、明治三十二年に至り罹災救助基金法と改めたる所の法令がある。前者は國庫費に屬し後者は主として地方經濟の負擔する所となつておるが、何れの府縣に於ても可なりに豐富なる罹災救助の基金を貯へて居る。併し前者と云ひ後者と云ひ、其の實質は極めて舊式なる不完全なるものであつて、到底今の時代に適したる合理的且つ徹底的なる救恤の働きを之に望むことは能きぬ。例へば罹災救助基金法に依れば、この基金を支出し得べき費目として、避難所費、食料費、被服費、治療費、小屋掛費、就業費等を指定してあるが、是等のものが決して救荒の働きに必要なるもの丶全部と云ふことは能きぬ。殊に本法の施行に就て各府縣の定むる所の細則な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るものを見れば、副食物代として一回五厘以下また被服費として代價一圓五十錢以下の時服を給すと云ふやうな迂濶極はまる規定を設くるもの比々皆是也であつて、とても此に藉つて救助らしい救助の出來得らるゝ筈のないことは明かである。殊にまた愈々之が實際の活動に着手するまでには煩雜なる種々の形式や手數を經るの必要あるが爲めに、多くは即ち彼の所謂る荒を救ふこと焚を救ふが如く速かなるべしとの原則に遠ざかるの憾みを貽さゞるを得ぬ。

後れて救ふものには多くの場合に百弊あつて一利なきの悔あるを免かれぬの常である。假りに我が罹災救助が荒政法の上乘なるものなりとするも、其の實施の迹に就て之を見れば、往々にして全く豫想と反對の結果を齎らし來る所以の偶然ならざるを知るべきである。併し是は必ずしも法の罪でもなければまた法を運用する者の其の宜しきを得ざる爲めでもなく、偏へに是れ法制其物に固有する所の不可分的屬性なりと言ふが至當である。救荒に關する完全なる働きを圖らんが爲めには、災禍を未前に防ぎ既發に救ひまた善後に處すべき百般のことをば、立法的に一層的確且つ詳密に規定する必要あるは勿論なるも、然も災害救護のことをば、唯だ法制又は法制を取扱ふ所の官公衙の力のみに依賴せんとするが如きは抑も誤れるの甚しきものである。法制の存在及び運用と共に、一方にはまた之を助成し之を補充する所の大規模なる義勇的專門機關の成立と活動とに俟つ所がなければならぬ。この理想を現實ならしめたるもの即ち今の歐米各國に行はれつゝある所の災害救護義勇團なるもの是れであるが、今や歐米に於ては、少こしく目星き都會地等に於て殆んど到る所にこの施設の活動を見ざるはなく、獨り救護團所在の都會地のみに限らず、幾十幾百哩の遠距離地方までも、若し其處に一朝大火洪水震災風害暴動汽車衝突等の突發したる場合には、一電の下忽ち時を移さずして、汽車電車自動車等のあらゆる速達の利器を利用することに因り、極めて大仕掛の組織の下に、災民の生命及び健康の救護に必要なるすべての物資を供給し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

また避難に適切なるあらゆる手段をば最も敏活且つ周到に運用し得せしむるとになつて居る。かゝる専門機關の任務としては、必ずや平生に於て非常の災害に對する事前、現當及び事後の應急法を講究するは勿論、官公衙を始め病院、學校、工場、赤十字其他の公私各種の救濟團體とも豫め其の力に應じ其の長所に適する所の分擔共助の方法をば協定し置くべきが故に、如何に事變突發の場合に於ても、決して徒に力を分裂し又は力を重複せしむるが如きことなく、能く一絲亂れざる整然たる行動の下に、すべての災民に對して敏活、周到且つ徹底なる救恤の惠に均霑せしむることが能きるのであつて、是は歐米各都市の災害救護團の年報を一讀する者の熟知する所の事實である。長足の文明進歩を以て誇りとする我國に於て、而も風水害をば恰も年中行事の如くに運命付けられある國柄なるにも拘はらず、唯だ不完全なる法制及び拘泥的なるを免かれざる官公衙の力若くは訓練に乏しく且つ連絡を缺ける救濟團體又は個々の有志家の任意的な働きに信頼して平生毫も組織的且つ専門的なる災害救護の施設に、ひを致す所なしと云ふが如きは、如何にも文明國の名に對して甚だ面目を失せざるを得ざる次第である。

六

抑もこの災害救護團なるものは、獨り水火風震等の非常の事變に處して應急救護の活動を全ふせしめんとすることを目的とするのみならず、兼てまた平生無事の日にあつて、殊に繁華熱鬧なる都會生活の日々夜々の間に起る所の大小幾多の單獨的又は綜合的なる災害事故に對して極めて敏活且つ適實なる謂ゆる第一の救急手當（フォルストヘルフ）と及び第一の搬送（フヲルストトランスポート）に關する措置を取らんとすることを其の任務と爲して居る。嘗てペーテル・フランクは、其の著「醫事警察法」の中に、「都會に於て災害の爲めに變死の運命を取る所の不幸者は、總死亡者に對する一と六十二との割合に當る、卽ち自然の死亡者の六十二人目每に一人の災害變死者を出だすの事實なるを見る云々」と述べ、尙ほ英國倫敦に於ける被害事件の年々驚くべき多數に上れる統計等を引證して、之

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に處する人命救助の施設を一日も緩ふし能はざるの理由を絶叫したことがあるが、是れは今を距る百二十七年も前のことである。其の當時にして既に然りとなれば、今の人口の密度を加ふるの幾層倍なるを知らず、恐るべき破壊力を有する所の各種の日用家具工業機械又は交通機關の發達を見るの著るしきこと、恰も彈丸雨飛の間を往き通ふが如き感ある都會生活の上に於て、災害事故の時々刻々に頻發するを免かれざるの一面に、之が應急救護の施設を周到ならしむる必要の一層益々切實なるものあるべきこと固より言を俟たざる所である。獨乙に於ける災害統計の示す所に依れば、一八九五年には全國を通して其の數約三十一萬人、一九〇〇年には同四十五萬人、一九〇五年には、更に六十一萬人と云ふ増加を呈してゐる。尚ほ同國に於ける災害の爲めに死亡したる勞働者のみにても、一八九五年には六千五百人、一九〇〇年には八千五百人、一九〇五年には八千九百人の多きに達し、また獨乙が最近罹災者の爲めに傷害保險金を支出すること實に年額一億七千五百萬マルクの巨額に及びたりと云ふ所を以て之を見ても、世の文明の進歩と共に如何に吾人を迫害する所の災害事故が、益々其の増加を必然ならしむる傾向の著るしきものあるかと云ふことが解かる。

七

數日前の萬朝報に掲げられたる「不安の都市」と題する一論文の中に「今の都市の街路は間斷なき戰亂の巷も同様である、電光石火に不安の眼を光らして歩行する都人士は悉く武裝せねばならなくなつた云々」と言へるが、誠に今の危險なる都會生活の眞相を穿ち得て遺憾なきを覺ゆ。我が東京市の如きは、交通及運輸機關の衝突によつて生ずる所の災害事故のみにても、大正五年中に於て實に三千六百三十九人の多きに及び、自動車の事故は昨年に比して本年は其の倍數に達し、一月乃至八月の間にすでに六百十一件の多きを見たと云ふとである。併し是等は唯交通及び運輸機關の衝突に起る街路上の災害事故たりと云ふに過ぎぬので

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつて、其他に或は兇賊の爲めに或は狂人の爲めに乃至は狂犬の爲めに、或は墜落の爲めに或は陷溺の爲めに或は急病の爲めに或は喧嘩の爲めに、若くはまた工場に於ける作業中に、或は調革に捲き込まれたとか或は溶解せる熱鐵を浴びたとか乃至はまた藥物の爆發に逢へりとか云ふやうな不慮の災難の爲めに、負傷し偃倒し苦悶し絶息すると云ふやうな類のものは、日々各新聞紙上に現はるゝ所だけにても、殆ど枚擧に遑まあらぬ程の夥しき數である。然るに此く頻發する災害事故の憐れむべき犠牲者に對して、最も神速に其の苦痛を和らげ其の生命を安んぜしむるに必要なる手當を施すべく如何なる救護法の講ぜられつゝあるかと云ふに、我國に於ては東京とか大阪とか云ふやうな世界的の大都會にあつてすらも、今日尙ほ歐米に見るが如き專門的救護機關の成立するを見るに至らぬと云ふ情けない始末である。されば都市の大道小路、何れの一角にか何等かの災害の突發したる場合に於て、固とより之が急を專門の救療機關に速報するの設備ある譯でない。唯だ所謂る警察事故なる名の下に普通の出來事として取扱はるゝの外なしであつて、或る何等かの偶然の機會によつて先づ其の出來事を知り得る者は警察であり、こゝに馳け付け來る第一着の人もまた警察官である。警察官の召喚に應じて醫師が來り人夫が來る。醫師なり又は救急手當の心得ある者の來るは多くの場合に甚だ遲く、或は旣に應急の時機を失するに至ると云ふが如きことも少くない。先着する所の警察官は、固とより何等の應急手當を施し得べき智識も技能も必要の材料も有つて居らぬ、唯だ群集を制するとか或は取り敢へず最寄の交番所とか病院とか又は醫者の家へでも擔ぎ込ませるの處置を取るに過ぎぬ。兎も角この災害事故に對する事實上の態度は檢視本位にして救護本位に非ず、片付主義にして療養主義に非ず、罹災者本人の爲めに非ずして寧ろ公衆の利益保護の爲めにするものなりと見るの外はない。人命を輕視するもまた甚しと謂はざるを得ぬ。

八

醫學の大家エスマルヒは、災害に對する最初の應急手當と最切のトランスポルト（搬送）とは、其の適否如何によつて直ちに被害者の運命を決定するに至らしむべきものなりと言ふて居る。この謂ゆる最初の應急手當とは、先づ取り敢へず出血を止めるとか人口呼吸を施すとか、興奮劑を與ふるとか消毒を爲すとか繃帶を行ふとか云ふことを指す譯であるが、何れも一分一秒を爭つて最も快速にこゝに着手する所あるを要すること論を俟たぬ。然るに路上街頭に於て災害事故の突發したる多くの場合の實況は、この必要なる應急手當が常に時機を失し、偶々手當を加へたりと稱するものも、多くは甚しく其の方法を誤つて居る。之が爲めに終に助かるべきものも助からず、早く癒るべきものも手間が取れ、輕くすむべき筈のものが反て重くなり且つ患者をして徒らに堪ふべからざるの苦痛に悶ふるの不幸を見せしむるやうなとが少くない。殊にまた負傷者をば醫家なり病院なり其他の適宜の場所に搬送する方法の如きに至つては、既に前にも片付け主義の遣り方であると謂へるが如く、殆んど負傷者保護の意味は全く閑却して顧みられぬやうな姿である。斯學の進步したる今日に於ては、特に病者搬送の目的を以つて作られたるものですらも、往々にして搬送用に適せずと斥けらるゝと云ふほどの次第なるに、我が東京市内に於ける災害事故の現場に就て之を見れば、擔架や病傷車の役に立つの場合は稀有であつて、不潔なる人夫の肩、居合せたる人力車、甚しきは戶板や荷車を以て搬送器に利用すると云ふやうな事實である。之が爲めにはさまでに手重からざる負傷にても、また格別の懸念を要する程にもあらざる疾病にても、不完全なるトランスポルトの影響を受けて、啻に餘分の苦痛を受くるのみでなく終には回復すべからざる重傷に陷り難症に變ずるの不幸を見るに至らしめざるを得ぬ。かくの如きは文明都市の面目としても之を看過し能はざるの勿論なるが、一方また人道問題の上より之を見ても、世の仁人義士のこゝに何等の考慮を費すに至らざること誠に痛嘆を禁ずる能はざる所である。萬朝記者曰く、

「昔は男一度び門を出づれば七人の敵ありと謂ったが、今は一寸門を出るにも命懸けであらねばならぬ。現在の東京市の道路の有様では、交通機關の増加するとは、殺人機關が増加すると一般である」云々と、(前掲「不安の都市」)災害頻出の我が都會生活の今日に於て殊にこの感を深ふせざるを得ぬ。

九

流石に歐米先進國に於ては夙にこゝに省みる所あり、從前にあつても各國に於ける繁華熱鬧の都會地などには、例へば人馬の往來することの頻繁なる要所々々に、應急手當用の藥品、繃帶、擔架の類を備へ、また市街を貫流する河川溝渠に沿ふて各須要の場所に救命袋救命艇等を常置するの施設ありしも、一躍して終に災害救護義勇團と云ふやうな大規模の有力なる專門機關を設定するに至つたのは、今を距約四十年前後のことである。蓋し都會の發達に伴ふて災害の頻出を見るに至つたと云ふやな實際の必要に促されたるが爲めなるを疑はざるも、然も一面にはまた、文明と共に人道的及び自衞的觀念の益々發達したと云ふことが之の有力なる動機をなしたるものであると信ずる。この義勇團の組織及び活動振りは、各國通じて大同小異なりと言ふを妨げざる所なるが、其の創立の比較的古くして且つ其の活躍の最も目覺ましきものありと稱せらるゝは墺國維納に於ける維納義勇救護團即ち是れである。本團は其の事業を消火部、防水部及び救護部の三部に分ち、各部に必要の人員、器具其他の各般の材料を備へて居るが、其の最も主力を注ぐ所のものは災害救護の事業である。災害救護としては、事故の大小と距離の遠近とを問はず、專用の汽車、電車、自働車、馬車等によつて神速に醫師、看護者人夫、飲食、藥品、各種の衞生材料等を發遣し、負傷者に就ては取敢へず之に應急手當を加へたる、最寄適當の病院に之れを搬送するの任務を扱ふことになつてゐる。本團附屬の自動車の中には、患者搬送の爲めに特裝せられたる傷病車數臺ありて、普通の病者又は負傷者用のものと、傳染病者用のものとまた精神病者用のものゝ各々其の種

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

類が區別せられてある。此外に尙ほ糧食用貨物用等の特別自動車もあるが、これで間に合はざるの場合には、更に電車又は汽車を用ひ、直ちに車內に罹災者を收容し且つ之に飮食を供給するの裝置が出來て居る。常備勤員二十三人、何時にても必要に應じて驅け付け得べき豫備醫員なるもの三百二十五人、助手六十二人（是れは多く醫科大學の上級生である）事務員七人、常備夫二十人、馭者運轉手十數名、これらの職員は、市內に在る本社及び出張所の二個所に常勤し、災害事故の急報に接して直ちに出動すべく結束して待つて居る。本團が一九一二年の一年間に取扱つた傷病者救護數は三萬五千九百二十件で、一晝夜間に平均約二十件の割合に當ると云ふことである。支出金年額三十一萬一千二百十三クローン、此內三萬二千クローンの公費補助である。尙ほ本團に於ては每年サマリーテンシウレーと稱する災害應急手當の講習會を開き、警察官、學校敎師、工場職員、消防吏、其他一般の有志者殊に婦人等を養成しつゝあるが、最近三年間に約四千人の修業者を出だしたと云ふことである。之を要する謂ゆる災害救護機關の活動の眼目となるべきものは、(一)災害事故の發生を速知し(二)速知すると共に時を移さずして醫療的應急手當に必要なる人と物とを發遣し(三)應急手當を施したる上にて醫學の要求を充たすに足るの方法に依り適當なる設備を有する最寄りの醫家又は病院に被害者を送り屆けると云ふこと即ち是れである。

かゝる施設の備はるものあるに於ては、假令不時の災害に遭ふことありとするも、之に依て能く人を死の不幸より救ひまた其の受くる所の苦痛を最少限度に止めしむることも出來、また之が爲めには罹災者自らも、顧みて大に其の心に慰藉を見出し得る譯である。この以上のことは謂ゆる人事を竭して天命を待つと諦むるの外なしである。

一〇

本稿を結ぶに當て尙ほ一事を語るの無益ならずと信ずるものあるは他に非ず、右に述べたる維納救護義勇團 Wiener freiwillige Rettungsgesellshaft の創立を見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るに至りたる動機に關すること卽ち是れである。時は一八八一年十二月八日、冬の夜風の吹き荒む十時前後、忽然として警鐘の亂打に維納全市の人の耳を驚かしたが、火元は市內隨一の大劇場たるリング・テアテルである。恰も當時滿都の人氣を博したる某名優の出演中のことゝて、さしもの大劇場も大入客留の盛況を呈して居つたこととて、火に呪はれたる場內阿鼻叫喚の慘狀は想像に餘りある所である。皇室よりも、特に皇子の一人が勅命を奉じて現場視察の爲めに派遣せられ、皇子は段々精しく其の實況を目擊もしまた聽取りたるの後ちに、最後にこゝに消防救護の司令に任ぜる一警察官に向ひて、人命傷害の模樣如何にと下問せられた、これに對し警察官は、知つてか知らずにか將た官僚式の自然の發露とも言ふべきか、『幸に御心を安んぜられよ、一同皆助かり候へぬ』"Alles ist gerrettet"の一言を以て奉答の辭となした。皇子はこの一言に大に安堵の思ひをなして、直ちに歸城の上其の趣を陛下に復命するに至つた次第である。然るに何ぞ圖らん、翌朝に至つて漸く其の眞相の發表せられたる所に依れば、災死者のみにても男女五百餘人、輕重の負傷者に至つては殆んど其の數を計り難しと云ふことであり、獨り消防に關する機宜の働きを誤まれるのみならず、人命救護の設備や手當などに就ても缺陷百出誠にみじめ極まる光景を呈し、結局助かるべき者も助からず、救ひの手の不足なるが爲めに、僅に一擧手の勞によつて救ひ得らるべき者をも見殺しに爲たと云ふやうな事實も曝露せらるゝやうになつて來た。是に於てか全市民の官僚式警察機關に對する非難憤慨は殆んど制止すべからざる程の高潮に達し、殊に上流の貴族富豪さてはまた知識階級に屬する者の間に於ては、期せずして災害救護に關する自家頭上の重要事をば、唯だ法令の規定や若くは之が運用の局に當る官公衙の吏僚に一任し置くの頗る不用意の至りなりと云ふの自覺が共鳴し、終に第一流の貴族富豪の首唱の下に、深厚なる皇室の同情贊助を得てこゝに救護義勇團の成立を見たのが、劇場出火事件の起た翌日の十二月九日の夜の、て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うど幾千の老弱男女が炎々たる猛火に包まれてこの世からの地獄の苦みに叫喚しつゝあつた前夜と同時刻の頃であつたと傳へらるゝ所である。この維納救護團の成立動機には極めて深甚なる意義の罩れる者あるを見るべく、この不幸の出來事の犧牲となれる幾百の生靈を慰め、またこの出來事によつて官僚に對し警察に對して起した所の極度の謂ゆる義憤公慨とも稱すべきものを徒爾ならしめざる上に就ても、甚だ興味深きものであると思ふ。關東方面に起つた今回の風水害事件に就ての救護其他の應急施設に關する實況は如何に、各方面災害激甚の急報に接したる上級官に於て、果してこの急報を齎らし來りたる下僚に向つて、報告以外の他の方面に於てヨリ以上の罹災を見るなきやと反問したるや否や、假りに此の反問ありとして、之に對して果して「この以外少くも東京接續の地方例へば近き砂村葛西等の方面に、さまで甚しき慘害を見るに至らず、希くは閣下の心を安んぜられよ、一同皆助かり候ひぬ」と云ふやうな報答をなしたるものなきや否や。兎も角、事件突發後の數日間に於て、救護の手の尙ほ周到を見るに至らず、警察機關を始めとして官公衙及び公私各種の團體又は有志個人のあらゆるベストを竭くしての活動努力あるに拘はらず、或る一部分の罹災地又は罹災民にして全然賑濟救恤の惠に浴するを得ず、肉親の屍體の所在を搜索して之を發掘することを得ず、之を殯するの棺を得ず、甚しきは飯米又は飮料水の供給をすら得る能はずと云ふが如きものをすら目擊した次第である。敢て義憤公慨とまでは言はざるも、少くも今回の災害救護の實況に對して、心ある者の頭の底に、何とか最う少こしく徹底的な敏活な行き屆いた救護の方法はないものであらうか、大正の今日も明治初代の救護と大差はないと云ふ感を起したことは事實である。交通機關の發達の著るしきものありと稱する今日に於て、人命の救護に、糧食の供給に若くは貨物又は不潔物の運搬取除けに、汽車や電車や又は自働車の大に利用せられたと云ふこともない、災害後數日間尙ほ都會地に於ける罹災の方面には街頭に山積せる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不潔物の爲めに交通を杜絶せられ、市外僅に數丁を隔てる地續きの町村は恰も絶海の孤島でもあるが如くに、都市との連絡を遮斷せられて居つたと云ふやうな有樣である。災害後の今日に於て人をして罹災地方に傳染病の猖獗を逞ふするに至るなきやを危惧せしむる所以のものも、災害當時に於ける救護の徹底を缺きたるが爲めに外ならぬと言ふて宜い。現に其の當時罹災地方を視察したる後藤內務大臣も、何うも組織的統一的有効なる活動を缺くの憾みなきを得ぬと言ふて居るが、是は恐くは實際を目擊した者の皆な其の感を同うする所であると信ずる。既往は追ふべからず、この苦がき經驗に顧みて大に將來に備ふるの策を講ずること今日の急務であり、また吾々自衞の目的を全ふするが爲めに文明の使命を盡さしむべき當然の權利ではあると信ずる。救恤の善後策を計るが爲めに、種々の手段方法に依つて資金を蒐集するの必要あるは勿論なるも、之が利用の方法に就ては、唯だ徒らに罹災地又は罹災民に金品を分配し若しくは限られたる範圍にのみ狹き救恤を行ふと云ふ月並式に出づることなく、必要あらば此機會に於て尙ほ大に募金額の標準を高めてゞも、本當に意義ある所の根本的徹底的且つ現代的救護の法を確立すること、恰もリングテアテル燒災に依つて、救護事業の新局面を開いた世界的ソシエテー・デソーブテール・ウヲロンテールの生れ出づるに至りたるが如くならしめんことを、我が帝國の文明の爲めに切望して止まざる所である。

現內閣の社會政策的施設を評す

▽現政府の社會的施設を論ず

法學博士　福田德三

現政府の社會的施設は之れを大隈內閣の同種類の施設に比べると、少くとも次の事は云へると思ふ。卽ち其主義は一應徹底してゐるし、若干の誠意も認められる。大隈內閣のやうな一貫した主義も何も無く、申さば支離滅裂な輕佻の施設と同視すべきではない。大隈內閣の米價調節、罹災救濟などは、主義の上では徹底しなかつたし、誠意は認められず、結果についても殆んど何人をも利してゐないのみならず、國家には寧ろ害を與へた。之に比べると、現政府の社會的施設も結果から云へば一向感服出來ないけれども、少くとも其動機には誠意があり、實行の上にも多少一貫した筋道が立つてゐると思ふ。

然し乍ら其の現政府の施設も、觀來れば隨分批議すべき點が少くない。物價調節令・船舶管理令の如きも第一時機の點から云ふと甚だ遲れ、手續の上から云ふと甚だ誤つてゐる。今日に至つてかゝる施設を爲すならば、豫め臨時議會に於て、誠意を以て政府の方針のある所を披瀝し、議會の協贊を得べきであつた。法律を作つて置けとまでは云はないが、大體に於て如何なる方針を執るべきかに就て、豫め政府の意嚮を述べて、國民の意思を問ふべきであつた。然るに臨時議會に於ては何等其邊の配慮は無く、今日に至つて遽かに思附いた如く應接に遑の無い程各般の施設を爲すは、立憲政治の上から云つて、其の手續きを誤つたものと云はねばならぬ。之れを法律の上から責めないまでも、折角の政府の誠意が國民に徹底しないと云ふ大なる損害を招いたではないか。時機の遲れた事も單に時機のみの事でなく、政府の誠意を普く知らしめる點に於て損がある。船舶管理令も英・米等の聯合國に強要された結果だと解釋してゐる者さへある。此說は必ずしも僻見と許り斷言する事は出來ない。之れも主として時機を過つたから起つた缺點である。

乍去最も肝要な事は內容と實質である。物價調節令と云ふ名稱は國民が勝手に附したもので、政府は必ずしも之れによつて各般の物價を調節しやうとしたのではない。物價調節令では名が大き過ぎて、其の實施される內容が大變小さい。政府が積極的に物價調節をやる積ならば、暴利を目的とする奸商取締などは小なる一部分に過ぎない。全體に亘る物價調節をしないで、部分的な方法を執つたのは、其の成功を傷ける所以で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。若し政府が全般に亘る物價調節を企てるならば、我國の物價騰貴の根本原因に斧鉞を加ふべきである。今日我國に於ける物價騰貴の主なる原因は、兌換券の過發である。(通貨の膨脹が原因であると云ふ者が多いが、之れは少くとも言ひ廻し方が間違つてゐる。)であるから兌換券の過發を抑制し、餘分のものは回收すると云ふやうな根本的施設をしないと、物價調節も甚だ無意味に了る。政府は或はそれも追つて行る積りだと云ふかも知れないが、既に奸商を取締つて物價の上に一指を染めたのだから、追つて行ると云ふは手緩りでもあり怠慢でもあると云はねばならぬ。故に政府は自ら唱へないまでも、あの施設を物價調節令と呼ぶは過つた名稱である。單に一部分的な施設に過ぎない。

戰爭を利用し、又は最近の風水害に乘じて、不當なる利益を貪る輩のあるは寔に慨嘆すべきである。かゝる輩に政府が注目してそれを取締らんとしたのは、結果は兎も角も、其趣意には、我輩も双手を擧げて贊成する。大隈內閣の遣り方とは大變な違ひである。元來今までの政府は歷代皆財産階級に對して不當な自由を認め、其の跋扈を許して、少しでも財産階級の利益を妨ぐる事を恐れてゐた。現政府が此の歷代內閣共通の情弊を矯めて、破天荒な事をしたのは、少くともしやうと決心したのは甚だ結構なことである。人或は之を以て脅喝恫喝に過ぎぬと云ふ。然し政治は罪人を作るのを目的とするものではない。罪人を作る前に之れを取締る事が出來れば、結構である。處罰よりも恫喝の方がより小なる惡である。處罰さへ同じなら恫喝の方が宜しい。然し乍ら惜しい哉成績から云ふと小なる暴利者が處罰されたのは認められるが、大なるものは勿論中なる暴利者も何等の取締りを受けてゐない。風水害に乘じて二十五錢のものを一圓に賣り、五圓のものを十圓に賣つたとか云ふ樣な小さな奸商は取締られたが、千萬圓のものを二千萬圓に、五百萬圓のものを千萬圓に賣つて非常な暴利を占めてゐる輩は恬然として顧みられない。大きな暴利者や財産階級は全く免がれてゐる。尤も之れは獨り現日本政府のみを咎むべきではない。交戰諸國に於ても免かれない現象である。近來米國が參戰して以來種々の珍聞奇聞が傳はるが、小なる暴利者が取締りを受け、大なるものが處罰されない例は枚擧に遑がない。英國に於ても同じ現象が公然の秘密となつてゐる。內閣更迭と云ふ事を唯一の目的とするものから云へば、之れも政府攻擊の材料にはなるかも知れないが、世界の形勢を見れば獨り現政府のみを咎める譯には行かぬ。

それにしても、我國のは餘りに偏し過ぎてゐる。殊に殘念なのは警察の力を藉りると有效で、藉りないと效果の擧がらない事である。警察の力は卽ち政府の力を代表してゐるのであつて、此點に於て我國は立憲國と云つても、依然警察國たる實を脫しないのである。警察の有力なるは一面は甚だ結構だが、一面には其の力を藉りなければ政治が行はれない事になる。警察政治は立憲の本義から云へば甚だ慨くべき事である。船舶管理令も之れと同樣、警察の力が及ぶ範圍が暴利取締令より少いから、從て其の效を奏する事も暴利取締よりは少い。一にも警察二にも警察である。而かも船舶管理令が多少有效なのは、物價調節令と同じく、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小なる社外船の持主の間で、郵船會社の如き大なるものは無關係である。社外船の持主にしても大なるものは郵船會社と同樣、高見の見物をしてゐられるのである。從來しない事を斷行したのは可いが、之れが爲めに警察政治の色彩を更に濃くしたるは、功罪果して相償ふか。長い眼で見ると寧ろ功は過を償ぐのはずと斷言しなければならない。若し此の調子を以て他の種々の問題に向ふと、それこそ由々敷大事となりはしないか。例へば先頃各所に起つた同盟罷工の如きを、警察の力で片端から鎭壓するとなるとそれこそ大事である。資本家に對しても工場法の施行は結構であるが、それも警察の力で工場監督官が警察官の如くになるのは困つたものである。工場法を以て工場を取締るは勞働者を保護する爲めである。勞働者を保護するは畢竟國の生產力を增す所以である。警察政治を以て工場を取締つても、徒らに餘計な負擔をなす事になるのでは駄目である。

併し余輩は決して我國の警察が諒解の無い干涉許りしてゐると云ふのでは無い。要するに問題は人である。警察機關の主腦に其人を得れば、警察政治でも立派な事は出來る。例へば先頃の早稻田大學の紛擾に對する警察のやり方である。大隈侯の周圍にある人々は警察の干涉が不十分であると攻擊して居るが、警視廳や所轄警察署が已むを得ざる場合にあらざれば干涉せずとの態度を取つたことは、同盟罷工やロックアウトの場合にも歡迎すべきである。右は諒解ある警察政治にはなか〳〵いゝ事〻あるといふ小さな例である。畢竟問題は警察政治其ものよりも、主腦者其人の理解・人格にある。

船舶管理令に關聯して海上保險再保險の官營も亦一の社會的施設と見られる。之れは批難する人も有るが、余輩は現內閣の行つた善政の一であると思ふ。始めから再保險官營の主義を取るべかりしを、今までは戰時補償法をやつて居た爲め國民に餘程損を與へた。政府が何もしないなら兎も角く、苟も何かしやうとするならば豐富なる外國の經驗を利用すべきである。然るに我國では今まで外國の實例を顧ず、一番拙劣な補償法をやつて居た。再保險の官營は其成績或は戰時補償法より惡いかも知れないが、主義としては無論此方を歡迎すべきである。

暴利取締令を批難する人は、やつても物價調節に功無し、何故最高價格を制定しないと云ふが、之れは批難する方が批難される人より馬鹿である。生活の必要品について最高價格を定めるは一應聞えたが、到底實行さるべき事でないのは、獨逸英吉利が具體的の例を示してゐる。それを行はれ得るものと思ふは、經濟の理法を全く無視したものである。獨逸や英吉利は背に腹は變へられずにやつて、而かも失敗したのに拘はらず、大變狀態の違ふ我國に實施しやうと云ふのは、益々警察政治の勢を助長させるものである。日毎に常なく變動する日用品の價格を制定して、それを破つたものは警察の力でどし〳〵檢束するとなれば由々敷き事になる。それよりも寧ろ獨逸が試みつゝある官沒主義の方が遙かに有效である。然し之れは我國の現狀態では行ふ可き施設ではない。最高價格制定論の如きに比ぶれば、少くとも現政府の方針に徹底してゐると云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へる。

今後の施設についての希望としては、國民の生活に密接な關係ある積極的の施設をするならば、官僚の獨斷でやらずに、國民の意思、代表者の意見、専門家の意見を十分尊重すること是れである。海上保險再保險の官業には民間の專門家を委員にしたやうであるが、各般の施設は皆さうありたい。かの經濟調査會の如く、何も知らぬ有象無象を並べた大隈流のやり方では、何等效果ある施設も出來るものではない。既に臨時外交調査會には政黨の首領さへ入つてゐるではないか。一般の社會的施設をなすならば、眞に智識あり見識ある公人の意見に飽くまで聽くべきである。さらでだに一般の社會的施設は、之れを政治的施設などに比して、大抵萬全を期せられないもので、實行上何等かの缺點を生じ易いものである。故に完全は期せられないとしても、出來る丈け缺點の無いやうな施設を企てやうとするならば、日本が持つ所の人材は遺なく之を求めて、野に遺賢なからしめるやうにしなければならぬ。

▽要は其遣口の巧拙

慶應大學長　鎌田榮吉

現内閣の社會政策的施設といへば、先づ物價調節令の發布であらう。全體物價といふものには、需要供給の關係で定まるものであつて、人爲的には何ら斯うする事は出來ない。それを強ひてしようとすれば、却つて經濟界を攪亂するの恐れがある。假令よく行つたところで其效能はなく、恐らく大變な害を惹起する事にならう。

平常物價が騰貴した場合には、其騰貴した處へ「蟻の甘きに集る」が如く、其周圍から貨物がドシ〱集まれる丈け集まるものである。貨物が澤山集まれば、物價は從つて下落に傾き、故に自然と調節を來す事になる。そこで、假令いくら物價が暴騰したとて、強ひて之を人爲的に調節しようとするのは、甚だ危險な事である。

然し、強ひて之を辯護すれば、即ち今日の場合は、歐洲の大亂があるので、日本でいくら物價が暴騰しても、貨物は十分日本へ集つて來ぬ。集つて來ぬから物價は益々暴騰する一方となる。それでは困るといふので、已を得ず法令の力で之を調節しようといふのである。それは全く政府としては當然なさねばならぬ事である。即ち非常の際に非常の手段を取るのである。故に現政府が執つた今度の政策を一概に惡いと非難し去る事は出來ない。要は其遣方の巧拙であり、其効能の有無である。然らば其の遣方の巧拙如何、其功果の有無如何といふならば、それがなかなか怪しいのである。

恰度今度の水害の場合など、其非常を調する爲めに干渉したのである。斯かる際には、貨物が自然と集つて來て物價が調節されるのを待つて居るのがよいか、但しは今度遣つたやうに買占めをしたり、賣惜しみをして暴利を得ようとする所謂奸商を一々片ッ端しから遣りつけたのは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

果して效があつたか無かつたかといふところに議論が分れるのである。辯護する者は效ありと言ひ、非難する者は效なしと言ふ事になる。然し大抵各人の常識で判斷が出來ようと思ふ。

▽社會政策實行の第一歩として歡迎す

早大教授 安部磯雄

現内閣によつて先づ私共の注意を惹いた政策は、今度行はれた施設である。我國は歐洲戰爭の影響を受けて物價段々と騰貴し、殖産工業は次第に盛になり、所謂成金連なるものが生じ、世間一般もつい一攫千金の投機的利益を夢み、其上奸商なるものがあつて日用品其他の貨物を買占めるので、物價は空前の大暴騰となつた。そこで、政府は物價調節令を發布して其順當を計つた。次いで、今度の暴風雨があつて東京附近に大慘害が起り、一部の小賣商人は此災害につけ込んで日用品に對して暴利を貪らんとしたので、茲に警視廳の不正商人檢擧となつた。之は何んといふても社會政策上大問題であつて、十分批評を下す價値がある事と思ふ。

私は今度の内閣が執つた政策を若し十年の前に行つたとしたら、世間は非常に驚いて隨分と騷ぐ事と思ふ。十年も前であつたら、恐らく今日の如き英斷は到底も出來なからう。私は何も現内閣の功績を小さくしようと思ふて言ふのではないが、何故如斯き英斷が行へたかといふと、私はそれを時代の功に歸せざるを得ないのである。即ち歐羅巴諸國では目下食つてないところの日用品の干渉を遣つてゐる。實際あらゆる食料品衣服類等まで政府で纏めて國民にあてがふといふ狀態である。此立派な實例があるから、現内閣でも思ひ切つて今度の政策が取れたのである。又世間でも左程驚き騷がないのである。政府の其之を行つた英斷は稱すべきであるが、一面此實例があつたので大いに遣りよかつたのである。

世間に於て新聞などは一時兎角の批評があつた。詰り政府が個人の事業に干渉するといふのはよろしくない、又干渉しても其目的を達し得るや否やといふ事は大なる疑問であるといふ議論であつた。私はこれは取るに足らぬ議論と思ふ。「干渉」といふ言葉は何らも我々の耳に惡るく響くものであるが、實際我々國民は仕事をする上に於て如何なる場合にも決して自由放任の絶對權を有つては居らぬ。多數の幸福の爲めには何うしても制限を受けねばならぬ。又政府から干渉せられねはならぬのである。例へば、煙草專賣法があつて個人では煙草は何うしても作られぬ。又酒なども個人では勝手に作れぬ。又將來日本でも處嫌はず工場を建てる事の制限をするやうにならうと思ふ。現にベルリンなどの都會では此制限がある。之等の干渉は全く當然の干渉であると思ふ。されば、食物の如き人間の最必要品たるものを、少數者が投機の目的を以て買占めをする場合に於ては、個人の自由也として許して置く事は出來ない。要す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るに、私は大體に於て内閣の今度の方針には反對すべき理由なしと思ふものである。

現内閣の此施設に如何に缺點なきとしても、之を私共から觀れば、將來に起るべき大々的社會政策のほんの第一歩に過ぎないのである。なんとなれば、今日暴風雨の慘害に際して警視廳が小賣商に干渉するといふのは一時的の事であり、又物價調節の如きは應急の手段に過ぎずして、將來に於て爲さねばならぬ大々的社會政策から觀れば甚だ不徹底であるからである。私共は食料品の取締の如きはもつと徹底的に又永久的の施設をするのが當然と思ふて居る。歐羅巴諸國は目下戰爭中であるから非常なる干渉をなして居るが、之は平和後に至つてもキット或程度までは繼續する事と思ふ。されば彼等は此戰爭に依つて社會政策の本當の道を經驗した譯である。此食料品の取締が十分行ひ得るやうになれば、最も難事とせられて居る貧民問題の解決の如きも比較的容易に出來ると思ふ。此意味に於て、今度の施設は簡易保險法よりも徹底し、又工場法よりも一層善良なる政策であると言ひ得る。少くとも夫等の施設と同價値ある政策である。歐米に於ては此度戰爭後になつても此施設の繼續する事であらうから、我國に於ても之を第一歩として段々と理想の設備にまで推進めん事を切望するものである。

私は平常から日本人の主要食物たる米などは、政府が自分で處理し經營すべきものであると思ふて居る。恰度煙草專賣のやうに米專賣をせよといふのが私の持論なのである。其理由は、主要食物たる米の相場が常に變動するといふ事は、國民生活の上に根底的の不安を與へるものであるから、之を國家の手で處理して其不安を除くといふにある。即ち國家は生產された米を全部買上げて、而して賣捌くのであつて、豐年の時は之を貯藏し、凶年の時は其貯藏を賣出すといふやうにして、毎年同じ價格を以て國民に賣り拂ふといふ政策を取るのである。如斯き政策を取る時は、如何程國民生活の上に便利と平安を感ずるかも知れない。

之は米丈けの問題であるが、其他の食料品日用品も時によつて價格が隨分と變動するから、これ又其取締を要する。其上此等の物は遣方如何で今までよりはずつと安價に販賣出來るかと思ふ。今までは、例へば生產費が一圓かゝつた物でも、消費者へ渡る時は三圓にもなつて居る。詰り卸商又は小賣商の制度が不完全なからである。國家が更に進んで、此等の制度をまで改良し經營して行くなれば、國民生活の上に大變化大向上を來す事は請合である。勞働者の賃金を一割上げるとか、官吏の月給を高めるとかいふが如き方法よりも、如斯き施設を採る方が何の位徹底的であるか知れない。現内閣は已に今度の如き政策を取つて其經驗を得たのであるから、今後更に以上の如き方針を順次に採用しては何うであるか。

之は私の理想であるが、現内閣に於ても十分考へねばならぬ問題がある。それは何であるかと言ふと、國民の最低生活費の研究と、それを標準として苟くも世に働く者には其丈けの賃金を與へるといふ制度を設ける事である。實際茲まで行かなくては、社會政策が其本當の意味をなさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないのである。元來國家は人民の生命財産を保護するといふが、之をよく考へて見れば、此最低生活費の供給といふ事を實行しない以上は、其目的を達する事は不可能である。今日國家が我々の生命財産を保護して居るといふが、それはほんの一部分に過ぎぬ。即ち殺されぬといふ生命の保護と、盗賊に盗まれぬといふ財産の保護とに過ぎない。これ丈で今日國民全體の生命財産の保護が出來て居ると思ふのは大なる間違ひである。若し一朝事あれば何萬乃至何十萬といふ國民が、生活費の不足の爲めに餓死せぬとも限らぬ。又假令さういふ事は滅多に無いとしても、何時あるかも知れぬといふ不安はある。現實所謂餓死はせぬにして、生活の不安、餓死の恐怖、營養の不十分の爲めに、段々と身心を害して遂に死に至る者は、今日澤山我々の眼に觸れ耳に聞くところである。これ即ち生命財産の保護なき所以である。歐米諸國では此事は餘程考へて居るから、早晩實行する事と思ふ。日本でも何うか此問題について考へて欲しいものである。

更に今一歩進めて考へて見ると、國民の最低生活費の制定と、それを標準として社會に働く者のみに對して最低賃金以上を與へるといふのではまだ不十分である。即ち世に出て働かれない者は何うするか、又假令働かうとしても仕事のない者は何うするかといふ問題である。前者には養老保險などの制度を要するが、後者の仕事のないといふ所謂失業問題は、世界共通の難問題である。そこで、國家は何うしても最低賃金を與ふると共に、その之を得らるべき職業を與へるといふ保證をせねばならぬのである。實際今日の社會政策を徹底して其最終の美を濟さんとするなれば、最後には何うして玆まで來なくてはならぬのである。其前途を望めば頗る迂遠の感がないでもないが、然し、已に現内閣が食料品日用品の取締を法律で制定し、天災に際して暴利を貪る小賣商人を檢擧して、少くとも生活問題を解決する社會政策に向つて第一歩を踏み出したのであるから、これより退く事なく次ぎつぎに其理想に向つて進まれん事を希望する。又これは現内閣に限らず、此次ぎに來る内閣に向つても望むところは勿論同樣である。何れにしても、現内閣が此將來の世界の大問題であるべき社會政策に向つて其第一歩を踏み出した事には、以上の意味に於て多大の賛成を表して置く。

▽不徹底且弱者虐めの政策

松山忠次郎

寺内内閣の今日まで實行して來た社會政策と云ふものは、要するに船舶管理令であるとか、物價調節令であるとか、戰時利得稅であるとか以外は無いと思ふ。戰時利得稅は未だ實行されてはゐないが、既に議會でも言明し、其後大藏省内でちよく／＼調査中であるとか云ふ話であるから、其内容は兎に角早晩實行される事と思ふ。依つて是等のものについて私の感じた處を簡略に一言しやうと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲

船舶管理令は其時の遞信大臣の說明にも明白であるが如く、二つの目的の爲めに出來たのである。其一は聯合與國と策應の便宜を進めんが爲めで、其二は國民經濟の激動を防がんが爲めてある。然るに此二の目的は互に相容れない。卽ち甲の目的を達せんとすれば乙の目的に遠ざかる譯である。其の理由を一言すれば、聯合與國と策應の便宜を進めると云ふ事は、卽ち日本の船舶を徵發して聯合與國の軍事輸送用に供すると云ふの外ならない。從て內地の船舶は少くなる事を意味する。既に船舶の不足に苦んでゐる上に、更に內地の船舶を少くしやうと云ふのである。之に反して國民經濟の激動を防ぐといふ事は、畢竟內地に於いて船舶の供給增加を意味するものである。啻に沿岸航路のみならず、日本と外國との航路に於ても、なるべく日本の商業上の必要に應ぜしる事を目的とするものである。是に於て此の二つの目的は兩立しない事になる。一の勅令に依つて此の互に相反する目的を達しやうとする事は元來無理ではあるまいか。尤も聯合與國と策應の便宜を進めると云ふ事は、外交上の意味から來てるるに相違あるまいが、社會政策には寧ろ反するのである。今、米とか、木材とか、石炭とか、食料品とか、綿布類とか、毛織物とかいふ國民生活に最も必要なるものが、非常に騰貴してゐるのは、種々の理由に基くには相違ないが、船舶の不足の爲めに供給せられ得べきものが供給されず、又運賃暴騰の爲めに其の代價が高くなるといふやうな事に大に基てゐるのである。然るに今多數の船舶を徵發して聯合與國に供給するといふ事になれば、日常の生活に必要なる物資はます〱乏して、運賃騰貴の爲め其代價はます〱騰貴する。故に之れは國民經濟の上から頗る有難くない事である。就中日本の船舶を徵發して亞米利加が露西亞に供給する軍需品輸送の爲めに提供するが如きは、單に商業上から云へば、日本の爲めに非常に不利益である。露國は元來開戰以來種々の軍需品を我國へ註文して來て、日本の實業家は相應に利益したのである。然るに露西亞は今や之れを日本に註文せずして米國にする。然るに米國の商品を廉く露國に供給せしめんが爲めに日本の船舶を徵發すると云ふ。若し斯樣な事があれば、日本は啻に商業上のみならず、社會上に於ても甚だ不利益だと考へる。故に本件に於ては、目的の第一卽ち聯合與國と策應の便宜を進めると云ふ事は姑く見合して、單に國民經濟の激動を防ぐといふ事にのみ力を入れて貰ひたいと思ふ。

▲

所謂物價調節令には第一に農商務大臣の發した省令がある。其後風水害の際に警視廳が廳令といふものを出してゐる。此の二つである。所が此の二つの行政命令は、其意味に於て頗る不徹底たるを免かれない。農商務大臣の省令を以て發布した調節令に據れば、買占め又は賣惜しみをするものを取締るといふのである。而して如何なる種類の買占め又は賣惜しみを抑制するかと云ふに、之れには二つの條件が必要である。其第一は急激なる市價の變動を惹き起すもの、第二は暴利を目的とするもの、此の二の懸念ある場合には買占め又は賣惜しみを禁ずるといふのである

る。然れど之れが頗る不徹底である。如何なる場合に於ても商品が賣買される時には、其需要供給の原則に從つて、幾分か相場に變動を與へるものである。之れは經濟上の原則である。從て農商務大臣は急激なる市價の變動を惹き起すものはいけないと云ふが、然らば如何なるものを急激なる市價の變動といふか、何圓何十錢以上の騰貴、若しくは下落を急激と認めるか、其の標準が分らないのである。從て買占め又は賣惜しみを禁止さるのにも、如何なる程度のものを禁止するか頗る不徹底である。

次に暴利を目的とするものを差止めると云ふが、暴利とは何を標準とするか。商人が物品を賣買するには、必ず多少の利益を目的とするのは云ふまでもない。然れども其利益の額の多過ぎるものはいけないと云ふが、幾許以上の利益が暴利であるか、若しくは資本金に對して何割以上の利益が暴利であるか頗る不明である。近來の商事會社には多額の利益を食つてゐるものがある。五割とか七割とかの配當をしてゐるのは珍らしくない。政府の保護の下に營業してゐる郵船會社の如きは、毎期十割以上の利益を占めて、七割の配當をしてゐるのである。唯之れ丈けの計算で見れば、暴利と云つて差支へないと思ふ。然しそれを理由として郵船會社の營業を差止める譯には行くまい。又其利益を減ぜしめる事も出來まい。暴利を目的とすると云へば各種の取引所の如きは最も暴利を目的とするもので、又最も急激なる市價の變動を惹き起すものである。或は株とか米とか綿絲とか生絲とか云ふものを買占めて、何百萬圓乃至何千萬圓の暴利を食つた成金はあるのである。少しの材料を言ひ振らして株式の景氣を煽つたり、又は過日來の如きあの暴落を來したりするのも矢張取引所である。若し大阪の三品取引所が無かつたなら、戰前に百圓以下であつた綿絲が四百七十圓にまで騰貴する事も無かつたらうし、四百七十圓の綿絲が僅か一ケ月の間に二百二三十圓に暴落するやうな事も無かつたらうと思ふ。果して然らば取引所なるものは暴利の目的を公許するものであり、且つ急激なる市價の變動を惹起するもので、即ち物價調節令に必要なる二個の資格を具へてゐるものである。然らば農商務大臣は何故先づ取引所の閉塞を命じないか。恐らくそれ丈けの事を斷行する勇氣はあるまいと思ふ。果して然らば物價調節令は要するに不徹底であり且つ弱い者虐めと云ふ事も出來る。呑舟の魚は取締る事が出來ないで左程でないもの許り威嚇するのであると云へる。其適例は先日風水害の際に警視廳が物價取締の廳令を出したのでも判る。其當時物資の缺乏を來たしたが爲めに、一本の大根が三十錢にもなり、一個の鷄卵が十錢にも引き上げられた。之れが爲めに罹災民は非常に迷惑したのは云ふ迄もない。故に警視廳が之を取締つて、成るべく安く供給せしめんと考へた動機は結構であるが、然し強いて大根を十錢に引き下げ、鷄卵を二三錢に引き下げしめんとしても、それは行はれない。物の價は需要供給によつて定まる。此原則は警視廳が幾許氣張つても破れるものではない。それよりも行政官としては斯かる必要な物資を至急に供給するを圖るが必要である。さうすれば干渉せずして物の價は下がる。然るに斯かる無用な干渉をするのみならず、若し之れに應じないものがあれば拘留若しくは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處罰すると云ふに至つては、寧ろ人權問題である。物價を廉くせんとした動機は結構であるが、其遣方は無法と云はねばならぬ。少しく問題は大きくなるが、之れは營業の自由を保障した憲法の精神に悖るもので、違憲の沙汰と云つても差支へない。

▲

第三に戰時利得税である。之れは先にも云つた如く未だ實行されてゐないが、時局の爲めに意外の利益した者の利益の幾分を政府に徴集しやうと云ふのである。之れ又一種の社會政策と云つて差支へない。然るに財政の原則から云へば、國家に必要なる租税は必ず徴集する。如何に國民が苦情を云つても必ず徴集する。其代りに國庫に餘裕の有る場合には國民が如何に裕かでも徴税しないのが財政の根本義である。日本の財産の現狀に於て戰時利得税を徴集する必要があるか如何か。新税を起さねばならぬものであるか否やと云ふに、歳入の現狀は豐かで、殊に昨年來民間の好景氣の爲めに租税の收入は凡て大に增加してゐる。官業及び官有財産の收入、印紙税等も非常に增加してゐる。故に大正五年度は豫算よりは八千幾百萬圓の增收になつてゐる。財政のこんな豐かな事は未だ曾て無い。而して今日の模樣で見れば今年度は更に好況と見ねばならぬ。然るに政府は何故以上の新税を課して歳入の增加を圖る必要があるか。たゞさへ澤山に剩餘金が殘るのに更に新税を附加して、之れを大きくするの必要が何處にあるか。吾人は全然無用と思ふ。或は此際政府が積極的に種々の事業を企てゝ爲すべき事業は多い。故に歳入の多いのは少しも困らない。「多々益す辦ず」であると云ふ者もある。今日の場合政府が積極的方針を取つて種々の新事業に着手するとは以ての外である。政府の積極的事業と云ふものは、鐵道であるとか、港灣であるとか、若しくは建築とか畢竟土木事業である。然るに今日は煉瓦とかセメントとか若しくは鐵材とか、土木事業の材料は非常に騰貴して何れも戰前の三倍以上に騰貴してゐる。そして民間では其の不足に窮してゐる。然るに政府が積極的方針を取つて盛んに土木事業を經營する事になれば、是等の材料は益々不足して、民間では益々困る事になる。結局政府が民間の會社と競爭して、之れを壓倒すると云ふ惡結果を來す。故に今日の場合政府の積極方針は許すべからざる事、そして積極方針が不可なりとすれば、戰時利得税を新に起して新税を徴集する必要はます〳〵無くなる。況んや戰時不意に利益を得たものに對しては、營業税とか利得税とかがあつて、國家に其利益の幾分を徴集する方法の既に具つてゐるに於ておや。

▲

以上政府が現に着手し若しくは着手せんとしてゐる社會政策には、良い點も不良い點もある。利益もあれば弊害もあると思ふ。處で未だ政府の方で着手してゐないもので、此際社會政策上是非實行して貰ひたいのは、砂糖トラストの打破である。砂糖製造業者と其商人とはトラストを組織して、內地で高く賣つて外國で安く賣つてゐる。其上に關税の保護がある爲めに、日本人は大變高い砂糖を甞めてゐる。そして外國から砂糖を輸入せんとする者があれば、堰き止めて輸入させない。全く日本國

民に取つて有害なるトラストである。砂糖が生活の必要品であるや否やは議論の餘地があるかも知れないが、假令不必要品であるにしても、二三の商人と製糖業者が示し合せて利益を壟斷し、日本國民に不自然に高い砂糖を供給すると云ふ事は、即ち不當の利益を貪るものである。農商務大臣の所謂急激なる市價の變動を惹き起すや否やは知らないが、暴利を目的として利益の壟斷を圖る事は確かである。物價調節令を制定したる農商務大臣は此意味に於て砂糖トラストを打破しなければならないのである。(談)

▽操つたい感じのする専制的社會政策

大山郁夫

寺内内閣が今回採用するに至つた經濟的調節政策に關しては、自分は「中央公論」の前號所載の拙稿に於て、一應政治學上より批評を試みたことであるから、同一誌上で、而かも棊月ならずして、同一論旨を繰返すのは、餘り氣の利かない沙汰と思ふのである。仍つて此度は前回に言ひ漏らしたことを、二三手短かに書き記して回答に代へやう。

放任自由主義の學説の全盛時代に於ては、政府の職掌は最少限度に止むべく、即ち人民の生命、自由、財産の保護に關する警察的任務の範圍を超ゆべからずとの原則が常に主張せられたが、近代國家の實際的必要は這般の空論を裏切つて、いづれの國家に於ても政府の職掌が非常に膨大し、且つ無暗に複雜に趨いたのは、君主制の治下たると、民主共和制の治下たるを問はないのである。而して政治上の自由思想の非常に尊重せらるゝ現代に於て、此事が當然の理路として是認せらるゝは、一は各國に於て、政治が民衆化した爲めであることも亦、言ふまでもない。詳言すれば、政治上のデモクラシーの増進と共に參政權が著しく擴張せられ、一般民衆の政府に對する統制力が强大、有數、確實の度を加へたからである。民衆の大多數が隔意なく信任する政府が、殆んど萬能に近い活動をなし得ることは、英、米、佛、其他の各文明國の政府の戰時施設に於て之を見ることが出來る。是等の諸國に於ては、デモクラシーが決して政府の社會政策や戰時施設遂行上の妨害となることなく、寧ろ之に牴牾扞格するものは、動もすれば多數の壓制を叫ぶ少數富豪貴族や、國家的共同利害を特殊的利害に從屬せしめんとする商工業者の階級的精神である。

經濟的調節政策の如きも、トラストやモノポリーの制限より以下近頃の物價調節に至るまで、理論としては、政府の職掌として一向差支のないものである。但し斯の種の政策は、立憲國家に於ては、成るべく法律の形式を以てするを順當とすべく、命令の形式を以てすれば屢ば憲法上の問題を惹起するものである。けれども我が帝國憲法の第九條は、斯の如き事項に關する命令權の範圍を廣汎にして居るから、今回の物價調節令や、船舶管理令は、先づ以て之に牴觸する虞れがない樣である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

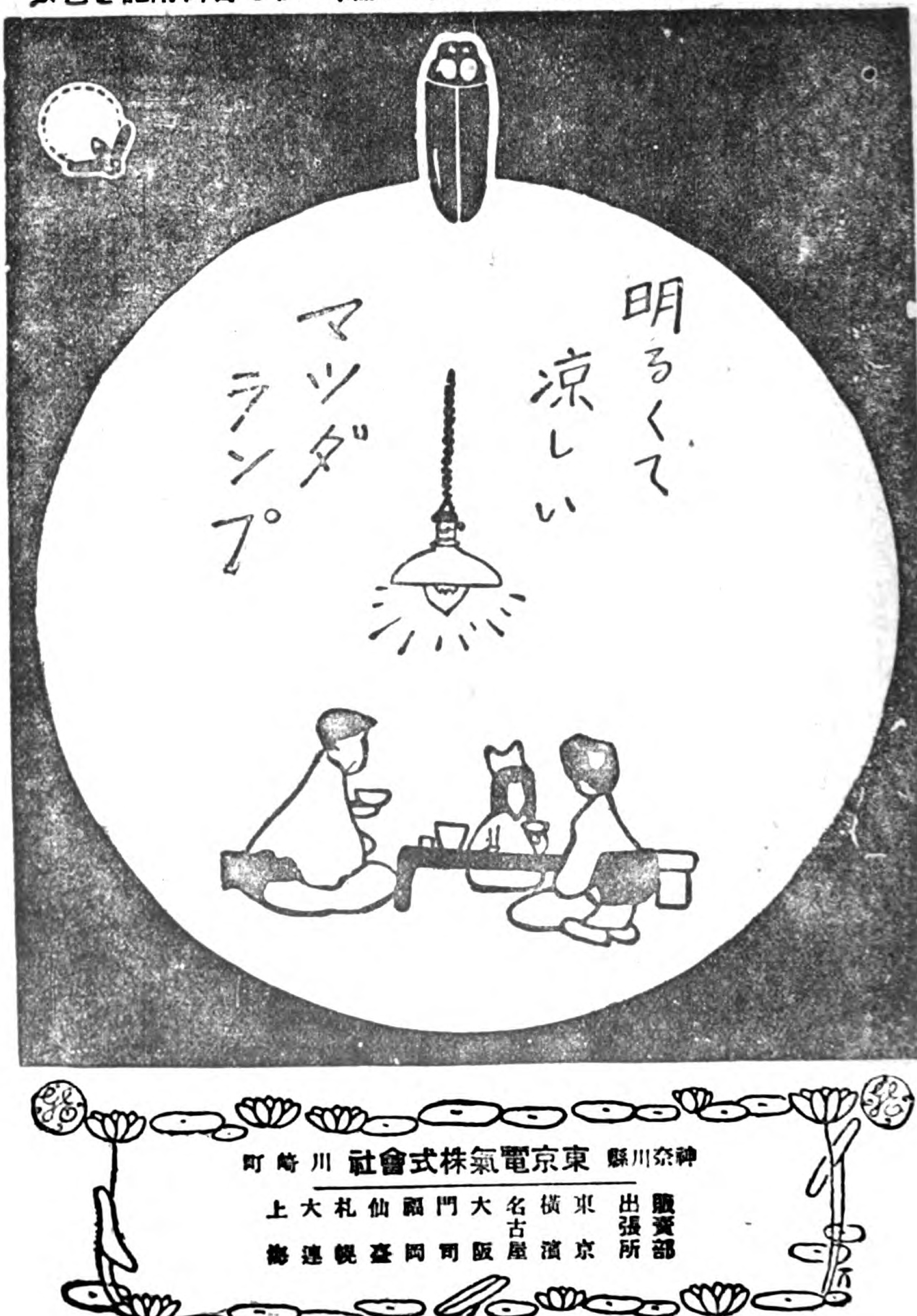
けれども斯の如き社會政策を行ふに就いては、政治家は單にその合法性を顧慮するのみならず、同時にその合目的性及び道德性を考察すべき經世的義務があることを忘れてはならぬ。此立場より見れば、今回の經濟的調節政策は、其目的に於ては不可なきも、其手段に於て批議すべき點が多い。第一暴利を貪ることを目的とする買占め賣惜みを取締るは宜しい。けれどもその認定を一々行政官の判斷に任せたのみで、少しもその認定の標準らしいものを掲げて居ないのは、大に專制的の臭ひの高い點である。立憲國家の法令の條項が非常に微細に渉つて、所謂「法三章」と顯著なる對照を呈するは、決して勞力の冗費ではないのである。第二に、世間で非常に喧ましく論ぜらるゝ如く、近時物價暴騰の遠因は通貨の膨脹及び運賃保險料の上騰でありとすれば、物價調節令の如きは、只其門戶に達したので、未だ其堂奥に到らざるものであると謂ふことが出來る。船舶管理令の如きは、運賃制御の目的を多少實現することを得べしとするも、それのみにては無論不十分である。素より近時の物價暴騰の遠因を根本的に掃蕩することは、非常なる難事に相違ないが、さらば政府は何故に專門的智識を集めて之を謀議しなかつたかゞ問題になる。會議好きの政府は、外交調査會や教育會議を無暗に起して憲法上若しくは憲政上の批難を蒙る事を意としないで居ながら獨り經濟的調節に關して急遽獨り合點で取決めたのは、日頃の哲人政治の主張にも似合はしからぬことである。尤も自分免許で哲人を決め込んで居るのならば論外であるが、それは世間の承知しないことである。或は斯くも急遽に獨り合點で取決めたのは、實際上緊急の必要があつたからだと言ふならば、それ頃の用意の足らなかつ ことを自白する譯になるのである。

寺內內閣が善政主義を標榜して立つてより以來、簡易保險の實行や、濟民局の屠言や、今回の經濟的調節政策など、様々な社會政策的施設を行ひ來つたが、多くは皮相的の事たるに止つて、毫も問題の神髓に觸れて居ないことは、深く究めずして自ら明白である。殊に國民生活の上より見て最も公正を失したる戰時特別税が日露戰爭以來其儘据置になつて居ることなどは、善政主義の政府の恰好の着眼點でなければならぬ筈であるが、間接税の如きは餘り目立たぬものであるから、一向之を棄てゝ顧みないのは、善政主義も餘り當てにならぬ廣告的看板であると謂はねばならぬ。

又專制的傾向の顯著なる政府の下に於て如何に善良なる社會政策が行はれても、國民は何となく一種の擽つたい感じを竟に脫することが出來ないものである。選擧權が相當に擴張せられ、選擧干渉の弊習が跡を絕ち、國民と政府との信任關係が密切を加へ、政府の失政に對しては國民の糺彈の手段が有效に確保せらるゝ責任內閣の制度が樹立せられたる狀態の下に於てこそ、政府が其信ずる所に邁進して萬能力を發揮することも、亦快心のことゝして歡迎すべき理由もあるが、官僚中心の政府の社會政策に對しては、それがたとへ必要なものであり、善意より出でたものであるとするも、一般國民は衷心より之に共鳴することを得ず、最も良き場合に於ても外來的恩惠として之を甘受するに止まるのである。今や、國民は內部の本然の要求より迸ばしり出でたる政治を欲求する時代が到來した樣に思はれる。此意味に於て我等は、現下の政界沈靜期に次いで起らんとする波瀾を樂みに眺めんとするものである。(六―一〇―二三)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

著者兩先生苦心二十年の賜物

我國民は今日始めて國家的大辭典を有せり

東京帝國大學文科大學長 文學博士 上田萬年
東京高等師範學校教授 松井簡治 兩先生著

大日本國語辭典

第三巻發行 四六倍判脊革角革一千二百五十頁挿畫約四百 ● 定價金七圓五拾錢 **特價金六圓**（金參圓宛二回拂込差支無之候）

第一巻（現在數五百部限）第二巻（同上一千部限）

此際特價金六圓にて高需に應じ可申候

送料內地二十四錢・台樺四十五錢・鮮支五十五錢

天覽台臨

苦心二十星霜、費用十數萬金、著者と出版者と、最善最美の努力に成功せるものは本書也、一昨大正四年御大禮の秋、第一巻の發行せらるゝや、我國空前の國實的大辭典として、萬口一致の推讚を蒙り、一擧

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

學海最高の王座を占め、照代文明の光輝たる名譽を荷ひ、尋で、昨秋第二卷を發行して嘖々たる好評は中外に普ねく摸範的大出版としての本書の信用は絶對に確立せり。今や公的期日一日を違へずして第三卷出づ、體裁品質前卷と寸分の差等なし。

我が國寶的大辭典　時事新報

最初の國民的大辭典　東京朝日

最も進歩的の國語辭典　萬朝報

國語界永久の權威　阪朝日

空前の國語大辭典　實業之日本

天下屈指の大偉觀　太陽

國家的事業の完成　帝國教育

案ふに本書の如き標準的國語大辭典は、單に學者の專有物に非ず、一般國民が最高の典籍として、吾人各家に於ける書齋の權威たり。全國各學校に於ける國語教育の憑據として、必ず先づ一本を備へらるべきなり。

内容見本進呈　往復葉書申込次第

東京神田 **冨山房** 振替五〇一

東京日本橋 **金港堂** 振替八六一五

申込 全國有名書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●●●熱狂的歡迎初版旬日に賣切再版發賣●●●

岡田播陽氏著

東京 京都 大阪 三都生活

四六判最上製美本
正價金壹圓四拾五錢
郵税金八錢

繪畫執筆者
太田喜二郎 大谷句佛 土田麥仙 北野恒富 野田九浦 水島爾保布 島成園 菅楯彥 河合新藏

三色版四葉 寫眞版十數個

此書恐らくは大正出版界に於ける空前絶後の最大奇書たるべし。著者は現代都會生活の一切を呪ひつゝしかも新生活新生命が都會の那邊に潜在し夜明けむとしつゝあるかを叫びつゝあるものそして本書の內容は政治・實業・藝術・思想・宗教等のあらゆる方面より東西三京の生活を嘲評痛罵したるものなり贅六町人たる著者播陽氏素より賣文賣名の徒にあらずして此の奇書を公にす豈に胸中絪縕たる不平の氣終に已むを得ずして發するものに非らさらんや、敢て大方の一讀を希ふ。

目次の一斑

都會—獸の都大阪—女性の京都と男性の東京—八百熊親分—三都の女—三都と人形—三都の玄關口—三都の言[illegible]—三都盲人待遇法—三都の家屋—贅六と金—極惡惡人—殺人犯罪—狂蕩子無鵬—私生兒—三都の子供—煩惱卽菩提の都—古い京都—乞食—生のつかれ—寢入り込んだ京都—三都の火事—帝都と大阪—江戸ッ子と嘔吐ッ兒—三都人の特質—山の手と下町—贅六と喧嘩—大阪人と支那人—京都人と朝鮮人—三都商人氣質—盜む東京賣る大阪貫ふ京都—金招牌の蝕入—人員調査—箱根と有馬—土臭い都會—贅六と信仰—大阪の藝術—文展—繪畫より觀たる江戸と京阪—三都の名畫家—大鹽中齋—文明の兩性と其消長

忽ち再版

東京帝國大學講師 紀平正美先生著

改訂 人格の力

四六判最上製全壹册
正價壹圓
郵税八錢

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たるものであるが其後久しく絶版せられてゐた然るに昨年末に其姉妹篇たる『自我論』を出版したに就て再び讀者からの要求が出たので同書の出版者からしても再び世に出ることになつたのであるから其儘での再勸は到底許すことが出來ない、それで全部書き改めて自分の責任を新にしたのである。もと四拾錢の定價のものが壹圓になつた內容にそれだけの差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのである。—（著者識）—

東京市神田區表神保町七番地 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七二番

（中付一の四）

信用[illegible]舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



西洋畫のみかた

山本鼎

一

西洋畫のみかた？瀧田君の與へた此題目は、私共にとつて實に都合のよいものゝやうで、實は迷つく問題だ。みかたは方法でなく、感悟なのだから、觀る方々の御勝手で、價値判斷はそちらの任意です。或人が一文の價値なしとして捨てた畫が別の人に千萬圓に購はれたとして、畫は澄して悅びも泣きもしない。悅むだり泣いたりするのはそれを作つた畫家でせうが、畫家よりも畫商です。畫家にとつて其作品の價値は常に無量です、それ故世間の評價に就て頗る神經質にはなるが、たとへ貶し落されても悲嘆に沈沒はしないし、賞め煽られても省て危惧するのです。似た心持は、諸君が諸君の有機的製作である子孫に於て經驗せらるゝ處でせう。まつたく、畫は自然物と同じに鑑賞して貰つてよろしい。自然物の場合は、背後に自然科學とか神とかいふものを想像するが、畫には、自然及人間が直接な內容になつて居るといふだけです。ですから、先づみかたと云へば、表現——人——自然、此三位の關係を直覺理解する事で、それには又、時代とか、傳統とか、郷土とかいふ復雜廣汎な副資料が扣へて居るのです。處

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、私はどういふ風に諸君に吾が西洋畫のみかたを要求したら良いか、私が私の作品を斯く々々に鑑賞して欲しいと希望するは勿論易い、併し、西洋畫といふ總括的な事になると其處にはいろ〳〵な主義流派があるし、畫家の自信も各人各樣ですから、まことに惑はざるを得ない。更に一方には、如何なる階級を相手として記述す可きかにも迷ふのです。で、とにかく、二つの標準を設けて見ます、即ち、みかたの上には日本の洋畫といふ事をおき、日々萬餘を算へるといふ文展の觀覽者を聽衆におくのです。これは一般向きの此雜誌に適當であらうと考へる。

二

みかた——即ち觀畫の豫備智識を作るには、大體二つの條件があります。第一は表現力に對する觀察、即ち、寫形、傅彩、構圖、筆觸、整調、等の技工上の經驗若くは智識を得る事で、これは身づから畫筆を執る事により又多くの繪畫に接し、畫家に親交する事などによつて養はれるが、それは既に素人畫家にでもならうと云ふ程の人々に從遊す可き事で、一般の人には期待す可くもない。而も此、畫面から受ける直接の感じが、價値判斷の第一要素となるもので、すべてが感覺的である近代繪畫に於て特にそれは主要なのです。第二は、傳統を知る事です。つまり比較鑑賞から生ずる價値判斷で、主義流派及郷土性等に關する、繪畫史的の知識が鑑賞の目を肥してくれるのです。知識階級にある美術愛好家の多くは、大概この「樣式上の傾向」を愛する癖を有つて居て、穩健、奇拔、若くは和魂洋才といつたやうな概念に畫趣を認識し、且つ奬勵したがるやうです。此他に、技工上の洞察力が少しもなく、繪畫史的の知識を全く有たない、至極低級な見物があるのです。而もこれは、頗る多い、文展入場者の一萬人のうち、おそらく九千五百人位は此連中であらうかと考へる。此人々は『表現力』を見ずに、單に寫された光景を評價します。それだから畫と寫眞の區別をしない、パノラマ畫を双眼鏡で見る連中で、美神像のほとに手垢をつける手合です。私は今、要するに此連中

に對つて、辻説法をやるのかと思ふと頭を掻き度くなる。併しながら潮は遠きより來る、彼等の眼を肥す事は要するに吾々を高める事であれば、此大衆にこそ說かねばならぬ。私は順序として、西洋美術の起源よりして、日本に於ける洋畫の傳統を略記しつゝ畫界の現狀に及び、次に各畫系の表現力の差異を述べる事にしませう。

三

西洋美術の源をなして居るものはギリシャの美術であるが、それは專ら大理石の彫像によつて代表されて居ます。其今日殘つて居るものゝ最も完備したものとして、巴里の、ルーヴル美術館にある、ミロのヱニュスといふ、美の神の像がある。これは勿論作者不明で、十九世紀の初めに、佛蘭西の一殖民地の海邊の村で發掘されたもので、ミロといふのは其の地名なのです。土中に埋つて居たゝめに却つて大理石面は些の腐蝕をうけずに麗はしく保存されて居るけれど、兩腕は二の腕のあたりから失はれ居て、其腕が如何なる風に着いて居たかといふ事は近世の美術家に樣々に考察され論議されて未だ確定した意見を得ないのです。此ミロのヱニュス像は、美術史上美術の最高標準にあるものとされ、一千八百七十年の普佛戰爭の時は地中深く隱され、此度の戰亂には、鋼鐵の箱に藏められて地下室に秘藏されたといふ事です。(此ミロのヱニュスに關しては頗る面白い話があつて、それは幸ひ此春の三田文學の三四號に亘つて詳記されて居ますから是非讀むで頂き度い、みかたは見ると讀むとによつて深められるのですから)ミロのヱニュスに次いで名高い彫像は、ロンドンの大英美術舘にある、昔、パルテノンといふアテネの神殿を飾られた群像ですが、これは風雨に蝕まれて、大理石面は輕石のやうに傷むで居り、且つ、手も首も失はれて居るのです。ギリシャの成蹟に次いで記憶す可きは、十五六世紀に亘つて伊太利亞に勃興した、所謂復興期の美術です。レオナルド、ダ、ヴインチ。ミケル、アンゼロ。ラフアエル。ヂオツト。ドナテルロ。ヴレネレスコ等の偉大なる畫家、彫刻家、建築

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此時代に簇出したのです。當時の美術家は皆高級な知識を有つて居て、ヂオットの如きは、今もフロランスの眞中に聳え建つ、ヅオモ寺の鐘樓を身づから設計し、そして立派なる浮彫りを一つ手で鏤めたのです。又、彼等の體力はすばらしく强健で腕力も强く、ミケル、アンゼロの如きはフロランスに敵軍が押し寄せて來た時、仕事して居た城の窓から、首をのべて、石像を刻みつゝあつた大きな鐵槌を振り上げために一時敵勢をためらわした、などといふ話もあり、又彼れの鼻のかけて居るのは或時劇しい喧嘩をして喰ひとられた紀念だといふ事です。更に、レオナルド、ダ、ヸインチの如きは、今日、人類としての最高能力を發現した歷史上の代表人物とせられ、數學、天文、地理、築城、造船の技能に長じ、又實に飛行機を考案した最初の人として有名なのです。此度の戰が始まる前、一時行方不明になつて、世界中の興味をあつめた、巴里ルーヴル美術館所藏の、ジョコンダの肖像といふのは、即ち此レオナルドの傑作で、彼れの愛人モナ、リザと申す婦人の肖像なのです。此畫の顏のうす笑ひは、今日、心理學者の間に、深遠不可思議なる微笑(びしやう)、と稱されて居ます、それば狂者の笑ひに類する無氣味な深さを有つて居るのです。斯樣な天才の續々(ぞく)現れた十五六世紀は、まことに稀有な時代です。彼等の遺した成蹟を見ると、近世の美術家の仕事といふものは、單に手先の細工としか見えません。その容量の大小は建築と家具との差です。處で、ギリシャの美術と、此復興期の美術とにどんな相違があるかと云ふと、これを大ざつぱにして、ギリシャ美術は、ギリシャ神話による美術で、主として自然崇拜の情緒になり立て居り、復興期のそれは、即ち主に基督敎美術で、宗敎上の信念により、聖者の事蹟を對象としたものです。ギリシャが彫刻によつて代表され。復興期は、壁畫及建築によつて代表されて居ます、此壁畫といふのは、多くフレスコといふ畫で、壁に漆喰を塗り、その生乾きのうちに描くもので今日の油畫とは全々異つたものです。復興期以後は、美術史上所謂衰退期(デカダンス)に入つて十八世紀に及ぶ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のです。此時代概ねの美術家は其頃の、封建の各權力者の幇間見たやうになつてしまひ、甘つたるい肖像畫を描いて、貴婦人達の寵愛を求めて居たのです。十八世紀に入り、近代の科學的文明の勃興に伴ふ覺醒に順じて、個人性を基調とする自然主義が興隆しました。阿蘭陀のレンブランド。佛蘭西のクールベーなどといふ畫家がこれを立派に確定し、次いで、アングルの新古典主義、デラクロアの新ローマン主義などが生じ、やがて十九世紀の佛蘭西の印象主義の百花爛漫を現出したのです。此印象主義は世界に波及しました。私共も、東京の美術學校を卒業する頃、此革命の潮音を足もとに感じた次第です。此印象主義の特長は、大體太陽の光線に對する、感覺的讃美といふ點で、色彩はすてきに鮮明になり原色的に冴えかへつたのです。從つて彼等の畫は戸外の作業に伴ふ即興的活躍を帶び、畫幅も又大なるものは少くなつたのです。さて此印象主義も廿世紀の初めをもつて行きつまりました。そして藝術家の頭は鋭く理論的になり、傳統打破の感情は林野を駛る霧のやうに、全歐になびき亘りました。處へ東洋の装飾美術は良き智慧を與へて彼れ等の創造を援けたといふものです。そして彼れ等の作畫上の趣味はいよ〳〵象徴的に、彩は强烈に、且つ立體的から、平面的になつたのです。これ等十九世紀の佛蘭西美術卽ち印象主義興起以後を近代繪畫として、其内の畫系の名稱、及それに所屬する、代表的人物の名を簡略に並べて見ます。此事は、日本の洋畫の傾向を味ふに就て必要であり、諸君の觀畫の興味を密にするだらうと考へるのです。

畫派	代表的畫家
○初期印象派（プルミエール、アンプレシヨンニスト）	クロド、モネー。
○後期印象派（ポスト、アンプレツシヨンニスト）	セザンヌ、及び、ゴツホ。
○新印象派（ネオアンプレツシヨンニスト）	アンリイ、マテイス。
○立角派（キユービスト）	アンヂイ、ピカツソ。
○未來派（フイチユリスト）	カンデインスキー。

以上五つの畫系の相影響し合て混沌たる有様が最近六七年間の歐羅巴美術界の現狀で、それが又目下の日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本の洋畫界の狀態でもあります、此混亂の狀態が將來、如何なる結論を得るか。丁度今日の世界の思想界の分裂、個人主義の漂泊が如何なる歸着點を得るかといふ問題と共に頗る興味ある事だらうと考へる。私自身の信念としては、人類は、又美術は、すべからく率直なものとならなければならぬ、内容の深い率直に到着せねばならない、それには個人主義に眞の目的を與へねばならない、國家を個性とし、民族を個性とし、時代を個性とし、人類を個性とする統一的人生觀にまで飛躍せねばならぬ。此責任觀があつて、はじめて濃き空氣が作られ、そして良き美術が其處に醞釀(うんじやう)されると考へるのです。

四

日本で一番古い、油で描いた畫は、法隆寺の橘夫人厨子の扉に描かれて居る密陀繪とされて居るが、歐洲の油繪が始めて這入つて來たのは永祿年間、スペイン、ポルトガル人渡來の當時で、其頃の有馬侯の家來、山田右衛門作が日本最初の油畫書家だといふ事です。松平侯の藏に係る、泰西王族騎馬圖はその作と云はれ居り、他にも數人あるがもともと當時これ等の畫法は、天主教の宗教畫と共に傳へられた物であつたから、其後、峻酷な西教禁制の事があつて絕えてしまつたのです。

徳川時代となつて、八代將軍吉宗の治世に洋書の禁が弛るみ、從つて洋畫の知識も段々と這入つて來て、平賀源內などが道樂に油畫を描き、それに導かれて司馬江漢が眞劍に研究を重ねて或程度まで技法を明にしました。江漢の門人に永田善吉(亞歐堂田善)といふ者もあつて西洋畫法を傳へたが、一般はこれ等の洋風畫に敬意を拂はず、洋畫は極めて平俗な物に用ひられるに過ぎなかつたのです、併し明治に入るとそれは急に廣つて來ました。

初期の洋畫家に、川上冬崖、高橋由一、五姓田芳柳、山本芳翠、國澤新九郎、本多錦吉郎等の人々がある、これ等の人達は皆、或は洋人に就て習ひ、或は洋行して研究した結果、開發された處は多かつたが、明治九

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年、政府の設けた美術學校の教授として來朝した、伊太利亞人、アントニオ、フォンタネジはまつたく精細完全なる油繪法を傳へ、其傳習者小山正太郎、淺井忠等により、以後日本の洋畫は根本技法上の心配はせずともすむ事になつたのです。後、多分明治廿一年に黒田清輝氏が當時佛蘭西に興つた新手法に影響されて歸るに及むで、日本の洋畫は急に進展しました。脂色を基調とした、所謂「道路山水」なる暗い風景畫の替りに、淡紫淡緑を主調とする外光的な明るい寫生畫が畫界を代表する事になりました。當時は、鷗外博士が旺んに文藝美術の評論をされた時分で、小山氏等を脂派と稱び黒田氏等を紫派と名づけた活氣に充ちた評論が「めざまし草」を賑はして居ます。黒田氏が美術學校の教授に任じ、白馬會を組織するに及んで、其畫系はいよ〳〵勢を得て以後十餘年間日本の洋畫界の主潮をなして居たのです。處で、此白馬會の新運動が如何なるものであつたかと云ふと、それは舊來の主智的、意匠的なるに比して、主情的印象的になつた事で、例へば、風景に對ふとして、彼れは、山村秋意といふ概念的詩意によつて、山水、茅屋、紅葉林といつた道具立に効果を委ねるのであるが、これは、午後の太陽といふ自然の直覺的印象を、彩と明暗と筆觸に語らしめんとするのです。尤も黒田氏等の仕事はモネエのやつた佛蘭西の印象派のやうに徹底した「光の雰圍氣」を表現したのではなく、外光描寫から教へられた虹のやうな美麗な明るい彩で、目前の自然を素直に寫したといふに過ぎないのです、つまり、美的情緒を念とする自然主義であつて、「智感情」といふ、三人の異つた姿勢で立つた女の裸體の、少しく裝飾畫的簡約を施した畫や、「小督」と題する戯曲的の構成畫や、「門つけ」「お稽古」「舞列」などいふ風俗畫もしきりに畫かれたのです。此人々の最も重んじたのは寫形と調子でした。又、白馬會に對抗した畫派では、太平洋畫會が重なるものであつた。此派の牛耳を執て居たのは淺井忠氏で、同氏の沒後は、中村不折、滿谷國四郎氏等によつて代表されて居るのです。此團體ははつきりした主張は有たなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たが、大體に於てフォンタネジに線をひく暗い色の調子を承けて、感覺よりも意匠が重んぜらるゝ事は今日までも續いて居るのです。白馬會の人達が原色的の明るい、粉つぽい色彩觀に傾いてゆく時、太平洋畫會の連中は、三次色（赤、黃、青を原色といふ、原色を各二つづゝ混和して出來た、橙、綠、紫を二次色といふ、卽ち橙は赤黃、綠は黃と青、紫は青と赤とを混ぜて出來たのである、二次色を二つゞゝ混和したものを三次色といふ、萬物の色はこの三種の色及そのとり合せで一切が盡されて居る。）を愛してうす暗い飴色の畫を續けた。此二つの傾向の、一つは黑田氏の教師なる、佛蘭西のラファエル、コランに、一つは不折氏の師匠なる同じく佛人ジャン－ポール、ローランに系統をひいて居るのであつて、コラン氏の代表作が、裸體の美女が若草を褥に仰臥して居る「春」といふ畫であり、ローランスの傑作が「マルチン、ルーテル」のやうな劇的な畫である事も、とつて直ちに此兩會の主なる出品畫の內容を律する資料となるのです。

さて、斯樣な畫派の併存も、年を經てだん〲に趣相影響し特長の凡化して、終に白馬會の解散となり、太平洋畫會の衰退となり、文部省美術展覽會の創設となり、目ざましい、新思潮の輸入となつて、最近五年間は統轄的畫系なく、放たれたる自我の混戰を現出したのです。卽ち樣式は任意に改鑄され、技工は練熟よりも卒直が尊ばれ、解剖學及遠近法等の法則による、畫術の基礎とせられた寫形、整調が輕んぜられ、畫趣は近代文化の產むだあらゆる相より攝取せらるゝといふ分裂時代に進入したのです。此時に當つて、海外に留學して親しく泰西――主として佛蘭西の繪畫上の新機運を目擊した、十數名の青年畫家が前後して歸つて來たのです。そして各自の所信を忌憚なく、畫と織とに披瀝して、動搖をしていよ〱定まる處なからしめ、後進を驅つて自省の重さに就しめたのです。或者は表現の純化を愛してマテイスの「綜覺」を傳唱し、或者は印象の醇熟を欲してモネエの「光りの雰圍氣」を力說し、或者は有機的質量觀に恍惚としてルノワー

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の肉體描寫の比類なき魅力を讃美し、或者は表現の眞率を愛してゴッホの粗き響を高唱し、或者は質量と生氣の實感を唱えてセザンヌの優れたる技工に拜跪し、或者は個性の生々〱しき發現を求めてゴャの凄慘を談じ、或者は物體の嚴しき描寫を第一義としてレンブランド、クールベー等の寫實主義を奉ずる等、數ふるに限りない程様々な信念が語られつゝあるのです。斯して畫家の氣慨が大體に眞と力とに飛躍せんとする事を認むると共に、私は疑ひます、此貴重なる、自覺の寶珠を、「趣味」の盤上に轉がし慰み居りはせぬか？と。個性趣味、懷疑趣味、卒直趣味、憂欝趣味、内容趣味、曰ク何、曰ク何と。まつたく、神藥も毒藥も日本人の手に渡ると皆ゼヽムのやうに輕便に用ひられる。もし人々が愛國趣味であつたらどうか、親孝行趣味、敬神趣味、戀愛趣味で放蕩趣味であつたらどうか、私は左様な横着な行爲はすべて憎み度い。日本の畫家は醫者にして見れば病理學者は少くて、町醫者ばかり多い、專門家的氣力を有たぬ、有たうとせぬ傍業者になつてしまうのです。これは何故であるか、私は簡單に云ふ、それは文化の中心と一萬海哩も隔つて居るからだ、日本に、人間を根本的に奬勵する名譽と報酬とを得べき何等の仕事も無いからだ。此事は後章に愚痴をなほこぼすとして、私は、記述を畫界の現狀に進めねばならぬ。現狀は前記の如く頗る混亂しては居るが、或思想上の主張、若くは社交的因緣から、大體數個の團體に括られて居るのです、それを記明すれば左の様になる。

會名	大略の畫系	重なる出品者
文部省展覽會	△白馬會に系統を有つ外光派	黒田淸輝　岡田三郎助
	△太平洋畫會に系統を有つ意匠派	滿谷國四郎　中村不折　中川八郎　和田三造
	△印象主義、綜覺主義等を攝取按配する分裂派	南薫造　辻永
	△寫實派	牧野虎雄　片多德郎　中澤弘光等

二科會
概ね佛蘭西に系統を有つ
- △初期印象派
- △後期印象派
- △新印象派
- △分裂派
- △立角派
- △未來派
- △即興畫派
- △實相派

有島生馬　石井柏亭　梅原良三郎　安井曾太郎　正宗得三郎　山下新太郎　東郷青兒等

美術院洋畫部
重に佛蘭西に畫系をつなぐ
- △裝飾畫派
- △印象派
- △實相派
- △分裂派
- △立角派

小杉未醒　長谷川昇　森田恒友　倉田白羊　山本鼎　山脇信德等

草土社
私は此會の展覽會を一度も見ないから分らないが、二科會に出た、此會の主腦岸田劉生氏の畫で見るとそれは頗る頼母しい寫實家です。

やはり佛西蘭に因緣する
- △裝飾畫派
- △即興畫派

齋藤與里　川上凉花

日本美術家協會
- △立角派
- △分裂派
- △寫實派

織田一磨　萬鐵五郎等

太平洋畫會
此會は既に現役的の力量を失つて居り、且つ其重なる會員は文展の出品者であるから別に記るす事は入らない。

以上はまづ重なる現存の團體です、二科會及美術院は、文展の鑑別審査と相容れずして反旗を飜へしたものの集りで、文展の現任審査員の過半は未來なき人々であり、二科、院展の現在會員の多數は未來ある人々であるといふ事が云へるのです。これは一は爪先に老年期が待ち受け。一は壯年期が次にある事からも云へるし、展覽會に示された畫の上に感受する藝術慾の强弱からも判定する事が出來るやうに思ひます。處で、畫界現役の人々を、かく團體に括つた上は、その群として、の由來を擧げて、展覽會見物の興味に資すべきが至當と考へる、それで私は、此各會の標榜する存立の意義、及私の所感を披露しやうと思ひます。

文部省美術展覽會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此會は、勿論現今の一番大規模な展覧會で、一部——日本畫、二部——西洋畫、三部——彫刻、といふ風に分けて、三大純正美術の自由出品を受けて是を鑑別審査し、以て廣く世間に、現代美術鑑賞の標準を與へ、曳ては一切の應用的平凡美術の趣味を高尚にせむといふ當局の意志のもとに開設されて、今年は早くも第十一回展覧會に達したのです。此會の審査員は文部大臣が指命し、文部次官が審査委員長となつて居り、各部に主任があつて今年は一部が平山成信氏二部が黒田清輝氏、三部が森林太郎氏となつて居ます。第二部の審査員は現在九名で、一人の帝室技藝員、三人の美術學校教授を含むで居り、出品者は大凡其弟子筋と見てよろしい。つまり此會の審査員の中堅は日本の西洋畫の位置を定めた最初の人々で。舊白馬會、太平洋畫會等の幹部であつた所謂大家である、初めは、白馬、太平洋兩系統の勢力爭ひを鑑別審査の上に現したが、近年は左様な風はなく、審査員の個人的意見が尊重せらるゝといふ事です。併し審査は多數決に依るから、自然學校派の意志に傾くといふ事も信ぜられます。さて此會の鑑別の標準は、其二三の審査員の標榜する處によると、製作——即ち整理されたる畫、といふ事であつて、會場の花とする處は即興畫でなく、構成畫（コンポジション）にあらねばならぬ、これは此會の意志として適當な事であるが、何分未だ製作能力の弱い日本ではコンポジションは肩に重すぎる。尤も今年の文展にも、十數枚の構成畫が出ては居るが、それは即興畫を單に大畫布に引のばしたふやけたものか、慌しい製作のプログラムに過ぎぬ畫ばかりです。文展の出品畫は一様に直寫の生氣を缺いた、修飾の作であつて、畫家の心弱い意志——出世の捷徑といふ事を表して居ます。其處には苦澁し若くは跳躍する藝術的威能の容積はなくて、細工と意匠と、一般的名譽を僥倖せむと期する粗暴なる元氣があるばかりです。ほんとに、文展の人氣は心弱い者を狂はします。文展で賞をとれば喰ふに困らなくなると云ふ考へは貧乏な洋畫家にはのがし難い誘惑である、單に鑑別に及第しただけでも、地方では大變で、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勿論赤飯を配るし。知友が祝賀會を催してくれるさうです。落第したゝめに家庭が陰氣になり、保護者に見はなされ、戀人に欠伸され、最近の新聞に出たやうに、兩國橋から身を投げやうといふ困つた人も現れるのです。此恨みは皆審査員にかぶさる。私は或審査員に云ひました。『貴君達は氣の毒だ、今に審査員の兒には指の一本足りない兒なぞが產れて來ますぜ』と。要之に文展は、畫家の藝術的表現力の競技場でなく、低い成心と野心の市場（マーケット）であるとなつて居るのです。

二科會

これは先に述べた通り、文展の鑑別審査の無理解に憤激して起つたもので、初めは概ね文展の出品者であつたのですが、文展の審査員と繪畫上の趣味を異にする處から屢々鑑別に落第したゝめ、數人が聯絡して一つの運動を起し、文部當局に對つて、文展の二部を一科二科に區分し、二科を新派を以て任ずる吾々に受持たせよと建議したのですが。終に容れられず、多少の曲折を經て、二科會といふ團體が成り、年を逐ふて對文展の旗色を鮮明にしたのです。此會の會員は、殆ど皆巴里に遊學し最近十年の間に前後して歸朝した青年畫家達です。發起人は有島生馬を筆頭として五六名であつたがだん／＼新人を包攝して現在は會員十一名に及んで居る。此人々は、まづ反文展の感情に提携して居るのであるが、藝術上の思想はてん／＼で、表現の相も一人一人異つて居ると云つてよい、やはり一般の自由出品を受けて同人等しく鑑別にあづかり、『新味』といふ豫定のもとに選拔をするらしい、それ故今年の如く會員が明かに吾々は理解を有たぬと云つて居る、未來派の畫に一室を與へて居るのでせう。左樣な展覧會の經營振りは恐らく對文展の感情から强調せらるゝのであらうが、二科會の印象が同人以外の力で强めらるゝ樣にならぬ事に願ひ度い。同人の指す方が、再現に基脚する、主觀的表現であるなれば、むしろ未來派は排斥す可きであるかも知れない。文展の老審査官連が、だん／＼新傾向を受け入れる事は、二科の人が未來派を受けた事に就て說明したやうに、展覧會を興味

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

多くする爲に受理するものとも思へるし選者の藝術的信念が、懷疑に曇つて居るが爲とも考へられる。思ふに未來派は一層文展へゆく可しである、文展はむしろ總ての樣式の市場たる可く、他の展覽會は主義ある表現の發表機關であり度い。文展は製作を重んじ、二科會は習作を受け入れて居る。半製も意とするに足りないといふ處に二科會の藝術的追求心を愛する氣慨があり、一樣に直寫の純を好む處に二科會の藝術的緊張があるのです。此秘密な藝術慾は一般の人には解らず、大家連には書生の仕事と思はれるらしく、二科の鑑別から、文展のそれのやうな悲痛なる被害者を出す憂ひもなく、二科に及第した處で、妻君が悅ぶ位にすぎないのです。つまり文展の一萬人の見物のうちの五百人が二科會の理解者であるからです。尤も二科會の展覽會は今年が僅かに三回であるから、此後どんなに世に時めくかも分らないが、私は二科の同人が趣味意匠の易きに就かずに、藝術上の信念を燃して、表現の醇熟を期せられん事を希望します。

美術院洋畫部

これも、やはり文展に對抗した性質のものであるが、其旗色は二科のやうに明かではない。といふのは、洋畫部の發起人は文展で優待された人で、文展に對する直接な憤慨が反抗の動機となつて居ないからです。五名の同人の四人は同時期に巴里に留學して居た者で、古くよりの友情相惹ひて今の團結を見たので、何等藝術上に一致せる主義を有つのでなく、何かあるとすれば、それは二科の人々と同じに、藝術至上主義であらうと思ひます。此會も又一般の自由出品を入れて、同人共に鑑別に伴はり、各員適意の物を擧げるといふ風です。標榜する處は表現上の傾向になく、表現の力にあります。此無主義の如き狀態は今のどの展覽會にも感ずる處で、今日の如く人々の信念が個性的に分裂して居る時代は止むを得ない事だ、此會の特色は世間でいふ如く、裝飾畫傾向のある事で、小杉未醒氏の畫がそれを代表して居るのです。文展との對照は二科のそれと似たやうなもので、二科との對照は、二科の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

畫系の感覺的なるに比して、これは理智的であるといふ事が云へるかも知れない。

草土社

私はこの社の展覽會を見て居らぬから何とも云へぬが、岸田氏を以て代表する處で考へれば質實なる實在派(リアリスト)の一團である事と思ふ。文展との對照は二科のそれと大差なく、二科との相違は、やはり感覺的でなく理智的で、迫つた處に眞がある、といふ信念で認識する處をぐん／＼と描くらしい。

美術家協會

此會は同人外の出品を受けず、一人一室制を取つてまづ個人展覽會の聯合といふ風です。會員の或者の話す處によれば、比較的良質の畫を一般に供給せんとするのが此展覽會の意志ださうです。畫系は文展よりも二科美術院に近く、齋藤與里氏の裝飾畫的傾向や。萬鐵五郎氏の立角派的試作を數多く見る事が出來るのです。

太平洋畫會

これは會員も多く、立派な研究所も有つて居るが、同人の製作力が全く衰えてしまつたので、展覽會としては殆ど無價値なものとなつて居ます。唯此會からは文展の審査員が出て居て、文展の會場に多少會員の消長を知る位のものです。

以上で私は、まことに不滿足ながら、畫界の現狀を紹介しました。もつと各團體の特長所屬會員の一々の畫趣に就て話し度いのであるが、それは一般向きでもなからうし。私の頭も少し疲れたので、次項に移つて、技工上のみかたを略記する事にします。

五

記述はやうやく畫面卽ち表現の鑑賞に進み、みかたの實際に諸君を伴ふ事となりました、前述によつて諸君は大凡洋畫界の現狀を會得された事と思ひます。文展の出品畫が他の會に比して例年最も多く（今年の出品は二科會百三十六點、美術院が七十一點、文展が九十三點であつた）審査員の過年が所謂大家であり殊に官設展覽會である事から世間の人氣はこれ一つに集ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るの觀を呈して居ますが、私共の眼から見ますと他の展覧會の出品連の方により多く藝術的熱量を認めるのです、つまり、文展の內容を純にするために是非共文展に包攝せねばいけぬ有爲な青年畫家の多くを會外に逸してしまつたからです。文展の審查員にもたしかに尊敬するに足る天分を有つた人があるのですが。製作熱が年々乏しくなつて、もはや文展を飾るに至らない、此調子で押してゆけば、文展は大體に於て價値の實質をますく俗化せねばやまない。私は折角の施設のため又大騷ぎやつてくれる、人の良い世間に對して胸を傷めないわけにゆかないのです。

さて私は、諸君に觀畫の臨床講義をしやうと思ひます。丁度文展の畫が今、世の鑑賞に入つて居る時であるから。其若干點を擧げて一々の畫趣を說明する事にします。

審查員中川八郎氏の「大同江畔」といふ畫があります、曇日の江岸にジャンクの集つて居る風景で、慣れた輕い筆で描きこなしてある。旅上の卽興畫に過ぎないのでせうから諸君は單に風光の異國趣味(エキゾテイル)を受取ればよい。これに詩趣とか、空間的の奧行きとか、色の生氣とか、筆力の緊張とかいふ事を要求してはいけないのです。つまり此畫は作者の手なれた寫景力――帆とか船とか點景人物とかいふ道具で持ち合て居る畫で、表現力の苦心はないのですから。

辻永氏の「九月の午後」といふ畫があります。日蔭になつた椎の木の列が前景にあつて、盆地の日なたに山羊が散點して居る。此畫は日蔭と日なたの照應にまづ人の目をくらましてしまひます。それから日なたの原と山羊との關係に田園詩的快感を與へられます。それだけ見れば作者は滿足であるのかも知れませんが、私は物足りない。良い畫といふものは目をよせて見ても快感がなければいけぬ、むしろ觸つて見ても氣持ちのいゝ位でなければいけぬ、と西洋の名家は云つて居ますが、左樣な快感を此畫は與へません。それは直寫から來る色や筆の生氣を缺いて居るからです。私は此畫に就て佛蘭西印象派のうちの田園詩人ピサツローを思ひ出します。彼れの畫は物件的でなく、大氣と光りの雰圍氣のうちに釀し出された軟い情緒に生きて居ます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

審査員和田三造氏の「バーの午後」といふ畫があります。下層なバーの光景を示したものですが、おそらくだれしも、勞働者の出入るバーにしてはハイカラ過ぎると思ふでせう、精養軒ででもありさうなテーヴルの裝ひで、背後の棚にはキユラツソの壜などがならむで居る。思ふにこれはおそらく、和田氏の嗜好に適する勝手な材料が集められて、バーの光景が假裝されたものでせう。其處に作者の記憶に殘る巴里の酒場と、日本の酒場とが混亂して居りはせぬか。それは賢明な和田氏とも思へぬが、要するに此畫は技工の或試驗に雇はれたものかも知れない。さすがに、描きこなしは垢ぬけて居り、色の感じも明るい佛蘭西風の爽かさで、觀る目に快い印象をのこすが、それは自然を嚙みしめた事から得た色の味ではなくて、單に明るく冴えた色を嗜好する、或潔癖から產まれたものゝやうに考へます。

審査員滿谷國四郎氏の「四月」といふ象徵的な畫があります。水郷の春景色を背景として、寛かな姿勢をした裸の女等を配したものです。其れ等の形態及配色の綜覺から春四月の情緖を感覺せよといふのです。成程花曇りらしい色の感じと、女らのだるい樣子に春らしい印象は與へられるが、それよりも技工上の[illegible]された稚拙が頭にのこります。

山本森之助の「滿州の一部」といふ畫があります、萬人好きのするジオラマ式の畫で、單に風景の紹介と思へばよろしい。何ぜならば空は青、山は、黃土といふ表現上に一定した概念があつて、その概念で丹念に且つ易々と描いてあるからです。

審査員南薰造氏の「城」といふ畫があります、雲の表現に少しく趣味化された後期印象派の影響が見えますが、大體に穩當な表現です、しかし私はうす日を浴びた城が、モネエの「光の雰圍氣」で描かれたら最も良からうと考へるのです。

長原孝太郎氏の「月」といふ裝飾畫があります。二枚折屛風に粉具的に描かれた油繪で嫦娥が雲の上に[illegible]を抱いて立つて居るのです。何だか構圖に不滿を感じるがさて何と云つてよいか今一寸言ひ出せない。單だ、私は全體を支配する溫か味ある畫品を愛します。

寺崎武男氏の「飛鳥朝の夢」といふ畫があります。漆喰の面を造つて、フレスコの効果を期したのでせうが、あの描き方では、紙の上へテンペラで描いても同じです。飛鳥朝の世は斯くもあらむと想像して畫いた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

畫でせうが、私は埃及の舞踊かと思ひました。畫稿（エスキイス）としても、少し丁寧に表現してもらひ度いし。作者の主張する律動的奏合（ディナミツク・オーケストラシヨン）としては、空間的奥行きを語る明暗の調子があつてほしいし。此作に示して居るといふ東洋趣味といふのは單に飛鳥朝といふ著想にあるものとしてゐゝのかどうか。

河野通勢氏の「自畫像」は作畫の發端にフランドル派の趣味的輸入を察するが。併し筆をとつてからは眞正直に寫生をやつて居る、其處に近代的の光りの感覺は乏しいが、物體の認識は研かれて居る、それ故此畫には、重みがあるのです。

牧野虎雄氏の「山間の初夏」といふ畫があります。何となく劇的な構圖で、表現の上に象徴的强調が行はれ、今人の自然（ナチユラル）な感覺を裏ぎつて居ます。光りと空氣の自然は斥けられて、物象の勢力を表現しやうとされて居るのです。其處に、十八世紀の佛蘭西風景畫や、後期印象派、立角派等から智慧を借りて居るやうです。つまり作者の「山間の初夏」に對する直覺を知らうとしずに、想念化された畫題の意味を探ぐれば誤りなからうと考へます。

片多德郎氏の「妓女舞踊の圖」といふのがあります。明治以前の油繪に趣味を偶したやうな、油つぽい暗い畫で、全く直覺の凉しさを有たないものです。併し、なかなか嚴しい描寫力を覗はせ、妓女の顏に淺からぬ藝術的の頭をも想像せしめます。といふのは輕く云へば、あの妓女の顏は性格（キャラクター）を有つて居り、表現の曲節に曖昧がないのです。

山脇信德氏の「疎林」といふ畫があります。多分午後の日であらうが、疎林の彼方に沈みかけて居て、其ために梢も幹も赤くなり、前景の茶畑らしい綠の畝の一面には五色の光りが躍つて居るのです。これはまつたく、佛蘭西の初期印象派、特にモネエーの外光描寫の信條に依つたもので。近頃の展覽會には乏しい眞系です。併し私は其直覺を重んじた率直なる表現を愛します。これでまずまず醇熟すればよろしいのです。

高間惣七氏の「浮雲」といふ畫があります、一寸郷里近郊の風景かとまちがへる程、歐化した畫趣で、裝飾畫的機略と漫畫趣味とを結びつけた分裂派風の畫で、一切の表現は概念に指命されて居るやうです。浮雲の感じは實感の生氣を有つて居るが、此人も空氣と光りとは嫌ひと見えます。

大久保作次郎氏の「海水浴の婦り」といふ大作があ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ります、舊白馬會の出品を想はす畫趣で、なか〳〵骨を折つた畫であるが、目も腕も行きつまつたかと思はれる暢びのない表現です。

審査員中村不折氏の『巢父汚流に飲はず』といふ畫があります。氏は裸體を嚙みしめた事を未だに自惚れて居るさうだが、それは巴里のジユリヤンの學生であつた時分の事で此頃の畫にそんな點を見やうとする必要はない。油繪を以てした、挿畫と見ればよろしい。それではあんまりだと思ふ人は、此作者の持前の一寸古雅な筆力の襯め殘つた處を拾ふがよろしい。

岡田三郎助氏の『花野』といふ美しい畫があります。白馬會時代の信條を其まゝに、色が少し強くなつたけれど。やはり美的情緒を愛するコラン系統の寫生畫です。岡田氏は凝り性で、一筆をいやしくもしない方だから、畫面に何となく誠實の氣息を止めて、私の樣な野人をも懷ける處があります。だが、私は、ルノワーの肉體の表現をいよ〳〵想はざるを得ない。それに比べると岡田氏のは美しい乾菓子を見るやうな氣味がある。肉情を潛めた生物の氣息をのがして居るのです。軟かい色の諧調から搖曳する優美な情趣だけでは私には物足りない。

金山平三氏の『氷すべり』といふ畫があります。興畫的の表現で、だれにも穩當に受入れられる畫であるが、私はもつと迫眞の滋味を要求し度い。

柚木久太氏の『赤城の秋錦』といふ畫がある。物象の勢力を抽出して、果斷な筆で表現されてあるが。私は面の觀察が粗であり、色の質に對する神經が鈍いと思ふ。此作者はむしろ常に平凡を嫌いすぎはせぬか？故に表現に匠氣を帶びすぎる。匠氣は竟に、自然なるには敵はない、私はこれは現今の吾が友の大多數に對つて相戒め度いのです。

私は表現の式の樣々を說かふとして、どうやら、文展の印象批評の方に流れちまいました。最早紙數が乏しくなつて、此上精細なみかたを叙述する事が出來ない。實は畫の表現力と云ふ事に就ては各畫派、分けても日本畫との對照の上に深く考察して見度いと思つて居るのであるが、それには大なる準備が入る。それは『技工の科學』といふ事です。これは外國にも確りしたものがないやうであるが。これを先づ確定せねばならぬ。これはなか〳〵大事業であるから何時大成するか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見當がつかないが。私が宿題として居るものなのです。

これが出來上つた時には、諸君に一目瞭然する、然も深い觀畫力を供給する事が出來ると信じるのです。

私は最後に、みかたに就て諸君が藝術上の說話を好むで讀まるゝ事を希望します。そして、現在の代表的な美術雜誌及び信ずるに足る美術批評家の姓名を左に紹介します。

「美術」これは元美術學校の美術史の敎授であつた、岩村透氏が主幹して居たもので、今は坂井犀水氏といふ人が主幹になつて居る。一月、三月、十月に發行する年三回の雜誌です。これには挿畫も多く記事は工藝美術にまで及んで居ます。

「美術新報」これは月刊雜誌でやはり古い歷史を有つて居り今は、巴里でギリシヤに就ての學問を積むで來た大隅爲三氏といふ人が主幹をして居る、挿畫のぜいたくな雜誌です。

「中央美術」これは田口掬汀氏が主幹で、石井柏亭氏が編輯長に任じて居る月刊美術雜誌で、素人畫家のためには最も興味ある雜誌です。

「書畫の研究」これは關如來氏の主幹たる月刊雜誌で、日本畫の方の記事が多いのです。此他文學雜誌「白樺」には每號泰西畫家に就ての版畫と紹介とが載せられて居るし。「早稻田文學」や「帝國文學」や「太陽」にも屢々西洋畫に就ての記事が現れます。

美術評論家特に洋畫の評に筆をそめる人としては。澤木梢氏といふ人があります。此人は最近歐洲の留學からかへつて、慶應大學の美術史の敎授をやつて居り又、文學雜誌「三田文學」の主幹をして居ます。此人の評論は剴切穩健で、主として、三田文學誌上及時事新報等に發表されます。

森口多里氏、此人は早稻田大學の出身で。其博識なる評言は、概ね「早稻田文學」誌上に發表される樣です。

矢代幸雄氏。此人は現在東京美術學校の美術史の講座を受持つて居る人で。技工上の經驗をもにぎる、透明な眼を有つた評論家です。此人の言ひ方は一般によく解るでせう。兒島喜久雄氏。此人は學習院の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

教授だそうです。愼重を極めた評をする人で、哲學的であるから素人などにはなか〱解り難いでせう。此他畫家にして、たしかな批評を屢々發表する人に有島生馬、正宗得三郎、石井柏亭、高村光太郎、齋藤與里、岸田劉生氏等があります。是等の人の云ふ處を常に讀むでもらへば、それが實は觀畫の捷徑です。觀る、聞く、讀む、私はこれを要求します。

（六年十月廿一日）

天明異聞「鱠の怪」

田中貢太郎

天保三年は十一月に閏があつた。その閏月の十三日、當時の戲作の大家瀧澤馬琴は、書家關濱南の家に招かれて行つた。馬琴はその時六十六歲であつた。文政七年三月、飯田町の家を聟の淸右衞門に讓り、醫師となつて神田同朋町に住んでゐた我が兒宗伯の許に引移つて、「吳竹の代を渡したり鶯の老を養ふ藪に隱れむ」と歌ひ、引續いて頭を圓めて笠翁と稱した以來の姿であつた。それは背の高い入道姿で、赤い光澤の好い下脣の突き出た長い顏は、頰がこけて、額に三筋ばかりの橫皺があつた。偏狹で氣位の高い、當時の同業者の京山三馬などを土芥視してゐた彼も、肉體の衰へは如何ともする事が出來なかつた。翌年の秋に到つて到頭右の眼の視力を失つて了つた彼はこの時もう眼に異狀が出來てゐた。それ故に醫師の忠告に從つて、夜の讀書を廢し、殆んど徹夜して筆を執つてゐた職業の著述も宵の口に止めて、年二板の出版の他には、書肆

の需めに應じないと云つてゐたが、それでもその年の彼の著述は、八犬傳の八輯の下、俠客傳の二集、水滸傳の九編、漢楚軍談の四編、殺生石の結末、千代褚良著聞集の正編と後編などがあつた。

その日は割合に暖であつた。午時過ぎに同朋町の家を出て、つい眼と鼻との間にある濱南の家に行つた老作者の頭巾の上には、薄赤い陽があつた。その陽の光は、縁側の障子にチラ〳〵と動いてゐた。座には馬琴濱南の他に、濱南の子の東陽と、濱南の親類に當る鈴木有年がゐた。有年は畫家であつた。その家は代々伊勢の龜山家の家士であつたが、上野の儒臣であつた鈴木家を襲いだ爲に、上野の家士となつてゐた。その有年は、十月の二十四日に實父を失つて喪中であつたが、馬琴に親しいと云ふ所から濱南の呼んだものであつた。

濱南父子の心を籠めた肴は、次第に老作者の膳の上を賑はして來た。この老作者の癖を好く飲み込んでゐる濱南父子と有年の三人は、彼の理屈ばつたねち〳〵した言葉を靜に聞いて、決して異議を挾まなかつた。濱南は土屋家に仕へてゐた。馬琴より一つの弟で、名を克明と云つてゐた。東陽の名は思亮であつた。濱南は書家共事の子で、父の業を繼いで書家として當時有名であつた。濱南と東陽との馬琴に於ける關係の明になつてゐるのは、馬琴が隱退剃髮した文政七年の七月桑山修理西原一輔など云ふ者が發起して起した耽奇會であつた。これは馬琴はじめ、濱南父子、一輔の子好和、山崎北峰などが、智識の交換を圖る爲に、毎月一回互に珍品奇物を持ち寄つて品評したもので、その結果は、北峰の編輯した『耽奇漫錄』となつて現はれた。耽奇會が止むと、その年の十二月、馬琴が北峰東陽等と發起して、兎園會と云ふものを起して、翌年の正月十四日、第一回を東陽の會主の下に開いた。東陽の家には、海棠菴と云ふ菴號があつた。その時の會員には、馬琴、北峰、東陽の他に、宗伯の琴嶺、西原好和、屋代弘賢、龜屋久右衞門、桑山修理、西原晁樹、中井準之助、清水俊藏、荻生維則、大郷金藏、角鹿清

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藪などがあつたが、その時は濱南の方は加はらなかつた。この會の結果は、馬琴の手に編輯せられた『兎園小說』となつた。この會は、その年の十二月、馬琴の著作堂に第十二回を開いたのを以て終とした。

兎園會では、十月の海棠菴の會合の席上で、北峰と馬琴とが議論をして絶交して了つた。北峰は下谷長者町の藥種商長崎屋の主人で考證家であつた。東陽はその席上で、馬琴が顏を赤くして北峰と爭つたのを親しく見てゐた。馬琴は又人が曲亭とか馬琴とか云ふ戲號で呼ぶのを非常に嫌つた。彼はその爲に京山とも喧嘩した。

三人は注意して、決して之を口にしなかつた。東陽は氣むづかしい先輩の機嫌を取つて、『先生、先生、』と云つて持成した。

行燈の點く頃になつて、下婢が大きな皿鉢に盛つた鯰の燒いたのを持つて來た。東陽はそれを受取つて、二つ三つの丼鉢を並べてある廣蓋の上に置いて、先づその内の三片ばかりを小皿に取つて老作者の膳の上に乘せた。『千住の知合から貰つたもんですから、』

『ほウ、これは好い鯰だ。』と老作者は旨さうに燒けた小皿の肉を見て云つた。

皆の膳に鯰が乘つた。馬琴の左側になつてゐた有年は、ふと何か思ひ出して、老作者の顏を見た。『先生、鯰に就いて面白い話がござります。』

『‥‥どんな話でござります。』と老作者は生眞面な顏をして聞いた。

『私の叔父に關係した話でござります。その叔父は父の弟に當ります者ですが、若い時から道樂に身を持ち崩して、祖父から勘當せられましたので、種々の事を遣つてゐる内に、佐官職を覺えて、それを身過にして居りますが、今から六七年前、私の方で家を改築しました時も、その叔父が壁一切を引受けてくれて、弟子達をよこしてくれましたが、ある日の事、見廻はりに來てくれましたから、御馳走の積りで、晝飯に鯰を取りますと、叔父は一眼見ただけで、『乃公は、これは喫べない』と云ひます。私の方では、叔父が遠慮する

と思ひましたから、「まア、どうかお上り下さい」と強いて勸めますと、「いや、乃公は遠慮でない、鮨を一生喫はないと定めてゐる。」と云ふものですから、仕方なく引込めて、後でその譯を聞きますと、叔父は面白い話をいたしました。」と云つて有年は重い口で話しはじめた。

一

頭髮はその頃流行した燈籠鬢（とうろうびん）の島田髷で、それに旭（あさひ）の櫛（くし）と云ふ朱漆の木櫛と象牙の笄をさし、根に吉野紙を染めて絞り縮緬のやうにしたのをかけてゐる女の眼は水々してゐた。著付は紺茶立縞の御召縮緬の袷で、帶は緋鹿子の丸帶をしてゐた。銚子を持つた手首には、長襦袢の緋絞りが艶かしく絡まつてゐた。盃を持つてゐる若い男は、茶紺堅縞の糸織を着て、白博多の帶を締めてゐた。若い男は絶えず小聲で何か云つてゐた。と、女は何時の間にか右の肱をかけて男の膝に縋つてゐた。男の右の手の指先は、女の右の肩にあつた。……濃艶な綿繪のやうな場面が頭を掠めると、源七は立ち縮むやうになつて、ぢつと全身に力を籠めた。その爲に眼が覺めた。彼は夢を見てゐたのであつた。

源七は階子段の下になつた狹い帳場で、石のやうに堅い一枚の蒲團に包まつて寢てゐた。眼を開けてみると、夜が明けて、門口の戸はもう開けてあつた。天明三年の暮春（はるさき）のある朝であつた。戸外に昨日から降り續いてゐる雨が降つてゐた。枕頭の方になつた店先の長火鉢の傍では、庭に下りて腰をかけた亭主の勘五郎が、肥つた身體に褞袍を着て、ゆつくりと煙草を喫んでゐた。

もう鮨を買ひ出しに行く時刻であつた。源七は驚いて起上つた。手早く蒲團を蟠んで押しやると、着てゐた袷を抜いて、傍に置いてある仕事着を着はじめた。千種色の股引を穿き、圓の中に「奴」の字を染抜いた標の法被を着て、三尺帶をきつと左前で結び、芥子玉絞の手拭を持つて、裏口の方へ下りて行つた。左側の座敷の障子が一枚開いて、薄暗い室の内には、お神さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んのお信とお芳とが黄八丈の蒲團に深々と包まつて眠つてゐた。お芳の島田にさした朱漆の櫛が艶かしかつた。源七は物妬ましい燃ゆるやうな眼付をして、見い見い庭を通つて行つた。

　源七は其所の養子であつた。下谷の武士の家に生れた者であつたが、安永の爛熟した空氣に浸つて身を持ち崩した爲に、家を追はれ、四方を渡歩いた結局、其所に住み込んでゐる内に、昨年から養子と云ふ事になつたものであつた。其所は下谷廣徳寺前にある「奴」と云ふ鰌屋であつた。お芳はお神さんの遠縁の者で、源七と一所にすると云ふ事になつてゐたが、お芳は我家に來る客の油屋の息子と云ふのを追つかけて、源七には冷かな眼を見せてゐた。お神さんもお若のするまゝに打ちやつて何も云はなかつた。蓋の下に半紙を敷いた黒塗の手桶をさげて出前を持つて行く源七は、時折考へ込んで街路に立つてゐる事があつた。

　勝手の竈の前では、下働のお作が釜から飯を出してゐた。裏庭の井戸は直ぐ出口にあつた。源七は釣瓶を入れて水を汲みあげ、井戸の傍にある手洗桶で顔を洗つた。井戸の前には、一坪ばかりの泉水があつて、縁には杜若の花が咲いてゐた。蒼どろんだ水の中には、鰌の生簀箱を沈めて澤菴石のやうな鼠色の石を置いてあつた。小さな糸のやうな雨がその上に注いでゐた。

　顔を洗つて店先に戻ると、もう火鉢の傍に二人前の膳が並んで、亭主は熱い味噌汁を吹き吹き吸うてゐた。「お早うございます」と源七は亭主に挨拶して一所に箸を取つたが、飯は木屑を噛むやうであつた。

　飯が濟むと、二人は連れ立つて鰌の買ひ出しに行つた。亭主は桐油合羽を着て、塗笠を冠つてゐた。源七は番傘をさして笊を挑つてゐた。

二

　亭主と源七が買つた鰌を輕子に荷はして歸つて來たのは、もう未時を過ぎてゐた。當時鰌を買ひ出しに行く所は、日本橋の小田原河岸や、千住などであつた。河岸に並べた鰌の笊を持ち上げてみて、目方の多い、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

條の好いのを目利きしながら買つたものであつた。その日二人の行つたのは、千住であつた。

帳場にはお神さんが坐つてゐた。鐵漿をつけた口元の切れの長い女で、痩せて背が高かつた。「お歸り」とお神さんは取り澄まして云つた。

源七は、お芳の姿が見えないので、何處にゐるだらうと思つて一とわたり見廻はしたが、附近には見えなかつた。又彼の息子が來てゐるのではないかと、二階の上り口に眼をやつたが、客の下駄らしい物はなかつた。

「傳手に裏口へやつてくれ」と亭主が云つた。

簑を着て笊を挑つた小柄な男は、亭主に隨つて裏口の方へ行つた。源七もその後から隨いて行つた。

雨はこの時大きくなつてゐた。泉水の中の生簀箱に置いた石の上には、青い蛙が一疋坐つてゐたが、人の足音に驚いて、ピヨンと飛んで杜若の葉蔭に泳いで行つた。杜若の花の紫は、暗い空の色を吸うて黒く陰欝に見えた。泉水の先には、一本の柳があつて、その枝が一つ水の上に靡いてゐる所に、水馬が輪をかいてゐた。泉水の右側は狹い空地で、蓼や蕗が生へてゐた。其所にも白い雨が見えた。

泉水の傍へ輕子が笊を下ろすと、亭主は財布から幾等かを出してやりながら、「帳場でお神さんにさう云つて、一杯やつていきな」と云つた。

輕子は輕子笠を著た頭を下げて歸つて行つた。歸る時チラと亭主の眼に付いた輕子の左の眼は螺殼のやうに白かつた。亭主は厭な眼だなと思つて眉を顰めた。源七は泉水の上に半身を乘り出して、生簀箱の石を除りにかゝつた。

亭主は一つの笊の蓋を除つた。内には鰻の薄黒い背と白い腹とが縺れ合つてゐた。亭主はその内から條の大きなのを選り出して生簀箱に入れる積りである。手を入れて掻き廻はしてゐると、底の方に豫想してゐなかつた大きな魚の胴があつた。亭主は驚いて手を引込めて、笊の縁に兩手をかけて内の魚をさびあげるやうにしてゐると、腹の黄ろい、まはりが八寸もあ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思はれるやうな大きな鰻が二疋のたうつて出て來た。

「源ちやん、源ちやん、」と亭主は周章てゝ云つた。

源七は生簀箱を泉水の縁に引揚げてゐた。驚いて振返つてみると、亭主は笊の中に指さしてゐる。「これを見な、これを」

源七は亭主の傍に行つた。丈けの二尺餘もあらうと思はれるやうな大鰻が眼に付いた。千住で買ひ取る時、鰻賣の赤ら顔の老人が、「印旛沼の主揃ひだ、安いもんだぞ、」と云ふのを聞きながら、一度も二度も笊の中に手を入れた源七は、こんな鰻が這入つてゐやうとは思はれなかつた。「どうして、そんな鰻が這入つてゐたんだらう、」

「さうさ、乃公も二度も手を入れたんが、どうも不思議だ。」

「何しろ珍らしい鰻だ。私あまり見た事がない。」

「左様だらう、乃公も長く鰻を手にかけてゐるが、あまり見た事がないね、」

「山城屋の旦那は大きなのが好きだらから、これを見せたら喜ぶでせうな、」

「左様さな、この鰻を喫べて戴くのは、まア山城屋の旦那位のものだね、」

「ぢや箱へ入れときませう、」

源七は笊を持つて生簀箱の傍へ行つた。亭主はもつの笊の蓋を除つてゐた。生簀箱の内にも二三十疋の鰻が這入つてゐた。源七は箱の蓋を開けてから、二疋の大鰻を一つ宛胴のあたりを掴んで入れた。鰻はグビともしなかつた。「印旛沼の主揃ひだ」と云つた鰻賣の老人の言葉がチラと浮んだ。源七は氣がさした。

三

翌日も細かい雨が降つてゐた。奴鰻では前日澤山材料を買込んだので、その日は河岸に行かなかつた。源七は出前の皿や丼を集めに行つた。平生のやうにお神さんと一所に遲く起きたお芳は、午時近くなつて錢湯に行つた。番傘をさして、ぴしよ／＼降る雨の中を歸つて來た源七は、白い素足に塗下駄を履いて戸外に出やうとするお芳と軒下で擦れ違つた。源七は眼を反ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して内に這入つた。源七は嫉妬に苛責まれて見るに堪へなかつた。

午時頃から源七と亭主は、店の右側になつた格子の下の料理場で、鰻を裂いたり、燒いたりした。お神さんは、帳場で煙草を喫んでゐた。お芳は化粧をしたり、三味線を彈いたりした。源七はお芳を見るも苦しかつたが、その姿が見えなくなると溜らなく淋しかつた。源七は二十四五歳であつた。彼はふと其所に來ない時分の自由な時代が羨しくなつた。此所の廣徳寺前の水茶屋をはじめ、上野の廣小路にも、御數寄屋町にも、其所にも此所にも前垂をかけて茶汲女の風をした若い美くしい女が男を待てゐた。芝の八官町、神田の横大工町、淺草の田原町などには、眉を細くひいた水晶のやうな歯をした比丘尼がゐた。湯島天神の境内、神田花房町、芝明神の境内、麹町天神、芳町、木挽町などには、陰間の美少年がゐた。中でも上野廣小路の三枚橋の東側の水茶屋にゐた年增の女の凄いやうに美しかつた眼付は、未に源七の頭の内に浸み込んでゐた。彼は○を燒く手を止めて、うつかり考へ込んでゐた。耳元にはお芳の彈く三味線の音があつた。

申時下になつて、ある屋敷から中串の注文があつた。源七はこれを岡持ちに入れて屆けに行つた。そして小半時もして歸つて見ると、鰻笊を手にして庭に立つた亭主が、その笊を少し傾けて、上框の所に立つてゐるお神さんとお芳とに、この内を覘かしてゐた。

「こんなに大きいと氣味が惡いね、」とお芳が云つた。

源七は直ぐ昨日の大鰻だなと思つた。二階の上り口を見ると二足の下駄があつた。

「……源ちやん、山城屋の旦那が見えたぜ、」と亭主は源七の方を見て云つた。

お芳は默つて長火鉢の銅壺に入れた銚子を持つて二階へ上つて行つた。亭主は笊を料理場へ持つて行つた。笊の中には昨日の大鰻の片割れが圓くなつてゐた。鰻は黄ろな鰓を脹らして時々呼吸を吐くやうにした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

亭主は頭の上の棚に手をやつて穂尖の五寸位ゐある大錐を取つて、切尖のとんがつた鮪庖刀を並べて置き、濡れた俎の上を乾いた雑巾で二度三度も拭いた。源七は岡持ちを置いて、亭主の傍へ行つて見てゐた。俎の水氣がすくなくなると、亭主は左の手を笊に入れて、輕く鱣の胴中を握つて俎の上に置いた。鱣は動かなかつた。亭主は靜に鱣の首元に手をやつて、背を前に向け、黄ろな腹を手前にした。そして右の手に錐を取ると共に、首元にやつた手に力を籠めて押へつけ、一と思ひに錐を頭に突き刺さうとした。と、鱣は豪い力で放ね返して、俎の前の流檀板(ながしいた)の上に飛び出した。亭主が右の手にした錐は、左の手の甲から掌にかけて突き通つた。亭主は夢心地で傷口を握り締めた。

源七は驚いて聲を立てた。源七の聲に長火鉢の傍にゐたお神さんが驚いて顔をあげた。「切つたの、」

亭主は歯を喰い縛つて痛みを怺へてゐた。

「錐で突いたんだ」と源七が云つた。

「よつぽど突いたの、」

「手の甲から這入つたんです。」

「それや大變だ、」とお神さんは立ち上つて

「お前さん、傷藥をつけたら好いかぢやないか、」

亭主は默つて寄つた行つた。傷口を押へた指の股から血が流れてゐた。お神さんは奥の方へ這入つて行つて、何か貝に入つた藥を持つて來た。亭主はこれを見ると腰を下ろした。

お芳が二階から下りて來た。「小母さん、どうしたの、」

お神さんはお芳に返辭をしながら、傷の上は青い布片(きれ)を巻いてゐた。亭主は思ひ出したやうに源七の方を見て、「お前が裂いてくれないか、」

源七は料理場に行つた。「源ちやんにや、裂けないだらう」とお神さんの聲で云つた。「さうよ、又、怪我でもすると大變よ」と云つたのはお芳であつた。お芳の聲は冷かであつた。

源七は流槽板の上に這つてゐる鱣をいきなり掴みあげた。鱣はすなほに俎の上に乗つた。彼は流槽の隅に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

轉んでゐた錐を拾つて、俎の下の桶の水で穗尖を洗ひながら、その儘鱣の頭に突き刺さうとした。鱣は急に體をうねらして、源七の左の腕首にきりきりと尻尾を纒いた。鱣にかけた源七の手は放れさうになつた。源七の背後には六つの眼があつた。源七は一生懸命になつて鱣の頭を俎の上に抑へつけて、錐を刺さうとしたが手元が定まらない。「乃公をいぢめた所でどうせ助からない生命だ。諦めて裂かしてくれ、その代り乃公は、今日限りこんな渡世はしない。」と彼は心の内で云つた。

雨は音を立てゝ降つて來た。鱣はぐたりとしたやうになつた。源七は錐を取り直してその頭に突き刺した。鱣は俎の上に長々となつた。源七は庖丁を取つて腹から裂いた。

四

源七は裂いた鱣を燒いて座敷に置いた。お神さんが帳場から來て、それを持つて二階へ上つて行つた。亭主は長火鉢の傍で、青い布片で卷いた痛い左の手を膝の上に乘せて煙草を喫んでゐた。

源七は何をするも厭になつたので、この儘亭主の傍に腰を下ろして、眼をつぶるやうにして考へ込んでゐた。もう夕暮で、雨の小降になつた戸外の方は明るかつたが、家の内は薄暗くなつてゐた。亭主も何も云はずに、何時までも默つて煙草を喫んでゐた。

下働のお作が蠟燭に火を點けて來て、門の掛行燈に明りを入れた。お作は又勝手の方から行燈を點けて持つて來て、亭主の背後の方に置いた。行燈の火はぼんやりしてゐた。

お芳が周章てゝ二階から下りて來た。お作が其所に立つてゐるのを見ると、「お作さん、お客さんが吐いたから、水と雜巾をおくれよ、」

亭主は顏をあげた。「何人だ。」

「山城屋の旦那さ、」

「どうして吐いた。」

「鱣があたつたやうよ、はじめからこの鱣は何だか變な味がする、死人の味のやうだつて云つてゐる内

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、三切ばかり喫べると吐き出して、それは大變よ、」とお芳は氣味惡るさうに云つた。

五

帳場へ寢てうと／＼してゐた源七は、亭主の聲に呼び起された。亭主は挑燈を點けて庭の暗い所に立つてゐた。

「泉水の方で大きな音がした。鰌を窃まれちや叶はない、見に行かう、」

源七は起きて、亭主に從いて行つた。夜はまう丑時に近かつた。

裏口の戸を開けて戸外に出樣とすると、大きな雨が降つて來た。二人は一本の傘の下に肩を並べて歩いた。

泉水の前に行くと、亭主は挑燈を翳して泉水の內を見た。生簀箱は石もその儘になつてゐて何の異狀もなかつた。「石を投り込んだやうに思つたが、それぢや犬でも飛込んだのか、」と亭主は獨言のやうに云つた。

「念の爲に見せうか、」と源七は云つた。

「左樣だな、一度見て置けば安心だな、」

源七は手にしてゐた傘を亭主に渡して、生簀箱を引揚げた。亭主は挑燈の光を箱の上に落した。源七は縛つてある繩を解いて蓋を開けた。內には五十疋ばかりゐる鰌が、同じやうに首をあげて蛇のやうな風をしてゐた。片割の大鰌の姿は見えなかつた。亭主は挑燈を取り落した。

その翌日になつて、源七の姿がふと見えなくなつた。

六

源七は上總の親類に行つて身を寄せてゐた。翌年の春になると、養家から使の者が來た。養父が昨年から病氣でこの頃は劇くなつたから歸つて來てくれと云ふ親類からの使であつた。自分から逃げ出して來たもので、表面離緣になつてゐないから、歸らない譯には行かなかつた。

歸つてみると養家は亂脈になつてゐた。お芳は情夫と駈落をして居らず、養母のお信も鳶の者を情夫にして擣曳してゐた。源七の歸つた日にも、法被を著た若

い男と二階で酒を飲んでゐた。
養父は暗い三疊の室に入れられてゐた。瘦せて骨ばかりになつた病人は、その三疊に寢た儘で、藥も飲まず、粥も啜らず、僅に水ばかり飲んでゐた。
源七は枕頭に行つて、「旦那」と云つて聲をかけた。遠うに物が云へなくなつてゐる病人は、頭を少し擡げて蒼白い咽喉を見せ、鎗のやうに眼を眠らして呼吸をした。

侠商傳・姦商傳

笹川臨風

昔し魯仲連は、「天下の士に貴ぶところは、人の爲に患を排し難を釋き、紛亂を解いて取るところなきなり、もし取るところあらば、是れ商賈の人なり」、と云つて、平原君の千金を辭した。一番肌を拔いでやつて、其報酬を取らぬ處に古東洋士道の精華が見えて奥床しい。商賈の道は之と異つて、與ふれば即ち取るを以つて、本旨としてゐる。して見れば義侠心なんぞと云ふものは商人に禁物であるべき筈だ。それでも商人にも人情の厚いものがないではない。淵深うして魚之に生じ、山深うして獸之に往き、人富で仁義附く。されば陶朱公は十九年の中に三び千金を致し再び分散して貧交疏昆弟に與へた。けれども俗、利を好で、敦厚の風に乏しく、賈人姦を爲して富を起すの弊は、隨所に少しとせぬ。

義賊と云ふものは、講談に隨筆に見えてゐるが、侠商の傳記は割合に傳はつてゐない。天川屋義兵衞は男でごんすと見えを切つた天野屋利兵衞は江戸一代の侠商の樣に思はれるが、實際の事蹟はとんと分らぬ。う

つかりすると烏有の人物に近いやうだ。よしや實在にしたところが、赤穂義士との緣故は頗る薄さうに思はれる。それよりは、慶長年間伏見の役に於ける京の吳服商佐野四郎右衞門の義烈なる行爲が、俠商傳中第一に位すべきと云つてよからう。

伏見役は關ケ原役の序幕である。鳥居元忠の壯烈なる最後は、三河武士の爲に氣を吐いたものであつた。元忠の家臣で下總の國岩ケ崎から伏見へと登る途中に此變を聞いて、夜を日に繼いで急いだものが四人あつた。杉浦河內、鳥居權平、市川茂右衞門、安藤甚九郎とがそれである。然るに大津には新關を立てゝ一人も通さずと旅行く人の噂を聞いたから、四人は談合し、とある村の一向宗の寺中に忍び入つて佛具法衣を盜取り、山林に隱れ、皆頭を剃つて一廉の坊主になり濟ました。これならば田舍坊主が六條に參る體と見えるであらうと皆々打笑つて、關所にかゝつたが、關守中々以つて通してくれぬ。判官の一行ならぬ四人は種々に陳じて見たが、關守は富樫もどきで、問答は無益、まこと法師ならば勤行仕れ、某は一向宗徒なれば、法要を能く存じて居るぞ、其方達に誤あらば、直に頸刎ね申すであらう、と威丈高になりて云ふ。各々合掌して讀經を始めたが、取別け杉浦河內は一冊の經文を繙き高らかにこそ讀み上げける。其聲甚だ殊勝であつたから、關守は禮拜心を發し、通れとこそは許容した。一色四郎左衞門と云ふ鳥居家の家臣も近頃元忠の勘氣を蒙むつて、とある片田舍に逼塞してゐたが、同じく變を聞いて馳せ上り、杉浦等と此ほとりで出會して、同じく剃髮し、五人ひとしく京に赴いて、元忠年來の吳服所佐野四郎右衞門の許に立寄り、四郎右衞門の好意に依りて、各々甲冑太刀等に身仕度し、伏見城に入りて、主の難に殉じた。

元忠の首が京橋口に梟らされたりと聞くや、四郎右衞門は急で大阪に馳せ下り、番人を賺し、夜に紛れて元忠の首を盜み取り、其夜の中に京に走せ歸りて、百萬遍の寺中に僧となれる我が弟を賴み、密に之を葬つた。石田方にては首を盜むものを百方手を盡して搜索

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する。四郎右衛門之を聞いて、思ふには、外より顯はれたらば口惜くあらう、なまじ逃げ隠れするべきところではないと、健氣にも、我と石田の邸に赴き、自白して處分を乞うた。そこは三成、商人には珍らしい義氣のある男、いよ感心〳〵と却つて賞め立てゝ、其罪を問はなかつた。伏見の役には幾多の美譚を殘してゐるが、これなども其一つである。

宇治の茶師上林竹庵も伏見城中に逗留するうち、籠城中の人となつた。元忠は竹庵に打向ひ、急ぎ宇治に歸れと云ふ。竹庵云ふ、多年德川内府の眷顧を受け、又貴殿の芳情を蒙れる某、商人なればとて此期に臨で此を去ることが出來ませうや、命は輕く義は重く候へと決心面に現れて、容易に立去るべくも見えぬ。元忠も其志に感じて太鼓丸の防衛に加へた。竹庵お手のものゝ、茶袋を集めて指物とし、赤色の手拭にて鉢卷して、八月朔日、城の落つるに際し、敵勢の中へ割つて入り、亂軍の中で、太鼓櫓の下に討死した。佐野と云ひ、上林と云ひ、いづれも上方の商人である。あんまり上方贅六なんて云つてもらひますまいぜ。

米價の調節を始めとして、諸物價が斯う騰貴するやうではすべての調節に、爲政者は其肝腦を絞るべきで、これは理論でなくて實際問題である。小貨幣が拂底してゐるのに、やれ小紙幣を出すの、其準備をしてゐるのと、今以つて、ぐず〳〵して細民を苦しめさせるやうでは、餘りに機敏とは云はれますまい。戰爭があつて下層社會が潤澤だから善いものゝ、戰爭が終つて、不景氣になつた曉には、どうするつもりだらう。經濟上社會上にどのやうな風雲を捲き起すやらと、寒心する。此物價調節殊に米價の調節には、江戸時代の爲政者も餘程頭を惱ましたものである。

慶長年間から四代將軍の頃迄は米價が安く、士人も困難せずに世の風俗も質樸であつた。元祿年間の米價は江戸で兩に一石二三升から五六升までゞあつた。しかし五代將軍の贅澤好きと、世間の奢侈とで、物價が稍く貴くなり、あはれ米價が金一兩に米一石ならば息をつくのにと云ひ合へりとのことであつた。元祿十二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年八月十五日の大風雨で、其年は凶作、此の冬米百俵（三十五石）を金五十兩に定めた。即ち一兩に米七斗である。米價が貴くなると、士農は喜び工商は困難するのが、當時の世態であつた。斯くて米價騰貴すること三年、元祿十四年には、市民に飢餓多く、道路に餓孚がある體たらく。元祿十六年十二月は江戸の大地震で關東諸國が皆其難を蒙る、寶永元年七月は奥羽の水害がある、寶永四年には富士山の噴火で關東諸國の田地は砂に埋もれ、米價は又高くなる。正德元年より米價下落して、二年の春に金一兩に九斗と云ふ相場であつた。しかし乾金の價が賤しくなつたから、米の價は下つても、實際は却つて高くなり、遂に米四斗餘を以つて金一兩に賣買するに至つた。享保六年の夏頃は先づ一兩に六斗二升二合と云ふ相場であつた。享保金の鑄造があつて、金位を舊に復したゝめに物價は漸く下落し、殊に八代將軍は米將軍と云はれたほどであつたから、天下漸く鼓腹擊壤の有樣となつたが、其後新金銀の吹替もあり、又々次第に物價の騰貴を來した。其の最も甚しいのは天明の頃、猶其後に天保年度の凶荒があつた。

享保年間に出來た町人考見錄を見ると、商人の榮枯盛衰の狀を目睹する如く述べてあるが、其破滅の原因となつてゐるのは、大名貸と、相場と贅澤とである。

大名貸のとに就ては、二村壽安の條下に「夫大名借の商賣は、博奕の如くにて、始少しの內に損を見切らずば、それが種に成り、元を動さんとかゝり、借大名の金借り役人、留守居などは、それをおとりにあおよくいひなし候故、世話に云ふ鼠の油揚とやらんにて、終にわなにかゝり、昔より如此大損致候事に候、然らば此借引は止可申事なるに、博奕を打もの、始より負んとて掛り候者一人も無之候、又町人へ取かへ申候得ば、大分の金銀、中々廻り難く、其上町人身上差支候時は、少々の分散を受取申候て、相手は跡方なく成行故、金銀持ても可致樣なく、借大名借の金銀約束の通り、能く取引有之候得ば、何か此上もなき手廻し、人數はかゝり不申、帳面一冊天秤一挺にて埓明、正眞の

寢て居て金銀をもうくるといふは此事に候」とある。猶其實例として見るべきは、兩替善六であらう。善六は輕身な兩替から段々と富貴になり、遂には京第一の分限者となる。二代の善六は美作の森美作守に一萬貫目の取替をなし、身上潰れとなつた。其の節江戸に赴いて、件の取替銀を公儀に訴へたが、森家より善六に扶持を給はり、家來に申立てたる故、そこは封建制度の世の悲さ、此訴訟相立たず、其他諸大名へ取替銀多くあつたが爲めに、元祿年間、遂に家邸を沽却し、あとも知れ難き悲運に立至つたのである。其の盛な時には二三十萬兩の分限と聞く。居宅は下立賣烏丸西へ入る町にて、一町四方の邸宅を構へて居たが、其あとは銀座ものゝ中村内藏助が住ゐした。内藏助は尾形光琳のパトロンとして知られ、光琳の遺言書にも、内藏助に萬事賴むべき由書き置いたほど關係が親密であつた。耆見錄の著者は此善六を評して、「すべて大名方の出入の町人、其有德なる時は多く扶持方を送りて是にて屋敷へくゝり付、其身上衰行時は、彼の扶持方合力

米も渡り方うすく成り、後はいつとなく相止申事にて候、畢竟餌を與へ、身體を釣申仕方くれ〴〵も御大名衆より少成りとも、合力米扶持方などを蒙る事あるべがらず候、此善六ゝ森殿より扶持方を給り候故、大分の借銀は借置、家來の名目に成て、其身も是を愛へて身を果しぬる事も愚なり、武士は計略を廻らし、勝非を專らとす、是れ軍務の戰なり、町人によきほどを見合金儲して紙銀を見切て、德分を得んと思へども、武士は四民の頭、智謀兼備の役人、中々其手は見通し抑てうらをくはせ、先を取て、彼方よりよきほど取込、斷を申出す、町人の竹鑓を以て武士の眞劍に向ふが如く、相手に及ばず、云々」と言つてゐる。斯うなると、商人より罪は大名にある。

元祿時代に、柏木太右衛門と云ふ木曾山の檜槫屋があつて、日光山社殿修復の御用をつとめた。柏木は一手に獨占して、其利を壟斷したのを、奈良屋茂左衛門が其姦を告發して、柏木は伊豆の新島へ遠流せられ、茂左衛門は之に代りて、一代の分限を極めた。御

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人は由來斯くの如く獨占事業で其身上を作り上げてゐる。

天保七年の風水の變には、世間一般に騷がしく、姦商の米を買占めるのが少なくない。それで諸處に買占の姦商どもを打潰すとの張紙が出る。公儀では大阪の商人に津留めの沙汰があつた。卽ち他國へ米穀を賣出すことを禁じたのである。大川町の肥前屋德兵衞なるものが、雜石一萬五千石を南部に送らんとて船に積出したが、忽ち召捕られて入獄させられた。しかし此津留めの爲に諸國の困難は又非常であつた。例令へば京都は大阪から見ると米一升につき六七十文高價なる故、行李、葛籠、鹽俵、風呂敷包等にて、一斗二斗五升六升など潛に買ひ登せたのが、露顯して數十人入牢したと云ふことである。大阪では姦商どもを戒める爲に、其年九月二十五日、左の觸を發布した。

此節米高直にて、下賤者難澁及候時節の處、米穀小賣の者共別て心を用ひ、正路の商賣に致候處、聊の利欲に關り、心得違の者共有之哉不埒の至候、先夜高津五右衞門町の者、雜穀賣方不正路の由にて及ニ論ニ候より多人數寄集騷動致させ、居宅損所も出來候段一同不屆の事候、早速夫々召捕へ、追々及ニ吟味一候條、右體不正路の商を不レ致、買手の者疑念無レ之樣心を用可レ申候、以後人集致し候儀は勿論、右等の所見物にも罷越間敷候、組の者日夜爲ニ見廻一候に付自然寄集候風聞等も有レ之候はゞ、早速に可ニ召捕一候間、其段町々家持借屋の者は勿論召仕下人小者等迄も大體の儀無レ之樣、銘々家主又は主人より篤く可ニ申付置一候、右之趣町々末々迄不レ洩樣急度相守候樣早々可ニ申聞一候。

申九月廿五日　　名代

諸家藏屋敷　　藏元

用達

米賣支配

又貧民へ施行錢を渡して一時を濟はんとし、奮つて義捐したかどうか其邊は不明であるが、鴻池の千八百貫文を筆頭として、諸富豪は爭つて義捐をしてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十二月には米價を下直に賣つた商人九十一人に褒美を與へてゐる。此等は一種の俠商と見れば見るべきであらう。けれども、諸民の困窮は遂に翌年の大鹽の亂を起すに立到つたのである。

天保八年のことである。尾州名古屋に香具屋と吳服商の二軒いづれも欲心深く町內でも爪彈きせらるゝほとであつた。固より斯る利欲に敏いものであるから、いづれも、金銀を貯ふることは少からぬ。七月十四日、一人の徒士來て、七十五匁の拂を五匁負けてくれと云ふ。いや決してなりませぬとて一向に聞き入れぬ。押し問答の末、一錢もまけませぬが、それほど欲しければ五匁は進ぜようと云ふ。徒士以つての外と怒り、買物の値を直切るは相對づくのことなり、御上より扶持切米給はる某が何で其方の合力を受けよう、もう負けるには及ばぬ、不埒な奴かなとて、七十五匁を拂ひ、今に思ひ知れよと其儘立歸る。十六日は精靈送りの日であつたが、町家どもゝ此兩家を惡み、兩家の表に精靈送りをするもの引きも切らず、忽ちのうちに山の如く積み立てる。家內のもの之を制すれども聞き入れず、門を閉ぢて潛み居ると、いづくとも知らず、徒千二三百人ばかり、いづれも手拭もて其面を包み、手に〳〵棒斧等を持ちて、兩家の門を打破り、家財は固より家土藏までも打碎く。町家の人々も打喜びて之に加勢し、またゝく間に微塵となつた。

足利時代には土一揆が起る、德政の強請が行はれる。姦商が富を致せば、打毀しが流行する。物價高直の世には、往々にして、此群集心理が實現せられる。慶長二年五月十日「近頃米價高直にて、下々之者可ㇾ及二難澁一儀に付、直段引下げ方之儀厚御世話も有ㇾ之、然る處此節兵庫西之宮邊に於て米價引下げ方に事寄、多人數寄集、無ㇾ謂人家を損し及二不法一候者有ㇾ之候に付於二當地一も萬一心得違之者有ㇾ之、右等之人氣に押移り、多人數寄集、聊にても不法之及二所業一候者有ㇾ之に於ては、速に召捕嚴重之可ㇾ及二沙汰一候間、其旨を存じ、決て心得違無ㇾ之樣可ㇾ致候」と令したが、五月十三日の夜、木津難波邊に不穩の狀態が見えて、刻々に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人數を增し、難波村にて數軒破壞せらる。十四日には搗米屋にて白米一升二百文の押買が始まる。其風次第に傳播して、大阪市中の米屋には押買連中押寄せ來つて雲の如く、騷動云はん方なく、遂に大勢召捕りとなつた。

儲けるのは商人の常であるから、理不盡な行までして、之を矯めんとするは、法を蔑みした所業であるが、彼の困窮に乘じて、我のみ利せんとするのは旣に德に背いたばかりでなく、或は法にも背く。姦商の名を負はせられるのを見ても、其心掛けのよくないのが知れる。此にはどうしても俠商何の某が出て、窮民を救濟せねばならぬ。惜むらくは兩つながら其傳記を缺いてゐる。其の名は傳にして、傳の體をなさぬ所以も亦此にある。

井上知事と岡田總監

鷲城學人

今度の風水害の慘事は東京府知事と警視總監とを頓に忙殺せしめた。一は最も名譽ある牧民官として、一は治安警察の執行官として、斯くの如き場合に活動するのは職責上當然のことであるが、其の當然の職務も知事や總監の頭の機能如何に依て、結果の上に非常な相違を生ずる。而も二者は東京府市罹災民の救護及び市民生活の爲めに最善を盡した。少くも日頃府廳なり警視廳なりの爲す處に慊らぬものも、一般市民が此の不時の出來事に依りて蒙つた生活上の不安に對する行政振りには、秕難を加ふる餘地がなかつた。兎に角井上友一氏と岡田文次氏とは、此の際當面の時の人として注目すべき人物である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

井上といひ岡田といひ、從來官場に生活する人々の間に知られてゐたけれども、一般的には餘りファミリアな名でなかつた。唯だ兩者の名が東京府知事若くは警視總監の名と結びつけられるに及んで、漸く世間の注意に上つた位なもので、それも唐突に東京府知事は誰か、警視總監は誰かと聞かれて、直ちに答へ得ないものもまだ隨分尠くない。蓋し井上も岡田も役人としては後輩で、今まで表面に立つて是れといふ著しい仕事をした經驗もなく、多くは世間の人々の氣附かない程に、平靜無事な行路を辿つて來たのである。それ故に兩者の閲歷を簡單に傳ふる日になれば、纔に物の十數行も費せば足りるし、又た人物を論ずるにしても月旦の材料は極めて乏しい。そこで自分の知れる範圍に於て此の兩人を評するに先ち前提として言づて置きたいのは、一は學問にして一は學問で無いと云ふことである。

井上の戸籍面は北海道となつてゐるけれども、實は金澤の士族で先考も井上友一と言つた。帝大に入る前は金澤の專門學校や第四高等中學に學び、最近東北大學總長から學習院長になつた北條時敬は彼の先生筋になつてゐる。帝大法律科を卒業したのは明治二十六年で、成績は法學博士松波仁一郎が二十九人の筆頭を占め、井上が五番目であつたと思ふが、兎に角出世帶に入つてゐた。同期の卒業中、後年に至つて世に出たのは法律科では松波の外に鐵道院副總裁中村是公、智利公使飯島龜太郎が居るし、政治科の方には博士美濃部俊吉、貴族院議員博士の桑田熊藏、香川縣知事若林賚藏、臺灣銀行副頭取中川小十郎などがゐる。此の中でも井上と中村とが最も志を得てゐる方である。井上は大學を出てから直ちに內務省に入つた。丁度其の頃は故井上侯の內相時代で、土木局長都筑馨六、縣治局長江木千之などが屬僚の牛耳を握つて、縣知事を頤の先で使ひ、一つ違へば馬鹿呼はりする程に羽振りを利かしてゐた。特に都筑は參事官秘書官を兼ね、ドシドシ大學の俊才を內務省に入れたから、一時地方官中に都筑系といふものが出來た位である。床次竹二郎でも水

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

野錬太郎でも皆な其の時代に内務省に入つたのであるが、井上も當時の俊才の一人として扱はれたのである。嘗て本誌に掲げた『水野と有松』の批評のときにも一寸言つて置いたと記憶するが、從來内務省は大學出身者が登龍門として競ふて入らんとする處で、こゝで政府學、官僚學を實地に修業し、これを卒業して初めて官吏らしい官吏になるとしてあつた。それ故に政府部内では行政大學若くは自治大學と稱し、内務省を他省以上に評價する傾があつた。明治二十四年から二十八年頃までの間に帝大を出たものは朝野共に玉揃ひと稱せられ、特に後年官僚畠の花形と言はれたものは大抵此の四五年間の卒業で、彼等の多くは一度内務省に吸收され、それから各方面に分布されたのである。井上は内務省に入てから、一度も他の省に轉じたことが無く、又た一度も地方官として田舍廻りをしたことが無く、二十餘年の久しきに亙つて本省のみにコビリ附いてゐたから、内務省所管のことは隅から隅に通じ、政府學、官吏學の實地修練を積んでゐる。彼は書記官、參事官及び神社局長として、井上馨、野村靖、末松謙澄、内海忠勝、桂太郎（兼）、芳川顯正、清浦奎吾、原敬、平田東助、大浦兼武、大隈重信（兼）の十一代に歷任し、現に東京府知事として十二代目の後藤に仕へつゝある。

彼は書記官及び參事官としても敏腕を稱せられ、他の同役に比して一頭地を拔いてゐたが、内務省中堅となつたのは明治四十年以後のことである。第二桂内閣の平田内相時代には床次が地方局長、水野が勅任參事官兼秘書官、井上が神社局長を以て勅任參事官を兼ね、第二西園寺内閣の原時代には床次が次官、水野が地方局長兼土木局長、井上が依然神社局長兼參事官として常に缺くべからざる部分を働いた。隨て此の三人は世間から内務の三人男と呼ばれ、政府學、官吏學の指南役といふ格で本省派からも地方派からも立てられた。當時内務省には行政大臣の外に人事大臣があると稱せられ、水野が人事大臣であつたとすれば、井上は其の次官たる形であつた。蓋し床次は初め地方官から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本省に轉じたのであるが、他の二人は内務省の生拔きであるから内部の事情なり地方官の人物なりを掌を指すが如く心得てゐる。特に井上は久しく、府縣課長の職にあつたから最もよく地方の狀態に通じてゐるから、地方官の任免易置を行ふ場合は、此の二人の意見と立案が基礎となつた。随て平田でも原でも少くも人事行政に就ては、兩人を帷幕の外に置くことが出來なかつたし、地方官も亦た此の兩人を恐れてゐた。斯くの如く井上は人事の點に於て水野の相談對手となり、地方行政に就ては床次の相棒となり、二者との交情も隨て親密であつた。其の頃内務省には役人とも附かず浪人とも附かず、一種中間性のものが囑託の名義で地方局の仕事をしてゐた。世に是れを朦朧組といつて内務省の寄生蟲であつたが、此の一組を率ゐてゐたのは床次と井上である。山本内閣のとき、床次は鐵道院總裁に任ぜられ、水野は次官に進んだが、井上は從來の位置に變りなく、續いて大隈内閣に及んだが、昨年久保田清周の辭職後二十餘年來の城廓であつた内務省を出て地方官の筆頭たる東京府知事に任ぜられたのである。

井上といふ人は多年内務省にゐて忠實に政府學官吏學を修業した丈けに、何處迄も職を奉じて理に循ふ方で、能吏循吏の型を具へてゐる。由來金澤の人物は概括して二つの異る色彩を帶びてゐるようであるが、是れは丁度東南より西北に金澤の市街を貫流する犀川と淺野川とが自然のコントラストを爲してゐると同じである。犀川は水勢急にして變化に富んでゐるけれども、淺野川は坦流にして他奇がない。若し人間の上に自然の感化が及ぶとするならば、急流の犀川は一種風變りの人物を造り、平流の淺野川は圓滿にして常識の發達した人物を造り出したと言へる。此の意味から金澤の人物を概別すると、故櫻井一久、遠藤秀景、松村務本、三宅恒德、中橋德五郎及び雪嶺博士などは前者の種類に屬し、本多政爲、北條時敬、斯波淳六郎、清水澄、倉知鐵吉、土岐債などといふ人々は後者の型に入て居りはせぬか。

井上も後者の色彩の最も著しい一人で、議論を好まず、人と爭はず、覇氣を有せず、別に際立て丶傑出した點はないけれども、至つて人物がナダラカで常軌に從つて行く方である。其の形貌風采の如何にも貴公子然たる如く、其の爲人も品好く出來て人に不快を與へるような忌味や衒氣は少しもない。尤も長い間役人一點張りで通したから、役人氣分のないでは無いが、吏氣が表面に顯はれてゐる程でない。彼は書記官として書記官の仕事を几帳面にした。參事官としても神社局長としても其の通りである。恐らく東京府知事としても、知事として爲すべき職責と權限とを自覺して、法を奉じ理に循ふて行く方であらう。

彼が法學博士として法學に幾何の造詣あるかを知ることが出來ないが、少くも法律の上案に長じ、內務省では久しく參事官として其の方に缺くべからざる役割を勤めてた。曾て行政裁判所評定官を兼ねてゐたことがあつたと思ふ。床次は學者といふよりも器の大を以て重んぜられ、水野は學者を以て任じ、間々自分の學者たることを世に示すが、學問よりも寧ろ吏才に長じてゐる。井上は未だ曾て自己の學問知識を證據立てた著書も文章も無いけれども、水野よりも却て蘊蓄があるかも知れぬ。特に地方行政に精しく、府縣課長として地方行政に貢献したことは尠くない。地方行政に關する問題が起つた場合に、新聞記者が內務關係の人に意見を徵すると、十人が十人まで井上に行つて聞けと振向けるを常とした位である。前年地方行政視察の爲めに歐米に行つたが、極めて短時日の間であつたけれども、其の浩澣なる調査書類は地方局の一室に堆積して等身を爲したといふ位で、立案の才に加へて調査の才もある。曾て內務省に大谷靖といふ老書記官があつて、多年會計課長を勤めてゐた。此の老吏は大久保內務卿時代から內務省に仕へ、政府委員として議會に臨むこと二十數回に及び、內務省の百科全書と綽名され、誰にでも彥左衛門風に言ひたいことを言ひ、機智と風流氣に富んで秀逸の詩も作れば歌の一つも口ずさむので、內務省の名物男に數へられ、數年前圓滿辭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

職をするまで大學出の若いもの丶間に立られてゐた。此の大谷老人こそ井上の舅父に當る人で、書記官時代に大谷から見込まれて今の夫人と結婚したのである。

原、平田の内相時代に内務省の幹部にゐたものは、床次といひ、水野といひ、犬塚といひ、古賀といひ、其の後相率ゐて政友會に投じたが、井上は初めから總ての勢力黨派の上に超然として唯だ内務官としての一筋道を忠實に辿つて來た。尤も舅父が長洲人であるから官僚系と思へば思へぬこともないが、將來はいざ知らず、少くも今日までは是れといふ色も臭いも附いてゐないようである。平田に重んぜられたと同じ程度に原にも用ゐられた。官僚系にも政友系にも憲政系にも好い。彼を東京府知事に推薦したのは何人であるか知らぬが、現に舊同僚の水野が次官として一切の省務を切廻してゐるから、彼と内務省との關係は自然好いと見るべきである。

彼は本年漸く四十七、從來の東京府知事に比すれば一番春秋に富み、此の順序で行けば無論未來に富んでゐる。將來大臣になるかならぬかの豫言は出來難いが、少くも近い中に貴族院議員に任ぜられること丈は決して外れない。東京府知事の位置も特別の事情のない限りは二三年動くまいと思ふ。

岡田は井上が内務行政に通ずる如く警察行政に精通し、もと／＼警察出身の人である。學校は獨逸協會學校と思ふが、こゝで專ら法律の學問をして卒業後高等文官試驗に及第したのである。今の法制局長官有松英義とは同學の友人で、兩人とも同じく警察方面のことに關係することになつた。地方の警察部長を久しく勤めてゐたが、安樂兼道の警視總監時代に警視廳警視に任ぜられ、故龜井英三郎が第二桂内閣の警視總監になつたとき、官房主事として警視の筆頭にあつた。犬嫌ひの龜井と共に銜口令で犬征伐をした一人である。主事の職は可なり久しい間で、それより再び安樂の時代を經て第三桂内閣のとき、例の川上親晴が大浦の鑑拔に依て警視總監に擧げられ、再び野蠻政策を執つた際にも警視廳にゐたかと思ふ。栃木縣知事に任ぜられた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のは山本内閣のときで、同時代の警視廳部長の太田政弘や小濱松次郎が東北の知事になつたのはそれから後で、此の二人は大學出身の警視であつたけれども、無論岡田の方が遙に先輩である。栃木にあること一年内外にして、北川信從に後を讓つて、樺太長官に任ぜられ、昨年秋寺内内閣の組織せられるまで樺太にゐた。是れは前長官平岡定太郎が不始末をしたので、其の後拭ひの爲めに差向けられたのであつた。

樺太長官は無論彼にとつて榮轉である。更に警視總監に至りては單に榮轉といふ單純の意味よりも、會心の位置を得たといふことになる。何人を警視總監にすべきかに就ては、現内閣の如く官僚主義を以て立つ政府の特に注意を拂つた處で、最初はいろ／＼呼聲を發しられた候補者もあつたようであるが、岡田を適任として寺内首相なり後藤内相なりに推奬したものは專ら有松英義であつたらしい。蓋し此の二人は前にも述べた如く同じく獨逸協會學校出身であるの上に、有松の方では岡田が警察家としてどの位仕事が出來るかといふことを知つてゐる。從來警察出身の人間は大概大浦の息が掛つてゐるとせられ、又た關係の深い淺いはあつても、大浦系と目せられるものが多かつた。此の意味に於て岡田も元と大浦系の一人と見られ、或は必ずしも大浦系にあらずとせられ、系統は餘りハッキリしなかつたが、兎に角有松の後援があることゝ、有松と同じく官僚系であること丈けは事實である。官僚系といふ點から言へば以前或は大浦に好かつたかも知れぬが、今はユカリも義理もない。若し大浦系といふ關係から多少でも前内閣派に傾いてゐるようなれば、如何に有松の推薦でも、寺内や後藤が承知する道理がない。特に岡田といふ人はなか／＼拔目のない才物で、自分で自分を狹くするやうな不利益なことをせず、何日如何なる場合にも巧みに推移して行く丈けの用意を怠つてゐない。學閥も藩閥もなしに兎に角此までノし上つて來た男だけに、一から十まで游泳の秘訣を心得た悧巧者である。

歷代の警視總監は川路利良以來、田中光顯、西山志

澄、關清英を除けば、樺山資紀といひ、園田安賢といひ、安立綱之といひ、大浦兼武といひ、安樂兼道といひ、川上親晴といひ、薩人の之れに任ぜらるるものが多かつたのみならず、いづれも巡査から身を起した無學者であつたが、近年に至つて藩閥以外のものが警視總監に任ぜられ、而して學校で正式の學問を修めたものを取ることになつた。西久保弘道でも伊澤多喜男でも藩閥外の出身で共に大學を出た男である。岡田は學閥系でないけれども、相當の學問はあるようである。併し彼は何處までも警察の繩張内の人で、警察以外に成功する行政家でない。頭が警察の方で出來てゐるから、殖民地行政や地方行政に當ても自然警察事務の方が主になるを免れない。彼は樺太民政長官としても、栃木縣知事としても、失策の無かつた代りに特に是れといふ治績を殘さず、謂はゞ可もなく不可もなしといふに過ぎなかつた。警視總監としては歷代の總監中に傑出してゐるとは言へぬが、少くも適材を適處に配したといふ意味には篏つてゐるようである。今までの警視總監と一々對照するのは困難であるが、伊澤に比すれば確に總監振りが好い。然らば前總監の西久保とは何うであるかと言ふに、西久保は胴體の大きい丈けにヌーボー然とした處があつて、それに肝腎の警察事務に精出するよりも擊劍や柔道に現を拔すといふ方であつたから、部下のものも何程か働き好かつた。岡田は久しく地方の警部長や警視廳の主事をして警察事務に通曉し、チャンと其の方面のコツを心得てゐるから、西久保や伊澤のように誤魔化しが利かない。各警察に對して問ふたり言ふたりすることが肯綮に中つてゐる。特に此の人は溫和肌の如才ない方であるから、いくら警察仕込みといつても、さう亂暴をする心配はない。併し探偵政治の頭は免れないと見えて、新聞記者などを密偵に使ひ、而も操縦の術が頗る巧みであるから、部下のものが報告する前に大概のことを承知してゐる。時として斯ういふ事があるが知つてゐるかと部下の知らないことを言出して弱らすことがある。此の意味に於て使はれるものは氣が許せぬとしてゐるが、其の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りに警察事務は擧がるかも知れぬ。

最近警視廳が市民生活の爲めに執つた處置は、必ずしも岡田總監のみの發意でなく、內相及び農相からの命令もあらうが、血も涙もない不正商人をやッつけたのは痛快である。警視廳は政府の爲めの機關にあらずして、民衆の爲めの警視廳であるといふことは今更說明するまでもないが、多少改つたといつても未だ〳〵警察方面にはいろ〳〵情弊がある。岡田が良總監としての期待に背かぬといふ氣なら爲すべきことは多々あるが、果して良總監の名と實とを一致せしめるを得るか何うか。

文展の日本畫は相變らず綺麗なものだ。繪のよく分らない素人(しろうと)―と云ふよりは寧ろ婦女子小兒(をんなこども)が喜びさうなものが多い。川村曼舟氏の「日本三景」は此綺麗揃ひの中でも目立つて綺麗なので、マンマと特選の第四席か五席かを贏ち得たのである。綺麗でない繪を出して、年來の文展の型を破つて目覺ましき成功を遂げた平福百穗氏と美術院の一方の御大將(おんたいしやう)小杉未醒氏とが文展の招待日に此曼舟氏の繪の前でヒョックリ出(で)つ遇(くわ)した。ソコデ其綺麗振りに呆氣にとられてゐた百穗氏は未醒氏に向つて「コンナ綺麗なのを觀たら西洋人は驚くでせうね」と云ふと、未醒氏隙(すか)さず「イヤ日本人だつて驚きますよ」は流石に未醒の才鋒は鋭い。(一記者)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今秋美術界の新收穫（二）文展評

▽文展一日

小杉未醒

彼の文展の招待の日の午後夕方近い頃に、日本畫の方の小さな室の中に、丁度私と和田三造君と山本鼎君と満谷君と落合ひました。他に人も居なかつたので、てんでに氣輕な會話をやつて居ましたが、其内和田君でしたか、つくづく思ひ入つたと云ふやうに、「日本畫は樂でいゝなあ」と云つた。「然うだなあ」と他の一二人が應じた。全く、彼の百代の名品とも云はれて殘る第一級のものに到つては、どれに優劣はありますまいが、當分此の國に於て作られる多くの日本畫を見ると、全く「樂でいゝなあ」であらうと思はれます。手近に擧げれば先づ容積の問題です。小品には小品の必然あり大幅には大幅の必然がある筈でせう。

小品の骨組をそのまゝ大きな屏風にブロマイドしたのでは、當然此の必然を欠くわけです。文展の屏風の多くは此の擴大病に罹つて居ます。

それは即ち空虚です。藝術品ではなくて、意匠品圖案品です。日本畫の圖案化は近時の惡傾向ですが、その爲に裝飾風の技術のすべてを否定するわけには行かない。西洋の油繪でも、結構的な大作は近代ほど裝飾風を帶びて居ます。是は余儀なき表現の必然で、彼の元祖のヂヲットが、如實に描かんとした結果は、今に於て見る古拙な裝飾風なると同様に、結果の自然に過ぎません。今の多くの屏風は、初めに圖案的形式なるか、乃至は自然の布置を、正當に安排する能はざるテレ隠しですから、彼此天地の相違となります。

日本畫の畫風は、今に於ては本場の一つの支那が默

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目ですから、日本ばかりで歐洲の洋畫風と相對するつもりもありませうが、しかしそれは先づ數量に於て比較になりません。漸く日本國內に於て日本人の洋畫と對比すのみです。それで居て古來の傳統や習慣がヵナリ執拗にコビリついて居ますから、西洋の方の幾千の人材から選ばれた何十と云ふ秀才が、相互に切磋硺磨した處の藝術の新らしい見解から見れば、實は存外固陋な偏見が多いと思ひます。是を破らなければ本當の東洋藝術は出來ません。

どうも見て居るのに、日本畫の批評家は、恰んど日本畫專門で、その上今の日本畫の方の傳統や習慣故實と云つたやうなもの丶、通人が多いやうです。

是は一面には或は日本畫の科外敎授にはなりませうが、然し相率ゐて東西美術の境界を無益に固うすると云ふ事になりはしますまいか。畫風には東西の別はあつても、美術の本義に國境はないのだから、それで私は、此頃の日日新聞の矢代氏の文展の日本畫評を賛成する、彼の初めに聲明した態度が宜しい。全く批評家は共通にしたいものです。その後漸次に展覽會の査も審査も共通にならねばなりますまい。畫題の意味や、古來の約束などが分らねば、日本畫が分らぬとすれば、それは分らぬ方の罪ではなくて、分らせぬ方の罪です。

さて私は文展の作品の批評をしなければならないのですが、實はまだ私は彼の會を熟覽して居ませんから、個々の作品について述べるなどと云ふ事は到底出來ません。恐らく此の儘で此年の會期を過ごしてしまふのだらうと思ひます。大體各個批評などと云ふ事は聞くものも余り面白からず、云ふものも倦き勝ちです。若し夫れ平生の朋友にしてその所作の甚だ不足なるものなぞに出會ふに到つては、まことに不愉快な事になります。右の如く私は到底各個の批評には及びませんが、日本畫の方で平福君の作品について喜んだ事は申して置きたいと思ひます。全く、平福君の當年の出來は、彼の人自身にもや丶得意でせうし、文展日本畫に在つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も近年の收穫だらうと思ひます。幾多の屏風、それにはいろ／＼の花の圖案や、又は百人一首の歌留多を散らしたやうな公卿の風俗畫、又は有るまじき夢のやうな眼を持つた度外れに白い皮膚の日本婦人などが、紅紫さま／＼の低級耽美の色彩を耀かして居る中に、平福君の屏風では三人の人と一輛の馬車とが、眞黒な塊りになつて、淡金色の上に跳つて居ます。多少の色彩も有るには有ります。しかし此の眞黒な塊りの手强さを、弱めない程度ですから、極く澁い色彩です。つまり、此處が百穗君の賢才の働きでせう。此の淡金色の上の黒い塊りは、尤も簡單で然して尤も効力の强い印象です。此の簡單の强味は以て彼の意匠圖案の複雜を厭倒するに足り、此の色彩の澁味は遙かに低級耽美の綺麗事を離れて居ます。只豫讓の面貌が余り瘦すぎた。どうも仁和寺で鼎を冠つても躍りさうです。趙襄子と相比敵する程の人品にしても差支はあるまいと思ふ。馬を見て私は武梁祠の平彫りを想ひ出すが、多分平福君もその邊から採つたのであらう。古支那の馬を畫くにはそれ等に依るより外はありますまい。御者の表情は一番面白く出來て居た。色彩の調子や線條やは朝鮮の古壁畫を連想せしめます。

　此の作品の次ぎに私は、橋本氏の倪雲林を擧げます。次に榊原氏の竹の屏風を數へます。

　倪雲林の手法は非常に支那臭くなつて居ました。從來の作柄のやゝもすれば鬼面人を嚇すと云ふ味が除かれて、その代り筆觸は弱くなつて居る。落付たいゝ畫です。しかし私は同氏が此邊まで來て此度は洋畫と意外な處で出會ふ事になりはせぬか。その收まりはどうつくかと一種の興味を持ちます。榊原君の作品を見ると、自然に東京の目黒派を思ひ出します。榊原君小野竹橋君などの京都の新南畫の連中と、目黒の故紫紅から來た處の速水御舟君等の新南畫派とは當代に最も興味ある對照ではありませんか。比較して見ると、目黒方が感覺は鋭いやうです。是は前に在南畫の傳習を欠き、やゝ油繪風の寫生を採つて居る爲もありませうか。その代りやゝもすれば、病弱に落ちる患もあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すが、京都の方は强味があり、中々元氣です。多少鐵齋老などの感化も認められませうが、同時に感覺が疎豪です。

此の三點以外には私の記憶は大分稀薄です。油繪の方は、其日後廻しにした爲め時間がなくて、日本畫以上の不熟覽でした。

それでも友人達の作品の前には、しばらくづゝは立つて見ましたが、精しい事はモット好く見た上でなくては申されません。(完)

▽觀たところ感じたところ

臨風生

本年の文展の日本畫は、まことに見答へがせぬと云ふものがある。果して然るか。如何にも飛び拔けて、これと云ふべきほどのものはないが、或意味に於ける進歩の跡は否むべからずと信ずる。殊に京都派に、從來の結構手法から、蟬脫しようとして、新しい傾向のほの見えてゐるのは喜ばしい現象である。本年の京都派が概して振はざるは、蓋し此新傾向に向ひつゝあるので、まだ試み中であるのであらう。尤も中には從來と同じ行方のもないではないが、とにかく田園生活などゝ云ふやうな畫題から離れて、やゝ精神に觸れようとし、又支那畫を研究しつゝあるやうな形跡が見えてゐる。

總帥竹內栖鳳の「日稼」は、よしや氏の畑でないにしろ、新進作家と競はうと云ふ若々しい所を取る。重苦しい極彩色の上部と輕い淡々とした下部との權衡が取れぬにしろ、斯る畫題の下に、斯る努力を試みた元氣は買はねばなるまい。審査委員や推薦、無鑑査連中は、とにかく新らしい試をなすべきである。栖鳳氏は度々此點に關して、後進に範を垂れる。「畫になる最初」と云ひ、「日稼」と云ひ、正に此見地より來たものなることは、請合ひである。大關相撲は云々などと云ふべからず。藝術は常に新天地を開拓すべきものである。

土田麥僊の「春禽趁晴圖」は、元明あたりの花鳥圖

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をねらつた所があるやうだ。書き過ぎたと云ふ非難はあるが、傳彩鮮麗に、氣品卑しからず、氏が生平の思ひ切つた大膽な試みとは違つて、如何にも落付いた調子がある。

榊原紫峰の「梅雨霽」は平板の如くにしてて平板ならず、善く其氣分を漂はせて、鵠の啼く音も快く感ぜられるやうだ。

橋本關雪の「倪雲林」は、畫題で人を脅かすつもりか。南畫流行の時に當りて、元季南畫の大家を捉へて畫題にしたところは、頗る茶氣滿々たるものがあるが、描法はしつかりとして、氏が生平の覇氣匠氣の少きを悦ぶ。

菊池契月の「蓮華」木島櫻谷の「孟宗籔」は、いづれも新しい試に屬して、猶遺憾ながら試み中ばのものである。一工夫も二三工夫もあつて欲しい。菊池氏の如きは、色の配合と、色の表現とに一段の研究を要する。木島氏の人物も大に考慮を望まねばならぬ。

さて東京派はと見ると、一般に京都派より出來榮が勝れてゐる。寺崎廣業の「白馬山八題」は、氏が從來の描法を一層明確にしたもので、種々なる觀様に氏の努力を看取する。

鏑木清方の「黑髮」は、氏の進路が絶えて邪徑に陷らずして、正しい的に向ひつゝあるを示す。「晴れ行く村雨」は、既に其方針を語つてゐたが、此に至つて、更に一段の進境に入つた。傳彩も上品に、すべての配合がわざとらしからず、淡泊と極めて氣持よく出來上つてゐる。他多數の諸作が展覧會張り、文展型であるのに、之と平福百穗の豫譲とが、自ら守る所を知つてゐるのは、多とすべきである。鏑木氏が美人と背景の調和に苦心し、春信の溫雅を今様に試みんとするのはよい。更に浮世繪を離れて、源瑞素絢を窺ひ支那畫の粉紅黛綠を研究したらば猶一層に得る所があらう。春信の如きは確に支那美人畫より多く得る所があつたと信ずる。

朝鮮古墳中の壁畫が復活したり、支那の畫像石が今様に取扱はれて來た尤も江戸初期の名所記の挿畫や、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

陶器の畫が畫家に少からぬヒントを與へのであるから、猶一層原始的に返るも無理がない。それは日本ばかりでない。西洋でも行き詰つて來たから、何か新しいもの〳〵をと探す。小供の書いたやうなものが歡迎されるやうになる。丁度會席料理に飽いて、あゝでもない、此うでもないと、とう〳〵鮨や天麩羅の立喰をするやうなものだ。屋臺食通之より起る。畫も亦其傾きがないでもない。

と云つて、平福百穗の「豫讓」をくさすのではない。豫讓の畫が文展で評判のいゝのは不思議だ。先づは院展畑で、文展畑に出來た南瓜としては變であるが、それが評判の好いのは、文展としては自家撞着の心地かする。世人の眼の肥えたのか、それとも批評家の影響か。何しても此に進歩が認められる。豫讓の畫と云ふと、從來は衣を裂く所が普通であつたが、之は趙襄子の馬が驚く所である。尤も正史では、豫讓が橋下に隱れてゐたので、躍り出したのではないが、之は其氣分を現はしたので、却つて、史外の面白味がある。御者と趙襄子の驚きと豫讓の意氣込とはぴたりと合つて、些の緩みがない。但し趙襄子は驚いた爲に、折角の寛厚な人物をめちや〳〵にした所はあるが、刹那の氣分であるからそれもよい。しかし車と馬とだけ畫像石仕立にしたのは、目先きが變つてゐると云ふだけで、實は甚だ無意味である。と少々奇を好んだと云はれても據ないであらう。けれども此所に作者の山がある。

此他の諸作は多く紅紫絢爛、奇麗ではあるが、皆干菓子の折詰、旨味もなければ、取り上げて味はうと云ふ勇氣も出ない。さりとて、觀れば觀るほど次第に感興を殺がれる。文で云へば六朝文學。東坡は、之を八代の衰と貶なしてゐる。努力は買はふが、內容に乏しいと云はねばならぬ。技巧の進歩と、調子の揃つたと云ふことは云ひ得るが、さて藝術の上から見て、果してどんなものであらう。

日本畫を觀て、西洋畫室に入ると、非常にいゝ感じをする。變ではあるが、實際さう感じたのだから仕様がない。南薰造の「城」、コランの畫でも見るやうな岡

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田三郎助の「花野」を始め、中川八郎、和田三造諸氏の作には、いづれも緊張の氣分が滿ち〳〵てゐた。紅紫絢爛の干菓子よりは、シュークリームや、プッジングの方が内容の充實があり、快味を感じたのであつた。斯くして振り返つて文展の日本畫に飽き足らぬふしが多い。進歩は否みはせぬが、一本調子の足並揃へたところは、何とか局面の轉回局面の打破を希望せざるわけにゆかぬ。

▽二部の印象

山本鼎

私は六年振りで文展を觀た。豫想以上にひどかつた。全體として、進歩したやうには思へない。出品畫の大半はふやけた風景畫で、人物畫は皆危つかしく、僅か十ばかりの、所謂構成畫も殆ど甘つたるい粗製品といつていゝ。私は畫の前を往きつ戻りつしてやう〳〵六枚ばかり拾ひ上げた。斯樣な成績では、官設展覽會といふ大いなる名に對してすまないわけだ。あの館外に駢ぶ立派なる自働車の群に對して氣がひけるわけだ。日々、雨が降つても觀にやつて來る萬餘の觀衆に對してきまりが惡いわけだ。文部省は下級な風致取締りばかりを考へずに、高級な風教——即ち積極的に國民の美意識を培ひつゝある、責任ある展覽會の成績に就て深く考究してもらひ度い。畫家も間に合せな物を持ち出さずに、時と金とを惜まず力一つぱいな仕事を示さねばいけない。私は、文展の作品が幼稚だとか、拙いとか、下らないとかといふ事をおいて、先づ、ぞんざいだと思つた。同じ人がもつと構想を精練し、表現に身を入れたとしたならば、可なり、立派に見えるものが出來ると思ふ。庭球をやるにしても、競技の前には旺んに練習をやる。處が、文展の特長とせるらるゝ所謂「製作」はどれだけの習作を經由して居るか。ルノワールの『水浴』は最初の畫稿が出來てから、十一年目に出來上つた。ロダンが巴里の美術局から「地獄の門」を請合ふたのは多分三十二才の時

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ。それが練られ〳〵て七十七才の今に至るも仕上らない。アレクサンドル、イワノフといふ人は、一つの製作に廿八年間を費し、其ための習作を百餘枚のこした。なぞといふ例を思ひ出して、一と夏でぼか〳〵出來上つてしまう製作が、五百圓、千圓といふ大金をせしめて居る有樣を見ると、まつたく顔を撫でて見度くなる。吾々洋畫家は折角貧乏をして居るのだから、洋畫家一統に褌を堅くしてもらひ度い。まことに、私は洋畫家といふサークルの連帶責任を感じて居る。それ故文展の作品をけなすとしても、文部省美術展覽會といふ施設にけちをつけ度くない。ならうなら、審査委員長になつて、己れの良しと信ずる藝術家を網羅した審査員の一團を組織して見度い位いだ。

私は前に七六枚ばかりを拾ひ上げたと云つた。其六枚に對する寸感を記す事にする。

私には、長原孝太郎氏の「月」といふ畫は感じがよかつた。私は寫實主義だし、裝飾畫に就いての經驗もないから、「月」に適確な評價を加へる事は覺束ないが、精練されたる趣味、嫦娥のふくよかな姿勢、畫なる色の照應、愼ましい觸等から作者の氣禀の誠實を感受して良い氣持ちだつた。又、腰から裾に曳く線がも少したわみがあつたらどうか、全體にも少し冷光を帶びたらどうか。衣裳がも少し單色で作られてあつたらどうか、二枚折りにしずに角な壁畫であつた方が良くはないか、などと考へた。

和田三造氏の畫は、豫想よりあつけなかつた。といふのは、巴里の畫室で見た同じ人の多くの直寫畫を覺えて居るからで、私は何故それ等のより醇味ある作品をおいて、和田氏がまづ此畫を提示したのかと思ふ。「バーの午後」は色も觸も爽かで、とんと新しい襯を見るやうだ。感觸は佳いが、内容的の魅力を覺えない。一度人に着られた襯ならば、其人の身癖のまゝを表情して居て吹き出す程面白味のあるものだ。つまり其襯は性的の内容に生かされるといふわけだ。私は和田氏に、現實の酒場の一隅を其まゝに摑むでもらひ度かつた。描くに面白い格恰な材料で組み立てずに、平

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣で、安つぽい德利と、汚れた卓と、愛す可く憐むべき酒喰ひの爺を表現してもらひ度かつた。其處に充分畫家の、手法に對する娛樂にも應ず可き彩も形もある筈と考へる。岡田三郎助氏の「花野」は美しい。目に摑みとられた、仄かな光調をも粗略にせず、春草と肉體の脆たき照應に恍惚となつて、餘念なく描き了つた、惑ふ事ない表現力には人を懷けるものがある。つまり私は岡田氏の耽美心に對して、だまつて見て居るより仕方がない。

滿谷國四郎氏の「四月」は季節に對する作者の感懷が形象されたものと見ねばならぬが、論理的性能に貧しい日本人の常として、此畫も平氣で其のんきさを現はして居る。斯樣な象徵的な畫であれば、表現の醉酣たる、畫家の春四月に對する情緖が濃く明かで、其感情の吐息を各部に負はせ、又全體に湊合させる表現上の論理的準備がしつかりして居なければ危ない。滿谷氏は構圖の才もあり、簡化の手練もあつて、表面的畫趣を娛みすぎるのだ。滿谷氏が此の慰みに飽きる時が遠からず來るに相違ない。來た方がともかくも幸福に相違ない。

河野通勢氏の「自畫像」は場中に類のない畫だ。ホルバインの模倣は惡くはないが、ホルバインが沈靜堅密な實相主義者であつた如く、氏も混り氣ないリャーリストであつてもらひ度い。だから、ホルバインの肖像畫のやうな身なりを工夫せずに、普通な信濃人のなりを描くべしだ。現に、氏は描きつゝあるうちにむきな寫實家になつて居る。顏や手の描寫はまつたく直寫畫の自然さを現して居る。そのやうな自然さを最初から重んじてもらひ度い。

山脇信德氏、場中で外光派の信條によつて、まつしぐらに自然を描いて居るのは殆ど氏の「疎林」一つだと云へるだらう。匠氣に鼻を突く文展の會場で此畫が僅かに所謂兒の素朴を感ぜしめるものである。

六年十月十九日

▽文展に於ける日本畫の三作

黒田鵬心

招待日の日に一通り見た印象で云ふと、今年の文展は、西洋畫と彫刻とがツブが揃つたと云ふのか、特に傑出した作もなく、またあまり拙い作も見當らないのに反し、日本畫には拙い作――と云はない迄も文展には出す必要のない作――が少くとも十點はあつた。さうして特に傑れたと思はれるものが三點あつた。それは鏑木清方の「黒髪」と、山内多門の「薩南六題」と、平福百穂の「豫譲」の三つである。

清方の「黒髪」は、始めてその六曲一雙を見たときに、實に何とも云はれないいゝ感じに打たれた。あつさりとした構圖と色調、極めて高き品を持ちつゝしかも艶な點のあるところ、蓋し清方の特色を最もよく現はし、清方の性格がよく畫に現はれてゐる。一人は正に髪を洗つてゐる所で、その水にしたつてゐる髪の風情に云ふべからざる味がある。一人は既に髪を洗つて立ち上つた所で、其の風姿、巧を弄さないのが殊にいゝ。右端に岩と草花とを描いてゐるが、其の手法はよく清方の小品に見受けるもので、頗るおもしろいが、左の端に飛べる蝶は寧ろなくもがなである。併しそれは缺點といふ程の事でもなく、全體として清楚といふ點では此上なき作品である。今回の文展で余の好きなゑ一つを擧げよと云はるれば、余は躊躇なくこれをあげる。清方としても傑作の一つであると思ふ。

多門の「薩南六題」は、題材、構圖奇拔にしてその手法も亦頗る變つてゐる。しかも其平凡ならざる風景と奇拔なる手法とがよく一致して、一種特殊の表現を呈してゐる。其の手法は細かに見たのではないが、溪仙などの用ゐたのとは違つて飄逸の點はなく、餘程强い感じがする。兎に角風景畫として最も特色があり、彩色燦然たる文展會場をよそにしてゐる慨がある。「耶上十二景」以後の出來榮である。

百穗の「豫譲」は、甚しい筆の利潤を捉えて或る程度迄成功してゐるのみならず、色彩の配合が頗る大膽に要領を得てゐる。馬と車とが主として畫面を占めてゐるが、夫を黒で現はし、人物には簡單なる配色をなしてゐるのみで、却つていゝ結果を來たしてゐる。馬だけみると堅い所もあるやうだが、全體としてはよく動いてゐる。「七面鳥」以來の出色の作だと思ふ。

文展の日本畫の色彩は、相不變絢爛を極めてゐる中で、「黒髮」にしても、「薩南六題」にしても、「豫譲」にしても、皆色彩には淡泊な方である。「薩南六題」はさて措き、美人畫たる「黒髮」も風俗畫なる「豫譲」も共に頗る簡單な構圖、色彩を用ひてゐるのは注意すべき點で、此の二つが傑出した原因の一つは其處に在ると思ふ。誤解されると困るから云つて置くが、濃厚なる色彩を一概に貶すのではない。濃厚なら濃厚で、巧みに濃厚さを發揮すればそれでよい。今回のには一寸見當らなかつたが、第八回の橋本關雪の「南國」などは濃厚さがよく發揮されてゐたので傑れてゐた。唯濃厚のはいくらよくても長い間に厭きがくるし、淡白でいゝのは厭きが來ないと云ふ事は免れない。今第一印象で黒髮をこれだけ褒めたが、次に行つてよくみてもます／＼よくなるだらうと思ふ。

審査員では廣業の「白馬山八題」が例によつて廣業の新努力を示してゐるのみで、栖鳳の「日稼」にはあまり感服出來なかつた。(招待日の夜)

▽文展批評談

正宗得三郎

▼西洋畫

今年の文部省の展覽會の洋畫部は、丁度美術院と同じ狀態に、僅かに小さい部屋に押込まれてゐる感じがする。二科會のやうな、又美術院のやうな民間的團體が出來たからには、文部省の展覽會に於ても毎年出品する或特種の技巧ある定連の如き人の作品は、なるだけ出品して並べるやうにしなければ、文展の洋畫部は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だん／＼衰微して行くばかりだと思ふ。今年は數の少い上に、活氣ある作品が乏しいので甚だ寂寞の感があつた。中で足を止めさせた作は、兎に角牧野虎雄、片多徳郎、金山平三、和田三造諸君達の作である。

岡田三郎助君の畫は同君達の老年グループの中で餘り荒びないで止まつてゐるのがいい。二枚の中で「花野」と云ふ裸體畫についてはいろ／＼不滿な問題が多いが、それよりも「初夏」と云ふ風景畫は、强味も無いし深刻な藝術では勿論無いが、取扱はれた材料なり、又それに伴ふ技巧が入念に描寫されてゐると思つた。

滿谷國四郎君の作畫は、同君が歸朝後表現法をいろ／＼變へたに拘はらず、どうも自然に對する理解が餘り無視されてゐる事を甚だ不滿に思ふ。和田三造君の作は「南風」及び「煒燻」以後始めて示す處のもので、多くの人はそれを刮目して待つてゐただらうが、大抵の人は「バーの午後」を見て、氣力の無いやうなのに失望したものが多いやうだ。然し僕などから見れば、和田君の今度の藝術は其等よりは品質は良くなつてゐる。

然し人間はその本質と云ふものを、何時まで經つても全然退ぞけるものでないからに、何處か「南風」などにあつた當て氣の處も無いではない。然し和田君がこれまでになつたと云ふ事に僕は贊成する方である。作から云へば散漫で、纏つた感じに乏しい。色は粉つぽく、美しい色が配列してあるが、明暗(ヴァリュー)の感じが乏しい。

南薫造君の二作は相變らず洞察力の乏しい、淡い氣分の畫である。餘り反感も起らない代り感動も受けない。太田喜三郎君の作は去年よりも劣るやうに思ふ。矢張り氏の性質には點線描法の方が適してゐるやうだ。牧野虎雄君の「山間の初夏」はなか／＼凝つた勞作である。が、その凝り方は多く趣味の凝り方で、自然の本體に入つて問答したとは思はれない。一寸ゴガンなどの如きローマンチックのもので、兎に角今年の出品畫の中では佳いものだと自分は思ふ。片多徳郎君の「妓女舞踊の圖」は矢張り牧野君流である。妓女の踊りはキャラクタアに突込んだ處も見受ける。直覺的自然の感じより、錦繪だとか云ふ低個的典型藝術で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あると思ふ。山脇信徳君の「疎林」も佳い方の作であらう、やゝ行き詰つた感じはあるが。金山平三君の作品は平明な處が可いと思ふけれども、その平明は餘りに凡人すぎて熱が無い。大久保作次郎君のは婦人雜誌の口繪の如く甘い繪である。ルノアヽルの藝術は甘い佳いものである。甘くつて佳いものも日本に出て可いと思ふ。尤もルノアノル位になると唯だ甘いとは云へないだらうが。河野通勢君の「自畫像」はデューレルの末流などの藝術を思ひ出さす作である。松井金良の「橋」幼稚だけれども一寸眼に着いた。小寺健吉君と大野隆德君とは寫生と構圖を共にし、自然の感じを得やうとしたものであらうが、その印象は實に呆氣ない。德永仁臣君の「某氏の肖像」はこれだけでも困るが德永君としては良いものゝ方である。

▼日本畫

文展の第一部は宛然屏風で取圍まれたやうに、何の室も何の室も六曲屏風を立て廻してある。入つた順序から云へば、第三室にある榊原紫峰君の「梅雨霽」は堅實でなか〳〵佳い作だと思ふ。恐らく今度の出品畫の中では最も良い部に屬する。第四室にある平福百穗君の「豫讓」は厭やには感じないけれども、平福君の有つてゐる寫生的な良いものではなくつて、巧くそして輕く雜に拵へただけに思ふ。菊地契月君の「散華」は技巧は巧いが一寸も感心しない。鏑木清方君の「黒髮」は色調が好いので氣持がいゝ。もう少し女などの形が確りしてゐれば更に可いだらうと思ふ。能く見ればかなりたよりない處が多い。小さい缺點を見付ければ、髮の水の中にある部が髮が流れたやうな感じがする。矢張り多少線を入れた方がよかつたらうと思ふ。それにたにある蝶はピンで止めたやうに硬い。第十室の土田麥僊君の「春禽趁晴圖」は非常に入念に凝つた、綺麗な作品である。花なども部分部分には、表面なり斜めなり寫生がある。全體の感じは氣持は好いが、何處か主になる力が有ると更に好いだらうと思ふ。第二十三室の寺崎廣業氏の「白馬山八題」は寫生のまゝだと云ふがそれでありながらその感じは古い感じである。又川

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を望んだ雄渾の氣が起きないのも、寫生が乏しいのか、或は日本畫の表現法そのものに寫生と合一しない處があるからかと思ふ。松岡映丘氏の「道成寺」は何處か未成品の感じがした。去年の作から見れば非常に見劣りがする。橋本關雪氏の「倪雲林」は逸筆でもあり、畫を作くるにも馴れてゐる。（談）

▽是ぞと云ふ收穫なき文展

紀　淑　雄

今秋の院展に少くも數點の新收穫を得た後に文展へ行つて、此處に新收穫と云はるべきほどの作品を得なかつたのには少からず失望を感じた。其の失望は院展には美の量に富んだものが多く、文展には然らざるものが多いと云ふ意味ではない。文展にも量の點から云ふと少からぬ美を持つたものが數點に止らない。而かも文展に感じた失望は、院展に於けるとは性質に於て異つたものである。院展は恰度若草の春尙ほ淺い野邊に二三の花を示して呉れたやうに、其の花と背景とのコントラストが著るしく目に立つた。即ち院展の佳作は、然らざるものと比較せられて鮮かなコントラストの花の色を示したものであつた。然るに文展を見ると、恰度一望の花の世界のやうで、描かれたる畫材や物の形ちや、色に種々の變化は有れど、其等の間に優劣美醜のコントラストが著るしく見えてゐない。何れを見ても同じ花で、其内から彼れ此れ特に手にしたいと思ふものが甚だ少いのである。何ものかを得んとして行つた者には、新しい收穫と云ふべき作を與へて呉れぬので、甚だ不滿に感じられる。

文展の日本畫百六十五點の中、最も多いのは風景畫であるが、それを見渡して何が我等に新らしい收穫たる興味を與へて呉れたらうか。寺崎廣業氏の「白馬山八題」は勞作であつて、やゝ同じ種類のものゝ中に光りを放つてゐるやうであるが、然し作者は此畫によると八景の形の變化を見た。そしてそれを表はすに方り其の表現の方法と筆とに興味を持ち、それに沒頭して

其の形の變化に印象された白馬山固有なあるものを忘却したやうである。少くも白馬山に聯想される雄大なあるものを缺いて居る。それが此の畫の生命となるべき要素であるのに、それを缺いた形骸は、寧ろ僅かに其の技巧の遊のみを覗はしめるに止まつてゐる。然し兎も角も此の畫は多くの他の風景畫を代表してゐる。即ち自然の外形、又は其の色彩に專念である他の多くの風景畫も、其の色調を除いてはやはり此の畫と同じく、物の形骸に筆を止めてゐる。それ故此の作と同じく、他の多くの風景畫も、感覺的な美には富むけれども精神美には乏しい。而して技巧を主としてゐる點も亦相互に似通つた所で、唯其等の結果は他のものよりも此の作により多く表はれてゐると云ふ點が違つてゐる位である。

風景畫に次いで多いのは人物畫であるが、之れには二三の種類がある。其の內倭繪の繪卷物を引き伸したやうな作品、即ち倭繪に基いたものには新らしい何の收穫をも得られない。去年の特選であつた川崎小虎、松岡映丘の兩氏も「御產養」「道成寺」によつて見ると兩氏の藝術はもう疑はれて來た。支那の歷史に於ける人物畫の內、目を惹いてゐるものに二點ある。橋本關雪氏の「倪雲林」平福百穗氏の「豫讓」は即ちそれである。が、前者は我々に其の節操と其の散漫なる構圖とを著るしく見せて、淸逸な畫境の天才倪雲林の人爲りを偲ばしむる事を障げてゐる。後者は一目して判る如く、武梁祠堂の畫像其他二三の支那の古畫を踏襲した結果の著るしいもので、又思想と形との一致をも缺いてゐるものである。古い材料に着想を構へて、それに自己の藝術を築き上げる事は、固より批難すべき事では無いが、「豫讓」には刹那的動的の形貌と國士たる風采とに所謂道德的の美が感じられない。然かる道德的意志の強い人に對して感じられる精神美は甚だしく誇張されて、而かも其の弱々しげな形に矛盾な感じを示しゐる。夫の院展の川端龍子氏の「神戰の卷」に於ける龍と蜈蚣とは、二神の表象としては寧ろ可愛らしき程小さくして、裝飾的な貧弱なものであつたが、而か

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も其の繪としての全體の結果は、少からぬ美を語つた。然るに「豫讓」には國士たる風采に相應しからざる程動的な力が表はされてゐる。而かもそれは空疎な力で、精神に於ける畏敬すべき壯美(サブライム)ではない。此の點は是等の種類の繪に果して何が必要であるかを告げ、且つ其の缺けたる結果の如何なるものであるかを示してゐる標本とも見られる。云ふでも無く藝術には一つの、生命たる主要の美がある。そして若しそれを缺いた時には、他に如何に從的の美があらうとも、其の繪は生命の空疎たる非難は免かれぬのである。

人物畫で我國の人に關するものに鏑木清方氏の「黑髪」がある。女の黑髪は女の生活に、又其の戀に聯想せられ、又深く關係されて、古より和歌などには好箇の題目であつた。今清方氏が玆に好個の畫材を見出して、果して何を表はしたであらう。其の背景と二人の婦人とを見れば、相互の關係は其の間の消息を我等に告げてゐない。之れが此の畫に對しての大いなる遺憾である。唯、浮世繪を上品にし、優美に描いたる手腕は、此の畫に於ける着想の缺點をば蔽ひ隱して多くの人の目を惹いてゐる。島御風氏の若い藝術である「かげろう」は「黑髪」と對照すると、種々の點に於て著るしく異つて見へる。而かも其の現代的で憧憬的な肉感的な若き女に、若き人々の心が少からず唆られてゐるやうに思はれる。「かげろう」に未だ若して圓熟せざる筆と色とが、竹内栖鳳氏の「日稼」には遺憾無く圓熟して表はされてゐる。實に氏が巧みなる藝術は、寫實の美を巧みに捉へて、京都の若き田舍娘の姿は巧みに描かれてゐる。而かも其の田舍娘の心裡に徹底して、其の精神を摑(つか)み得ざりし點は、氏には已むを得ざる事としても、阿彌陀佛像の飾つてある本願寺の茶所たる此の場所と、作者の實感とになつた其の作とに對して少からざる遺憾である。之れに似たものに木島櫻谷氏の「孟宗籔」がある。若き者は勞働の疲れに睡つて華胥の夢を見、老いたる者は片時も心に紛糾の綱を緩めないで、過去の生活の思出や、行く末のことなどが偲ばれて、疲(やつ)みたる身體に、而かも暇(ひま)も無き心

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の消息を示してゐる。「日稼」と同じく賞牌に得た作としては、寧ろ此方が或る深味を有つてゐる。唯それがミレーの如く徹底的に深刻に描かれてないで平凡に打見らるゝ處は、未だ作者の至らざるを示してゐる。

斯の如く新らしい收獲らしいものを擧げて見ても、其等が他と對照して甚だ鮮かならざる爲に、大して見榮えもしないし、又新らしき收獲として言ひ得られぬのである。何れも一樣に見へて其の特色の明かならざる點は是等の作品が能く代表してゐる處で、今秋の文展に於ける作品の何れにも行き渡つた缺點である。之れには種々の理由が有らう。文展の日本畫家の多くは依然として古畫及び前回に世評の有つた入賞の作品を模倣し、或は踏襲する爲めであることも一つの理由である。又折衷的な態度が多くの人に取られてゐる事も其の理由の一つである。文展—生活—名譽などと考へて入選に苦心する處の、多くの小なる作家に取つては、折衷は寧ろより多く安全な道である。新古東西の名作を漁つて、之れに多少の潤色を加へた努力位にてやす〳〵と入選し得る事は、經驗ある多くの畫家にも存外能く理解されてゐるやうである。而かも此種の作品は案外入賞の榮を得てゐる例のある事は人の知つてゐる所である。恁かる獨創無き安價の折衷程、其の補綴の露骨して、興味を殺ぐものは無い。此種の折衷が多く試みられてゐる間は、類似したものが多少あることは到底免かれない。又多くは技巧を尊び、殊に色と表現とに甚だしく努力するに至つた事は、何れの作品をも一樣の光のものに見えしむるに至つた一つの理由である。色と表現法とに於ける技巧の著るしく彫琢されて一段の進歩を示して來た事は爭はれない。今年の文展に於ける進歩は何ぞと問はゞ、之れが直ちに答へられる主要のものである。命題から云へば果して那邊に興味を感じて恁かる大なるものを描いたかと思はるゝやうなものを、無造作に描き得るに至つたのも、又大いなる此の屛風に甚だしく散漫なる結果をも示さないで、兎も角も何等かの興味が有るらしく、又少らず形式美を示し得たのは、此の表現法の工風に於

歩の結果である。又色彩についても、それが微細な調和や對照法に至つては、未だ至らざる點は多いが、兎も角も強き色をモデレートに用ひ、それを裝飾的に美ならしめた其の方法は、明かに亦進歩を證明してゐる。然し其等は要するに感覺的の美であつて、誰の感覺にも能く感じられる特徴である。而して多くの作品に於ける其の技巧は感覺的であると同時に寫實的であり、又多少裝飾的であり、而して其等は皆何れも低級的なものであるから、それよりもより高き美に對した時の如き感興を起さしめない。之れが凡ての作品を平凡に見えしめた一つの理由で、多くのものが同じ水平線上に、無特色的に見ゆる所以であらう。

要するに今秋の文展に於ける收穫は有るが如くして、而かも其の如何なるものを擧ぐべきかに就ては、何れも同じ程度の作物が多く、其結果は恰も收穫が無いと同じやうな思ひをさせる。自分に云はしむれば、此の現象は日本畫の衰退を示したもので、日本畫の爲めには賀すべき兆候ではないと思はれる。（訣）

○今度の文展の雙璧が蔣方氏の「黒髪」と白稜氏の「鳴鷺」であることは疑がない。之を他の紛々たる所謂文展派の作品に比較すれば、前者は流れに隨つて流れを渦めるの趣があり、後者は流れに逆つて其波を揚ぐるの概がある。優婉の態、精緻の筆は前者の基調にして、勁烈の情、高古の句は後者の生命である。前者は女性的にして而人間、後者は男性的にして、之を衷心から映賞するものは寧ろ少數の具眼者のみであらう。高等批評の立場より云へば後者を前者の上に置くべきだが、今日の文展の標準より云へば前者が特選の首位を占め、後者が次位にあるのは先づ無難と云はなくてはならぬ。

○氣の毒なのは關野氏と麥僊氏とである。前者の「児樹林」が、闊達な態度、自在の筆を以て些の屈托もなく、輕々淡々描き去つて而かも動かすべからざる力あり、氣品あり、又多少の俳諧をもあらはし得たるは、作者の驚くべき大物たるを十分に證明したるのみならず、あの作品も場中の優品たるに疑ひはない。然るにそれが特選のビリに近い所にあるのは作者ならずとも憤慨せざるを得ない。作者は憤慨の餘り來年からは文展に出品せぬだらうとの噂があるが、之は噂丈けに留まらんことを吾輩は信じ且つ希望する。拗ねて退くは婦女子の事、關野氏の如き男性的藝術の所有者に相應しき態度でない。關野氏たるものは宜しく何處までも自己の力量で以て審査員共を壓服し、若し退くなら其上で「態ァ見ろ」と云つて勝利の笑みを洩らしてから勇退すべきである。

○麥僊氏の「保育繪晴圖」は眞面目なる藝術家の繪である。新なるものと眞なるものとを求むるものゝ物である。小倉の位置に難がある、描き過ぎたと云ふ憾もある。然しあの位落ちついた底力のある、見てゐて見飽きのせぬ繪は他に餘り類がない。ソレが特選にも入らずして、二三の他の低調俗惡な作品に見代へられて居るのは作者に氣の毒である。審査員諸氏に向つても「何を見てゐる！」といひたくなる。（櫻隣）

中央公論社

十一月號

婦人公論

定價 二十三錢　郵税 一錢五厘

■戀愛と結婚の關係を論ず……生田長江
結婚前の女は勿論、結婚後の女も此大論文を見遁す可からず

■家庭は西洋も東洋も同じである……八田三喜
いやに新しがる女に讀ませたいのは此最近歐米觀察の一面

■日本婦人の活動すべき時は今……高島米峰
此非常なる水害を前にして日本の女はまだ眠つてゐるか

■皆さんに舞踊をお勸めします……坪内士行
藝術としても將た女の嗜みとしてもこれ程よい物はない

■食物の話（主婦の爲めに食物の經濟等を說く食物の滋養料理の事切）近藤耕藏

■現代女風俗 北十一　藝術的插畫數葉

諸名家の批判「花の日會」の可否
「日本の娘さんや奧さんが街頭で花を賣る」

■低い鼻を高くする法について……一記者

■仲人物語（不思議な緣で不思議な人と媒酌した目出度い話）中川愛氷

■水の中に明した恐ろしい一夜……上代いく
此回の水害に家と共に流され不思議に命の助つた實話

■繪を見に行く人の爲めに……笹川臨風
なまかじりやらうとする人は先づ此文を一讀してからになさい

■交戰國婦人の目醒しい活動……森下岩太郎
物凄い歐洲の婦人がいかに命がけで働いてゐるかを

■夫の無情を怨んで愛兒を殺した女……澤田撫松
裁判官の厚意で三年間刑の執行を猶豫されて放たれた實話

（新長編小說）玉藻の前……岡本綺堂

（小說）■秘めたる戀……德田秋聲

■神と人（好評ある本誌の特色たる二大長篇）……谷崎潤一郎

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

法學士 細貝正邦先生著

易の原理と其應用

靈氣煥發の域に至らば易占は將に百發百中也。著者の父祖代々儒を以て顯はる。特に祖父造詣易經に最も深し。著者幼にして敎を祖父に受け、長じて最新科學を最高學府に學ぶや、彼此相契合する所多きに驚き、乃ち和漢の易書一百卷を渉獵讀破し、想を練ること數年筆を呵して稿を改むること十有餘回、漸くにして本書一卷を大成す。實に新註易書の先驅にして斯學の最大權威也。

定價壹圓卅錢
送料八錢
三六總布美本

經濟記事の讀み方

紫電一閃萬里の異域より或報導の來るや忽にして起る經濟界の怒濤狂瀾は礎石の鐵壁を誇れる大會社も一朝にして跡を絕ち、巷裡の一窶子却つて座して金殿玉樓の人となる。實業家の興亡大は却ち斯の如し。試に新聞紙の經濟欄に就いて諸君が有する株券の價格を驗せよ朝な夕な己が財產の增減しつゝあるにあらずや。經濟の變轉小にして尙且つ斯くの如し。海圖をよみ得ざる船長と、經濟事情を處得し得ざるの實業家と其の何れが危險なるや。

定價壹圓
送料六錢
三六總布美本

(中付二ノ二)

東京市京橋區南紺屋町十番地 實業之日本社發行 振替口座東京三二六番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英傑傳叢書全部十二卷

第一編 ワシントン

第一高等學校教授文學士 矢代幸雄先生
第七高等學校教授文學士 井上赳先生
共著

世界近世の歴史上に於て、ワシントンの如く偉大なる人は他に匹儔を見ず。其の生涯は眞率にして其の性行は平凡なりき。しかも偉大なる平凡は實に平民の典型なり。世にワシントンを語るものは多し、然るに未だ邦文ワシントン傳の完きものなきは、其の偉大を知りて平凡の傳し易からざるに由來せずんばあらず。本書は此の缺點を補はんとして出でしものにしてワシントンの邦文詳傳の一たると共に一面に於てはまた米國の獨立史也。（東京朝日評）

第二編 ビスマルク

法學博士 蜷川新先生新著

英傑傳叢書の第二編にして、獨逸民族統一の大事業を完成せし奇策縱横の偉人ビスマルクの生涯を、「その家柄と少壯時代」「外交官時代」「皇帝との水魚の關係」「其對內策」「其對外策」等の諸章に評傳し、別にその警句書信を添へたり。敍述の正確にして繁簡其の度を得たる、正に邦文比翁傳中の白眉として推すべきものなり。（萬朝報評）

第三編 ルーテル

米國紐育市ユニオン神科大學教授、マギッフォート博士原著
日本の「宗教改革史」著者・村田勤先生譯

ルーテルは天下の快男兒也。名利を超越して惟り神を畏れし英雄也。獨逸の僻村に生れ、大學を卒へし後飜然僧となり、程なく宗教改革の大波瀾を捲き起し、歐洲列國を震動したる大活劇を演ずるに至れり。文藝復興はやがて宗教改革を生み、宗教改革は更に政治上社會上の革命を誘致して近世文明の大勢を釀せり。近代文化の淵源を探り、剛邁なる獨逸國民性の由來を知らんと欲する者はこの傳を讀め。彼は其の偉大なる胸襟を開放して卿等に示さむ。

◁定價貳圓・送料十二錢・菊判總布・函入美本▷

東京京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社發行　振替口座東京二三六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中村二ノ三）

天覽　蘇峰　德富猪一郎新著（再版）本社創立三十年記念出版

杜甫と彌耳敦

特製

三百部限　刊行內二百部發賣 ― 最上洋紙總黒革天金　函入菊版八百八十頁 ― 定價金六圓　郵税三十錢

上製

總クロース上製天金　函入菊版八百八十頁　定價金三圓五十錢　郵税金二十錢

內容見本御申越次第進呈す

東西二大詩人の記傳

本書は著者三十餘年來の宿志を成就したる、文學界空前の大産物と云ふを憚らず。其の記述する所、獨り杜甫と彌耳敦の兩人に止まらず。今其の大綱を擧げん乎、▲第一章　總論（即ち詩人論）▲第二章　彌耳敦以前の歐洲及英國▲第三章　彌耳敦生涯の第一期▲第四章　英國革命時代▲第五章　彌耳敦生涯の第二期▲第六章　彌耳敦と其大作▲第七章　晩年の製作と其終焉▲第八章　杜甫以前の支那▲第九章　杜甫の生涯▲第十章　支那詩概觀▲第十一章　杜甫と李白▲第十二章　杜甫詩概觀▲第十三章　詩人としての本領▲第十四章　杜甫と彌耳敦。是れ也。本書は東西兩詩人の記傳たるのみならず、一部の『支那文學精華史並に唐代史論』又は一部の『英國革命史及近古歐洲思潮』と云ふを得可し。若夫れ杜甫と彌耳敦に至りては、著者滿腹の同情と觀察とを以てし、精神の貫注する所、筆力の煥發する所、眞に文壇最高の權威たらずんばあらず。特に其の詩人たる獨特の位置と、伎倆と、性格と、思想と、人物とに就て各別に細論し、最後に至り兩人を把て併觀し、縱横無盡に較論す。眞に屠龍搏虎の手也。眞に曠世絕俗の筆也。古人が杜甫の詩を評したる渾涵汪茫、千彙萬狀の語、獨り之に當る可し。

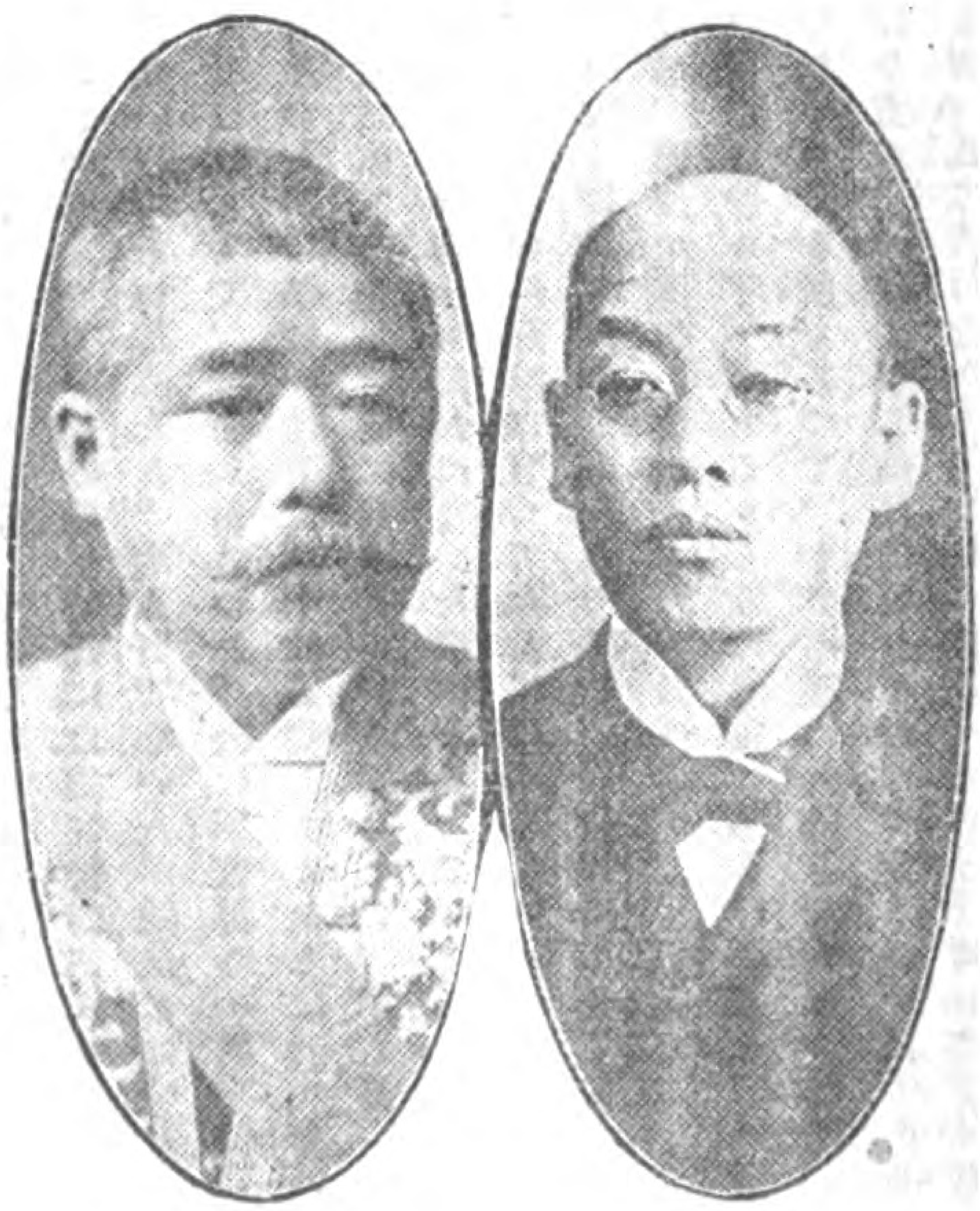
發行所　東京市京橋區日吉町　振替口座一三一〇〇　民友社

信用な[illegible]店舗及び卑猥なる賣品[illegible]は謝絶す
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人物評論（八十七）

北條學習院長
と
福原東北大學總長

▽兩者各々適所を得たり



文學博士　澤柳政太郎

福原君は長らく專門學務局に居つたから、東北大學の事は創立當時から知つてゐる上に、專門學務局の仕事は大學に關する事が多いので、大學と云ふものゝ性質には、大學の內部にゐる人達よりも能く通じてゐる。或る一の講座を擔任して專門的な講義をする事は、大學で其の實際に當つてゐる教授に比べ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、或は及ばないかも知れないが、大學の組織、大學の經營、西洋各國の大學の狀態等の行政的方面に就ては、福原君は教授連よりも遙かに深く廣く通曉してゐる。西洋へ留學した事のある教授は、成程自分の學んだ大學の事は知つてゐるであらうが、他の學校の事には暗い。福原君は文部省に長くゐて其方面の研究を積んでゐるから、世界の大學がどういふものであるか、どういふ趨勢になつてゐるか、時代の要求に應じて大學はどういふ仕事をしなければならぬかと云ふ事を知つてゐる。此點では前の東北大學長であつた北條君よりも適任である。固より北條君も行政の局にゐたことこそないが、教育の實際には當つてゐたのだから、大學總長も決して不適任であつたと云ふのではない。然し大學總長として赴任する前は普通教育に從事してゐたから、大學の本質を能く了解してゐるといふ點に就ては、福原君に一步を讓る。加之、福原君は才子であつて、學問の上から云つても學才がある。學校時代でも級の首席か次席で、出來の餘程良い方であつた。從て學問に對する趣味は深く持つてゐる。長らく行政官をしてゐたので、多少世間化してゐる事は免かれないが、最高學府の主腦者としては、此點から云つても適任者である。

北條君の方は、以前の東北大學總長としての地位よりも寧ろ現在の地位の方が一層適當してゐる。學習院は教育の程度から云ふと、最高科程の高等科は高等學校に相當し、中等部、女學部は夫れ〳〵中學校、高等女學校に相應してゐる。更に其下に小學校に當るものがある。然し學習院の本體は中等教育及び初等教育にあつて、最高科程は寧ろ附屬的のものである。北條君は長く廣島の高等師範學校長として中等初等の普通教育に携つてゐて、其點に幾多の經驗又調查した處もあるたらうし、大學の總長になる事は以前に豫期しなかつた事かも知れない。恐らく大學の事は大學に行つて始めて研究された事と思ふ。所が今度任に就いた學習院の事は先生が極く旺んな時期に於て其の局に當つた普通教育だから、最も適任であらう。附屬とも云ふべき最高科程の高等科の教育については、北條君は以前山口、金澤の兩高等學校長をしてゐた事があるから、高等學校教育にも經驗が有る。さう云ふ點でも適任である。更に北條君を歷代の學習院長と比較しても最も適任者と思はれる。人格が高いと云ふ事があつたらうが、どうも是迄武人の院長の職に當つたのが多かつた。彼等は一個の人物としては確かに尊重すべき人であつたらうが、肝心な中學教育、小學教育又は高等學校教育に就いては、何等通曉してゐる處が無かつた。主腦者がそれに通曉してゐない事は適當ではない。其の爲め補佐役が必要になつて、前の院長時代には補佐役が三人もあつたが、已むを得ない事であつたあらう。武人出でない人が院長となつたものに、ずつと昔は別として、近衞公があつた。公は華胄界の一異才で、確かに人物であつたが、學校の仕事には十分通曉してゐたとは云へない。寧ろ一個の政治家であつた。後に菊地男爵が就任したし、極く僅かの間であつたが山口理學博士も院長になつた事がある。是等は長く教育界學界にゐて、教育の事業に趣味は有つてゐたには相違ないが、中等教育や初等教育に親しく經驗を持つてゐた人ではない。是等に比べても北條君の學習院長は、適所に適材を置いたものと云へる。

福原君は仲々才子であるから圓轉滑脫であるけれども、一面又不羈磊落の如く見える所もあつて、まア一種の人物と云へる。北條君は謹直な質朴な方で、才氣は寧ろ缺けてゐると云つて宜しい。極く地味にやる方である。此二人はなか〳〵趣味のある人である。福原君は元來專門學務局の管轄に屬する爲めではあるが、文展などにも關係して、委員長になつたのは第三回目からであるが、創設以來いろいろ世話を燒いてゐる。地方行政官として奈良に行つてゐた事もあつたりした爲めか、美術に對

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する趣味はなか／＼深くて、批評眼もなか／＼高い。文展が始まると役所の事務をほつたらかして出懸けて行く程の凝り方である。碁も烏渡強いさうであるが能く知らない。詩も素人が見ると巧とやうに見える位黒人染みた詩を作くる。北條君もなか／＼趣味があつて。それに耽溺する方である。主なる趣味は碁と謠曲であるが、碁はなか／＼强くもあるさうだし、相手が無ければ獨りで打つてゐるほど好きである。一見田舍漢のやうな樣子だが、謠曲は根が金澤の人だけに、御多分に漏れず、好きで上手である。芝居に對してもある理解を持つてゐるらしく思はれる。仙臺などでは總長は碁と謠ばかりやつてゐて困ると云ふやうな評判が出た位である。其外北條君は坐禪もやる。之れは何の位堂奥に入つてゐるか判らないがかなり眞面目にやる方だと思ふ。

▽北條と福原

大蘇鋏人

其一

北條と福原とは對照す可き興味の有る適役者では無い。然し此の二人を對照するの必要が有るとすれば、其は、仙臺、或は東北の大學から見れば、前總長と新總長とである。教育界から言ふて見れば、北條は元と學術を標榜して、學者、教育家として進んだ人。彼は學者肌であつて、學者として終始す可く思はれて居たのであるが、常識も發達し、事務の才もあり、圓滿でもあるので、知らず／＼學者から教育家になつて仕舞つた。福原は徹頭徹尾、行政の才幹を以て進んだ人で、學校に奉職した事は無い。全く教育行政家である。行政官である。其が、一躍して大學總長になつた。大學總長たる者は純然たる行政官に非る事は申すまでも無い事である。然れども教育家肌を有せざる福原は、飽くまで大學總長を行政官的に行るであらう。北條は學者的に教育行政を行つて來た。此の二人者の間には、是丈けの對照の興味は有る。而して福原は風采が豐勇らしく見える割合に、强い人では無く、北條は溫柔に見えるけれども、一旦、決斷したところは、案外、頑强である。故に北條は、引當てになる人と、内外から思はれる。此の性格が則ち彼をして今日あらしむる所以。福原の性格も亦た彼の運命を齎らし來つたのである。

此の二人が、同大學に新舊總長としての評價は如何。教育家として、共に有數の位地を占めて居る二人の前途は如何。今日、新任の際に於て、興味ある話題で無いわけでも無い。

其二

大學總長が、官歴上の待遇は、大臣と次官の中間位に在る。尤も總長の人物に依つては大臣以上で、東大の總長の如きは、斷然として頭角を拔いて居る。東北大學の總長は大學の中では貫目の少い方で、實際に於ても領域が少い。札幌の農大は別物のようになつて居るから、東北の總長は事實に於ては仙臺の總長である。嘗て、文部大臣の候補ともなつた福原としては、不滿足であるかも知れぬが、此の外には行く可き位地は無いかと思ふ。

從來の各大學總長の中で、一たびも大學教授たらずして任命された者の中には、北條、澤柳、及び福原の三人であるが、其の中、北條は豫備門の教授、澤柳は高等學校長。ともに大學に因縁が遠くは無い。眞野は文部の局長であつたが、本職は大學教授であつた。純然たる行政官の出身に

原を以て嚆矢とする。此の意味から見ると、福原の成績如何は、純然たる行政官が大學總長としての適否の問題に參考ともなる可きもので、教育界が彼に注目するであらうし、彼の責任も中々、輕くは無い。北條の總長から院長たるは官歴の上からは榮轉でけ無いが、事實に於て榮轉である。社會的に、殊に、聲價を揚げたのである。學習院長は、昔は、觀樹將軍或は近衞公などが、其の任に當つて重職であつたが、中頃から宮内省の方針が變はつて、教育家任かせとなり、理學博士山口鋭之助などいふ人が院長になつた事もあり、高等學校くらゐの格に落ちた事もあるが、乃木大將以來、非常に名譽ある位地となつた。前任の大迫大將は、閲歴の釣合で面目を維持して居たので、教育上の實務は御用掛の手にあつた。そこに院長としての弱點もあり、學校の不便もあつた。其等の不備を補ふ爲に、北條の新任となつたのであるから、彼の責任たる重大である。彼が此の重責を完くした上では、如何なるかと言ふに、前途の事は豫言し難い。然し、彼が教育家として享受し得る最上の榮譽は、恐らくは此の位地に於て得られるであらう。

其三

福原は、思の外、氣の小さい人らしく思はれる。一體非常に肥滿した人に神經質の人がある。例へば梅ケ谷の如きが夫で、福原も其の一人らしい。磊落、無頓着は彼の皮相で、彼は案外、强い人では無く、見掛よりも正直な、圓滿な人である。彼の運命は、譬へば、飛雙六で、上りを通り越した人であらう。彼は文部次官として、多年、上りの次席に居り、賽の目の一を振り出せば、卽ち文部大臣になつて拍手喝采せらる可き地位に居た。淸浦内閣の準備の時、賽の目が、彼の爲に、一を持ち來たしつゝあつたのが、紙上に落ち、何かの故障の爲に、一轉して、二が出た。依然として舊位地である。其れから以後は、内閣は幾度も變更されたが、彼は其に懲りたの乎、遂に、賽の目を振つて見て二が出たのでは無く、一が出そうにないから振つて見ないで、今日まで舊地位に賽を握つた儘で、眼前に上りを眺めて、滯在したのである。其の中に、一木だの、高田だの、岡田だの、飛出しては上りを取るので、福原たる者何時までも、賽を振らずに休んで居るわけにも往かぬので、双六を思ひ切つて、退場したのが、彼の文部次官辭職であつた。

彼の長々しかつた双六競技に、遂に、上りを取らなかつたは氣の毒であつた。殊に、出發點の華々しく、前途有望で謳はれた彼の生涯としては一層、氣の毒に思はれる。彼が双六を已めてから、東北の總長になつたのは、譬へば上りを取らずに賞金を貰つたようなものである。

（十月廿一日、曇、稿畢つて玉川に行く。）

▽福原君は大學向、北條君は學習院向

専門學務局長　松浦鎭次郎

大學と云ふ所には一種特別な空氣がある。大學の内部にある人達は皆夫れ〳〵專門の學者許りであるから、總長と其等の人との關係は自ら他のお役所とは違つて、上官と下僚、命令と服從と云つた風の關係では迚もやつて行けるものではない。其上醫科とか法科とか理科とか工科とか云ふ風に各分科があつて、各一種の自治團をなしてゐるから、統轄の任にあるものは各分科の圓滿な調和を保つて、尙其上に大學全體の發達を圖

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて行かねばならない。此の全體の調和を圖つて行く事は、必ずしも學者でなければ出來ぬと云ふものではない。寧ろかゝる事は其の專門とする所に忠實でなければならぬ學者よりも、寧ろ行政的手腕を有する人の方が實績を擧げ得るかも知れない。然し單に行政的手腕は有つても、一種特別な空氣のある大學を統治してゆくのであるから、普通の役人育ちでは駄目であるし、又お役所式にやられては内部の人達が迚も治まつて行かない。是等の點から見ると、福原君のやうな人が總長として大學を統轄して行く事は至極結構で、寔に適任であると思ふ。福原君は全體を圓滿に調和融合させて行くやうな行政上の手腕は有ると云ふよりも、さう云ふ事が最も此の長ずる所である上に、一方學者を尊重する道を知つてゐるから決して下僚扱ひにしたりするやうな事はない。かゝる點は迚も他人の企て及ぶべき所でない。福原君は一見豪放磊落で邊幅を修めず壯士のやうな風采をしてゐるが、あれでゐて常識が非常に發達してゐる。であるから締る所はちやんと締る。決して粗大ではない。世間には頭が粗雜で、ポーツと大きな人があるが、福原氏のはそんな型ではない。構はないやうでゐて、要所はぴたとりと押へてゐる。大まかな所があるが、仕事をする上には決してソツがない。此邊なども大學の總長として誠に適任である。

北條君も人格の立派な人である。高等學校の校長もしたし、高等師範學校長もして成功した人である。東北大學も創立當初からではないが澤柳氏などと共に盡くした方で、醫科大學の創立には隨分骨を折つたものである。彼には工科を作らうと苦心した。福原君とは性格が違ふ。何方かと云へば自分で計畫して行く方で、大學などと云ふ一種特別の空氣の間に立つて、全體を甘く調和して行かうと云ふやうな點は福原君の方が勝れてゐるやうに思はれる。然し學習院の如き性質の學校に長として立つには、人格の人である丈けに矢張り北條君などは最も適した方であらう。

▽行政官の大學總長は僭越

學界の人

○私は福原と云ふ人はゴク當り前の人だと思ふ。官吏になると大抵官臭がつく。又強いて官臭に染まざらんとすると野狐禪になる。而し彼れ福原は官臭があるでもなく、又野狐禪になる程でもない。いはば極く自然な極くいへば平々凡々な當り前の人間だと思ふ。彼に官臭のないことは確かだ。弊衣破帽で平然としてゐる。然しそれが努めてゞもない。當り無頓着なのだ。人に接しても洒々落々としてゐるが、そんなことは誰でも出來る。それが本當にエライのならば、どこかにもつとエライと思はしめる所がありさうなものだ。矢張り私はあの人には立ち入つてエライ所のないのだと思ふ。

○あの人の私生涯に於てはさう批難すべき所がないとするも、決して識者をして傾倒せしむべき生涯を送つて居る人とは思はれない。人の私生涯に亙ることだから、之を例證することは差控へるが、世間の通俗な見方に從へば、藝者買ひなどをせぬ所謂謹厳な人の部に屬するのだらう。

○それから教育上の施設だつて、あの人の創出したものは特に何にもない。日本の從來の官僚の遣る丈けの事は遣つたけれども福原を教育行政家として特に傑れたものとするならば、普通の官僚より彼をデスチングイシユする丈けの經歷がなくてはならぬ。然し彼にはさう云ふものは一つもない。若し教育上に經綸ある人ならば大學總長などになる筈はない。大學總長と云ふ地位に、普通の行政官の古手を持つて行くと云ふ事は世界に類の無い事である。學校の創設の際ならまだしも——創業の際て無論ちつともよい事はないが——出來上つた大學を率ゐて行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うしても矢張り現に學問をやつて居る人で、學者で、會教育的見識のある人でなければならぬ。然し不幸にして日本には學問でもエライ人があるないが、夫れ以上教育上に意見のある人が少い。だから官吏の古手なんかを大學總長に持つて來るんで、之は或一面に於て學界の耻辱である。學界の學問上の耻辱にあらずして、學界の人格上の耻辱である。然しそれにしても學問に直接に緣故の無い所謂行政官が總長の任を汚がすと云ふ事は僭越極まつて居る。育兒法の理論上の研究は子供を産つたことの無い人でも出來る。本當に子供を育てるには子供を産つた人でないと行届かない。大學の本當の經營は學問をした人でないと出來ぬ。大學經營の行政的方面の如きは書記官の遣る事である。日本の官制では書記官と云ふ地位をさう重く見て居ないから、福原を書記官に持つて行くことは出來ぬだらうが、然しさう云ふ種類の行政官を大學の幹部に入れるならば書記官以上に入れては大學たる權威を損ずる。又入つて行くものも身の程を知らぬにも程がある。福原氏は何で東北大學總長の任を受けたか知らぬが、大學總長の任が自分に勤まると思つて居る風では決して教育上の經綸あるものとは思へぬ。一時の御都合主義に迎合して行くやうな人では、當節の碌々者流の間に一頭地を抽んで居る才物と見る譯に行かない。

從來文部省には全然教育に暗い人が大臣になつたり、偶、文部省系統に育つた人でも、岡田現文相のやうな現代の思想と非常に關係の遠い舊式の人物が局に當つたり、同僚としては、例へば田所現次官の如き頭腦が石より堅くなつた極めて偏屈な凡才が居るから、偶々福原と云ふものが勝れて見えたのであらう。今の所は要するに鳥無き里の蝙蝠で名を成したのであるが、若し彼にして今日の虚名を實にしようと思ふなら、もつと根本的に修養啓勵しなくてはならぬ。北條氏のことについても今は何にもいひたい事がないからやめて置く。

△新舊東北大學長

鐵拳禪

一

北條時敬の謹嚴は、殆んど教育界の通評である、一にも謹嚴、二にも謹嚴、三にも謹嚴、謹嚴を除いては北條時敬が成立しないと云ふ有樣である。して、その謹嚴のメートルは、四高校長の時分も、北大總長の時分も殆んど同一で、上りもしなければ下りもしなかつた。恐らく學習院長の今日と雖も、亦然うであらう。何となれば、彼れは學習院長になつたからとて、改めて挨拶を謹嚴にし、笑ひ方を謹嚴にし、歩み方を謹嚴にする人でないから。謹嚴は全く彼れの性格であり、習慣であるから、謹嚴其物を粧飾する爲に、苦痛を感ずることは無さ相であるが。又謹嚴相應に、謡曲とか、詩賦とか、圍碁とか、趣味の境地に入つて、ちよつと肩を拔くやうなこともする。

然らば、彼れの謹嚴振は如何と云ふに、彼れは居常端然と威儀を整へ厠に上るにさへ袴を放たないと云ふ程に、心掛が可いのである。こんな所は、常に軍服を著て居たと云ふ乃木將軍と似てゐる。で彼れの謹嚴を評して「彼れは、ちよつと文官の乃木と云つた風さね」と云ふ人も少くない。併し四高校長の時分、この謹嚴から發動した嚴格が禍をなして、袋叩に會つた事もあるさうだ。之も當時の出來事で、彼れの謹嚴を裏付ける話柄だが、伊藤公が北陸漫遊の途次金澤に寄るや、彼れは早速之を訪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同して、國家の重臣が妓に戯るゝが如きは風敎を害すること甚しいものだと云ふ意見書を突き付け、公を苦笑せしめた事もあつた。彼れは夫れ程に風敎を念とし、自らの謹厳に人を同化しようと思つてゐる。

彼れは石川縣の人で、最う安政生れの五十九、前額の謹厳が少からず興味と光とを持つて來た。帝大の理科を出たのは菊地大麓と同年で、今より三十三年前。爾來高等學校の敎授を勤め、四高校長、廣島高師校長を經て、大正二年五月北大總長となつたので、大抵田舍廻りに長い月日を送つた。彼れが一枚看板の謹厳は、即ち此の間に出來上つたのであるが、彼れの才幹も、力量も、皆この謹厳に蔽はれて評判には上らないが、北大總長としては、可なり仕事をやつたやうである。實際本人も長く其の職に留つて、何事かを成さうとしたやうである。それが再三の辭退にも拘らず、學習院に引き上げられた。院長の仕事は總長のそれに比べれば、非常に樂で、彼れの取つて置きの手腕よりは、謹厳の方がより多く物を言ふであらう。

二

謹厳總長の後に、無頓着の福原鐐二郎が厭應なしに擔ぎ込まれた。彼れは二三年越の麥藁帽を被つて、平氣で徒歩ると云ふ風に、威儀の方は至つてお粗末である。晩餐後に、浴衣掛で神樂坂の夜店を素見すことも珍しくはない。事によつたら、壽司の立食位はやり兼ねまじき元氣である。奇を衒ふのか、廣告の爲かは知らぬが、兎に角彼れは此の無頓着さと、奇行とで以て、變物の名を儲つて來てる。今度北大に赴任するにも、ちよつと和服を著て出掛けて行つて、挨拶をしただけで直ぐ歸京した。そして往訪者の名刺も澤山に袂に入れて歸つたなどと、愛嬌の積りか、無頓着を廣告する積りか、そんな事を云つて居る。北條の謹厳とは、餘りに距離が遠くて比較にも何にもならぬ。

福原は三重縣の人で、明治元年生の丁度五十である。二十五年に法科大學を出て、遞信省の試補となつた。次で内務省に轉じ、それから參事官會部長を歷て、文部省參事官となり、視學官となり、三十三年には獨佛二國に留學して、研究の色揚をやつた。歸朝すると專門學務局長になり、文部次官まで累進して、可なり長い間文部の飯を食つた。そのお蔭で、省内の事務に通曉し、次官は何でも福原で無ければならぬやうな時期もあつた。餘りに椅子にほとぼりが著いて、官僚式を露骨に發揮するやうな事もあつたが、民間からも、官界からも信任されて居た、何處か茫漠とした大きな所があつて、人を容れ、人を反撥せぬやうな、極めて如才ない所もあつた。怜悧とか、敏腕とか云ふ風ではないが、切れぬやうで切れる山刀のやうな、重い切味のする手腕を持つて居た。文相の女房役としては、適當な人物と見られた。新聞の號外辭令で、文相の宿まで付けて了つたが、其の椅子に据れば、次官の時程の手腕は揮へないかも知れぬ。彼れは他の役人に比すれば、人物の大きな、面白い所があるが、矢張まだ事務官の域を脱しない。練達した事務的手腕で、こつ〳〵仕事をやつて行く方の側の人である。

總長は事務官で、學者を必要としない。草創の北大などには、彼れのやうに本省の呼吸も知つて居り、事務に練達してる人物が可いのである。實際仕事をする上から云へば、謹厳の一枚看板よりは、斯の茫漠彼の腕が、どんなに頼母しいか知れぬ。敎授連の質朴と云ふ事もあるが、彼れの包容力は學者の鼻息を緩和するに十分であらう。それに彼れは、北大の創立とは密接な關係がある。時の内相原が古河家から寄附金を出させて、北大を成立させた時、その成立に盡力したのが福原である。福原の總長就任は、寧ろ北大の望んで居た所であるから、當分何事も圓滿に進行する事と思ふ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次號說苑豫告

「知名の兄弟を產んだ父母の硏究」

兄弟が揃ひも揃つて世に名を爲せるは何の爲ぞ。之れ豈に其父母よりの遺傳及び敎育に因る所尠しとせんや。之を究むるは父母及び敎育家にとりては勿論、將來家を成し子女を產むべき靑年者にとりても重要にして興味饒き問題たらずんばあらず。兄弟共全國に名を馳する文學者・藝術家・學者・政治家等數十氏について、多くは其知名の兄弟夫自身より其父母に對する正直なる感想を集めたるもの約五十頁、之れを次號の說苑に滿載して讀者の淸覽に供へん。

（編者申す。之を本號に掲載する豫定なりしも豫想外の長篇多き爲め頁數の都合上之を次號に發表することゝなせり。此旨寄稿者諸氏に謝す。）

家庭醫學叢書

全部五十册完成 定價各册十五錢 郵税各册二錢

吾妻醫學博士述●お産の話
唐澤醫學博士述●小兒病の話
千葉醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
山田醫學博士述●神經衰弱の話
額田醫學博士述●肺結核の話
岡村醫學博士述●皮膚病の話
佐藤醫學博士述●婦人病の話
廣川醫學博士述●淋病の話
佐藤病院長述●黴毒の話
森肛門病院長述●肛門病の話
杉江醫學博士述●ヒステリーの話
南醫學博士述●胃病の話
中原醫學博士述●外科療法の話
森醫學士述●呼吸器病の話
竹中ドクトル述●性慾教育の話
森醫學士述●病人看護の話
中村醫學士述●精神病の話
菊地醫學士述●脚氣とリウマチスの話
齋藤ドクトル述●寄生蟲の話
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 上卷
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 下卷
竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
岡崎醫院長述●有益危險食物の話
阿久津醫學士述●男子生殖器病の話
森醫學士述●漢藥と洋藥の話
高橋醫學士述●妊娠と避姙の話
杉本醫學博士述●便泌と下痢の話
森醫學士述●注射の話
井上醫學士述●眼病の話
落合ドクトル述●科學的美容法の話
額田醫學博士述●糖尿病と腎臟病の話
上田醫學博士述●腦病の話（上卷）
同●腦病の話（中卷）
同●腦病の話（下卷）
岡崎醫院長述●有效漢藥療法の話
竹中ドクトル述●肺病有效療法の話
衞生新報社編纂●物理的健康增進法話
同●化學的健康增進法話
同●精神的健康增進法話
同●滋養食物と滋養劑話
同●兒童健康增進法の話
同●婦人健康增進法の話
同●黴菌と消毒の話
同●生殖衞生の話
同●營養療法の話
同●癌の話
橫手醫學博士述●理想的飲食物の話
小川醫學博士述●心臟病の話
宮原ドクトル述●理學的療法の話
森醫學士述●九種傳染病の話

體力養成叢書

▽冷水浴と冷水摩擦 大澤醫學博士述 ▽定價二十錢 ▽郵税四錢
▽腹式呼吸 二木醫學博士述 ▽定價二十五錢 ▽郵税四錢
▽海水浴 栗本醫學博士述 ▽定價二十錢 ▽郵税三錢
▽滋養物の攝取 樫田醫學士述 ▽定價五十錢 ▽郵税六錢
▽深呼吸 遠山醫學博士述 ▽定價二十五錢 ▽郵税四錢
▽呼吸靜座法 伊藤尙賢述 ▽定價二十五錢 ▽郵税四錢

著者自費出版の引受

印刷、製本、出版、廣告、販賣等總て書籍出版に必要なる手數一切を引受く、御依賴御希望の方は原稿御送附あれ、見積書提出す

組合セ本箱

東久邇宮家、梨本宮家、朝香宮家を初め奉り德川公爵家、大隈候爵家、伊藤公爵家等の諸名家より御注文の榮を辱ふせる最善最良の本箱……△種類價格並に構造を示せる目錄……郵税二錢封入御申越の方へ進呈す

書籍雜誌小賣販賣

新刊月報 雜誌目錄、新橋堂出版目錄郵券二錢封入御申越の方へ即時發送す

年末年始 廣告的進物品製作引受

其必適品として卓上備忘曆、電話商號早見カード、廻轉式日取曆等を販賣せる弊店は御注文に依り各種廣告的進物品製作の御需めに應ず

內外美辭名句集（全二十册）

夏目漱石美辭名句集
尾崎紅葉美辭名句集
高山樗牛美辭名句集
三宅雪嶺美辭名句集
德富蘇峰美辭名句集
森鷗外美辭名句集
トルストイ美辭名句集
ニイチエ美辭名句集
ゲエテ美辭名句集
イブセン美辭名句集

ツルゲネフ美辭名句集
ダスタエウスキー美辭名句集
樋口一葉美辭名句集
曲亭馬琴美辭名句集
德富蘆花美辭名句集
近松巢林子美辭名句集
國木田獨步美辭名句集
幸田露伴美辭名句集
大町桂月美辭名句集
坪內逍遙美辭名句集

定價各册十八錢 郵税各册二錢

●發賣元 東京市銀座通新橋際 振替東京二一〇〇番 電話新橋一九九一 新橋堂

（中付三ノ一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

太靈道

定價一年税共參圓 半年税共一圓五十五錢 一部廿五錢税二錢

創刊號

十一月一日發行

東京麴町一番町四二
宇宙靈學寮
振替東京三三二三〇番

●普く萬衆に諮ぐ
●太靈道・靈理學・靈子術
●太靈道發展と我國民の覺悟
●太靈道より觀たる藝術
●生命と靈子
●予が靈子作用の確實を認めたる楷梯
△小説 一杯の茶(太靈道の效顯)

太靈道の深呼吸法【連載】
新時代に活動せんとする者は此深呼吸法を行ひ、奮闘力を增大せよ

精力を增進する法【連載】
精力は人生の基本である如何にして增進し得る乎

新健康長壽法【連載】
心身の强健を求むる者は此無藥簡易の新健康長壽法を學べ

△靜座法で體の動き出す原理說明
●靈子作用の奇蹟的効果
●靈子作用に依る疾患の透視
●靈子發顯檢知方法
●醫療に應用したる靈子作用實驗
●益々興味ある靈子術
●英文 TAIREDO

太靈道主元 田中守平
海軍少將 石田一郎
陸軍主計總監 井出治
米國哲學博士 中根環堂
陸軍一等獸醫正 篠崎雅太郎
女流作家 長谷川時雨

滿誌靈氣溢る

東山大化
醫師 朝倉松四郎
醫師 望月大祐
陸軍少將 横田宗太郎
陸軍一等軍醫 衣斐賢治
陸軍砲兵大佐 間宮春四郎
ジャパンマガジン主筆 ブライアン

(中付三ノ二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

太靈道は修養界治療界の最新權威として識者階級の間に勢力を有するに至り、近時また外國人にして此嶄新なる思想、學理、作用を研究するもの漸く多く、將さに大靈道は世界的の發展を遂げんとするの機運に際會せり、これ實に時代の要求然らしむる所にして此秋に當りて雜誌「太靈道」新たに發刊せられ普く萬衆をして靈澤に浴せしめんとす、其内容目次の一端は前頁記載する所の如く、此他種々有益多趣味なる記事を以て滿たされ一讀誰人も靈境に入るの思あらしむ、若し夫れ世上精神上の煩悶を懷て宗敎、哲學等に依りて解決安立を得ざる人々肉體上に疾患を有して醫療も尙ほ能く効を奏せざる人々、及び靈的研究に趣味を有する人々又は靈界に立ちて聖業に從事せんと欲する人々は速かに雜誌「太靈道」を一讀して以て其内容を知了せらるべし。

（申込は總て宇宙靈學寮宛の事）

● **太靈道講話會**（傍聽無料）　十一月十一日午後一時より　本院に於て

● **太靈道特別講授會**　第廿期　自十一月十二日　至十一月十六日

● **靈子顯動作用講授會**　第十五期　自十一月十七日　至十一月廿六日　第十六期　自十二月一日　至十二月十一日

● **太靈道及靈子術講授錄**　（既刊）

東京麴町一番町四二

太靈道本院

電話番町三〇四八番

（中付三ノ三）

信用なき商店及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新東洋

■■■■■■ 内容の獨特と報道の機敏と論旨の健實とを特色とせる

ニューイースト

新東洋は世界的智識の供給者として日本讀書界の爲常に宇内大勢の鳥瞰圖を提供せんことを本務とす

主筆 ロバトソン・スコット

十一月號要目

近代思想の巨頭 バァナァド・ショウ氏

「日本に寄する辭」

是、氏が我國に對する最初の告白として大正六年度日本言論界の一大異彩たるべきもの、本誌の爲め、特に寄送せられし自筆原稿をば寫眞凸版として掲載せり。

日英兩國の離婚法……穗積重遠

我が大戰觀……澁澤榮一

戰爭 寫眞漫畫 泰西名畫 カット等 特載

▼ベサント夫人と印度自治▲

▼歐洲の二元兒▼英國の娘子軍▲

▼歐米の養子法▼論戰と武士道▲

▼ジブラルタル遷附論▲

時事評論

本欄は歐米に於ける社會文藝政治科學大戰に關する最近の思潮を論評せる本誌の最も特色とする也

▼政黨政治と叙動問題▲

▼飛行界近況▼支那出兵論▲

▼出版法と著者▼勞働黨の態度▲

▼日本の教員增俸問題▼

郵稅共定價金二十錢
同上一ケ年分金五圓
教員學生特別割引

新東洋社

東京市麻布區市兵衛町二ノ一二
振替口座東京三五一七九

（中付三ノ四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

劇壇之最近十年

我演劇界の權威的名著

本書要目

明治四十年以後の劇界觀察—局面展開策—劇界の前途—團菊の追懷—默阿彌論—脚本論—普通人の好まぬ劇—舊脚本の新改作—日本人と沙翁—外人と近松—帝國劇場論—活動寫眞と舊劇—役者繪論—觀劇の目安—觀劇の趣味—日本演劇史—演藝と演劇—日本及外國の**操り芝居の研究**

其他尚ほ日本、支那、西洋の操り芝居の圖八頁を口繪とせり。

定價 壹圓七拾錢
送料八錢

人のアラ世間のアラ

坪内逍遙序　生方敏郎著

〔最新刊〕

袖珍上製美本
定價七十五錢
郵送料六錢

奇拔な警句　痛快な諷刺

著者は容易に他人の追隨を許さない一種のうまい特色の持主である、警句家である、諷刺家である、大正の緑雨、現代の正太夫と呼ばれてゐる著者が最も得意とする警句と諷刺的短篇とを集めたもの卽ち本書である。

發行所　東京牛込區富久町八四　振替東京三三五〇九　米山堂　電話番町三四六一

信用なき店鋪及不良なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

政治・文藝・教育・科學・家庭

毎週土曜日發行

（大正六年九月廿九日 第一號創刊）

編輯顧問 文學博士 澤柳政太郎

主幹 文學士 水島耕一郎

雜誌と新聞紙の長所を兼ねる 「週」の報道は雜誌よりも迥に機敏である。又「週」は日刊の如く各種の事實を雜然と臚列しない。即其記事を精選批判する。**讀むと同時に見る** 「週」は各種の出來事を文字に綴つて報道するのみならず、其重大なものは毎號之を寫眞にとつて讀者の眼前に提供する。即ち「週」の讀者は事件を讀むと同時に見るのである。**編輯法の一大特色** 「週」は其幹部に最も卓越した記者編輯者を有すると共に社外にも多數の當代一流の特約寄稿家をもつてゐる。けれ共「週」は原則として是等の人の論文或は記事には一々其の名を現さない。なぜなら「週」は「週」として記事全體の責任を負擔するから。

最も意義ある生活法

現代の生活は目まぐるしい程多忙である。毎朝ゆる〳〵と新聞紙を精讀する暇のある者は極めて少い。けれども何人も一週に一日或は半日位の餘暇はあるであらうし、又あらねばならない。此時徐ろに「週」を閲して、平生の卒讀亂讀から來た腦中の雜駁な印象を訂正し、其記憶を整理するのは、最も有益な方法である。且又各人の頭腦には大凡そ働くべき限度がある。それ故毎週一回「週」を讀んで精神的滋養を攝取するのは確に現代人にとつて意義ある生活の一樣式である。

東京市神田區錦町三丁目四番地

振替東京三一五二〇番 「週」發行所 週報社

一部拾錢（三ヶ月分十二册壹圓拾錢半年分廿六册貳圓八錢一年分五十二册四圓 郵税本社負擔但し支那を除く海外）

（中付三の六）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

(新刊)武者小路實篤氏作
岸田劉生氏畫及裝
表紙―鬱金木綿木版色刷。挿畫―凸版密畫廿三葉。用紙極上。印刷鮮明

かち〱山と花咲爺

武者小路さんと岸田さんの藝術は、皆さんがよく御承知ですから何も述べません。出版者はたゞ、素晴らしい立派な本を仕立て丶、兩氏と皆さんとにお目に懸け得ることを本當に心から喜んでをります。

四六版、價一圓三十錢、送料八錢

(新刊)上山草人氏作
谷崎潤一郎氏長序
小林古徑氏挿畫
四六判價一圓廿錢送料八錢

蛇酒

凄艶なる戀愛記である。哀切なる懺悔錄である。同時にまた、起伏常なき新劇運動の側面史である。著者久しく踏晦して自らその傳を舒し、遂に此の一大長篇を完成す。君が詞藻の魂麗にして芳烈なることは、谷崎氏をして「海内文章落布衣」と嘆稱せしめたるを見てもその一般を覗ふことができる。歡樂の極地をすぎて、漸く廓落たる信仰の一路に入らんとする著者の心境に同感し、併せて社會の疑義たる女優問題の歸趨を知らんとする人々の清鑒を待つ。

東京有樂町一の三
阿蘭陀書房
振替東京一四四八九

(新刊)與謝野晶子夫人著

愛、理性及び勇氣

四六判美本價一圓三十錢 送料八錢

愛、物性及び勇氣。與謝野夫人の生活は此の一句につきる。この一句また以てすべての婦人の標語となすべきである。評論四百餘頁。

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

奥野他見男著
學士様なら娘をやろうか
定價五十錢
郵税四錢

新刊
◎出たぞ!!出たぞ。
◎悉く事實!!
◎面白いのなんのって!!
◎某博士曰く「此奴めが、此奴めが。」

忽ち十版發行
奥野他見男著
大學出の兵隊さん
であります物語
◎見よ!・萬天下を風靡したる彼の有名な「大學出の兵隊さん」出世物語出でたり。
筆致愈々圓熟、着想益々非凡、興趣正に絶頂!!見よ出版して一ケ月ならず早くも拾版!!
菊判半截型
洋裝美本
定價四十錢
郵税四錢

奥野他見男著
おへその宙返り（第卅五版）定價四十錢・郵税四錢
先生様と生徒（第十八版）定價四十錢・郵税四錢
初旅の凸ちゃん（第十版）定價四十錢・郵税四錢
峭のあたま（忽七版）定價七十錢・郵税八錢
あの山戀し海戀し（忽六版）定價六十五錢・郵税八錢
何れも大好評増版續々出來

發兌 振替東京七八六四 東京中澁谷町 東文堂
賣捌 振替東京二七〇 東京神田神保町 東京堂

信用なき出版者及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

有島兄弟谷崎兄弟小説集

■姉の死・弟の生……里見弴

■追放者……有島生馬

■迷路……有島武郎

■父となる前……谷崎精二

■ハッサン・カンの妖術……谷崎潤一郎

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姉の死・弟の生

里見弴

前がき

姉は、結婚がその生涯をメチャ〳〵にして了つた女の一人だつた。孤獨とか、凌辱とか、絶望とか云ふものはもとより、不自由、氣兼苦勞、——ほんのちよつとした不愉快さえも識らない位な、春の海原のやうに靜かな、豐かな、溫かな、そして晴々と美しい娘時代の後に、恰もそれまで貯こんであつたものが、ガラ〳〵と落ち掛つて來たやうに、結婚が、有ゆる慘苦をいちどきに彼女の上に齎らした。女だけが有つ極端な忍堪力で、彼女はそれを受けた。良人の過失とも自殺とも他殺ともハッキリしない死、(船旅の間に、或る晩彼の姿が甲板の上から消えて了つた。)——が來た頃には、そろ〳〵貧困が迫つてゐた。(元來良人は裕福な貴族だつたから、それまでの慘苦のなかには、貧乏だけは數えられなかつた。然し、貧乏が慘苦の王樣ではない。)

四度産褥の苦みを嘗めながら、唯一人の子供の手を携へることも出來ずに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

喪服を着た彼女が再び生家に歸つて來た時は、三十五歳だつた。生みの兩親は、彼女の結婚生活の間に二人とも亡つてゐて、彼女とは二十近く年齢の違ふ弟がたつた一人遺されてゐた。

彼女はこの弟に、彼女の幸福な娘時代を見出した。可なりな印刷所の主だつた父が、老つてからそれを更に大規模な同業者の手に讓り渡して、孫のやうな息子のために、心配のいらない株券や公債にして遺して置いた富は、若い嗣子がいかほど贅澤な暮しや、飛び切りの教育費に費さうとも、尚ほ刻々に殖えて行くやうな額だつた。

彼女の結婚生活が多く外國で送られた故に、五六年ぶりで、どことなく貧困の蔭を脊負つて生家に歸つて來た當座は、姉の居心地は、幾分か具合惡いものだつた。弟の方でも、常にギゴチない禮儀の後にゐた。然しそれもほんの一月かそこらの間だつた。

前にも云つたやうに、弟のすることなすこと、考へること、――姉はそこに、娘時代の自分が何かしてゐるやうに思ふことがあつた。同胞の愛と、過去の自分に對する愛と、亡した子供に對する愛とがゴチャ／＼になつて、姉は見る／＼弟に歸依して了つた。

細かく云へば、然し、弟には娘時代の姉と違つてゐる所がないではなかつた。溺愛してゐたと云つてもいゝ、老つた父母の、續けざまの死、――かう云ふ悲みと淋しみとは、その頃の姉の識らないものだつた。それがまた、一層姉の慈みを深くする所以ともなつたし、弟から云へば、そこに足りなかつたものが滿される故に、まるで母に對するやうな愛着にまで强められる因ともなつてゐた。

姉弟の生活は幸福だつた。――不幸な姉の上にも樂しい後半生が微笑みかけるやうに見えたし、弟は尚

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

更云ふまでもなかつた。それにも拘らず、この家庭に踏み込む人は、何んとなく寒いやうな氣がした。姉から受ける印象にさう云ふ所のあるのは、それほど怪むに足りない。彼女の美しい顏は、劇しい苦痛と忍堪との試煉に會つて、美しいまゝに、硬い、隙のない、生眞面目な表情が動き惜いものになつてゐた。普通ならば五十位上のお婆さんほどに、全く灰色になつた髮の毛と、まだ幾分か赤みをもつた頬とは、最初の一瞥では、不氣味と云つてもいゝほどの不調和をなしてゐた。そして彼女は、良人から與へられたもので墓まで持つて行かなければならない唯一の紀念として、跛の右足をもつてゐた。止むを得ない場合のほか、客間へ出ることを喜ばなかつた。然し一旦客の前に立てば、彼女の餘り故意とめかない應對は、何んと云つても社交に長けた貴夫人だつた。(どんな貧困の最中でも、彼女はこの貴人の矜を捨てたことはなかつた。それは血にあつた、——彼等の母は華族の娘だつたし、父も同族の出だつた。)

弟は快濶な、少しも蔭日向のない少年だつた。たゞ父母の死から、姉が歸つて來る迄の一二年の間に得た憂愁は、その後も全く拭ひ去ることは出來なかつた。けれどもそれも、大人がはたからさうあらうと云ふ目で見て、さう感じる程に、少年の心を傷めてゐる譯ではなかつた。立派な學者を家庭教師に迎えて、全く學生々活をさせなかつたにしては、寧ろ亂暴すぎると思はれるほど生々とした少年だつた。

それでも客は、何故か部屋が廣すぎるやうな、落つきのなさを感じた。そして、父母と(父母でなくつても、若い夫婦でもいゝ)年ごろの娘とは、どこの家庭にもなくてならないものだ、と云ふやうなこと考へながら、玄關前の石階を下りて行く者もあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

穏かな、しめやかな愛の生活が、姉弟の上に何年か續いた。姉の深く傷ついた心も、無邪氣な弟の笑顏に癒されて行つた。生家に歸つてから一年半か二年程の間は、よく貧しい者や病むでゐる者のために無名で喜捨などしてゐたが、さう云ふことも次第にしなくなつて、下婢や家僕のやうな者を、全く人種の異つた人間のやうに見る貴人らしい態度が、益々明かに現はれて來た。傲慢にならない高雅、――この物語のなかの人々が屬するR國の習慣では、一層さう云ふものが貴ばれた。下の者どもゝ、見下げられゝば見下げられるほど、主人を敬ひ尊ぶやうな風があつた。殊に彼女の年ごろから云つても、次第にもうさう云ふ態度が甚だ適はしく見ゑるやうになつて來た。

退屈なほど何事も起らなかつた。財政顧問をしてゐた老つた辯護士が死んで、その後任を選ぶのに、少し心配をした、――その位なものだつた。

……突然、世界の一劃に思ひもかけない戰爭が始まつた。それは彼等には何程のことでもなかつた。すると彼等の皇帝が、F國やE國と同盟して、彼等の隣國をその背後から攻撃しやうと云ふ考をもつた。これは彼等の心を騷がした。が、まだ大したことではなかつた。この平和な一家にとつての大事件は、この年十九になつた弟が、志願兵として應募したいと云ふ考をもつたことだつた。

初め姉は力かぎり根かぎり思ひ止まるやうに說いた。弟は決して聽かなかつた。强情に、自分の言葉に反對する弟を見出すことが、既に彼女の大きな苦痛だつた。學藝を他にすれば、これまで彼女がたゞ一人で獨占して來た弟の心を、突然思ひがけないものに竊み取られたことが、彼女を狂ほしく悲しませた。然し弟の心が、既に根から動かされてゐるのを識つた時に、自分の方から弟の心の側へ歩みよるやうな

心持になつた。この場合執拗止めるのは僅かに賢いやり方ではなかつた。――けれども、彼女は、女の心として、さう意識的に、打算的に考へることなしに、殆どひとりでのやうに、さうなつて行くことが出來た。すると、今まで上から覆ふてゞもゐた私の愛が除かれたために、急に國家に對する公の愛がむき出しになつた。――さう彼女には考へられたやうな、灼々とした熱情心が燃え上つて來た。彼女が先に立つて弟を勵ますやうになつた。

……それでも、彼女は弟には內證で、或る貴族の將軍を尋ねた。その結果、弟は近衛聯隊に採られて、速成の訓練をを受けると、間もなく少尉に任ぜられたが、いつまでも戰地へは送られなかつた。

姉弟は前にも增して仲よく暮した。彼等の愛が、露骨にお互同仕をその對象としないで、愛國心と云ふ沸騰點へ昇つて肇めて顏を合せるやうな心持によつて、その利己的な感じを消し、淨化して見せた。たつた一つ、二人の心持がいつもそこだけではピタリと來なかつたのは、弟が一日も早く戰場へ送られたいと云ふ希望を述べる時だつた。姉は、戰線に立つばかりが强ち、報國の道ではない、と云つて、ヂッ〳〵と苛立つてゐる弟を宥め賺した。然しそれは大して利き目のある言葉ではなかつた。弟は不滿さうに口を噤んで、ストオブに燃え上る焰をヂッと見詰めたまゝ、先達から當路の人に掻き口說くやうにして出征のことを嘆願してゐる話は、姉には內證にして了つた。

暫くたつてから、弟の希望が達せられることになつた。姉の絶望的な悲み、弟の喜び、――二人はわけの分らない感情の渦のなかに捲り込まれた。全く異つた感情の基調をもちながら、二人は全く同じ境遇にあるもの丶やうに、同じやうに亂れ騷ぐ心で、同じやうに夢遊病者のやうな振舞ひをした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一年ほどの後に、弟は負傷者として後送されて來た。――彼が第一線の塹壕のなかにゐた時に、擲彈が投げ込まれた。知らないうちに、彼はそれを劍を持つた右の手で拂ひのけてゐた。さいはひ、鑵詰のあき鑵に火藥を詰めた弄具のやうなものだつたが、足もとでその導火管が燃えつゝあるのを見ると、サツタに左の手で拾ひ上げて、それを敵の塹壕へ投げ返さうとした。この瞬間に導火管が燃え盡くした。彼の左の手頸はあとかたもなく飛び散つて了つた。傷の程度と名譽とを差引勘定すれば、大分得のいく負傷で、心配のために瘦せ衰えてゐる姉のそばへ歸つて來た時には、弟は全く違つた人間になつてゐた。

「オヤ、すつかり大人びて了つた！」姉は第一にかう云ふ印象を受けた。「さうだ。皇帝陛下のために片手を失つて來た名譽の軍人が、小供であらう筈はない！」弟の胸を抱き締めながら彼女は心でかう呟いた。それから、ソファにかけさせて、自分はその肘かけに凭りかゝりながら、弟の頭を抱きよせた。永い間心配に凍らされてゐた愛が、止めどのない言葉と、額の上の接吻とに溶けて、注ぎかけられた。弟も心から喜んだ。

然し一日二日とたつうちに、彼女は、姉らしい愛撫が、もうこの弟にはにつかはしくなくなつて了つたことを感じた。ほんの心の一隅に、それは易々と取り込まれて了つて、殘つた部分には、何があるのか、何を吸ひ込まうとしてゐるのか、――兎に角もう姉は、以前のやうにそこのなかなら、どこへでも案内出來る人ではなかつた。

「その筈だ、もう立派な一人前の男だもの」喜ぶためにかう思つて彼女は、却つて孤獨の淋しさを染々と味はなければならなかつた。幸福はもう彼等の共有財産ではなかつた。そしてこの「立派な一人前の男」に

と、それを共有した、或は共有することの出來る者に對しても、彼女は漠然とした嫉妬を強く感じた。また實際目のあたりに、それを刺戟するやうな事實が、ほどなくそこに現はれて來た。同僚の來訪、押し低められた劣しい笑ひ聲、晩い歸宅、倶樂部に費される永い時、外泊……。

戰爭は永びいた。後備に廻されてゐた弟が、また聯隊のなかに起居して、新兵の教育などに當ることゝなつた。

一

急に恐ろしい世の中が來た。一見揺ぎのないものと見えた帝制が、心を蝕まれた丸太のやうにポックリいつて了つて、地蟲のやうに踏まれて來た平民が、遂にムク／＼ともち上つて來た。山上の湖に決潰が生じ、乾き切つた平地は水を得やうとして、無秩序な混亂のうちに高まらうとしてゐた。

……二三日、姉は一歩も寢室から出なかつた。いま弟がそこへ這入つて來てゐた。姉は床の上に横たはつて、ヂッと天井を見詰めたきりになつてゐた。弟はイラ／＼と部屋のなかを歩き廻りながら、時々扉の側へ耳をよせて、階下の物音でも聞くやうな容子だつた。日暮のやうに黄色つぽい沈默が部屋を占めてゐた。戸外にも靜かな雪が降り積りつゝあつた。

「……で、詰局どうなるんです……」

弟は半ば自分に云ふやうに、呟いた。この言葉は、答へられずに、部屋の四壁にさえもつき戻された形で、不安げにそこらに漂つてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ねえ、姉さん、何故默つてゐるんです。今ならまだどうにかなります……」

「どこへ行つたつて、お前の謂ふその『詰局』は同じでせう」と、姉が瞬ぎもしずに答へた。

「國内ではさうでせう。けれどもJ國までお逃げなさい。さうすれば……」

「駄目々々。……お前が私を慰めやうとしてくれるのなら、もうその話はよして下さい」

「姉さん、そりやア卑怯な考へ方です。僕たちは出來るだけのことをして見なければいけません。避ければ避けられる運命を、唯弱い氣から、早過ぎる諦めから、それの下に打ち拉がれるのは馬鹿げたことです。……僕の場合は姉さんとは違ふが、姉さんならまだ逃げられないことはない……」

「この二三日、私はもう新聞も見ませんが、鐵道だつてとうに彼等のものでせう。それに私たちは、彼等の誰と比べても、今ではもう貧乏な位です。國立銀行が彼等の手に落ちて了つた今では……。それだのに、私たちは……」姉はそれまでの冷かさからは思ひ設けられなかつた感激に、急に彼女を任ねて了つた。「……それだのに、たゞ『富んでゐた』と云ふ言葉だけのために、私たちは……」

彼女は小供のやうに兩手で顔を覆ふて泣きだした。そして「彼等」の理不盡を、暴虐を、涙の間から斷片な言葉で、憎み、罵り、呪つた。云ふまでもなく、弟の胸も同じ感情で燃えてゐた。貴族らしい、封縣君主的な感情は彼等の血だつた。その血の標象である彼等の愛する皇帝の不幸は、思考も理屈もなしに、直に彼等の血を湧き立たせる出來事だつた。實に、曾て思ひもかけなかつたほどの強さで、「彼等」に對する敵愾心がヂリ〳〵と動いてゐた。

然し、弟の位置はいま不思議なものだつた。彼は「彼等」を指揮して、「我等」に對つた彈丸を放た

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せなければならない位置に置かれた。弟は肚の底から「彼等」を憎む。……が、彼の配下に屬する數十人の「彼等」のことを思ふと、そこにはまた、全く別な心持があつた。今までに一度でも、彼は彼等を虐げ苦しめたことはなかつた。僅かに輕蔑はしてゐたが、然し輕蔑に伴ふ輕い愛は常にあつた。實際に彼等の殆ど總てが、また愛すべき好漢だつた、それは今でも少しも變りはない。彼に對して、無智な尊敬と、人のいゝ愛とを捧げてゐる彼等を、どうして遽かに憎むことが出來やう。――彼が置かれた「位置」が不思議だつた以上に、彼の「心持」は更に不思議なものだつた。

　彼等を憎む心持になると、――恐ろしい結果がボンヤリ彼の腦(あたま)に浮んで來た。

「卑怯だ！」かう呟いて彼は幾度か頭を振つた。

彼等を愛する心持になると、――靈(たましひ)を敵に僞るやうな疚しさが、ボンヤリ心に感じられた。

「卑怯だ！」また彼は頭を振らなければならなかつた。

　假令さう云ふさきのことが思ひ描かないとしても、彼にとつて、いま彼等は實際愛することも憎むことも出來ないものになつてゐた……。

「ぢやア一體姉さんはどうしやうと云ふのです」

「私はこゝから一歩も動かうとは思ひません」

　弟は答へられなかつた。蒼白い唇を震はせながら、姉が言葉を續けた。

「假令J國まで逃げ延びて、生きられるだけの壽命を生きるとしても、お前のない生活を、私はちつとも、幸福だとは考へません……。私は、生れた土の上で、同族の人たちと同じ運命を擔ひます。あゝ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神様！」

　彼女は、上空(そら)へ、真直に手を延ばして、起き返つた。

「……神様！」弟は唾を吐くやうな調子で呟きながら、姉に背後(せなか)を向けて、窓のそばへ歩みよつた。

――靜かに舞ひながら雪が落ち續けてゐた。身の輕い蟲が、群れ戯れながら飛んでゐるやうにみえた。

ふとそれに見惚れて了つて、ボウッとなつて、そこに彼は立ちつくしてゐた……。

　パラ〳〵、パラ〳〵、どこか遠くで小銃の音がした。聞きながら、一瞬間、戰地にゐるつもりでゐた彼は、ヒヨイと我に返ると、肩を突き上げて、寢臺の側へ戻つて行つた。

「暇を得たら直ぐまた歸つて來ます。明日(あした)……多分晩にでも。たが今はもう行かなければならない時です」

　兩掌(て)の間に弟の掌を挾むで、姉は涙のたまつた目で見上げながら、出來るだけ屢々彼女を見舞つてくれるやうに、弟に頼むだ。

二

　……弟は目を覺ました。自分の體(からだ)が寢床の上にあるのを知ると、生き返つたと云ふやうな深い溜息をついた。そして、その恐ろしい夢を思ひ出した。

　――彼は、至つて義の堅い秘密結社のやうなものゝ一員だつた。そのために始終不安につき纏はれてゐた。たうとう彼は、そこから自由になるために、仲間の秘密を賣つた。――さう云ふ情勢(シテユエーシヨン)にある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼が、餘り高くもない立木に登つてゐて、直ぐ目の下で行はれる恐ろしい爭鬪を見てゐた。二三人の仲間の者（覺めてから考へてみても、それは皆な知らない男ばかりだつた）は、彼の隱れてゐる一本の立木をこだてにとつて、四方からヂリ〳〵と寄せて來る大勢の敵に、絕望的な突進をやつては、また木の下に引き上げて來た。その度に彼等は血だらけになつて行つた。仲間の者が顏を合はせると、必ず、R――はどうした！　R――はどうした！　と頻りに彼の名を呼び交はして、尋ね探してゐた。彼等は、裏切者の血を見ないうちは、死んでも死にきれないと云ふ風だつた。――彼は、とても現實では經驗の出來ないやうな、生命が食ひ缺かれて行くやうな恐怖に覆はれてゐた。「俺はまア、何んと云ふことを仕出かして了つたんだらう」と云ふ後悔もあつたが、恐怖が何よりも一番强かつた。體の下が、丁度木の葉がごく疎な所なので、仲間の者が一寸でも上を見ようものなら、直ぐに見つけ出されて了ふ。どうかしてもつと安全な所へ移らうと思ふが、少しも身動きがならなかつた。ヂッと竦むでゐてさえも、木の葉が、ガラ〳〵ガラ〳〵と敷石の上へ鉞力鐺でも引き摺つて歩くやうな仰山な音をたてゝ、搖れ動いてゐた。――段々仲間の者が殺されて行くにつれて、敵の構えた銃劍の輪が、立木の周りに壓まり迫つて來た。その銃劍は血で染まつてゐた。彼は、もうどうにもかうにも居たゝまれなくなつた。――そこで大聲を立てるほど魘されて、その自分の聲で目を覺ましたのだつた。

　考へ出してゐるうちに、それは夢として恐ろしかつたばかりのものではなくなつて來た。こんな夢を見ると云ふのは、自分の心の底に、最も卑怯な裏切の芽が旣に萠してゐるからだ、とさう思ふと、彼は吃驚した、――それは餘り思ひがけないことだつたから。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「俺がそんな卑怯者だとは！」

ほんとのお坊ッちやんで育つた彼が、突然軍人になり、戰爭に出た時分から、それまで卑しいこと、善くないこと、恥づべきことゝして、心の一隅に禁固してゐた種々なものが、人々の間では平氣で通用してゐるものであることを知り、續いて彼自身の裡に深く潜んでゐたさう云ふ心持が、恰も毬の緒がほぐれ出したやうに、ヅル／＼と引き出されて來るのを見た時に、彼は自分にかう呟いた。

「どうせ人間は神樣ぢやアない！　完全と云ふ譯にアいかない」

彼が茲に用ゐた「完全」と云ふ言葉の內容は、中學程度の厚みしかないものだつたが、それまでの彼は、殆ど自分をその「完全」に近いものと思つてゐた。少くも「完全」であり得るもの、と云ふことは疑はなかつた。その後彼は自分の裡に種々の「不完全な點」を見出して行くにつれて、いつの間にか、以前の「完全」とはどんなものであつたか、その姿を忘れて行つた。隨つて嘗て自分で「不完全」と思つたものが、どんな不完全だつたか、どう云ふ理由で不完全などゝ呼んでゐたものか、それも忘れて了つた。けれどもこれは、彼がその「不完全」に身買りをして了つた、と云ふ意味ではない。唯さう云ふ言葉を失つて了つたばかりで、今でも、自分を、よい者、値のあるものと思ふ心は捨てなかつた。

殊に弟は、ほかの點では兎も角も、自分が卑怯者だとは思ひもよらなかつた。――卑怯者があんな風にして戰場に臨むことを希ふだらうか。臆病者が、導火管の燃えてゐる擲彈を拾ひ上げるだらうか。

「くだらない！　ほんの馬鹿氣た夢だ！」

前の日營庭で見た光景が、こんな夢に醸されたのだ、あの血のついた銃劍などはそつくりそのまゝだ

と思つた。するとまたその「光景」が彼の目の前に浮んで來た。

…T――大尉が部下の兵に刺された、と聞くと自分は直ぐ營庭に出て行つた。(それでも卑怯と云へるか！)この殺人を企てゝそして果したのは、僅か四五人の兵だつたさうだが、もう自分の行つた時には、二三十人その周りに集つてゐた。自分は彼等を押し分けて人垣の中心に近づいて行つた。(その時上官らしい無遠慮をいくらかでも控えたらうか。斷じてそんな心持はなかつた！)大尉は背後から胛骨の下を銃劍で刺し通されて、腹ンばいに倒れてゐた。二中隊のV――と云ふ兵が、その恐らくは地面までも通つてゐる銃を引き拔かずに、その床尾板を脇の下に支つて靠れながら、足を組み交へて立つてゐた。自分がはいつて行つたことに氣がつくと、彼は、對手の肚の底まで讀まうとするやうな劇しい瞳を、自分の眉間に射かけた。自分もそれを睨み返した。(それでも臆病と云へるか！)兵士の間に無言のどよみが傳つた。然しV――が直立して、自分に敬禮をした時に、急にあつちでもこつちでも手を擧げる者が出來た。自分はT――大尉に目を落した。額を雪のなかへ揉み込むやうなことをしてゐた。銃劍は鍔元まで血に濡れてゐた。

「誰だ」と自分がV――を見詰めながら云つた。(この回想の間に、彼はたうとう、前から知つてゐたことを、その時改めて尋ねた自分の心理に、一顧の注意をも拂はずに了つた。)

「T――であります。T――大尉であります。少尉殿」

「何故殺した」

V――は答へないで、その生々とした若い目を、年寄のやうに陰鬱にした。

「お前たちを虐げたか」

「さうであります、少尉殿。私の右の耳を聾にしたのは彼であります」

「お前たちの手で、死骸をどこかへ片づけて了へ。死骸は侮辱しないもんだぞ」

それで自分は、悠々と將校室へ歸つて來た。彼等は皆なうしろから自分に敬禮をしてゐた。

——こゝまで考へて來ると、もうあの惡夢のことは、まるで氣にならなくなつて了つた。そこで床を出て、朝の身じまひをして、軍服をつけた。いつも彼が起き出る前に、從卒が綺麗に磨いて持つて來て置く筈の長靴が見えなかつた。彼は從卒を呼んだ。すると從卒ではなく、中隊ぢうの馬鹿で通つてゐる一人の兵が、シヨンボリとはいつて來た。

「S——はどうした。直ぐ靴を持つて來るやうに云つて來い」

兵は動かなかつた。さうして下を向いてメソ〳〵泣き出した。

「どうしたお前、どこか加減でも惡いか」

「いゝえ、少尉殿」

「どうしたんだ」

「S——は居りません……」かう云つて兵は一層ヒドく戲り上げた。「私はS——が好きでした。それだのに、先刻殺されて了ひました」

彼は驚いた。普段から憎まれてゐたやうな將校は、あつちこつちで、日に三人五人殺されてゐた。然し兵卒の間では、まだこれまでに一度もさう云ふことは起らなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうして殺されたのだ」

「知りません」

「誰が殺したのだ」

「PとIです。……多分S——が金を有つてると思はれたからです。少尉殿の從卒を勤めてゐるからは、金を貯めてゐる筈だと云つて、昨夜二人がそれを貸せと云つてゐました。だけれどもあれは本當に有つてゐるなかつたと思ひます。あれは故郷の兩親へそれを送ることを樂みにしてゐました。いつか私が許嫁の話をした時に、あれがさう云ひました、「お前はその人へ金を送るかい？」つて。私はそんなことを思つたこともありませんでしたから、「送らない」つて云ひますと、その時あれが、自分は兩親へ送つてゐると云ふ話をしてくれたのです。それからは私も、許嫁に……」

「もうよし。いゝからお前行つて俺の長靴を持つて來てくれ」

目の前が暗くなつて、彼は立つてゐられないやうな氣がした。

「……金でも、幸福でも、力でも、少しでも、何か有つてゐたものが殺される……」

彼は慥かに種々のものを有つてゐた。然し有つと云ふことが何んだらう！

「總てのものを、彼等に渡してもいゝ。唯勇氣だけは最後まで渡してはならない！」

かう心に叫んだけれども、その實彼は、もう「彼等」を惜む「勇氣」を、とうに失つてゐることには自ら氣が附かなかつた……。

そこへ長靴を下げて、先刻の兵がはいつて來た。許嫁の話よりほかに何も有たないやうなこの男を見

ると、彼は心底から羨ましい氣がして、その空しく瞠いた目を見詰めてゐた。

三

老つた女中頭と、コックの下働きと、もうこの二人しか殘つてゐなかつた。腕のよい、然し狡猾な一人のコックが、忠實な女中頭を脅して、銀器の藏つてある戸棚をあけさせ、金目のものを持ち出して、どこともなく出て行つた。その男と通じてゐた女中の一人が、顔色を變へて續いて飛び出して了つた。そんな風にして、今では廣い邸のなかゝ、あき家同然にガランとなつて了つた。

姉は矢張り寢室にとじ籠つたきりでゐた。食事らしい食事もとらなくなつて、唯一人そこへ出入することを許してゐた女中頭とさえも、殆ど口を利かなかつた。

……その晩は電氣が來なかつた。二三本の蠟燭が薄暗く部屋のなかを照してゐた。

「……まるで犬のやうに殺されました。然し、それを、慥かにT——大尉は、値する……」

弟は、今夜も部屋のなかを歩き廻りながら、まるで愉快な宴席で、調子づいたお喋りでも續けるやうに、快濶に話してゐた。ちよつとでも、そこに死人のやうに横たはつてゐる姉の方へは、視線を向けやうとはしずに。「……何故かと云へば、あのT——大尉は、實際大のやな卑怯者でしたからね。彼等がムク／＼と頭を擡げ始めた時分から、彼は、一兵卒に、イヤ馬丁にさえも、自分の方から擧手の禮をするのです。それから、自分の中隊の兵に、可なりの金を分配したさうです。『これまで、我々は皆な哀なものだつた。然し今、我々は……』からその時彼が兵士どもに話したさうです。慥に我々と云つたさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うです。『我々に壓迫を加へてゐた、憎むべき我々の……』こんな風に彼は部下に向つて、『我々』の機關銃を注ぎかけたと云ひます。まだヒドいのは、或る兵が彼に靴を磨けと云つた時に、犬のやうに床の上にヘイツクバつて、命ぜられたことをしたさうです。さうしながら、『我々が、我々の神の前に立つ時には、總て我々は全く平等無差別なものだ。我々は我々の友のために、我々の勞力を惜みはしない』と云つたのです。ハヽヽハヽ。さうして彼等が彼を殺して了つたのです。……以前から彼は、ヒステリーの恐るべき妻君に頰を打たれ、洟垂れの腕白小僧に頭の毛を毟られ通してゐた代りには、それをまた彼の部下にも廻してゐました。その間は無事でしたが、彼の所謂『平等不差別』が命取りでした。ハヽハヽ」

「それでは、お前は飽まで、彼等を彼等としてゐるのですか」

姉は衰え切つた體に似げない、シッカリした聲で云つた。

「勿論です。僕は彼等に命じます、彼等を指揮します、必要があれば彼等を罰しもします。彼等は僕を愛し、敬つてゐます。彼等は僕の力を信じ、勇氣を恐れてゐます。彼等はまた……」

「お前は、その殺された大尉の『我々』の代りに『彼等』の機關銃を私に擊ちかけるのですね」と云つて、姉は棘をもつた嘲り笑ひをした。「……けれどもお前は、その彼等の先頭に立つて、無辜の、陛下の臣民を殺してゐるのですね」

弟の顏色は變つた。初めて、ヂッと姉の顏に目を据えて云つた。

「上官の命令には、絶對に服從しなければなりません」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さうですか？　それでは皇帝陛下は、多分貴方の最高の上官ではなかつたのでせう」
弟は床に目を落した。何か言葉がつき上げて來たやうに、唇を動かした。然し何も云はずに、だん〳〵低く首を垂れた。
「……いつそ、彼等と一緒に、自分を「我々」と呼んだ大尉の方が勇ましい……」姉は目を閉じて獨言ちた。
「そりやァあんまりヒドい。僕が「犬」よりも惡いものだと、姉さんに思はれやうとは……。僕が己を曲げたのは、世の中の大勢です。彼等の前には、僕はまだ一度だつて己を曲げたことはありません。そんな、何んぼ何んでも自分の部下の前に阿諛追從するやうな、そんな卑劣な心はもちません。最後までも僕は勇氣を捨てない覺悟です……」
「生意氣なことを仰有い！　私にはよく解つてゐます。死を覺悟してゐる人間は、鋭い眼で見るものですよ。……お前は、その勇氣を示すことによつて、辛じて命を護つてゐるのです！　猫が、自分より强い獸と出會頭にヒヨックリ顏を合せた場合に、どう云ふ態度を取るか見たことがありませんか。前足を揃えて、その上に頸を突き出した姿勢は、成程前から見れば、勇氣凛々たるものです。然しその後足を注意深く見てご覽んなさい。そしてそれを、前に鼠がゐる時の姿勢と比べてご覽んなさい。……あゝ、然し、私は云はないつもりのことをたうとう云つて了ひました。私は、お前がその贋の勇氣を揮ひながら、遂に彼等のために斃される所まで持ちこたへることを信じてゐました。それならば、それでもいゝと思つてゐたのです。少くともそれは、T——大尉の死態ほど醜いものではないでせう。そして、私が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

このことを云へば、お前は必ずその臆の勇氣を捨てる氣になる、——そのあとへ本統の勇氣が湧いて來るならば有難い、——が、若し、臆にもせよその勇氣を失つたあとに、哀な弱い心が生じたならば、それは一層慘なことだと案じられたのです。……けれども、矢つ張り云つて了つてよかつた。一人の弟を、心のなかで猫に譬へながら死ぬことは辛すぎます！

勇氣をお出し！　本統の、心の底からの勇氣をお出しなさい！」

「有難う！　姉さん！　ほんとに僕の勇氣は臆ものでした。けれども、僕は矢つ張り死にたかァありません！　勇氣があつたために殺されると云ふのは、あんまり馬鹿げたことです。僕は戰線にゐた時に、勇氣があつたために幾度か死を逭れました。然しこんだのは、見す／＼殺されるための勇氣なのですからね。生きると云ふことが、取りも直さず卑怯だと云ふのは、どうしたつて眞理だとは思はれません。さう云ふ答が出るまでには、どこかにきつと計算違ひがあるのです。姉さんにはその答が絶對に信じられるのだからいゝが、僕にはそれが信じられませんもの。僕はその計算の違つてゐる所をハッキリさせなければイヤです。若しまたどこにも計算違ひが見出せなかつたら、その時こそは、姉さんのやうに信じませう。それでいゝでせう？」

「よござんすとも。けれども、その骨折りは、無駄だと私は思ひます。それよりも、立派に覺悟をなさい！」

その時かけ布團の下で、姉の右の手が動いたやうに見えた。すると弟は、布團を透して、ピストルを覗た。——不思議な力が彼を突き飛ばした。次の瞬間に、彼は眞暗な階段を駈け下りてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「姉さんは僕を殺してから死ぬ氣だな！」とその時弟は思つた。「それにしても、僕はまたどうしてから命が惜しくなつたんだらう！」

勇敢なるR――少尉、まるでさう云ふ友人でもゐたかのやうに、戰場にゐた頃の自分が、向ふに眺められた。それとこれと、どう考へても一人の人とは思へなかつた。――それは、自分ながら信じられないほどの不思議だつた。

四

小銃の音がした。もうこゝの市民には、それは格別珍らしいことではなかつた。

不性に髭を延ばした、病人のやうに蒼白い若者が、犬小屋よりも穢いくらゐの屋根裏の部屋で、それを耳にすると、半ば無意識らしく、寢臺の上を腹ン匍ひに窓ぎはまで居行(ゐざ)りよつた。そとには、いつか雪が降り込むでゐた。若者は臆病らしく幾度か躊躇してから、窓の戶をあけた。小氣味のよい寒さが彼の頰を打つた。同時に下の騷ぎが手に取るやうに聞えて來た。一寸それにひるむだやうだつたが、彼は注意深く、辛じて下の往來が見えるだけに、窓から顏を出した。――一小隊ほどの兵が雪を蹴立てゝ突進して來た。勇敢に、眞先に立つて、劍を高く擧げて進むで來たのは一人の若い少尉だつた。不意に、その少尉が前にツンノメつた。と、直ぐ半身起き上つて、「彼等」の萬歲を叫んだ。前の二階に潜むでゐる敵の放つた彈丸(たま)でやられたものと信じたのだ。所が、實は、彼のあとに續いた一人の兵士が銃劍でいきなり突き倒したのだつた。然し次の瞬間には、部下の靴が彼の上をドシ／＼踏み躙つて行つた。あとには

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汚い雪の上に、劍を持つたまゝ手足を延ばして横たはつてゐる一つの死骸が殘つた。三階の屋根裏からそれを鳥瞰的に見下ろした若者には、却つてそれが、劍を振りかざしてゐる姿に見えた。

「あの猫は、後足を見られたのだ……。俺ももう少しであんな具合に殺られる所だつた。この上もない無駄死だ！」こんなことを考へながら、忽ちもう人ッ子一人ゐなくなつて了つた淋しい往來を、ヂッと見下ろしてゐた若者は、變り果てたが、かの弟だつた。

――布團ごしに、姉の手に握られたピストルを感じて以來、自分の命が始終「彼等」のために附け狙はれてゐると云ふ恐怖が、見る〳〵病的と云つてもいゝ程になつて行つた。勿論彼はあれきり聯隊へは歸らなかつた。まづ平服を得なければならない。出來るだけ汚い着物を買いに行く前に、歩兵少尉の軍服を覆ふために、まづ可なりの店で外套や帽子を買つて、それを淋しい往來で身につけたり、帶劍を捨てたりしてから、古着屋の店先に立つたほど注意深くなつた。古着屋の爺(おやぢ)にだつて「彼等」の仲間がゐないとは限らないと思はれたから。無事に勞働者のやうに姿を變へてからも、彼は手頸のない左の手を必ず衣袋に入れて置くことを忘れなかつた。帽子は云ふまでもなく眞深く引き下ろしてゐた。軍人は固より、總ての人を恐れた。彼の傍で、口をあけてダラシなく寢こんでゐる女にさえも油斷しなかつた。食物を見ると直ぐ毒を思つた。晝間は決して外へ出なかつたし、そのくせ夜も恐がつた。夕方、出るとだん〳〵町はづれへ、貧しい屋根裏へと、ひとりでに惹かれて行つた……。そのうちに髭も延び、手足も垢じみて了つて、もう誰が見ても「彼等」に狙はれさうな男ではなかつたけれども、彼の恐怖は募りこそすれ、決して衰えはしなかつた。

この恐怖のほかにもう一つ彼を落ちつかせないものがあつた。それは姉の身の上だつた。ふと姉のことを思ふと、內股の邊から妙にゾウ〳〵と寒氣だつて來て、居ても立つてもゐられい心持に驅り立てられた。Hasheesh と女とで、やつと自分を痺らせて置いた。然し Hasheesh は、どうかすると却つて、彼の追跡妄想を亢進させた……。

「寒い〳〵。何してるのさ。早く閉めてお了ひなさいなね」

思ひきり頰のこけた醜い女が、床のなかゝら、突慳貪にかう云つた。「……でも、一體何を見てたの」

「一人の少尉がね、自分を殺した奴の萬歲を稱へながら死んだのだよ。どうだ、面白い見物だらう」

「當り前だわ。まだちつと足りない位だ」

「だが、たかが少尉だぜ。やつらが何を知つたことかね」

「少尉でも軍曹でも、みんないけない。まア考へても、ごらんなさいよ。今までに、幾萬とも知れない私たちの仲間が、殺されたり、牢獄へぶち込まれたりしてるんですよ。死靈生靈の思ひだつていゝ加減……」

「『私たちの仲間』と謂ふのは、淫賣仲間のことだね？」

「馬鹿におしでないよ。私だつて五年前まではね……」

「所で、死刑よりは、今の商買の方がましだと悟つたんだね」

「ましなことはないわよ。だけども、あゝした死に方をした所で、僅かにそれが人助けになるかどうかす。ほんと云やア誰にも解らないことでせう？　それでて、自分のためにならないことだけは僅かなん

ですからね」
「然しかうなつてみりやア、解る筈だ。愈々死靈生靈の思ひがとゞいたんだからね」
「かうなつてから、解らないッてことが、肇めて解つたんですよ。――第一に私たちの商買なんざアあがつたりだよ。……でもね、そんなことより何か食べに出ませうよ」
「俺ン所には、もう一文だつてないことを知つてるぢやアないか」
「ぢやア私だけ出て行くよ」
「勝手におし」
女は、いやらしい色合の、しがんだやうなヨレヨレの着物を、手早く身につけた。
「さむざむ、さむ」女は故意らしく體を揺つてみせて、「これ、着てッてもいゝでせう?」と、彼の所有品のなかで今では一番金になりさうな外套を、手を通さずに羽織つた。
「いゝとも」と弟は、胸に淡い愛を感じながら叩頭いて見せた。
「お前さんはほんとにいゝ氣前だわ。でも、もう愈々氣前の見せやうがなくなつて了つたわね」
「澤山持有ことも、少しゝか持有たないことも、詰局大した違ひぢやアないさ」
「ぢやアまたね、――ご緣があつたら……」
女は何んの執着もなく、サッサと出て行つて了つた。
急に、直ぐ起きて行つて女を呼び戻さうかと思つたほどの淋しさが來た。あんな女との「二人ゐること」が、これほどに自分の心を引き立てゝゐたらうとは、全く豫想外だつた。が、その發作的の情が過

ぎると、彼はまた重くるしい思ひに鎖されて了つた。

「こんな生活でも、生きてゐたいのかなア。下らないことだ。唯生きてると云ふだけのものだ。今のあの女よりもヒドい位だ……」

彼には、生活の目的がなくなつて了つたやうに思へた。假令目的を有たうとしても、到底それは「彼等」が許さないことだと云ふ風に思はれた。唯彼の壽命を保つに必要なだけの、酸素や飲食物を攝る自由が、大目に見逭かされてゐる、と云ふほどの慘な人間になつて了つたやうな氣がした。――それだのに、尚背つ死ぬのがイヤだと云ふ己の心持を、彼はどう解釋していゝのか、自分ながら解らなかつた。腐つた小さな一片の「生活」が投げ與へられたのを、飢えきつた野良犬のやうに、尾を振りながら、また疑ひ深くそれを投げた者の方へいぢけた、臆々とした眼差を送りながら、貪り喰はふとする自分！それを思ふと、彼は直ぐ姉の撰んだ覺悟が、死が、譬へやうもなく美しい、嚴かなものとして目前に思ひ描かれた。實際幾度も彼は、愛する姉の側に歸つて行つて、死を共にしやうと思つたこともあつた。

「いかん〳〵。これこそ、ほんとに油斷のならない誘惑だぞ」その度に、然し、彼は思ひ返した。「姉さんは俺に、『ほんとうの勇氣をお出し』と云つてくれた。おかげで俺はほんとうの勇氣を得た。然しその勇氣が、僅かに俺に云つた、――『飽まで生きよ』と。姉さんに、『死ねよ』と告げた勇氣よりは、俺に『生きよ』と敎へた勇氣の方が僅かに一段上のものだ。虛勢を張つて、彼等と睨み合つてゐた頃の勇氣は、今の姉さんの勇氣より下だつたが、俺はそこから、姉さんのゐる段を一足飛びに飛び越して、一段上へあがつて了つたのだ。いま俺が姉さんの側へ歸ると云ふことは、取りも直さず、より高い所から一段下

りることだ。それは慥かに卑怯だ。うつかり悲壯美に目を眩まされちやアいけない……」

それでは、何故弟は彼のゐる高所まで、愛する姉を引き上げることに努めなかつたゞらう。優越を感じながら、同時に誘惑を感じた點にも、何か腰の弱いものが潛むでゐなければならない筈だ。

……弟は、彼の目的(めあて)のない、或はそれを有つことの許されない生活を思つて、陰鬱な心持に鎖されたまゝ、寢床の上に腹ン匍ひになつて、右手で額を支へて、ヂッと一つところを見詰めてゐた。――いつか、その焦點の置かれてあつた、古い跛(ちんば)の椅子は、ボヤ〳〵と輪廓を崩してゐた。同じやうに、彼の陰鬱もいつの間にかボヤ〳〵と輪廓を崩し始めた。そして、何んとも云へないほど長閑な、安氣(あんき)な心持が、陰鬱の席にポカンとよりかつてゐた。これは、その二三日來、時々彼を見舞つたものだつたが、それの來去が、まるで彼の意識に上らないほど淡く、とりとめのないものだつたから、この侵入者はいつも見咎められずに彼を去つて了つた。一二度尻尾(しつぽ)を押へられかゝつたこともあつたが、いつも彼は、それを Hasheesh の恩惠だと思つて、格別咎めなかつた。

「オヤ――とその時彼は氣がついた。この恐ろしい世の中に、――彼の生活が無目的にならうとしてゐる危急の際に、――陰鬱に鎖されてゐる眞最中に、これほど安らかな、長閑な心持が來やうとは、……

「何んと云ふことだ。あんまり呑氣すぎる！」

……ふと彼は、いつか大分以前にも一度、これと同じ性質の氣安さに浸つた覺えがあることを思ひ出した。それは、遂には心苦しくなるほど駘蕩たる氣安さだつたが、……と考へた。

「ウン、さうだ〳〵。野戰病院で、初めて氣がついて、左の手が失はれたことを聞いた時、――あの時

の心持だつた！」

もう彼は、眼前につき附けられたこの心持の實相を廻避することが出來なかつた。――それは、白痴か頽齢の老人でない限り、男として誰も有つてゐる仕事慾の緊迫が除かれた場合にだけ、ダラ〲と蕩(とう)け得る心の狀態だつた。三日するとやめられない乞食の氣安さだつた。餘り辛すぎる仕事に悩むだ人に「いつそ一生何んにも出來ないやうな癈人にでもなつたら」と云ふ憧憬を抱かせる、あの別天地の釋放だつた。仕事慾から許可證を得た安逸境だつた。

左の手頸を失つたばかりでは、まだ彼はその許可證を立派に受けたものではあつたが、……いまは彼は何をすることが出來やう。何を企てることが出來やう。――彼の生活には目的が許されないのだ。彼の心が水のやうな安逸境に悠遊するのも無理ではない。

「さうだ。慥に俺は安逸好きだ。然しこの安逸を貪るためだけに、これほど生に戀々としてゐるのでもない。いつまでこんな世の中でもあるまい。俺はこのさきどんなことが來ても生きてやる。壽命の限り生きる。生きてゐる限りは、俺は何かだ。きつと何かする！

さうだ〲。かうしてはゐられない。生活力を取り返へさう。第一に睡眠だ」

彼は床のなかで強ゐて目をつぶつた。困憊し切つてはゐたが、容易に寢つかれなかつた。不思議な、これと云ふ的(あて)のない希望と、慘な生活の不安とが、彼の若い心に暗く明るく隈を描いて過ぎた。ふと起き上つて、Hasheesh の瓶を、人通の杜絶えた往來に投げ捨てたりした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五

……眞暗なかに、姉がつい枕頭に來て立つてゐた。無言で、少しうつむき加減にして……。

ハツと思つて弟は目をあいた。いつの間にか夜になつてゐて、部屋のなかは、ほのかな雪あかりだつた。

「姉さんは死んだな」

直に支度をして彼は戸外へ飛び出して了つた。姉の立ち姿はまだ彼の目の底から消えなかつた。いつもそれで見馴れた喪服ではなく、白いものを着てゐた。さうでなければ暗闇のなかにあゝハツキリと見えたわけはない、――そんなことを考へなければならないほどボンヤリしてゐて、それで何んとなくハツキリしてゐた。――見えないものが屋根裏の彼の枕頭まで來たことを思ふと、心が寒くなつたけれども、それ以上の何か力強い感じで少しも恐い氣はしなかつた。何んのために行くとも考へず、いつも往來で必ず襲はれる「彼等」に對する恐怖も忘れて、彼はひたすら道を急いだ。

……どの窓にも晃々と灯がさしてゐた。それを見ると有繫に彼は躊躇つた。或る家々がさうであつたやうに、こゝも「彼等」の屯になつて、夜晝ない騷擾、混雜の巣にされてゐるのではあるまいかと惧れた。內の容子を窺ひながら、彼は臺所口の方へ廻つた。どこもかもシンカンとしてゐた。裏口の戸はあけ放しになつて、光の縞が、足跡だらけな雪の上に落ちてゐた。暫くそこに立つて耳をすましたが、全く人の氣勢と云ふものがなかつた。心を決して彼はツカ〳〵と臺所から上つて行つた。目映いほどの灯

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の下で、鼠が恐れげもな　歩き廻つてゐたが、彼を見ると戸棚を駈け登つて、いゝ加減の處まで逃げてから、振り返つて、黒い小さな目で彼を眺めてゐた。行くさき〳〵が、「彼等」の嵐の吹き過ぎて行つた無慘な破壞の跡だつた。

彼は益々急き立つて來た。四日前に、暗闇のなかを夢中で駈け下りた階段を、いままた彼は、一と跨ぎに二三段づゝ飛び上つて行つた。

姉の寢室の扉は内から錠が下ろされてあつた。彼は無駄であることを信じながらも、慌たゞしく叩した。案のじよう答はなかつた。扉を毀すより仕方がないと思つて、彼は得物を探しに行かうとして。その時、全く思ひがけなくも、部屋のなかで慥かに人の氣勢がした。不思議に、その突嗟の瞬間に、彼はそれが姉以外の人だと感じた。併もそれが彼の身方であると……。思はず彼は扉に抱きついて行つた。

「僕だ！　D――R――だ！　早くこゝをあけて！」かう叫びながら扉を打ち續けた。その聲はグワン〳〵と廊下に反響した。

「オイ誰だ、なかにゐるのは！　神に誓つて、僕はD――R――だよ！」

「オヽ！」この聲と一緒に鍵が鳴つた。

彼は、あの忠實な年寄つた女中頭と向ひ合つて立つた。一瞬間、恐怖と絶望に歪められた彼女の表情が、稻妻のやうに動くと一緒に、「オヽ、D――様！」と叫びながら彼女が倒れかゝつて來た。ピストルが彼女の手から床に落ちた。

「姉さんは？」女中頭の體を受け支へながら、彼は寢臺に目を走らせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姉はいつものやうに靜かにそこに橫たはつてゐた。……唯、彼が枕頭に見上げたやうに、ヒドく蒼白くなつて。

寢臺の前に跪くと、彼は心のなかで姉に、――姉の靈に云つた。

「今こそ姉さんは、僕の心の隅々までも見渡して下さる。そこには恥しいものもあります。然しそればかりではないでせう。姉さんには死が一義だつた。そこに搖ぎのない信念があつた。――僕にはまた生が一義だつた。然し僕には、姉さんが有つたやうな信念がなかつた。その故に僕は、姉さんを見舞へば必ず死の魅力に誘惑されさうな氣がして、露骨に云へば、姉さんが死ぬのを待つてゐました。然しいま僕は何もそのことを云ひ譯しやうとは思ひません。今こそ姉さんは、僕の心の隅々までも見透して下さる。――姉さんには死がよかつたのだ。僕には生がよくなければならないのだ！」

どこかで、彼の言葉が正しい理解を以て受け取られてゐる嬉しさに、彼はポロ〱と涙を滴した。

六

感激に充ちた言葉で、女中頭が姉の死を物語つた――その大略。

――その同じ夜の八時頃、「彼等」が闖入して來た時に、邸に殘つてゐた唯一人の召使であつた彼女は、直ぐ姉の寢室へ驅けつけた。姉は、樂しみにして待ち設けてゐたことが遂に來た時に子供がするやうに雀躍をして喜んだ。

「よし！　愈々その時が來た。幾度私は自殺して了はうと思つたか知れない。でも、神樣のおかげで、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それは犯さないで濟むだ。——そこでお前は、直ぐ逃げるなり、こゝに殘るなり、お前の心のまゝにしておくれ」

彼女は殘ると答へた。姉は入口の扉を廣くあけ放して置くやうに彼女に云ひつけて、容儀を正した。程なく「彼等」がそこに亂れ込むで來た。

姉は貴人の高雅と矜持とを以て靜かに彼等の前に進むと、

「賤民！」と平手ではたくやうな侮蔑の調子で呼びかけた。「お前たちは、私たちから總ての財寳を掠め奪ふことは出來るだらう然し高貴な心を奪ふことが出來るか。私たちの總てを虐殺することは出來るだらう、然し勇ましい靈を殺すことが出來るか。貴族の根を絶やすことは出來るだらう。然し偉人の根を絶やすことが出來るか。それはいつの世にも、お前たちのやうな賤民がウヂャ／＼と生きてゐるのをどうすることも出來ないのと同じことだ！」

(こゝを話す時に、それが姉の口から放たれた時のやうな、威嚴と、酷烈とがなくなつて了ふ、と云つて、賤民の一人である女中頭が口惜しがつた。)

暫く啞にされてゐた「彼等」は、我に返ると、この傲慢無禮な女を生捕にしやうとした。姉はピストルを構えて云つた。

「私を撃て！　さもなければ、私の方かお前たちを撃つぞ！」

かうして姉は遂に「彼等」の彈丸に斃れた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

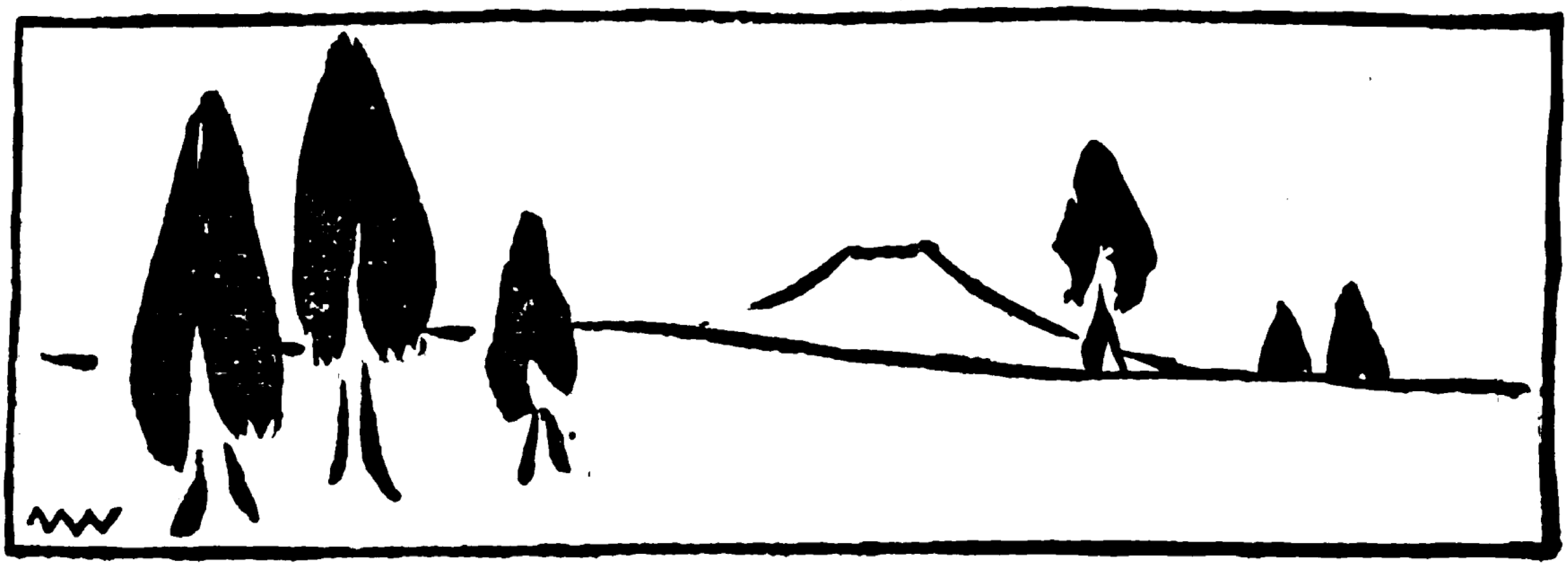
東が白むで來た。電燈が不安に黄色ッぽい光でとぼつてゐた。

弟は、姉の枕頭に跪いたまゝで、女中頭の話を聞き終つた。――彼の心は躍つた。

「姉さんの死は實に立派だつた。然し死は遂に死だ。どんな死でも有つことの出來ないものを生が抱いてゐる。生は何かだ。地熱も太陽の熱も冷め果てゝ行つて、人類の生存が地球上で不適當なものになつて來た場合、出來るだけ精力を放散させないために口一つ利かず、身動一つしずにヂッと死んだ者のやうになつてゐる人間でさえも、生きてゐる限りは何かだ。それでも子供が生れるだらう。それでも何か考へるだらう、何か企てるだらう。そこから何が生れて來るか、誰も云ふことは出來ないではないか。ましてこれは、一國の一寸とした政變だ。俺の靈と何んの係りがあらう。俺は生きてゐる。何んと云ふ燿かしいことだらう。俺は、でなければ俺の子孫は、きつと何かする。生きてゐる限りは何かだ！」

弟は立ち上つて、姉の冷たい額に接吻した。そして、この荒された貴人の家から出て行つた。――大跨にシッカリと、そして油斷なく……。

大正六年十月作



追放者

有島生馬

一

何度ぐる〳〵廻つてもやつぱりそこに出た。リウ・ド・モンパルナス第十六番は有名なラルス圖書會社の向側にある、薄穢い二階建で、往來から奥に中庭が覘かれ、そこが運搬車輛の置場になつてゐる。その外十六番といふ家は Bis にも何にも二つとはなかつた。

「不思議だぞ、こゝより外に十六番はありやしない。」さう呟かざるを得なかつた。念のため、何度念のために見たか知れない、廣告のカアドをもう一度ポッケットから引づり出してみた。やつぱりそれはリウ・ド・モンパルナス第十六番と明かに、然も立派な活字で印刷してある。それも古い事ではない、此廣告が自分の畫室へ舞い込んで來たのは、つひ一週間許り前の事である。

まさか廣告の印刷物に大切な番地を間違へる奴もあるまいし、自分の眼を疑ぐる餘地もなし、十六番自身に住んでゐる車屋の神さんの云ふ事も確かだ、さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うみねばならぬ。すると之は困つた事だ。私の探物は唯の探物でなくなる。難題だ。一寸舌打をして立停ると、もう無駄に歩くのが嫌になつた。

それは五月一日で珍らしい程著い初夏の午後三時頃だつた。私は帽子をとつて薄穢い丈の低い二階建の家を睨んだ。帽子をとつたのは額の汗をふくためだつた。その家の壁は例の泥色で塗つてあつて、二階の窓と窓との間に大きな字が書いてある、窓は孔で窓框がとつてない。それ等諸てが假小屋か物置のやうな感しか與へない。まして見渡した限り學校などがありさうにはとても思へない。先刻「こゝにはそんなものはありません。」と神さんに云はれた時、「はいさうですか。」と云つて歩き出した自分に大した落度はなかつた筈だ。話が前後するが、私はある學校を探してゐたのである。内を出る時から學校なんてものは探すほどの事はない、直ぐ見付かると頭から見縊つてゐた。それも私の想像に想像してゐた學校は可なり立派な堂々たる建物だつた。もしあの廣告のカアドさへ保存してあれば、私のこの想像が突飛なものか、否か判斷して貰ふに都合のいゝ證據になるのであるが、それは出來ない。然しあの英迦げて立派だつた廣告のカアドは今でも目に見るやうによく記憶してゐる。

それは卵色の上質の厚紙に體裁よく印刷され、唐草のやうな模様で縁どつてあつた。文句、カバニヤリ語學校、來る五月一日より開設、毎夕七時より二時間授業、英佛伊語中二課を選修し得。月謝は二十法だつたか、二十五法だつたか、何しろ普通の授業料の半分位なものだつた。月謝の安いのも、之は半官業的な計營に違いないと早合點してゐた。私はその夏英國に渡るつもりで、少し英語の勉强をせねばならぬと兼ねて思つてゐた矢先である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處で私の想像して來たその堂々たるカパニアリ語學校なるものはどこにどう消えて終つたものか、リウ・ド・モンパルナス第十六番へ來てみたが一向それらしいものさへない。巴里にも狐が横行するものと見える。

少し五月蠅がられるのは覺悟で、もう一度車屋の肥つた神さんに敬意を表しながら、「どうも、外には探す處もないが」と言分けしてその廣告を渡して見せた。神さんは腹を突出しながらカアドを受取つてやゝ得意氣に眺めてゐたが、「成程十六番に違ひない。」といふやうな事を云つた。それで私の探物が決して杜撰でなかつた事も思ひ知つたらうし、先刻の返事は餘り邪見だつたと後悔したらうと神さんの心中を忖度して、私は少し寛ろいだ。

「ふん、殊によつたら、あの爺さんの事かもしれないね。ほら此間引越した外國人さ。」彼女は誰れに向つてだか、薄暗い内の中を覗き込んで云つた。占めたぞ、私は心で叫んだもの丶、少し心細い氣もして來た。

神さんは振返つて中庭の方を指し、「こゝを通して上げるから、中庭の左側にあるアトリエで聞いてごらん。」と初めて寛大な處置を取つて具れた。私は恐る〳〵薄暗いほどに臭氣もあるその屋根の下を潜つて、車輛置場である中庭へ突き抜けた。五月の日光は廣い青空から狹い中庭の底へたまつてゐて、木挽機械だかなんだか繰返しの單調な響に、中味の腐つたやうな平和が淀んでゐた。

高い建築物の斷面で圍まれたそこの地面には役に立つ、役に立たぬ荷車の數輛、少し許りの材木の積重ね、生乾きの干物などがあつたと記憶してゐる。裸の地面だ。巴里の眞中で僅か二十坪でも三十坪で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も土を見るのは忘れられない印象を殘すに充分だ。學校らしいものはまだ見出せなかつた。唯一つその地面の上にぢかに立つた平家造りのアトリヱがあつて、間口一間許りの入口の扉が左右に八の字にあけてあつた。

その入口から巾廣いアトリヱの窓にかけて机、腰掛け、戸棚、そんな粗末な木製の家具類が干してあつた。机の脚からは露がまだぼたり／＼落ちてゐるし、板の面からは水蒸氣がぼや／＼立ちのぼつてゐる。入口にも水が撒いてあつて、强い石炭酸の臭氣が鼻をつく。今やアトリヱの掃除を濟せ、家具を洗つて干した處といふ場面である。

自分は全く何がなんだか見當がつかずに、でも敎へられたまゝアトリヱの入口に近づいて見た。森として人の居相な樣子ではない。人がゐなければいくら明放したアトリヱでもやたらに覗くべきものでない事はきまつてゐるが、つひ自分は覗いて見た。覗いてみると、人がゐないのではなかつた。ちやんと一人ゐた。ゐたはゐたが晝寢をしてゐた。奥まつた隅に置かれた寢臺の中に、頭まで毛布をかけて仰向きにすや／＼眠入つてゐる一人の老人があつた。

起さうか、起すまいか、このまゝそつと歸つて終はうか、そんな事を思案する片手間に、いつか自分はアトリヱの中を悉く觀察して終つてゐた。又それは大して手間のかゝる事でもなかつた。寢臺の外には家具といふべきほどのものは一つもなかつた。皆んな戸外に持出してあつた。それにしても、これは餘り貧乏臭く見られても仕方のない畫室だつた。四方の壁は板張りの裸のまゝになつてゐる。莫迦げて大きな天井窓から外のやうな日光が用捨なくぴしよ／＼に濡れた床板の上に直射してゐた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その明小屋同然だつたアトリヱの中で、もう一つ私の目にとまつたものがある。それは入口の眞正面の壁の額縁にも入れずにかけてあつた一枚の油繪である。畫は可なり拙くかいてあつた。然し一見私はそれを眠つてゐる老人の肖像畫に違ひないと思つた。高い額に房々とたれた白髮と長い頤髯は鉛色に見えたが、本物は銀のやうに光つてゐた。眠つてゐる人の眼に就いては何んとも云へなかつたが、鼻の形にはもつと鋭さと威厳が表はされてゐねばならなかつた。顏色も繪のやうに黒づんではゐなかつた。天井の光で頬のあたりは老人に似ず若々しい血色に見えた。肥り過ぎも、腰せ過ぎもしてゐなかつた。輪廓は正し過ぎる位クラシックで、一本一本の皺すら人間の顏の自然な構造を毀してはゐなかつた。その上男性美を裏書する非凡と智識の相が寢顏にも自から備はつてゐた。唯だ思ひなしのせいか、生活の苦勞と倦怠とは歪めて結んだ脣から頬のあたりに苦しげに刻まれてゐた。

輕い鼾の音が聞えた。胸の上で組んだ手か心持上下に動いゐる。

起すには惜しい位、老人の眠は心地よげだつた。それだから一寸起してみたくもなつた。實際無理に老人の安眠を妨げねばならぬほどの必要はなかつたのだか、先刻からぐる〳〵廻りとして、この裏庭まで迷ひ込んで來た足勞に對し、その位な事はあつていゝといふ手前勝手な理窟をいつの間にかつけてゐたものとみえる。私は一足さがつて、今入口へ來かゝつたやうな態度で、改めてこつ〳〵扉を叩いた。

老人は羽根枕の中で靜かに眼を開いたが、天井明りが餘りまともだつたので、又目をつむつて横を向いた。鼾は消えた。やがて半身を起すと又眼を開いた。その霞んだやうな眼でじつと私の方を見た。彼はシャツの襟をはだけてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ご免下さい、お起しまして。」
「いゝえもう起きる時でした。」
さう云つて襟をかき合せながら、
「今朝から掃除を初め、今しがた濟んだので一寸晝寢した處でした。失禮しました。普段晝寢なんかした事はないのですが、ご覽の通りこんなに壁から、床から、家具まで、一人で洗つたり消毒したりしたんで、今日は疲れました。まあ一寸待つて下さい着物をきます。」
彼は寢臺を下りて、靴をはき、上着を引かけながらも何かと話した。それが初對面の人に話すやうではなく、何んでも細々話した。私は當惑した。早く私の訪問の理由を云はねば濟まぬと思ひながら、その隙が見出せなかつた。彼はそんな事には一向かまはなかつた。私が何をしに來たのか呑込でゐるやうに馴れ〳〵しく話しかけた。
「さあ、これで出來上りました、失敬しました。」
物云ふ度にそのぼう〳〵と長い白髯は胸の上で動いた。
「私はこの十六番になるカバニヤリ學校の事を伺ひに上つた丈けですが……。」
「あゝさうでしたか、そのカバニヤリが私です。」
さう云つて手を差出した。私も彼の人品にある信用を置いて、名刺を渡した。彼は目を細めてそれを眺めながら、
「日本の方ですね。さうだらうと思ひました。私は支那人の友達を持つた事があつたが、日本人に親づ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きになるのは初めてゞす。私は東洋に非常な同情を持つてゐる。」
とさも滿足相に云つて、名刺を胴着のかくしに藏つた。
「隨分こゝを探すのは骨が折れました。一體學校はどこにあるのです。」
「こゝです」
外から椅子を持ち込んで來た彼は少し顏を赤め微笑しながら云つた。私は氣の毒な思ひをしながらもその憐むべき一言に或る親みを感じさせられた。
「この部屋は大きくはないが、でも二十人位は這入れる。それによく掃除をしたから不潔な事はもう決してない。」
彼は申譯するものゝやうに、溫氣と石炭酸の臭でむつとする部屋を見廻して云つた。
「今晩から上つていゝのですか。」
「えゝ七時から授業を初めます。私ともう一人英國人が敎へに來ます。その人は米國のハアバアド大學で哲學のドクトラアを受けた立派な學者です。」
「私は佛語も出來ませんが、この夏英國へ旅行するつもりですから、寧ろ英語を敎へて頂きたいのです。」
「よろしい。私は十五年ロンドンにゐましたから、英國人のやうに話します。それに私の足りない處は私の友達が援助して呉れませう。」
から話してからパイプを啣え、刻煙草に火をつけて吸ひ初めた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十五年ロンドンで暮したといふ事から、彼は伊太利人でヴヱネト州の生れであるが、前後二十年も佛蘭西に住んでゐると話した。私は彼の寢顔を見た時から佛蘭西人でない事は確かだと思つた、それにその名前が伊太利人ではなからうかと云ふ疑問を抱かせた。其頃私は佛語より伊太利語の方がいくらかましだつたし、伊太利と云へば、人によらず、物によらず總て第二の故鄕といふ氣がしてゐた。でそれから伊太利語で話し初めた。自分も嬉しかつたが、彼は一層喜んだ。從つて話ははずんで終つた。一時間許りして歸る時には今日初めて逢つた人のやうな氣はしなかつた。彼は一體誰れともすぐ打解けて、包む處なく話した。今考へれば彼の經歷と全く孤獨な生活がさうさせた事に何の不思議もなかつた譯である。

「では今晩上りますが、私の組は何人位生徒がありますか。」

「まだ一人も。然し今晩です、今晩になれば大分多勢來るでせう。何しろ三千枚も廣告を配つだんですから。」

確信あるもののやうに、滿面得意氣な希望の色を浮べて、手を振りながら、

「兎も角これから、二十人ほど腰掛けの用意をして置かなくつてはならん。」

わがドンキホオテはもう落付いてゐられなくなつて、椅子から立上つた。

二

外には薄明が殘つてゐたが、中庭を通つてアトリヱに這入ると內はもう夜だつた。中央に据ゑた長い

細い机の上にランプが三つも黄色くともつてゐた。

その明りの下でカパニヤリ老人が唯一人ぽつねんと本を擴げてゐた。中庭は暗く、アトリヱの中は寂しかつた。晝間のやうな濕つた空氣はもう燥いて、石炭酸の臭も薄らいでゐた。ランプの傘の下に限られたアトリヱの内は狹くなつたやうに見えた。

「さア、そこにお掛けなさい。」、

さう云ひながら向合つて坐らせた。彼は讀みかけた小形の本を無雜作にとぢると、ぽんと輕く表紙をたゝき、その手で鐵框の粗末な鼻目鏡をはづした。二三度目を堅くねむつて擦つた。

「まだ誰れも來ませんか。」

「之からです、今にきつと來ます」

少しの不安氣な容子もなく、元氣よく言放つた。彼はあれから散髪をしに行つて來たものと見える。五月蝿く額に下つてゐた白髪は綺麗にかき上げられ、長い髯も長いまゝ揃へられ、形よく胸の上に下つてゐた。よく見ると眉毛だけが胡麻鹽だつた。その奥によく光る眼が並んでゐた。それは鳶色で、老猾と誠實、智慧と放心、その相反した何れにも思ひやうによつては思へる眼だつた。どの位信用していゝのだか、惡いのだか分らないやうな眼だつた。

彼の談話も亦その眼のやうだつた。どこまで事實で、どこまで嘘なのか判斷しにくかつた。先刻も話しかけた支那人の話を又した。彼は非常に聰明な男で、法律を調査に來たのであつたが、哲學的な議論を好んでした。二人は二年も一緒に研究をした。それがため孔子や孟子の思想を學ぶ事が出來たとも云

つた。又有名な露西亞のミッシエル・バクニンヌの家庭敎師となつてゐた頃の話をして、バクニンヌは横濱にも行つた事があると云つた。バクニンヌには兎も角ひどく敬服してゐた。そんな雜談で三十分も過した。彼の話は愉快だつた。

「まだ來ませんね。」

話の切目で私が云つた。

「今に來ます。」

相變らず元氣よく答へながら、やつと立つて行つて、英語の本を二三冊奧の方から持つて來た。私の程度を試みる積りらしかつたが、私は全くの初歩からやつて貰ひたいと云つた。で彼は再びリイダアの一を持つて來て二人の間に擴げた。鼻目鏡をかけながら、白髮頭を本の上に突出した。六十幾歲にもなる人がリイダアの一を讀む事はどんなに寂しいか分らない。やがて彼は音讀し初めた。

わがカバニヤリ先生は「それは本である」と讀め初めた。私は驚いてその口元を見詰めた。これが英語だらうかと思ふほど、その發音は奇怪に滑稽を極めた。「これは犬である」と讀まれると吹出したくなり悲しくなつて來た。不思議なもので、或る外國人が外國語を話すアクサンには他の外國人にとつてたまらなくお可笑しい癖が耳障りになる。とても之は駄目だと悲觀して終つたが、初めた許りで直ぐやめて下さいと云ふ譯に行かず、酷く當惑した。

いつの間にか眞黑い一人の男が忍び込んで來て、吾々の机の脇に立つてゐた。黑い蝙蝠傘に兩手を支えて、ぼんやり吾々の本を眺めてゐた。私はぎよつとしてその男を見上げた。カバニヤリ先生も振返つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てその人を見た。見ながらにつこりして立上らうとするのを、その男は右手で肩を支えて制した。先生は中腰になつたまゝ、英語でぺら／＼話し出した。黒い男は默つてそれを聞いてゐた。先生は終ひにも う言葉だけでは間に合はなくなつて來て、顏に顏を近づけ、兩手を使つて熱心に話してゐる、その容子が大分激昂してゐるやうに見えたが、黒い人は反對に益落付いて少しも騷ぐ風なくじつといつまでも聞いてゐた。終ひに彼は二言三言答へたが、それは低い小い女のやうな聲だつた。沈痛で滑かに響いた。今想像すると、あれは豫期に反して一向生徒の集まらない事でも話し合つたのではなかつたらうか。

今度は天にも地にも唯一人の生徒である自分がこの黒い人に紹介される番になつた。彼は云ふまでもなく、ハアバアド出身の哲學者と云はれた英國人だつた。

黒い人は初めて宣敎師の被るやうな黒い帽子をぬいで自分の手を握つた。手は氷のやうに冷えてゐた。握手して終ふとすぐ又帽子を被つた。ブロンドの薄くなつた髮の毛は帽子の外で少し縮れて品なく女臭く見えた。色が蒼白く、幅廣な額が殊に葱の莖のやうに白かつた。靑い眼は沈んで臆病らしくおど／＼してゐた。カパニヤリ老人の丈の高い釣合のいゝ體格を貴族的と名づけるならば、この人の首の短い猫背の、丈の低い風采は極めて市民的だつた。薪屋のやうだつた。彼が異敎神の彫刻、所謂ディオニジヤック形の人物ならば、これは寺院の柱の陰に小さくなつてゐる名も忘られた一人の基督敎の聖者の不恰好なゴシック彫刻像に似てゐた。

彼等は二人並んで自分の前に坐つた。たつた一つの子供の讀本が三人の大人に眺められた。アトリエ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の中は嚴肅なほど寂しかつた。

カパニヤリ先生が又その奇拔な發音でリイディングをし初めた。彼も私もそれを謹聽した。彼は吹出しも、笑ひもしなかつた、默つて聞いてゐた。何かカパニヤリ先生が相談を持かけるまで決して講義に喙を入れずに、默つて耳を傾けてゐた。

九時近くなつて三人は本をとぢた。

「とうとう誰れも來ませんでしたね。」

私は慰めるやうな調子でカパニヤリ先生を見て云つた。

「今日は一人も來ない。」

彼は當然豫知してゐた事のやうに雜作なく云つて退けた。私は先刻の言葉を思ひ出して一寸不快を感ぜずにゐられなかつた。

「然し明日、明後日になればきつと來る、今日は何しろ初日だから。」

不安相な顏もせず、別に失望の色も見せず云つた。私もそんなものかと思つた。

やがてその哲學者と一緒に私は車屋の潛戶を明けて貰つて往來に出た。その邊は寂しかつた。二人並んで寺院の冷々する石壁に沿つて步いた。前にて後ろにも人はゐなかつた。彼は初めて私に向つて口を切つた。ゆつくりではあつたが正確な佛語を話した。彼は私がどこに住んでゐるかといふやうな事しか話題にしなかつたが、その言葉は何んとなく本當に心から流れて來るやうに響いた。懷しい人で同時に氣味の惡い人だつた。間もなく吾々はブウルヴアル・モンパルナスの電車通に出たので右と左に別れた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三

その翌日も、又その翌日も同じ時間に、同じやうに夜學へ通つた。私は何んだか謂れあつて落魄してゐる貴公子が裏長屋で忠實な二人の老教師から教育されつゝあるやうな圖で英語の初歩を稽古してゐた。相變らず生徒は一人も增えなかつた。カバニヤリ先生も二日目までは「今に來る」を云張つてゐたが、三日目からは流石にもう云はなくなつた、否もう云はれなくなつたのであらう。さうかと云つて別に深くそれを氣に留める容子もなかつた。そこがわがカバニヤリ先生のカバニヤリ先生たる所である。然し私は自分一人のためにかうして二人を煩はすのが心苦しかつた。殊に哲學者先生は每晩唯だそこに座りに來るといふだけの事だつた。彼は欠伸一つせずに、默つて吾々の稽古を眺め、又默つて歸つて行つた。

一度歸り途で哲學者先生と二人切りになつた時、「一體カバニヤリ先生は本當に英語が出來るんですか」と訊いてみた。彼は眞面目な顏を一層眞面目にして、

「確かによく出來ます。」

さう何んの淀みなく云切つて、彼の沈んだ眼がぎろりと私を睨んだ。自分は僅か發音の點だけで氏の實力を疑るやうな質問をした輕卒を酷く窘められたやうな氣がした。彼等は互にある尊敬を拂ひ合つてゐた。

然し四日目の晩遂に二人の間の平和は爆裂して終つた。言葉の通じない私にはどうにも手のつけやうがなくつて唯傍觀する外なかつた。喧嘩は極めて小さな文法上の爭論から初まつたらしかつたが、次第

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に形勢は險惡になつて來た。カパニャリ先生が拳固で机を叩きなぐつた時は、口論だけで濟まなくなりはしまいかと思つた。仁王立に立上つた彼は、今にも打ちかゝらん氣配で、哲學者の周圍をぐる〳〵廻りしながら、眞赤になつて髯をしごき〳〵泡を吹いて罵つた。哲學者先生も平常の冷靜を失つてゐた。でも腰かけたまゝ相手の動くやうに向直つて身構へ、刺々した聲で時々反駁した。彼の顏色は益青白くなつて、手に持つてゐた例の蝙蝠傘ががた〳〵震へてゐた。强情にかけては何れが何れとも云ひやうにもない人々のやうに見えた。

でも流石に摑合ひの淺間しさにはならないで濟んだ。哲學者は云ふだけの事は云つたと云はぬ許りの片意地な態度で、すうつと立つて戸口から出て行つて終つた。カパニャリ先生は行くものを追ひかけやうともしなかつたが、火のやうな憤怒の遣場には困つた。ひどく手持無沙汰になつた。でやたらに惡口雜言を並べた。終りには彼を惡性な梅毒患者だから(彼の顏や手に小さな腫物が出來るには出來てゐた)決して握手した事はない、なんて事まで云つた。私も不愉快でたまらなくなつた。默とはたんと本を閉ぢた。

「歸るのか。」

彼は一番手近な私にその怒を向けて荒々しく云つた。

「もう歸ります」

「まだ時間にはならない。」

「でも稽古なんか、私にも、あなたにも出來やしません。」

「仕やうと思へば出來ない事は何んにもない。」

かう云つたもの丶彼の顔には忸怩たる色が閃いた。此短い瞬間に喧嘩の相手は私でなかつた事も漸く分つたらしい。

「では明晩來給へ。」

「……。」

「きつと來給へ。」

「え丶、來ます。」

「では明晩。」

繰返し〳〵彼は詫びるやうな調子で云つた。中庭に出て振返ると入口の火影に佇んだ老人の姿がはつきり見えた。その姿はなんとなくさつきまでの剛氣な勢に較べれば氣の毒な氣がした。彼は云ふまでもなく孤獨だつた。私が歸つて終へば、唯一人アトリヱの夜の懐ろに取殘されねばならなかつた。ランプの陰の生先き短い影法師すらどんなにその友の彼を憐んだらう。

「お前にはこの先晩年を休ませやうと云ふてくれる故郷はないぞ、お前の墓石を建てやうとする妻にも子にもお前は背いて終つたぞ、お前には明日喰ふべきパンも殘つてゐないぞ、それだのにまだお前は、お前の總てをパッションの餌にして悔ゐない積りなのか……」と。憐れなカバニヤツ先生、憐れな老追放者！　私は往來の暗闇を歩きながら、さう考へて涙ぐまれた。私の通る片脇には例の寺院の石壁が空まで聳えて私の心を脅した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

プウルヴアル・モンパルナスまで一度出て、そこから後へ引返した。

私は途々、机にもたれて考へ込んでゐる寂しげな老人を想像しながら、忍びやかに窓に近寄つて、窓子越しに內を覗ひてみた。豈圖らん、彼はもう諸てを忘れ果てたやうに鉛筆を握つて一心に計算に熱中してゐた。少しも孤獨に苦んでゐるやうな容子はなかつた。二十年も孤獨と同棲すれば孤獨も一人の友達になるものと見える。その机の上はいつもの通り秩序よく一面紙切れで埋つてゐた。かうして計算してゐるのが彼の通例だつた。私はその散らばつた紙切れの上にいつも讀本を擴げた。計算といふのは吾々が見ては一向譯の分らないやうな高等代數で、見る度私のぞつとしたものだつた。

その晩吾々はぶら／＼散歩して十一時頃別れて歸つた。彼はすつかり機嫌を直して、色々面白い話をして呉れながら、暗い町や明るい町を夢のやうに歩いて通つた。彼の話に少しでも敬意を拂ふ聽手のあることはどんな喜びたつたか知れない。希臘時代には既に電子に關する完全な學理が發見されてゐて、電氣力は實用に應用されてゐた、その實際は發掘物に見出す事が出來るとか、飛行機もあつた、現にサモスの「勝利」はその象徵的紀念像であるとかいふ、破荒天な新說は吾々の容喙すべき限りでないとして、ヴザアリのかの有名な畫家傳は決して世人の傳へるやうな彼の著述ではない、實はミケランゼエロ自身で書いたものだといふ說や、埃及のスフィンクスは單なる石像でなく、內部的裝置の當然あるべき建築物であるとの說の如きは、非常に獨斷的だつたが、敬服すべき着眼點と獨創的な論據があつた。殊にその話を聞いてから五六年たつて、偶然米國のある探險家がスフィンクスの內部に三重の黃金の殿宇を發見したといふ報に接した時には、夜の街をてつ／＼歩いてゐたカバニャリ先生の墨繪のやうな姿勢が直

ぐ目の前に浮んだ。嘲りたいやうな、憐みたいやうな、不思議なそれは思ひ出である。

四

私は相變らずカパニャリ先生の處へ通つた。その後も生徒は來なかつた。「私は馬鹿な事をしたものだ、廣告を三千枚刷るのに二十五法も使つた。それを配つて歩くのに四日かゝつた。さうして生徒はお前一人しか來ない。」さう愚痴をこぼしたが、すぐそんな事は忘れてゐた。私も英語を習ふ事はいつとなくやめて終つた。矢張りその本國語を敎へて貰ふのが一番いゝに違ひなかつた。私の夜學に來出した最初の目的は達せられない譯だつたが、或る事情で急に英國行を見合せたので、それも大した損失ではなかつた。

伊太利語の稽古を初めるやうになつて先生の本に飽きつぽいのには全く感心した。二三日づゝで讀本を替へた。

最初は何んでもお前の讀みたいものを持つて來いと云つたので、セラオとか、ダヌンチョとか、デアコオザとか云ふ現代ものを持つて行つた。十ペエヂか、二十ペエヂも讀むと、もう後は家で讀めばひとりでに分ると云つた。それからイ・プロメッシ・スポオヂにかゝつた。それも一週間位でやめになつた。デカメロオネも同様な運命になつた。それでも一番長く續いたのがレオパルディの詩集だつたらう。之は肩の張らないものなので、大概カフエの卓で講釋を聞いた。二人さし向つて初夏の夜に厭世詩人の寂しい詩を讀んで貰つた記憶は一番樂しかつたやうな氣がする。最後にゼペルティ選文集にとりかゝつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これには形而上の議論や、政治上の意見などが混つてゐるので、むづかし過ぎて興味が少なかつた。然し先生は喜んでゐた。色々得意な講釋をする餘地が多かつたからである。然しギペルティのお陰で大變な禍がやがて身の上に降りかゝつて來た。

　或る日の事、カパニヤリ先生は改めてから云つた。

「一つ私はお前を根本的に教育してみたいがどうだ。今お前がそんなに骨折つてギペルティなんかを讀んだ處で、何んの役にも立たない。たとへお前にどんな理解力があつたつて、お前の受けた教育だけでは解らないのが本當だ。日本でのお前の教育は物になつてゐない。だから一つ私が教育し直してやるといふのだ。さうしてお前が日本に歸る時分にはお前の裡に私といふものを充實させて返してやる。文學だ、歴史だ、自然科學だ、そんなものは人間を作るために何んの効力もありやしない。要するにそれ等の學問は總て過去の記錄たるにとゞまる。第一に肝心なのは論理學だ。然し論理學を學ぶ前に準備として數學と羅典語をみつしりやる必要がある。今お前に必要なのはその二つだ。どうだ是非一緒にやらうではないか。」とさも熱心に說いた。

　私は不思議な感に打たれた。先生のやうな生涯でも、まだかうでなければならぬといふ理想があるのか、自分が一番いゝ、自分が一番豪い、さう思つてゐねば活きて行かれないものがあるのか。それにしても私の裡にカパニヤリ先生なるものが充實されたとしたら、私の運命はどうなつて行くだらう。それに數學と羅典語と聞いては毛虫同樣私の嫌いなものだ、聞いた丈けで精神的に眩暈を感ぜずにはゐられない。元來私が夜學へ通ふ氣になつたのは「これは幾らですか」「どうぞパンを下さい。」そんな日常の用語

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を教はるのが目的だつた。そんな高尚な學問をしたり、先生の人格の感化を受けたりするつもりはなかつた。第一日本では「局長の椅子は幾ら。」「重役の椅子は幾ら。」「教授の椅子は幾ら。」「どうぞパンを下さい。」こんな單語を教へたり、教はつたりするのを學問と心得てゐる。それでなければ道徳倫理所謂神聖な精神修養の課目を學問の極致と心得てゐる。「何々は何々すべきものなり。」これだ。私はかういふ風に教育されて來た。今更らそんな面倒臭い學問などが何んの餘裕あつて頭の中に這入らうぞ。眞平御免挑下げだと思つた。

然しカパニャリ先生は中々承知しなかつた。「お前は大層面倒に思ふから出來ないのだが、私が羅典語を獨修したのは僅か一週間だつた。その代り一週間といふものは全く一室に籠り、外出の出來ないやうに頭を半分坊頭にして終つた。かうしてその室を出て來た時はもう自在にティトリィヴルを讀む事が出來た。」

かう雜作なく云つて聞かせて說服しやうとする處は中々上手だつた。私も先生の時間に對する觀念のせつかちは兼ねて心得てゐた。デカメロンにある話か、それとも本統の話か知らないが、嘗つてナポリで先生が惡い病氣に罹つた時、僅か一日の間に劇藥を飲んで全治し、翌日は素知らぬ顏で旅行先から來る妻君を迎へたといふ自慢話を聞いた事がある。でこれも或は同一筆法ではないか……と思はないでもなかつたが、いつの間にかうつかり羅典語の方だけ「シイ」といふ承諾を與へて終つた。たつたこの一言のため、どれほど私はその夏中苦しい目を見たか、頭のいゝ餘人には想像出來ない。

その翌日、先生は私を引張つてヴォヂラの先きの先きの郊外に近い處まで文典、辭書其他必要な書物

を調へに行つてくれた。そこは地下室と云ひたいが、寧ろ穴藏の底にあつた。床は地びただつた。集まつてゐる本の數は何萬卷といふ大變なものだつたが、皆んな古い穢い本許りだつた。主人といふのは無口な學者らしい老人で、先生とは長い友人だといふ事だつた。流石にカバニャリ先生でなければ知らないやうな世界があるものだと思つた。

これで教科書も揃ひ、ぐらついて許りゐた私の課目もきちんときまつた。さうかうして二月許り過ぎた。私はこゝで極く簡單にカバニャリ先生の履歴を陳べやう。二ケ月の間に切れ〲ながら先生から聞いた懷舊談は可なりの量がある。それだけでも一つの小説が書ける位だ。然し私は今その荒筋だけかひつまんで紹介するにとゞめねばならぬ。

彼はヴネト州のある豪族の家に生れ、ヴネチアでその少年時代を送つた。十四五歳になつた時、ガリバルディは盛んな歡迎のうちに徴兵募集にヴネト州へやつて來た。彼も勇心止めがたく、年齡の不足を承知しながら檢査に出かけて行つた。ガリバルディ將軍はこの少年を見てにつこり笑ひながら、どうだお前はそんな小さい身體で馬に乘れる積りか、と訊いた。負けぬ氣の彼は、乘れますと答へた。では乘つてみろと云つた。然しヴネチア育ちの彼は碌に馬を見た事すらない位だつた。弱つたが、合格したい一心で、やつと飛びついて鞍の上に匍ひ上つた。と思ふ間にもう落ちてゐた。そらみろ、と將軍は大笑ひしながらも、彼の健氣さを見拔いて合格させた。

彼は軍中に三年を過し、負傷して一旦歸郷したが、再び軍人生活に入り、一轉して代議士になつた。その時代が彼の得意の頂上だつた。「銀の船」といふ史劇がコンスタンツァ座に上演されたのもその頃の事

だつた。狂喜した羅馬の市民が作者を舞臺の上に呼び出し、銀の小船に香の高い花を盛つて贈つたといふのも、今ではもう悲しい日の樂しい思ひ出の夢に過ぎなくなつた。彼の結婚もそれと前後してゐた。式部長官の妹だつたその夫人との間に一男二女をあげた。

急進民主黨に屬した彼は共和政體を主張して、時の政府のため七年の國外追放に處せられた。七年の追放は長かつたに相違ないが、まだ彼の一生を紛碎する禍根にはならなかつた。彼は追放の六年目あと一年といふ處で、自分の娘より若い女優のあとを追つて、半白の髮と髯を眞黑に染め、色目鏡をかけて羅馬に乘り込んだ。

彼は遂にナポリで捕へられ、更らに十五年の追放に處せられた。今度はひとり郷國から見放された許りでなく、妻にも子にも見限られた。有ゆる送金の途は次第に絶えて終つた。

追放者としての二十年の生活にも波瀾曲折は少なくなかつたらうが、振返つて見れば、寧ろ單調で、弟子に向つてするやうな自慢話は多くなかつた。彼は酒を飮まず、博奕に手を出さなかつた代り、有ゆるものを女といふ坩堝の中に投げ入れて悔ゐなかつた。

ある時彼は豪然として云つた。

「私の半生は學問を愛する事と女を愛する事で費された。私はあんまり女等を愛し過ぎた。それが一身を誤つた事を知らないではない。然し今からそれをどうしやうもない。殘る幾年かも亦同じでなければならぬ。私を觀る美しい女は一年一年少くなつて終つた。然し今でも私を愛して吳れる女がある。若い男よりも幾倍も強く私を愛して吳れる女がある。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は何れを向いても躊躇といふ事を知らなかつた。先生の目前にはいつも炎々と燃へてゐる火があるやうだつた。撓まずそれだけを見、それだけに歩いた。

「先生の見ていらしやるのはなんです」

「お前にあの火が見えないか。さあ急がなくつてはいけない、何をそんなに躊躇してゐる。」

彼は有ゆる障害を押しのけて、その火の方へ身を焦しに行かうと悶えてゐるやうに見えた。そのパッションはひとり女だけではなかつた。唯だ外のものは皆んな時と共に褪り、腐り、朽ち、無に歸つて終つた。いつとはなしに慘めな女が彼の傍に一人か二人殘つてゐるに過ぎなかつた。

「お前は若い、どんな女でも好きに選べるではないか。お前が今にも聲をかけるかと有ゆる女は耳を欹てゝ待つてゐる、それがお前には分らない。青年がどんな冠と、どんな鍵を持つてゐるか、お前はそれを知らない。だから私が教へてあげるのだ。

若い時、私は聰明で、健康で、美しかつた。私のやうな良い種は地に蒔かれねばならぬ。私は良い種を出來るだけ良い土地に蒔いて、良い收穫を納めた。

もう私のやうになつてはその必要もなくなつた。たま〳〵手の間に落ちて來る者をよく守る外ない。私が女に仕へ、女を大切にするのはそれがためだ。」

先生はかう生徒に教へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五

その内カバニヤリ先生の人物が仲間の評判になつたり、實際旅行をしやうといふ必要にせまられたりして、先づ山下が伊太利語の稽古を初めた。次いで湯原も來るやうになつた。その少し前から古い先生の弟子でマホメツトといふ波斯人も一人來てゐた。もう三十を越えた位の醫學生だつたが頭のいゝ上に勉强家で、屢々相棒の私を困らせた。

吾々は四人毎晩一つ机でカバニヤリ先生の授業を受けたり、居眠りをしたりした。年上でよく肥えた湯原はその尤なるもので、來て本をひろげたかと思ふともう鼾をかいてねてゐる事があつた。

「湯原は日本人みたいでない、支那人みたいでいゝ。あれは聰明な男だ。私の友達だつた支那人によく似てゐる。」

かう云つて決して先生は咎めなかつた。湯原も初めてカバニヤリ先生の處へ來た日の歸途で、

「へえ、あの人か、あの人なら僕はよく知つてゐるよ。シルク・アンテルナシヨナルといふ畫室があつてね、そこの取締みたやうな事を暫くやつてゐた。近頃見えないからどうしたのかと思つてゐたのさ。え、それでモデルの來ない時なんか先生がモデル臺に座つたりしたんだから、氣の毒に思つたよ。あんな事をしてゐなくつたつていゝ人だらうと思つたのさ。あゝさうか、どうして中々立派な人品だ。」

そんな風に考へてゐた。

ある夕方例刻に内を出て、ぶら〳〵先生の方へ歩いて行くと、山下が向ふから少し息をはづませて、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さつさと歩いて來た。その頃はもう日が長くなつて七時頃まであかるかつた。
「おいどうしたい。」
と聲をかけると近視の彼は首をかしげて、目鏡の中からあの目を見張つた。十年後の今日でもその目の表情は變らない、恐らく事變のある度に生涯あの小鳥のやうな目を見張る事だらう。
「やあ君か、大變だよ、カバニャリ先生が大病だ。今まで僕は介抱して來たがね、君早く行つてみて與れ給へ。卵とラムを買つて今しがた飲せて來た。今はうとうと眠つてゐたから僕はそつと歸つて來たんだ。今晩夜食に呼ばれてゐたので、一寸斷りに行つたら、今まで引張られてしまつたのだ。……失敬。」
彼は例によつて云ふだけの事をいふとさつさと早足に行つて終つた。
昨日まで元氣だつた人が急にどうしたんだらう。それにしても老人だから氣遣はれると思つた。私も急いで行つて見た。入口は開け放しになつてゐた。隅の寢臺の中でカバニャリ先生はうん〳〵呻つてゐる。ランプもつけてない。枕元へ近づいてもまだ私の這入つて來たのに氣付がない。何か囈言を呻つたり、兩手で頭の毛を掴んだり、枕に嚙りついたりして藻搔いてゐる有樣が私の想像して來たより遙かに重態だつたので驚いた。
兎も角ランプに火を灯した。その火で先生はやつと私の來たのに氣付いた。
「先生どうしました。」
「苦しい、苦しい、こんな苦しい事は生れて覺えない。」
やつと云ふやうに口をもご〳〵させた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「熱でもありますか。」

「熱もあるが、心臓が苦しい。」

彼は目をつむつたまゝ私の手を握つて心臓の處へ持つて行つた。火のやうな熱である。心臓の動悸も波打つて早い。額は汗で流れるやうだつた。

「苦しいでせう。」

「あゝ苦しい、私はもう助らないかも知れない。」

さう云つて泪を流して聲を立てゝ泣いた。

「私を抱いて接吻して呉れ。」

彼は枕の上にはひ上るやうにして、私に抱ついて荒武者な口で接吻した。彼は私の手を握つたまゝ色々な事を云つた。羅馬だとか、パトリアだとか、いふ言葉が切れ／＼に聲えたが舌が縺れてよく分らなかつた。私は急激な死の來襲がかほどまで人間を物狂はしくするものかと心をかきむしられる思がした。素人の私には直ぐ腦充血とか、心臓痲痺とか云ふ病名が頭に浮んだ。旅の悲しさ廣い邊里に私は只一人の親づきの醫者も持なかつた。然しもうぢきマホメットが來る時刻だと思つた。それまでの手當として氷と氷嚢を取寄せねばならぬと思つた。

「一寸手を放して下さい。」

「お前は私を捨てゝ行くつもりか。」

恐ろしい眼で睨んで益々手を堅く握つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さうではありませんが、氷を買つて來て貰ひませう。」
「それよりこゝにゐてくれ。」
「でも氷は此場合一番必要です。氷がきつとあなたの命を助けます。」
彼はやつと私の手を放した。私は飛んで車屋に行つて譯を話した。
「そんなに惡くなりましたかね。風邪のやうだと云ふから四時頃藥を作つて飲ませてやりました。もういゝ時分だらうと思つてゐたんですに。」
神さんは案外落付いてゐたが、でも心配さうに云つた。
「藥つて何です。」
「ラムを熱い湯に入れて一リイトル許り飲ませました。」
「さうでしたか、然し今は大分熱が高いやうだから、直ぐ氷と氷嚢を買つて來て下さい。」
歸つて來て見ると先生はまだうと〳〵眠つてゐた。早くマホメットが來てくれゝばいゝとそれ許り思はれて、時計を出したり入れたりしてゐた。色々な悲しいことも考へられた。やがて彼は例によつて悠然といふより、のろ〳〵やつて來た。私はほつと一安心した。
「先生が急病でね。君の來るのを待つてゐました。
苦しいから死ぬかも知れないと云つて居ます。」
「一體どうしたんです。」
「どうしたんですか大變な熱で、囈言許り云つてゐました。」

彼は首をかしげた。

「變ですね。今朝風邪のやうだから見て呉れつて病院に來ましたが、その時はほんの輕い咽喉加答兒で何んにも心配するほどの容態ではありませんでした。兎も角診察しませう。」

彼は流石に醫者らしい威嚴を表はした。普段のマホメット君とは大變な差だつた。

「先生どうです。」

病人の枕元に立つて、顏を覗き込みながら訊いたが、何んにも答へないで眠つてゐた。

「これは大變酒臭い。」

脈を握りながら彼は顏を反けて云つた。

「何か飲んだんでせうか。」

「門の車屋の神さんが四時頃發汗させるためラムを飲せた相です。それから……」

私はさつきの山下の言葉をやつと思ひ出した。

「……それから、今しがた又山下が卵にラムを入れて飲せた相です。」

「あゝそれに違ひない。」

彼は突然笑ひ出した。

「どうしたんです。」

「醉つてゐるんですよ君、こんな事で人間が死んでたまるもんですか。……君は知るまいが、先生はそれは酒に弱いんです。それに二度もラムを飲まされては大變だ。一體どの位飲んだでせう。」

「さあ、どこかに壜がある筈だ。」

紙に包んだ卵と新らしいラムの壜が本箱の上に載せてあつたのを見出した。

「これだけ飲せたんでせうか。」

「今買つて來た許りなんだから、さうでせうよ。」

「これは大變だ殆ど半リイトルも山下さんは病人に飲せてゐる。」

と壜をふりながら笑つた。

「さうかも知れない、山下は中々强いから。」

醉つぱらいに又酒を飲ませた山下の滑稽悲劇がたまらなくおかしくなつた。その内神さんが氷を買つて來てくれた。折角來たんだから頭を冷して上げませうと云ひながら、マホメットが氷をかいて氷嚢に入れた。

私はその後樣々な嚴肅な臨終に連つた。その度にこの夜の事を思出し、かの瞬間のカパニヤリ先生を思ひ出すと、いかにも先生が輕く滑稽な人物に考へられる。然し誰れの一生にだつて、ある部分を切り放してみたら、こんな場面のない事もあるまいし、又コンスタンツ座で舞臺の上に呼び出されて銀の船を贈られたやうな場面のない事もあるまい。(終)

(作者附記、本稿は初め「追放者の末路」といふ題で執筆し初めたが健康が許さないので「追放者」とし後半を略すことにした。)



迷路

有島武郎

一

再び事新らしくもない學徒生活といふ空氣の中に彼れが自分を見出した時は、夏がもう過ぎ去らうとする頃だつた。押なべていふと、金のあるものには暇つぶしの爲めの、金のないものには少しでもうまいパンを口に運ばふとするための、生活――一方にはふやけた、而して一方にはこせ〳〵と餘裕のない生活――他人眼(よそみ)には氣高くも厳めしくも見えながら、當事者には心尤めのする程に効果の薄い生活――彼れはそういふ境遇に立ちまぢる豫想から、一種の苦い不安を胸に感ぜずにはゐられなかつた。

然しながら、梢黄葉になつた、枝ぶりのやさしいエルムの木立に見え隠れして、宏大もなく立ちならんだ講堂や研究室を見上げたり、革紐できりつとくゝつた重さうな書物を小脇にかゝへて、傍眼もふらず大股の足並を揃へて歩き廻る學生の群を見たり、思想の重さに押へつけられたように、房々した白い眉の

大公論 5580

鋭い眼に遍つた老教授が、挨拶する學生等に親しみをこめた顔を向けながら、行き過ぎるのを見たり、賑やかな大學の敷地を取まいて、建て連ねられた學市の閑雅な姿を見たり、學年開始のいさみにつれて、蝦夷茶色の學帽が、旌旗が、幔幕が、九月の青空をわたる太陽の光に、秋にふさはしい彩を漲らすのを見たりすると、彼れの心にも、さすがに、離れて考へてゐた時とはちがつた誘惑と期待との湧き出るのを覺えた。

總立ちになつたように賑か立つた街の間を彼れは友もなく默つて歩いた。而して遂に實になつたライラックの生垣に沿つて、ある横町を十軒あまりも行つた突當りの古めかしい木造の平家に着いた。鍵の孔は錆びてゐた。鍵をさしこむと不愉快な感觸が齒に傳つた。

絨氈も何も敷いてない北向きの小部屋は、濕つぽい冷やかさで彼れを迎へた。取りちらかして單調を破るべき小道具すらなかつた。彼れは亂想を頭からもぎ取るように、沒義道に帽子を脱いで、部屋の隅の古トランクの上に投りやつた。それでも彼れの頭は重苦しかつた。で、いきなり窓際にいつて、繫釘を外すと、がら〳〵つと窓をはね上げた。眼の前の小庭には唐檜が茂りあつて、永年落ちたまつた黃葉は、錆びた針を敷いたように積り積つてゐた。外の空氣は、黴臭い香をたゞへて、ひそやかに部屋に通つて來た。彼れはほとつた手を窓の枠にもたせたまゝで、ぼんやりとその陰氣な北向きの庭を眺めた。

辯護士のPはまだ歸つて來ない。蟲籠のようにがらんとしたこの家には彼れの外に人氣はなかつた。もう臺所の仕度に取りかゝる時分だと彼れが氣付いたときは、部屋に這入つてから可なり長い時間がたつた後だつた。彼れはむづかしい顔をしながら窓際から離れて、いきなり上衣を脱いで臺所に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出た。

空しい光景がそこでも彼れを待ち設けてゐた。薄暗くだゞつぴろい部屋の隅に置かれた西洋竈(オーブン)の鈍重な色は空氣にまで滲み込んでるように見えた。第一の仕事として、彼れはこゝでも亦窓を開けた。而して燃木(たきつけ)を竈(オーブン)に投げ入れて、石油をかけて火を作つた。火が燃え始めた——紅い火が。丸い孔を通して見える眞暗な中で、渦巻く白い煙を追ひかける火は、この物憂い部屋の中でたゞ一つの生物のように、細長いしなやかな斷片となりながら、光つては消え、消えては光つた。彼れはやがて頃を見計つて石炭をくべて蓋をした。而して大股に筋違ひに部屋を歩き始めた。

狂癲病院に看護夫として過した夏の二ケ月は殊更ら彼れを悒鬱にしてゐた。消す事の出來ない無邪氣さを持つた彼れの顔も、一寸(ちよつと)見には牢獄からでも來た人のように暗かつた。おまけに道を歩く時には、何時でも雑多な事を思ひ耽る癖の彼れの頭は、古綿がつまつたようにこぢれてゐて、事務所で受取つた學則の細かい活字が、うるさい蚋の群のように、うづ／＼頭の中にうごめいてゐた。彼れは嚴丈な拳をあげて右の顳顬を絶えずたゝいた。

彼れは臺所を筋違ひに歩み續ける事をやめなかつた。彼れの身にあまり、心にあまり、部屋にあまる悒鬱な力が、出來るなら彼れを戸外に、戸外から曠野に、曠野から地極にまでも驅り立てようとするらしく思へた。彼れはあらんかぎりの意志を集めてそれに反抗した。然しその努力にも係らず、彼れはぢつとしてはゐられなかつたのだ。

家庭と境遇と周圍から來る凡ての壓迫は故國に捨てゝ來た。彼れの心を捕へて逃がすまいとする或は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

甘い、或は悲しい、或は美しい記憶のいくつかゞないではなかつたが、彼れは惜んではゐなかつた。それほど彼れは若かつた。女の聲と讀經の聲とが同じ强さで心を牽くといはれる齡頃に、彼れが摘み取つた信仰の生活も、二ケ月の狂癲病院の生活の間に奇麗に崩してしまつた。何んにもなかつた。何んにもなかつた。唯自由と若さだけがあつた。だから、彼れは小兒のやうに快活で無頓着であらねばならなかつた。然し事實は反對だつた。彼れに與へられた命力は働きかける對象を失つた爲めに、彼れの肉體の中でのたうちまわつて苦んだ。その力は色と形とを失つた暗い渾沌に還つた。謂はゞ飽電しながら、それを發散する機緣を失つた黑雲のやうに、力强い非形が彼れの心に滿ち／＼てゐた。我れながらその虛無の力を彼れはあつかいあぐんだ。おまけに衣食の問題に頭を惱まさないですむ境遇に置かれるので、その暗い力は純粹に暗くなつて行つた。手がゝりのない暗さだつた。彼れには、そこまで自分を還元した事が恐ろしい以上に物凄かつた。彼れの悒欝はそこから生れ出たのだ。

「静かに、静かに」

彼れはどすん／＼と床板を踏みならして歩いて、何所かに突き出ようとあせる力を强いて押しづめながらつぶやいた。思はず獨語をいふのがその頃の彼れの癖になつてゐた。

その時突然天井に近い所で呼鈴がけたゝましく鳴つた。心の中を見詰めてゐた彼れはぎよつとして、心の一部分でも眺めるように臺所を見廻した。而して足を停めて聞耳を立てた。

二度目に呼鈴が鳴つた時、彼れは始めて玄關に客のある事を知つた。それは珍らしい事だつた。彼れは急いで上衣を引かけながら入口に行つて戸を開けた。戸の外は華かに晴れた九月の夕方だつた。その夕

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

方の光と一緒に黒い裝いをして、黒の厚いベールをかけた婦人が、吸ひ込込まれるように這入つて來た。而して彼れの手からハンドルを取上げて、ばたんと戸をたてゝしまつた。

急に暗くなつた眼の前に彼れは小柄な華車な黒い立像を見た。而してベールの奥の恐らくは大きな二つの眼が、檢べるようにぢつと彼れを見守つてゐるのを感じて、先方にばかり勝手を働かれる不快を覺えた。

「失禮ですが一體貴女は誰方です」

一體などとはこんな場合婦人に對して使ふ言葉でないのを知りながら、彼れは故意と使はずにはゐられなかつた。

「私はマーグレットの母です」

不幸な中年の婦人を思はせる色澤のある聲が可なり甫高くこういつた。マーグレットの母なら、Pと別居してゐるその細君だ。Pの妻だともいはず、マーグレットを愛稱でマァギーとも呼はなかつたのが、彼れには氣の毒に聞かれた。彼れはP夫人がさし出した手を快く握つた。

「Pはまだ歸りませんね。さう。私今日貴方に御願ひがあつて參つたのですの。是れからはマァギー……マーグレットの送り迎へを貴方がして下さいましな、お忙しいでせうけれども。私はもうPには顔を合せたくありませんし、マーグレットは貴方になづき切つてゐるんですから。いかゞ。引受けて下さいまして」

さういつて夫人はちよつと顔をかしげるようにした。彼れには、隨分やんちやな少女を土曜から日曜に

かけて連れて來たり連れて行つたりするのが面倒臭かつた。然しそれをすげなく斷るのは何んだか氣の毒だつた。彼れは簡單にPに尋ねて見ようとだけ答へた。

「Pは屹度この上なしに喜びますよ。Pにとつて私の顏を見る以上の呵責はないのですもの。難有う御座いました。次の土曜日には私貴方にお目にかゝれますわね。ではその時まで左樣なら」

いくらか蠱惑的でさへあると思はれる調子でさういつて、夫人は再び彼れと握手すると、戶を開けて身輕に石階をかけ下りて、足早に行つてしまつた。その姿は彼れの眼に美しく映つた。身だしなみのいゝ婦人から漂ひ出るかすかな優しい香が跡に殘つた。

彼れは上衣を自分の部屋に脫ぐと、又臺所に戾つた。而してP夫人の來訪のために默想からほんとに眼がさめて、急いで馬鈴薯の皮をむき始めた。

そこに凹んだ眼を持つたPが、大きな體を埃だらけにして、牛肉とバタとを小脇にかゝへて歸つて來た。

二

「今夜も私の所に友達が來るからね」

夕食を終つたPはナプキンをぐちや〳〵に食卓の上に置きながら、友達といふのが來る日に限つて見せる暗い顏をしてかういつた。而して、

「火曜日々々々には來るのだからね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とつけ足した。

　不愉快な顏は見せまいとしながら、彼れの眉はひとりでにぴり〳〵動いてしまつた。Pの言葉に從へば、Pは紐育で生れて今の夫人と紐育で結婚したのだつたが、二人の間の理解は新婚の當初からちぐはぐになつて、子供を設けても、その間の深い溝は埋らずに廣くなるばかりだつたので、互の間に離婚の話がもちあがつたけれども、紐育州の離婚手續は面倒なので、成るべく早く決行が出來るためにマサシユーセッツ州に移つて來たのだ相だ。この州では移籍後三年で離婚の條件は成立つのだ。で、P夫婦は別居してこの三年の期限の來るのを待つてゐるのだ。Pが友達といふのは一人の婦人だ。彼れがPと共同生活を始めてからもう三週間になるが、その婦人は一週間に必ず一度づゝPに連れられて來て三四時間をPと共に過ごして行くのだつた。それが必ず火曜日の晩であることを彼れはPから話されて始めて氣が付いた。

　Pと共同生活を營んでから始めてその友達といふのが來た晩の彼れの心の醜さを彼れは忘れる事が出來なかつた。友達を連れて來るが君はどうか顏を見せないでくれと云ひ置いて出て行つたPが、暗くなつてから歸つて來た時、Pの跫音(あしおと)の外に廊下に聞えた跫音は女のそれだつた。彼れは別に怪しみもしないで書物を讀んでゐた。Pの書齋と寢室とは彼れの部屋からは廊下一つを隔てた向ひにあるので、話聲は、意味までは解らぬながら、可なり明らかに聽き取れた。始めの中は友達の間に交はされるらしい快活な高い聲と笑ひとが漏れて來てゐた。然し少(しばら)くして讀み耽つてゐた書物から彼れが注意をPの書齋にふり向けた時、聞えた聲は、押しひしやがれて、たゞひように早口な、熱のこもつたものだつた。彼れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は書物から顔をあげて書齋の方に眼をやりながらぢつと聞耳をたてた。脅かすような男の低いしやがれた聲……沈默……彼れの心臟には破れさうに血がこみ入つて、頭ははち切れさうに暴れ狂つた。

童貞を守り通して來た彼れの想像力は事實以上の境まで彼れを連れていつた。彼れの手には冷たく油汗が滲んで、脚は椅子にも堪へないようにわな〳〵と慄へた。その間にも彼れは自分と戰はうとした。

「貴樣は何んといふ馬鹿氣違ひだ。こんな事を誘惑とさせる程貴樣は淺薄なのか。讀め書物を。書物の中の思想に喰い入つて行け。齒を喰ひしばつて思想が千切れるまで噛みくだけ。貴樣の頭を向ける事は山ほど外にある。滿洲で戰つてゐる露西亞人と日本人の一人だけの事ですら考へて見ろ。貴樣の醜態を打ちくだくには餘りあるものがある筈だぞ」

さう嚴しく自分をたしなめながら、彼れは矢張り渴いた野獸のように片唾をのんで、恣まな想像を頭一杯に描いてゐた。而して血走つた眼でぢつと書齋の方を見詰めてゐた。

とう〳〵部屋の空氣が彼れには息苦し過ぎて來た。彼れは高熱になやむ病人と同じ足どりてひよろ〳〵立上つて漸く窓の所に行つた。而して非常な力で窓を開けると、水を得た魚のように、口を開けて夜の空氣を吸ひ入れた。張り切つた絲同樣、次ぎの瞬間には斷ち切れさうだつた彼れの力は、漸くかすかなゆるみを見付け出した。彼れの口からはすゝり泣きのような長い震へた溜息が漏れた。

然しすぐその跡から盲目な本能は二重の力を集めて押かへして來た。詩人の想像がクライマックスに達するまでは何所までも灼熱して行くように、一度眼覺めた欲情の衝動は、天才のような正確さで、彼れの心の中に恐ろしい樓閣を築き上げた。書齋から寢室に通ふ唐戶が開くのを聞いたと思つた瞬間から、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼れの神經は極度の緊張に達して、彼れは苦しげに喘ぎながら、ある一事をのみ專念した。欲情の忘我が來た。始終一所ばかりを見詰めながら、彼れは我れ知らず盜賊のように靴を脫いだ。而して靜かに自分の部屋の戶の所に寄つて行つた。而して鍵の孔に耳をつけた。而して天から地につながつた落雷の光のように震へてゐた。

その翌朝Pは、彼れの機嫌を取る積りも手傳つてゐたのだらうが、すつきりした氣分で、四十男にも似ず子供のようにはしやいでゐた。それに反して彼れの嶮しく澄んだ眼のまわりは紫色に黑ずんで、口の中は物をいふさへ苦しい程乾き切つてゐた。而して自己に對して暴虐の限りを盡した頭は、泥のように濁りながら痛々しく傷いてゐた。彼れの感じ深い心は、今まで自分でも知らなかつた醜さをしみじみ怒り恐れた。

次の週にPが婦人を連れて歸つて來るといつた時、彼れは驅り立てられるようにPの留守の間に家を出てしまつた。彼れは罪の思出にのみ生きるカインのように、開校前の淋しい學校町の夜を所嫌はず步きまわつた。その時々にPの家で行はれてゐると思はれる恣まな光景が、跡から跡から彼れに追ひすがらうとした。彼れは暗闇の間を逃げ廻つた。狂癲病院内の隱者のような嚴かな生活を彼れは祈るように繰返して考へても見た。然し惡魔はその淋しい生活をすら娼家の生活にして見せようとした。天使のよらに純潔な可憐な監督の娘のイーディスは媚びた眼をあげて、嚴格な副院長の接吻を求めてゐた。看護夫と看護婦とは木蔭や叢の中を密のような私語で滿した。白髮の老院長すらが、躁狂性の或る美しい婦人患者にからかつてゐた。彼れは釋迦を思つた。釋迦を思ふと、その沐浴を垣間見て乳を捧げたといふ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處女が眼に浮んだ。彼れは基督を思つた。基督を思ふと、白晝奸淫を犯したマグダラのマリヤが想ひ出でられた。

彼れはいつの間にかロウエルの住んでゐた家の前に來てゐた。暗い木立ちの奧深く續く道の所々に輝く電燈の光は、やゝ乾いた樹の葉をも水々しく照してゐた。（いつもなら彼れはそのしめやかな感じに打たれて帽子を脱ぎでもしたであらふ）彼れは反抗するように電燈の光に映へた白壁を睨みつけた。「僞善者」さう彼れは獨語ちた。

知らない中に彼れは又町に沿ふて流れる河べりに出てぼんやり暗い水を眺めてゐた。眞黑な水はボートや杭をしやぶりながら流れるともなく流れてゐた。遠くの方でボストンに通ふ電車が時々靑白い火花を散らしてゐた。その外に動くものとてはなかつた。自然は、不服なく、慌てずに、その大きな力で活きてゐた。然し彼れの頭の中では全世界が動いてゐた。全世界が淫蕩に動いてゐた。「この瞬間に」と彼れは思つた「また次の瞬間に、Pの今しつゝある事が地球の表面にどれ程行はれてゐるか。夫婦の間に、その時まで童貞であつた男女の間に、凡ての醜行に飽き果てた娼婦と放蕩者の間に、自然に、不自然に、而して强迫的に、……。」彼れの心の眼には、色々な厭むべき場面が、眼まぐるしく次ぎから次ぎへと折重つて現はれ出た。顏や手に蚊の來るのも忘れたように、彼れは身動きもしないで、その奇怪な幻影を見入つてゐた。世界のどんづまりの姿がそれのように思へた。彼れは恐ろしい欲望にさいなまれてわなく〳〵と戰いてゐた。

ふと彼れは襟を傳ふ冷たいものに氣がついた。眞暗な空はいつの間にか雨になつて、彼れの帽子と肩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とはぐつしより濡れてゐるのだつた。彼れはそれでもそこを立退かふとはせずに、奇怪な空想に身を委ねてゐた。

「俺れは臆病なんだな全く」

しと〳〵と降る秋雨の中に唯一人立つて、かう彼は囈語のようにさゝやいた。

「力があるんだからな」

「あゝあゝ……馬鹿になつてはゐないぞ」

「どん底……靜かに……靜かに」

思ひ出したように彼れはかうも獨語ちた。

　雨は次第に降りつのつて彼れの上衣からワイシヤツを濡し、メリヤスの肌着を通し滴になつて背骨を傳ひ始めた。その時彼れは漸く我れに還つた。冑を着たように硬ばつて重い衣服の感觸の間に、彼れの肉體は寒さと感情とで慄へてゐた。

　痺れた脚を重そうに引ずりながら、人通りの絶えたがらんとした往來を通つて彼れは歸路についた。彼れの悲しみを知るものは何所にもなかつた。空しく費された肉は疲れ果てゝゐた。彼れはそつと表戸を開けて部屋に這入つた。婦人を送りとゞけて歸つたPの安らかな鼾がかすかに廊下を隔てゝ聞えてゐた。彼れはぐつしより濡れそぼつた衣物を、はがすように脱いで跛脚な椅子にかけた。而してこちんとした寢臺に横になつた。

「靜かに、靜かに」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やゝ暫くしてから、熱い涙と共に彼れはこう獨語ちた。

是等のいまはしい記憶はPの言葉を聞くにつれて、彼れの心にまざ〳〵と甦つた。別居とはいふものゝ離縁も同様なPの境遇で、Pが外の婦人と親しむのを彼れは尤めようとは思はなかつた。たゞその事を秘密に――彼れに對してさへ――してゐるらしいのが彼れに不快を與へた。それよりも彼れを不愉快にするものは、その事柄が彼れに與へる恐ろしい影響だつた。彼れは何んとかしてその日は呵責から免れたかつた。

で、Pが家を出ると彼れも家を出た。薄寒い程に空はよく晴れてゐた。明日から學校の始らふといふこの町は、夜になる程賑やかになつてゐた。店といふ店は電燈の光で寳石のように輝いてゐた。男女の學生の笑ひさゞめく聲や、面白い校歌を歌ひ歩く聲が一つの音樂となつて耳を撲つた。群集の凡ては自由に快活に心を許して振舞ひ歩いてゐた。その中を、彼れだけは、囚徒を護送するように、彼自身の心に嚴しい警戒を與へながら歩いた。彼れは自分が健全であるのか病的なのかを疑はないではゐられない恐ろしい心の狀態にあるのを感じた。

彼れはもう一人で町の中を歩き廻る事にも懲りてしまつた。溺れた人が一片の藁にも最後の望みをかけるように、彼れは誰かにすかつてこの恐ろしい一夜の誘惑から逃げようとした。然し住みついてから三週間にしかならないこの町に知人といふようなものはなかつた。彼れは已むを得ず日本にゐた時顏だけ知つてゐたMを尋ねて見る事にした。

Mはこの町でも一流の寄宿舍に住つてゐた。五分も厚みのあらふと思はれる絨氈を敷きつめた階段を

昇つて、九尺も一丈も高さのある檜造りの戸を開くと、そこに善美を盡したMの部屋があつた。小Mは鏡の前に立つて、絹のシャツ一つになつて髭を剃つてゐたが、部屋の置物の一つのように小さく見えた。彼れが這入つて行くと頬から顎にかけて石鹸だらけになつた顔を一寸こつちに向けて、その父によく似た低級な愛嬌を浮べて挨拶した。一ヶ月三百圓づゝ送らふかといつてよこした父に對して、それはけた違ひでせう、三千圓なら間に合つて行くかも知れませんと、高飛車に返事をしたといふ男だなと思ひつゝ、彼れは安樂椅子に體の半分も埋れながらその後姿を見やつてゐた。

「一寸待つて下さい。すぐ濟ませるから」

Mは頬をあたりながら、鏡に映る彼れの顔をうろんさうに見詰めていつた。

「時にね。貴方は勞働してゐるといふがさうですか。感心だね」

こゝでMは丁寧に剃刀の石鹸を紙で押拭つた。而して剃刀をまた顎の所に持つていつた。

「貴方は勞働なんどせんでもいゝでせうがね。もう一人Kとかいふのも勞働してゐるさうだか、西部とちがつてこゝでは……こゝもエールなんどなら別だけれども、おやめになつたら如何です。お父さんの顔もある事だし、こゝにゐる日本人達も面白くは思つとらんようだから」

Mはこう途切れ／＼に、いひながら、顔の皮をあちこち引張り上げて毛を堀つた。

言葉も言葉だが、人を人とも思はないしやあ／＼した小生意氣な顔は、彼れを怒らした。彼れの悒欝はそのまゝ憤怒に代つた。彼れは自分がこんな所に來たのを耻入つて赤くなりながら立上つた。

何んとか言ひ譯をいつてゐるらしいMの言葉を聞き捨てにして、彼れは往來に出た。血は熱湯のよう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に煮えくりかへつて、皮膚に近い所を漲り流れた。凡てのものから切り放された彼れの心は少しの手がかりさへ見付ければ、容捨なく驀直にそつちに働きかけた。

彼れはPの事などは忘れてしまつてゐた。Mの導くような生活に對する憤激だけが暴れ狂つた。他人事ながら、外面にばかり即して、自分といふものを置きざりにしたまゝ、済し込んでゐるような鈍さ加減が、彼れをいらだゝした。彼れは、おまけに、そんな所に彼れ自身を運んで行つた自分の心を耻ぢ怒つた。「信仰を持つてた貴様は少くとも神に慰籍を求めようとしてゐたのに、今はMづれに行つて慰籍にありつかふとする。その態は何だ」彼れは肩を怒らしながら、そうつぶやいて、アカシヤの葉の散りしいた歩道をがむしやらに歩いて行つた、お蔭でその夜の恐ろしい誘惑からのがれた事は忘れながら。

三

「ウエッブでも讀んでやるかな」

こう獨語ちながら、彼れはL教授の講堂から校庭に出て來た。「今の時代に生れて社會問題を閑却するのは精神的のなまけ者だ」といつたウエッブの言葉を面白いと思つてゐた彼れは、社會問題の講座を受持つL教授の開講に、參考書の一つとしてその名を擧げられたので、讀んで見る氣になつたのだつた。貸出されない中に早くと思つて彼れは圖書館の方に急いだ。

晩い午後の陽は薄曇つた空にぼんやり隠れて、秋だつた風が立ち並んだエルムのなよ〳〵しい枝を可なり激しくゆり動かしてゐた。青いまゝに吹きちぎられた木の葉は、學則の切端や包紙の屑などと一緒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、乾いた音を立てゝ、彼れの足許を轉んで行つて、建物の隅に波頭のやうな渦を卷いた。それを見て彼れはその年の老いてゆくのをしんみりと思ひやつた。故國を去つてから四年目の秋が來たのだ。燃えるやうな暑さの中に、汗みどろになつて狂人を相手に働いた夏の事は、遠い昔のやうにも夢のやうにも考へられた。

彼れの眼はひとりで夢るやうになつた。廣い厚い肩を持つた中背の健康な體の上に正しく据えられたその顏は、體格に比べては少し小さく見えたけれども、きりつと引しまつてゐた。デリケートな輪廓ではなかつた。のみならず耳から顎にかけての骨だつた堅い線は、肉情と物欲の激しさを語つてさへゐた。鼻は不恰好に大きく平べつたかつた。口も大きかつた。然しその口尻は笑窪のやうにくぼんで、怜悧さと子供らしい無邪氣さを示してゐた。左の眼は右の眼より小し大きかつた。女を知らないその眼は女の眼のやうに澄んでゐた。左の眼は見、右の眼は考へてゐた。物思ひにでも耽る時どうかすると、少し纒まつた彼れの眼は夢遊病者のそれのやうに瞬きをしなくなつた。さういふ時の彼れの顏は非常に精神的になつて美しかつた。

その時も彼れはさういふ夢るやうな顏付をしてゐた。すれちがつた學生達は、何んといふ事なしに、振返つて彼れを見送つた。「あれもJapか知らん。いゝ顏をしてゐる」さう彼等のある者はいつた。

彼れは古めかしい大きな建築の暗い階段を登つて閲覽室に這入つて行つた。エマーソンもソローもロングフェローもそこで書物を繙いたといはれるだけに、米國には滅多にない古い落付いた空氣が漂つてゐた。開校の日だつたので、さしもに廣い室内も數へる程より閲覽者はゐなかつた。彼れは眞直に目錄

棚の所にいつてカードを繰り始めた。ウエッブに來るまでに色々な書名や著者が彼れの注意を牽いたので、彼れは奥に入つてかの引出し、この引出しと漁つて歩いた。

その時女の靴音が彼れに近づいた。が、彼れは格別の注意を拂はふともしなかつた。

「お手傳致しませうか」

彼れは夢るような眼をあげてぢつとそこに立つ人を見た。それは一人の女事務員に過ぎなかつた。

「え、ウエッブを」

「ウエッブの何んで御坐います」

「ウエッブの『生產業上の民主主義』でも讀みませう」

こう彼れは答へた。而して、

「然しファビアン協會ぢやいやになるな」

と日本語で獨語ちた。彼れはPの大好きなファビアン協會を妙に好まなかつた。ウエッブがその有力な一會員である事をその時思ひ出して、不圖いつもの癖の獨語をいつてしまつたのだ。

「御免下さい。今のお言葉はよく判りませんでしたが」

その聲を聞くと彼れは夢から覺めたように、始めて自分の側に立つてる婦人を意識的に見た。彼れはすぐその婦人に好意を持つた。而して馬鹿らしい自分の癖を恥しく思ふと子供のように赤面した。見ると彼れの眼の前の若い事務員も髮の根まで顏を赤めて伏眼になつてゐた。咄嗟に、彼れは、この女は自分の獨語を惡く取つたなと思つた。けれども處女らしいその婦人の顏には少しも惡意の色は表れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐなかつた。彼れは稍安心した。

「お許し下さい。私決して貴方を辱める積りで伺ひ返したのではなかつたのですから。もしか私の伺つておく事を聞き漏したかと思ひまして」

彼女はすぐ顔を擧げて、彼れを靜かに見やりながら、潤みのある優しい聲でこう佗びた。それを聞くと彼れは何んといふ素直な Sensitive な心だと思つた。打とけたなつかしみがその胸にこみ上げて來た。而して口ごもりながら言葉の意味と自分の惡い癖とを言ひ譯けした。彼女は喜ぶように微笑んだ。彼れの顔にも微笑が乘り移つた。彼れは久しぶりで微笑んだのに氣がついた。それは醉ふような快さだつた。

暫くして彼女は彼れの机の所に書物を持つて來てくれた。

「つまるかつまらないか、もう一度學徒の生活だ」

彼れは一人になると又さう獨語ちた。歯ぎれのいゝ條理のたつた文章は、然しだん〳〵彼れを著者の思想の圏内につれこんで行つた。彼れは論理に弄れまいと思ひながら、彼れの知る限りの社會の實狀を頭に置いて、それに照し合せて讀み進んで行つた。

一時間過ぎた。緯度の高いこの町ではもう電氣が來て天井と壁との電球は一時に輝いた。彼れは始めて書物から眼を放して前を見た。丁度眼の前に、粗末な洋服を着て鼻眼鏡をかけた瘦せぎすな日本人がゐるのに氣が付いた。その男は彼れを見て笑つてゐた、……物好きな、皮肉な、然し正しい笑ひを笑つてゐた。而していきなり立つて彼れの所に寄つて來た。

「先刻から言葉をかけようと思つたんだが、讀書を妨げちやいかんと思つて扣へてゐた。君は〇〇君

だらう。僕はKだよ」

初對面の彼れに對してKは兄が弟にでもいふやうな言葉遣ひをした。

「何を讀んでる。ふむ、ウエッブか。ウエッブのコッブウエッブ(蜘蛛の巣)に引かゝつちや困るぜ。それより、今夜ボストンで週會があるから君にも聞かせてやるさ。さあ行かう」

さういつてKは彼れの前にある書物をしめてしまつた。無遠慮な奴もあるものだと思ひながら、彼れはKを憎んだり卑んだりする氣にはなれなかつた。而して一種の好奇心を感じながら椅子から立上つた。

圖書掛の事務室の細長い棚机のかなたに先刻の若い事務員は、彼れとKとを見守りながら、肘をもたせてゐた。彼れが差出した書物を受取りながら、

「私の父もファビヤン協會は嫌いですの」

と小さい聲でいつて微笑んだ。彼れはむつゝりしてゐた。

「貴女のお父さんとは誰方です」

「M教授です」

彼れは色々な意味で驚いてしまつた。M教授といへば米國でも有名なゴシック藝術の研究者だつた。それが社會問題に對してもさつぱりした意見を持つてゐるのだ。M教授の令嬢ともあるものが圖書係をするといふのも意外だつた。彼れがM教授の建築史を聽講する事になつてゐるのも奇縁だつた。微笑はまた彼れの眼に歸つて來た。M教授の建築史の挿畫を描いたのが令嬢であるのを思ひ出して彼れは尋ねて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見た。

「夫れは私の姉です」

彼女は素直にいつて輕く挨拶した。彼れはKと一緒に風の吹きつのる夕闇の校庭に出た。

四

濛々と煙草の煙のこもつた汚い室には、つめこむように凡ての階級の人が立つたり坐つたりしてゐた。六階目に部屋のあるためか、建築の粗雜なためか強い西風が窓ガラスをみし〳〵と動かすと、部屋はぐら〳〵とゆすれた。一段高く講壇の後ろまで聽衆はつまつてゐた。その眞中にKは鼻眼鏡をかけて衝立つてゐた。扁平な胸から出るKの聲は稍ともすると部屋の隅々には行き亘らなかつた。

「もつと大きな聲で頼む戰士」

「何んだ。勢よくやらねえか」

「そんな聲の持主に俺れ達の仕事が出來るか」

「いや俺れ達の仕事は小さい聲でするに限る」

そんな聲が色々の國籍の人達から蕪雜な英語で叫ばれた。Kの側にゐる坐長は大きな腹を抱へながら立上つて鈴を鳴らした。

「辯士に敬意を表していたゞきたい諸君」

その側から洋服屋の看板のようにきちんと衣物を着たしやれ者らしい佛國人が立上つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「事實と數字、夫れを私は辯士に要求したい」と、ガッのぬけた英語で甲高にいふと、遙か離れた末座から國籍不明の、美術家らしい、大きなネクタイをかけた男が、

「第一に火第二に火而して第三に火」

と虎のやうに叫んだ。仕舞には彼れは、手を振り、立上り、地團太を踏み、笑ひどよむ聽衆の波の中にもまれて、已むを得ず立上らねばならなくなつた。彼れは自分の信じてゐる主義に對して抱いてゐた熱意の全部を揉み消されたやうに思つた。

突然Kが兩手をさし上げると見る間に、恐ろしい鋭い叫聲をたてた。鼻眼鏡はその眼から落ちて、兩腕は、節だつた繩のやうに、細くよれて天井を指した。

「君等は僕を怒らせる」

劈頭に彼れはかう叫んだ。聽衆は思はず鳴りを鎭めた。Kは涙にかゞやく眼をむいて、自分の感情に壓倒されながら、深い呼吸をして、聽衆を見まはした。而して Sing-songで語りつゞけた。その聲は前にもまして細かつたがもう立騷ぐ聽衆はなかつた。

「君等は僕のこの細い聲と扁平な胸とが雄辯に語る所に耳を傾けないのか。それほど人類に對して冷酷なのか。祖先以來の不合理な生活の壓迫と、方便的な結婚とが、この胸を造りこの聲を造つたとは氣がつかないのか。この胸は細菌の巣になつてゐるのだ。僕は僕だけの仕事を仕遂げる前に斃れなければならないのだ。是れは事實だ。而して正確な數字だ。……」

Kがまだ結論に達しない中に、「火」を叫んだ男ははね返されるやうに椅子から跳り上つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ブラボー」

とわめいた。それにつゞいて起つた多數の激烈な拍手は、人々のししつと制する聲でぱつたりやんだ。その後には意味ありげな沈默が續いた。笛のように鳴る風の聲と、ガラス窓のひしめく音とが耳立つばかりだつた。

鼻をすゝる聲がした。彼れはふりかへつてその方を見た。晩年のユーゴーを思はせるような一人の勞働者は眼を赤くして、ハンケチを鼻の下に丸めてゐた。そのそばには商賣人らしいショーのような男が皮肉な眉の下から灰色の鋭い眼を光らしてKを見据えてゐた。

「僕はもう多くを語らない」

Kはまた稍冷靜になつた聲に力をこめて言葉をつゞけた。

「君等は日本からこゝまでの距離の遠さを知つてゐる。無資産で虚弱な僕が、自分の生命とする思想の容れられない爲めでなかつたならば、何を好んでこの遙かな旅を企てやうぞ。信じてくれ給へ、僕はそれだけ自分の思想を愛重して來た。僕の演説が低聲な爲めに、又事實の羅列の少ない爲めに、又數字の引用の不足な爲めに、君等を説伏し得なかつたとしてもそれは僕の責めではない。君等の思ひ遣りの未熟な爲めだ。無知な勞働者の叫聲に何の事實があり、何の數字があらう。勞働者そのものが事實であり數字であるのだ。君等は僕を怒らした。然し僕の怒つた事によつて僕が如何程君等の友であるかを知つてくれたらふ。だから、僕は、僕を怒らした君等に感謝する」

Kはこう結論して、床から鼻眼鏡を拾ひ上げながら眼を拭つた。いかにも男性的な、ぐん／＼と人の胸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を衝くような拍手と呼喚の響きが突然室内をゆり動かした。人々は總立ちになつた。Kは眼まぐるしくさし出された手に、兩手をつかつて握手してゐた。彼れの若い心も思はず識らず昂奮してゐた。

　彼れはKの演說に感動させられた譯ではなかつた。彼れはKの言葉の中に煽動者の常用する空虛な表現のある事を直感してゐた。然しそこに集つた人達は、一人〳〵奧底い背景を持つてゐる事を彼れに思はせた。彼れは是れまで、互に嚙み合ふ勞働者を見てゐた。然しKの演說が濟んでからの聽衆の親しさは彼れを涙ぐました。大學の老教授も、有名な雜誌記者も、大商店の管理人らしい人達も、賃銀によつて生活する勞働者の一人として、普通の勞働者等と隔意なく話し合つてゐた。演說中互に激しい言葉でいひ罵つてゐたものも、今は手を取り交して打解けてゐた。彼れは始めてこゝに、力になり合つてゐる勞働者の群を見た。而してその後ろには大きな實生活といふ大事のある事を深く感じた。

　煙草の煙と濃密な空氣の中から出て來たKと彼れとは、別々な心で夜の更けた街路を歩いてゐた。製鋼所を近所に持つたこの邊の町並は、耐久性な材料で造つた建築物の穢さに滿ち〳〵てゐた。裝置の不完全なために明暗のはげしい瓦斯の街燈に照らされて、敷石の上にたまつた汚水も、踏みしだかれた菓物、南京豆の皮や、襤褸、紙類の屑も、雨露にへこんだ煉瓦の壁に描き散らされた樂書も、半分剝れて風の爲めにばた〳〵と鳴る安興行物の畫びらも、痛ましい醜さと貧しさを、不快な臭氣と一緒に一面に漂はしてゐた。夜目にもしるく埃を立てながら乾いた風が往來を吹きまくつてゐた。すれちがふものといつては、飮んだくれの何所か不具らしい男か、かすれて猥らな聲を持つた豚のような賣春婦だけだつた。偶には瘦せこけた犬にも遇つたが、二聲三聲吠へかけたと思ふと、自分の聲を恐れるように尾を卷

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いて姿をかくしてしまつた。

彼れはKの言葉も耳に入れずに押默つて歩きながら考へた。その右の眼は殊に鋭く輝いた。新しい眼で彼れの見た世の中には深い滞や奇怪な矛盾がそこら中にあつた。彼れは開放された自分の力を如何使つていゝのか全く解らなかつた。

「あゝあゝ如何にすればいゝんだ」

Kのゐるのも忘れて彼れはこうつぶやいた。

「支那料理屋に上つてチョップスイでも食ふのさ」

いきなりKがこう答へた。彼れはぎよつとしてKを尻眼にかけた。Kはその機會を外さずに彼れとの會話をつながふとしたけれども、彼れはまた沒義道に默つてしまつた。

いつの間にかKと彼れとは支那料理屋の二階に向ひあつて座を占めてゐた。今まで通つて來た町の様とは打つて變つた賑かさの中に、婬靡な色彩と音響とが彼れの感覺の凡てを擽つた。手も肩も足も裸形になつた女樂人のヴァイオリンや笛から俗謠が奏で出されると、そこから男女の客の歌ひ合はせるだらしのない唄聲が起つた。その間を、いたちのように捷敏い瘦せぎすな給仕の支那人が、生眞面目な顔をして周旋した。客の中には女ばかりの群もゐた。Kと彼れとはさういふ群から絶えず眼つきや手まねで挑みかけられた。

「いくらよこすかな。五弗は間違ひなからふ。あれだけしやべるにも相當の準備はいるからね。それにあすこにやね、中々偉い奴が來るんだぜ。今夜なんかも、アリイナの主筆もゐたし、レヴュー、オ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

プ、レヴィユスの支局長もゐた。而して早速僕に寄稿を賴みやがつた。……厚かましくやるに限るよ」Kは濃厚な支那酒に醉を催しながら、鷙鳥のやうに上瞼の眞直な眼で彼れを見つめてこういつた。Kがどれ程笑顔をくづす時でもその眼だけは除け物のやうに笑はなかつた。それがKの笑ひを皮肉にして不自然にした。彼れは不愉快だつた。

「ふむ、君は主義を賣りに行つたのか」

Kは再び皮肉に笑つた。

「主義は愚かな事だ。僕自身が一つの物件だよ。從つて賣物だよ」

彼れは承服しなかつた。

「然し無條件で、無條件所ぢやない命まで投げ出して……」

「主義や信仰に殉じた人間もあるぢやないかといふんだらふ。笑はせやがる。愛を賣つてやるから救世主をよこせと大きな聲で立賣りをした奴は誰だい。涅槃が欲しけりや無上光明佛といふ貨幣で買いに來いと大店を張つた奴は誰だい。そいつ等は一番づう〳〵しい生産略奪者ださ。愛だ涅槃だといつて、謂はゞ空氣に色をつけたやうなまやかし物を恐ろしく高値で賣付けたんだ。どうだ飲み給へな。飲まん？　酒を飲まん奴はな、人生といふ世界にゐて、樂園そのまゝな熱帶地を旅行しない馬鹿者のやうな奴だよ。かう飲むんだ。そら、坐つたまゝで眼の前の景色が變つて來る。……然し君は賴もしい所があるよ。君のやうな境遇にゐてPと共同生活をやつたのは毛色が變つてゐる。それだから僕は進んで交際を求めたんだ。實はね、僕もPと一緒にゐた事があるんだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さういはれると、彼れの來る前に一人の日本人が一緒にゐたとPが彼れに話した事が思ひ出された。

「Pは一寸話せる男だつたんだが、僕がその細君にからかつたので氣まづくなつたんだ。おい、何を考へてる。そんな暇に女でも物色しておき給へ。こゝは今夜は割合にいゝ景色だ」

さういつてKは臆面もなく女達を見まはした。

彼れは我慢の出來るかぎり我慢しようとした。然し彼れの心の中のある力が猛り狂つてそれに反抗した。たつた今、眼に涙をためて、悲壯な事をいつてゐたKが、彼れの眼の前に見せたりいつたりしてゐる事は、彼れのKに對する信頼を二重に裏切つた。自分の判らない彼れは他人を批判すべき何等の標準も力量もない事を十分に知つてゐた。それにも係らず、彼れは本能的にKを憎まないではゐられなくなつて來た。

咄嗟にKの口から重い溜息が漏れた。今までの元氣にも似ずKは俯首れて、食卓の上に立てた手で亂雜な髮の毛をかきむしるようにしてゐた。

「とはいふものゝだね」

Kは又顔をあげて、少し憚るように彼れを見た。

「君はいくつ? 二十四? 若いなあ。而して君は健康な體質といゝ顔付きをもつてるね。君の顔付きはほんとにいゝよ。君はいくつになつても子供でゐられる質だ。僕にはそれがない。おまけにもう三十二だ。君を見てゐると後ろから新しい時代が追かけて來たような氣がするよ。僕等の努力は凡てのものを物質に還元したのだ。そりや今になつて見ればこそ何んでもないが、小さな仕事ぢやなかつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たんだ。けれどもねえ、來る所まで來て見ると、又先きには遠い道があらあ。解るかい。君には解るまい。けれども君の顔付きにはちやんと解つてると書いてあるよ。そいつが恐ろしく癪にさはるね。僕にはそこに跳ね返つて行く力がないよ。健康も許さないしね。僕は自分の主義を働かす代りに、主義に働らかされてしまつたんだ。畜生！　くやしいけれども主義の腰辨になつてしまつた、いつの間にか。健康がありやなあ。‥‥然しこれも自分でこわしたようなもんさ。十七の齢から女を道具と思つて取あつかつたんだからな。hipの形で女の醜美を見分けないような奴は、唯物主義者の而よごしだと思つてゐたんだからな。然しこれ位時代思潮に徹底すれば、僕も觀念して成佛しなければならんのかも知れないて。まあ跡は頼むぞ。自重し給へ。君のバプテズマのヨハネが一献進呈する、飲んでくれ給へ」

Kの言葉は段々しんみりして來て、仕舞には兩眼から感傷的な涙が痩せた頰を傳つて流れ下つた。彼れは默つて酒杯を擧げてKのと打合はして一息に飲み乾した。

突然Kが惡魔のような笑ひ方をして椅子の上で延び反つた。その眼からは續けさまに涙が流れてゐた。

「飲んだな。おだてられていゝ氣になつて飲んだな。ハヽヽヽ。おい飲んだ駄賃に勘定し給へ。僕は一錢もないから。ハヽヽヽ」

彼れは懷中を探つた。小錢が無くなつて二十弗の紙幣があるばかりだつた。彼れは已むを得ずそれで支拂をしようとした。Kは彼れの手に大きな札があるのを見ると、いきなりそれを奪い取つて、女の群の方に向いて振廻はした。而して口では、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「おい勘定！　二十弗だぞ。二十弗だぞ」

と叫んだ。給仕の來るのより早く、四五人の女が、火を見かけた蛾のやうに、Kと彼れとの周りに集つて來た。蠱惑的な、むせる程强い女の香が彼れの鼻をついた。Kの眼は忽ち生氣を回復して、女達の中から一人を選んだ。而して處女のやうに赤面してゐる彼れを指して、女達を見やりながら、

「この若い紳士はなあ、本統に生粋の生なんだ。一肩入れようといふのはゐないか」

といつた。それと同時に、彼れの首は三四人の女の腕で重苦しく抱きすくめられてゐた。而して彼れの耳は「妾よ」「妾にね」「妾だつてば」などいふ甘いつたれた、なまめしい聲で滿たされた。

「やめないか」

彼れはとう／＼本氣に怒つてしまつた。女達をつき退けると同時に、帽子と杖とを取つて料理屋を出た。Kはすぐ支拂をすませて、彼れの後から連れの女とやつて來た。

「おうい、お坊ちやん御成人！ハヽヽヽ金は土曜の支拂日まで借りとくよ。まあ折角自重し給へ、ハヽヽヽ」

十五六間も離れて、さう呼びおこす聲は風に送られて高く低く彼れに達いた。彼れは默つたまゝ足早に三四町歩いた。

その時彼れは不圖自分の側に一人の女の歩いてゐるのに氣がついた。彼れは驚いて立止つた。女は彼れの耳許にビイドロの震へるような小刻みな笑ひを送つて、

「獨語と無口は貴夫人に對して失禮よ。もういゝ加減にして妾の家に歸りませうね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とさゝやいた。彼女は若かつた。痛々しい程痩せてゐた。この女がよく笑へたと思ふほどその顔はやつれて暗かつた。その上に頬紅と白粉とが乘り惡く塗つてあつた。强い力の感覺が齎らす一種の哀情にふるへながら彼れは慌てゝ衣嚢を探つたが、有金はKが殘らず持つて行つた事に氣がつくと、胸のあたりを撫で廻して、父から貰つたネクタイ、ピンを拔取つて、女の手に渡した。而して逃げるようにその女から遠ざかつた。

彼れは漸く孤獨になつた。淫らな光景を見せつけられながら、彼れは少しも肉欲の衝動を感じなかつた。のみならず、そんな衝動に對する不思議な嫌惡の情が、ひし〳〵と感ぜられた。彼れの頭は熱に燃へてゐた。芝居氣のない崇高な感じが甦つた。彼れに追ひすがつて來た女が、深く憐れまれた。恐ろしい人間生活の缺陷が彼女の姿を通じて、彼れに救ひを求めながら、叫んでゐるようだつた。

Kにもしたゝか飜弄された。然し彼れは確かに打負かされたとは思はなかつた。彼れは雪に埋れた笹のように自分を感じた。雪はいつか解ける。その時笹は跳ね起きて見せる。春を迎へてぐん〳〵生長するために跳ね起きて見せる。

「それにしても自分はどう歩けばいゝのだ」

さう彼れはつぶやいた。そこまで來ると哀れな彼れの心には何等の手答へもなかつた。恐ろしい虚無な力が彼れの内部に張り滿ちてゐるだけだつた。彼れは砂塵を卷き上げて吹きまさる風に齒向ひながら力强く歩いた。

「ぶつかれ、ぶつかれ。躓くのを恐れてはゐられない。躓いたら起上るまでだ。新しい生活を獨りで

するのに蹉くのを恐れて何が出來る。もう力にも倦きた。その力が何であるかを知るのが肝要なんだ。明日から。今夜から。今から」

電車の往來もなくなつた眞夜中のボストンの街を、風に吹きまくられながら、彼れは齒を嚙みしめて步きつゞけた。

五

その冬のある日曜日の夕方だつた。

彼れはマーグレットを連れてP夫人の家に急いでゐた。

Pはマァギーを眼睛（ひとみ）程愛してゐたが、夫人は土曜から日曜にかけて泊りにやる事だけしか許さなかつた。その送り迎へを彼れが引受けるようになつたのは、三ヶ月も前からの事だつた。その間に彼れは夫人と唯ならぬ關係を結んでしまつてゐた。

それは、Kと支那料理屋で物を食べてから間もない、十月初めの日曜日の晩の出來事だつた。夫人はいつものように彼れの歸りを引とめて色々ともてなしをした。いつも非常に神經質な夫人はその夜に限つてしとやかに落着いてゐた。三十になるかならない小柄な彼女が、頸もとまで黑い衣物を着てゐるのが、非常につゝましやかに、美しく見えた。卵形の顏立で、鼻の尖から、折れ返つたような小さく引しまつた厚手の唇にかけての線は、實際男の心を肉的に引つける力を持つてゐた。又その手は米國人に珍らしく整つてゐた。彼女の手を見た人は、小さな靴の中に包まれた足の形を想像せずにゐられなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。彼れはこの夫人を見ると、何故Pがこの人から別れたのかを訝つた。

彼れが立たふとするのを夫人は幾度か引とめた。彼れは段々不思議な不安を感じ始めた。極普通な事柄を二人は平氣らしい顔をして話し合ひながら、互に憎み合ひ、引寄せ合つてゐるのを彼れは氣付いた。動かしてはならないと思ふ衝動が、どつと彼れを襲つて來る事もあつた。彼れは自分を引締めようとする努力の爲めに妙にぎごちなくなつて充血して來た。彼れは幾度か立つて部屋の中を力強く歩きながら、少し惡戯者らしい眼付きをして見送る夫人と會話を取かはした。哀れな未經驗者なる彼れは、知らない中に、夫人のかけた陷穽に段々と近づいて行つた。

「貴方は妾を可哀さうだとはお思ひにならない」

無表情な聲で夫人はこういつた。

「思ひます」

彼れの答へた聲はどす黑く震へてゐた。恐しい暫くの沈默の後に、

「お思ひになるわね」

といひながら、突然椅子から立上つて夫人は彼れの立つてる方に近づいて來た。どつちからともなく身を近けた次ぎの瞬間に、彼れはあらん限りの力を籠めて、たゝきつけるように夫人を床の上に突放してゐた。

眼の前は眞暗だつた。彼れは息苦しくよろけながら、戸があると思ふ方へ歩いて行つたが、そこに倒れてゐる夫人を危く踏みつけようとして、よける拍子に自分も床の上に倒れてしまつた。彼れは倒れた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ま丶野獸に備へるような身構へをした。彼れの眼の前に眞暗だつた。(眞赤だつたともいへる)彼れの耳が聽覺を回復してから始めて聞いたものは、痛ましい啜泣きの聲だつた。

深い悲しさが彼れの腹のどん底からも湧き上つた。滿たされない力が一齊に泣き叫んだ。彼れはもう我れを忘れてゐた。溺れるものが手かゞりを求めるように、彼れの手は無闇にそこいらをわな〳〵と尋ね廻はつた。夫人の手がさはつた。彼れはそれを摧けるやうに摑んだ。その後を彼れは知らない。

彼れは、雪の上を、マーグレットの手を引いて歩きながら、その時以來今日までの事を思ひめぐらした。彼れは本統に夫人を愛してはゐないのだ。夫人も彼れを性格的には愛してゐないのだ。Pが外國人を選んで共同生活をしてゐる事について、Kのいつた言葉などが思出された。それはPの性的の秘密を保障する爲めには同國人を寄留さす事が不利益だからといふたのだつた。彼れは同じ理由をP夫人にあてはめて考へたりした。そんな屈辱を思ふと彼れは夫人を踏み殺しても飽き足りなかつた。それにも係らず、土曜日が來ると、彼れはおめ〳〵とマーグレットを迎へる爲めに夫人の家に出かけて行くのだつた。日曜日に受ける苦い悲しい後味は月曜日の堅い覺悟と變るけれども、それが土曜日に近づくに從つて薄らいで行つた。

第一彼れはこの事をPに告白せねばならぬ事を知つてゐた。Pの秘密主義を不快に思つた彼れは、Pに對して秘密を持つべき云ひ開きがないと思つた。けれども彼れは今日までそれをせずにゐた。

今日こそと彼れは可憐な顏をしたマーグレットを見返りながら思ひこんだ。何んにも知らない少女は絆の外套に、白狐の襟卷をし、同じ毛のボアに兩手をさしこんで、長脚絆をはいた小さな脚を豆々し

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く働かしてゐた。然しその顏の何所かには、不幸な結婚が生んだ不幸な烙印が譯たず押されてゐた。この小さい子は父と母との秘密を知る事なしに成長するかも知れない。然しこの恐ろしい秘密が秘密として終ると誰れが保證する事が出來やう。自然はそれ以上に嚴格だ。それを思ふと彼れは切られるやうな苦痛を感じた。彼れは今まで自分が力量を感じ、熱意を感じ得る所では、どんな犧牲でも平氣で拂はせて澄してゐた。然し出來心のために、一人の人間の一生を暗くすると思ふと、彼れは少女のやうに臆病だつた。

マーグレットは、ちよこ〳〵と彼れの步度におくれまいとして、顏を赤くしながら步いてゐた。惡戯が激しいだけに、おとなしい時のその子の顏は可憐だつた。彼れはひとりでに涙ぐんだ。

「マアギー、あなたはパヽが好きか、マヽが好きか」

彼れはやさしく尋ねて見た。

「みんな嫌いよ」

「何故」

「何故でもみんな嫌いよ。」

確信してゐるやうに小さな貴女はこう答へて。「皆んなが秘密を持つて妾をどけものにしてゐるから」彼れはさう答へられたのと同じ感じでそれを聞いた。クリスマス前の寒い雪道を、着物だけはきらびやかに着飾らせられて、小さな步みをこの子は一體何所に運ばふとするのだらふ。感じの深い彼れの眼には、果てもない雪の廣野の眞中に、一點の汚點のやうに、かぢかんだ手を口にあてゝ途方に暮

る子供が見えるやうだつた。

彼れは思はずマーグレツトを抱き上げて歩いた。

やがて彼れはP夫人の家の戸口に立つて、抱いてるマーグレツトに呼鈴を押さした。彼れの耳に親しいP夫人の靴音が近づいたと思ふと、戸が音もなく内に開いた。

「まあだつこして下すつたの」

といひながら、夫人は少女を荷物かなんぞのやうに彼れの手から受取る間にも、眼を彼れから離さふとはしなかつた。その眼は一週間の待遠しさを濃厚に語つてゐた。

彼れは怒つた。彼れはそのまゝ歸つてしまはふとした。然し夫人の眼は彼れの弱點のどん底を射ぬいてゐた。彼れは、夫人の眼付が命令するまゝに、絲で繰られるやうにをぞましくも、門口を潜つた。

乳母がマーグレツトを寢かしに二階に連れていつてしまふと、直ぐ夫人は彼れに近々と寄つて肩に手をかけた。

「貴方は妾を嫌ひ始めたのね」

夫人の眼は嶮しく彼れの眼を射た。彼れはその時「然り」を答へなければならないのを知つてゐた。然し、實際は、彼れも嫉妬するらしい顔付をして、

「貴女こそ僕を嫌つてるんだ、」

と云ひ返してゐた。その行きつく先きは知れてゐた。二人とも虚言のつき合ひだといふ事は萬々承知しながら、互に嫌つてゐるのではないと證明し合つて、禁斷の木の果を敵同志の内から盗み取るのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼れの内部の爭闘は激しかつた。然し敵人の門を潜つた以上、それも一つの作爲であるのを苦々しく彼れは心の隅に感じてゐた。彼れの肩に置かれた夫人の手は、彼れが始めて知つた女の手の强味をもつて、彼れの心には關はずに、彼れの肉をどん／＼目覺ましていつた。

その夜九時過ぎに彼れがPの家に歸つて見ると、Pの所に來客があつた。それはPの所によく話に來るボストンの醫師で、ホイットマン會の會員だつた。ホイットマン會とは老詩人の死後その愛讀者が組織した會で、米國の諸州に小さいながら堅い團體を作つてゐた。その會員には殊に婦人が多いと、彼れは、ホイットマン崇拜者なるPから聞かされた事があつた。醫師といふのは心の廣さうな、品のいゝ、健康な、白髮の老人だつた。煙草をゆるく燻らしながら、白い髭と鬚を動かしてゆつくり物をいふ有樣は長閑だつた。Pも打くつろいで始終微笑を浮べながら、話の相槌をうつてゐた。彼れが書齋に這入ると、老人はPよりも先きに握手を求めて、自分の側に坐れといつた。

「いつ見てもいゝのは青年だ。こつちまで若いような心持ちになる。然し」

とPに向けてゐた顏を彼れの方に向けて、

「今夜は如何したといふんだ。君の顏色は大層惡い。然しホイットマンにでも『默つて、考へる』といふような時もあつたんぢや。大きく、……大きく人生を見んぢや駄目ですよ」

さういつてから、老人はしかけてゐた話の續きを靜かにつないだ。

彼れは、窓を通して見える隣りの屋根の雪が星あかりで燐のように光るのを茫然と見つめてゐた。

「そこでY氏の夫人が俺にいふには……お前はたしかあの奥さんを知つてゐたな。あれでもう三十

ぢやさうな。若う見える、美しいで……俺にいふには、俺が好もしいのぢやさうな。人間一生の間にしんぞ好もしいと思ふはさう澤山はおらん。好もしい人を見かけたら、その人と戀人だけに親しまんぢや、この世に生きる甲斐はない。心と心との喜びに比べれば、どんな社界の秩序も制度もたはけた干からびた邪魔物ぢや。愛をさまたげるものゝあるべき謂れはないと思ふ、どうぢやといふのだ。相違のない事だ。その通りと俺がいふと、直ぐ相談が出來てな、二人で近くの海岸に旅行してからに、夫婦よりも親しく一晩過した。その翌日二人はこの世の中がな、一段輝くように思ふて快く別れたよ。滅多にない事だが面白からふが」

Pは快げにから〳〵と笑つた。老人は後學の爲めにしろといはんばかりに晴やかに彼れを顧みた。

老人はゆつたりと落付いて色々な事をPと話し合つてゐた。然しいら〳〵した彼れの頭にはこの話以外の話はまるで聞取れなかつた。今の話を聞いてPの快げに笑つた顔の印象は彼れに勇氣を與へた。云ふべき時は今夜の外にないと彼れは思つた。彼れは席にゐたゝまれない程昂奮してゐた。

老人が元氣らしく歸つていつたのは遲かつた。Pは可なり疲れて見えた。然し緊張し切つた彼れの顔は、この部屋の今までの呑氣な空氣を一掃してゐた。Pは已むを得ず書架からホイットマンの詩集をぬいた――毎日曜日にPが彼れに朗讀して聞かせるのが習慣になつてゐたから。

「今夜はおそいから少しだけ讀むよ」

Pはどつかと燃えかすれたストーブの前に疲れたらしく腰を下ろした。客に對して愛相のいゝPは稍ともすると家人には澁い顔を見せた。今までのPの快活さは影を隱さうとしてゐた。

「僕貴方に告白して置く事があるんです」

彼れは立つたまゝでさういつた。Pは楔形の髯に埋つた顋を引いて、禿げ上つた廣い額を大きく見せながら、上目づかひに彼れを見た。而して默つてゐた。彼れは言葉をつがなければならなくなつた。

「僕はP夫人と友達以上の關係を結んでゐるのです」

彼れはきつぱりとこういつた。と同時に彼れの心は自分でも物凄い程しんと鎭るのを覺へた。

Pは、彼れの言葉か、自分の耳かが信じられないように、暫くしてから「ふむ」といつたが、被告を睨める檢事の目付きでぢつと彼れの顏を見入つてゐた。彼れは悠然としてPを見返した。

漸く彼れの言葉を頭に入れたように、突然Pはすッくと立上つた。二人は大きなテーブルを中に置いて立ちながら向ひ合つた。

「何日からだ」

Pは簡潔にこう問糺した。

「貴方がマァギーの送迎へを僕にさせた時から」

彼れも短く答へた。Pは考へるように俯向いて窓際を二度三度往來した。而して立止ると衣嚢から光つたものを出してテーブルの上に置いた。ピストルだつた。彼れは驚かなかつた。

「P夫人は私の妻としての籍をまだ脫してゐない事を君は知つてゐるんだな」

「知つてゐる」

Pは再び「ふむ」といつて、ちらつと彼れを睨めつけた。彼れは少しも騷がないで立つてゐた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そんな事をいふ權利が貴樣の何所にある」彼れはさう思つた。彼れは自分の力が何んであるかを何んとなく感じた。「是れだ。是れでぐん／＼進んで行くのだ」さう彼れは、切迫したこの場の態にも係らず餘裕をもつて考へた。

「どつちから始めた事だ」

Pは、長い躊躇の末に、聞いてはならない、然し聞かずには置けないこの問題に觸れて來た。

「僕だ」

彼れは咄嗟に答へた。Pは滿足と不滿足とを同時にしたゞか感じたらしかつた――妻か主動者でない爲めに滿足を、而して皮膚の黃色い猿のような劣等人種の挑みに敗けた不滿足を。――その顏は、彼れに不時な笑ひの衝動を强いる程澁かつた。

若い時俳優になる積りだつたといふPは、突然ピストルを取上げて彼れにつきつけた。

「二挺のピストルは二人の間の決鬪を可能にしたらふ。一つ足りないのは君の爲めに僥倖だ。今後に君が取るべき手段は君が承知してゐる筈だ。左樣なら」

彼れは默つたまゝPの書齋を出た。自分の部屋に歸つて僅かばかりの所有品をトランクにつめ込んで錠を下ろした。

彼はすぐに又寒い戸外に出た。外套の襟を立てゝ、靴の下にきゆつ／＼ときしむ澱粉のような雪を踏みしめながら歩いた。先刻まで晴れてゐた空は何時の間にか曇つて、思ひ出したようにちらほらと白いも

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のが降つてゐた。遠い街燈の霞んでゐる下を、たつた一人の男がよぼ〳〵と歩いてゆくのが見えた。

「哀れなマーグリットの前には、頭を地につけて侘びても足らない。俺れは何んとかしてその埋合せをする」彼れはその孤獨な人影を見ながら、小さな少女に大きなものを感じてさう思つた。

彼れはやがて、Kが置いて貰つてゐるB教授の家に來た。玄關の直ぐ右にあるKの部屋からだけ光が漏れてゐた。彼れは近寄つて外部から窓の扉を敲いた。日本手拭で後鉢卷をしたKがすぐ顏を出した。

「敲き方で君だなと思つたよ。何んでこんなにおそくやつて來たんだ」

「まあ入れてくれ」

Kの部屋は新聞と雜誌で足の踏立て場もない程散らかつてゐた。暖爐は感心に勢よく燃えてゐた。その側にある小さな机の上には書きかけの原稿が可なり堆く積んであつた。

「おい紙とペンを貸してくれ給へな」

「さ、一本しかないから之を使へ。紙も原稿紙だけだ。……一體如何したんだ、いやに君は武氣になつてゐるぞ」

彼れは子供のように微笑んだ。

「まあ書くから讀んでゐ給へ」

彼れはペンを執つてP夫人にあてる手紙を書き出した。Kは鼻眼鏡をなほしながら、突込むように顏を近寄せて、彼れの書き卸す字を拾つて行つた。

彼れが自分の署名をし終はると、Kはいつもの皮肉な然し正しい笑ひを顏に浮べた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「僕の失敗した所に君は成功したんだね。だから君は隅に置けないといふんだ。然しこんな手紙をやるには當らない事つた。大に醜行を續けろよ。馬鹿正直な」

「正直なものが。僕は馬鹿だ。馬鹿だ。馬鹿だ。」

彼れは激しく自分の囁嚅をたゝきながらかうゝなつた。Kは彼れの心を推しかねるようにけげんな顔をして彼れを見やつてゐた。

手紙を投函した彼れがKの部屋に駈けこんで來ると、Kは、

「これから君の居所はどうする積りだ」

と聞いた。彼れはKの所に置いて貰いたいのだといつた。二人の間に談判が開始された。

「少し勉强の妨げにはなるが置いてもいいさ。然しいくら出す」

「部屋代だけ三弗ぢやどうだ」

「金のある癖にしみつたれた事をいふなよ。五弗よこし給へ。こゝの主人は學者だけに呑氣だが、細君と來では鼻持ちがならないから、君を置くにも交渉に骨が折れるよ。暖爐だつて石炭にやかましいから、晝間は寒くても燃かずに我慢してゐて、奴等が寢てしまふとこの通り燃くのだ。五弗出し給へ」

Kの借金するのは有名なものだつた。然しきちんと借金を返すのも有名なものだつた。Kは凡ての事を金で見積らなければ承知しなかつた。そこにKの主義に對する質實さがよく見えた。

「それぢや細君懷柔費に二弗だけ奮發しよう」

彼れは笑ひながらいつてしまつた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「agreed」―そこで僕は勉强を始めるから、君は顔の見えない所にゐてくれ給へ。これを讀んだか」

そういつて新聞の切拔を彼れに渡すと、Kは窓から氷柱を二三本折つて來て、手拭に卷きこんで鉢卷をし直した。

降りまさる雪は、凡ての音を、空中から奪つては地面の中に埋めていつた。その寂寞の中で、大學の大時計が、時の前後を截斷してはつきりと一點を打つた。

部屋の中ではKのペンを走らせる音がかすかに聞えてゐた。彼れは、Kから受取つた、ロンドン、タイムスに發表したトールストーイの平和論を讀み進んでゐた。感激から感激に飛躍してゆく彼れの心はその特異な眼の中に炭火のように閃いた。彼れの唇は折々痙攣的に戰いた。

乃木軍とステッセル軍との將士が、旅順要塞の內外に肉迫して、國家の存亡をこゝに集めて戰つてゐたその夜の一つであつた。新しい次の時代を生み出す陣痛のような、重い。鈍い、形のない自然の力がこの小さな部屋には濃く立籠つてゐた。

夜は靜かに更けた。

六

Kと同居して以來、彼れの上には、彼れに當然來べきであつた、然し彼れには一々意外な色々な運命が來た。日本のある雜誌に屢發表した彼れの論文は、彼れが思ひ設けた以上の恐惶を家族や親戚の間に起して、とう／＼學費の杜絕を彼れに結果した。兩親と自分との間の時代の隔りが引起すべき思想の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りを、彼れは十分に察してゐたから、兩親に對しては怒りを感ずる代りに、深い憐れみを感じた。今まで平氣な顏で學費を受けてゐた自分を卑みさへした。彼れは家族親戚との文通を絶つてしまつた。

然し自活といふ事は彼れが空に考へるやうな生優(なまやさ)しいものではなかつた。學科の出席時間を極端に減じて、彼れはM教授の研究室の助手として金を取らねばならなかつた。然しそれは彼れに三つのいゝ結果を持つて來た。一つは自分の生活全部に主となつた事。二つは自分と周圍との本統の關係が成立つた事。三つは圖書館で働いてゐるM教授の令孃の姉なるヂュリアといふ畫家と研究室で一緒に働く事。

聖フランシスの傳を讀んで、聖者がその父に衣服を放げ返して神に還つたといふ條(くだり)に來ると、彼れはいつでも物足りなく思つた。命まで放げ返すのでなければ、人はその親から本統に獨立する事が出來ないからだ。然し親から思想に於て離れた以上は、他の部分に於ても出來るだけ離れなければならない。責めてはそれだけでもしなければならないと思ひながら、彼れはそのまゝに問題を放置してゐた。それが遂に段落を告げたのだ。それは彼れの心を活々とさせた。骨肉を引ちぎる例へようのない淋しさの中から、彼れの自由は逞しく羽を擴げた。彼れは自分の若さに任せて、思ふまゝに振舞つた。彼れは放たれた小鳥のやうに、恣まに米國の雜誌新聞の上で舞ひ躍つた。始めは商賣上の打算と興味から彼れの投書を歡迎した出版業者も、彼れの放圖のない言説に對しては相當の警戒をしなければならない事を發見した。彼れの收入の減じて行くと共に、活動の範圍は見る〳〵狹ばめられた。大學の日本人會は彼れとKとに除名を通告した。ある教授は、彼れの才能を認めながら、聽講を拒んだ。彼れは已むを得ず、狹められただけ深まつて行つた。彼れは、隱れてでなければ、這入つてならない幾軒かの家を知るように

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつた。それは多く地の底か空の上にあつた。地の底では薬品が調合された。空の上では赤いインキの活字が跳つた。そこに往む人は狂暴だつた。然しその涙腺は普通の人より大きかつた。物の釣合ひといふ事を知らなかつた。然し一番重いものと一番輕いものゝ何んであるか知つてゐた。さう彼れには思へた。彼れは自分の心に最も近い周圍をそこに見出したのだ。

然し彼れの生活はみぢめだつた。Kは寒さのつのると共に半病人になつて、屢喀血した。M教授の研究室に行く前に、彼れは拭掃除から皿洗ひまでKのするだけの事を代つてしなければならない事が幾度もあつた。彼れは洗ひ物の中から、精巧なシャンペーンのコップを取り出して、細い把手をぴし〳〵と折りくだいて、床の上に粉微塵にたゝきつけたりした。Kの外出しない時は、その外套を借着しなければならない程貧しくもなつてゐた。痩せたKの外套は彼れの背中と脇の下とをつねるようにした。衣食に充ち足つた人の知らない、下らない然し深い悲しみが彼れを涙ぐました。生來の貧窮に慣れなかつた彼れは、金を取る術に疎く、金を捨てる道に明るかつた。

「若いサン、シモン」とKは彼れを渾名した。然しサン、シモンは生涯に自分の力を如何使ふべきかを知つてゐた。然し彼れはまだそれを知らなかつた。

この荒んだ殺風景な彼れの生活の間に、彼れをまつしぐらに牽付けるものが一つあつた。それはM教授の研究室だつた。北向きに大きなガラス窓の揃つた廣やかな部屋はスチームで冬でも春のようだつた。部屋のそこゝには中世紀の文化を代表ずる彫像、浮彫、柱冠、繪畫の原物（オリヂナル）や複製が飾られてゐて、棚の上にはビオヲ、ル、ドユークを始めゴシック美術史の大家の著書とポートフオリオが所狹く置きなら

てあつた。その一隅を衝立てゝ圍つてM教授の机があつた。ゴール人の血を潤澤に持つてるらしい小肥りな七十四のM教授は、そこにどつかと座りこんで、二重にかけた眼鏡越しに古文書を漁つてゐた。窓に沿ふて長く据えられた卓子には四五人の助手が椅子を並べて各自の業務にいそしんでゐた。彼れはこの研究室の空氣をなつかしんだ。老教授を更らに愛した。然し彼れの隣りにヂユリヤが座を占めてゐなかつたら、この研究室も彼れに取つては一箇の學究的城廓に過ぎなかつたらう。

彼れが第十三世に於ける獨立市と寺院建築との關係を研究してゐる側には、ヂユリヤがコンパスや尺度とを使つて彫刻物の錦密な縮寫圖を作つてゐた。仕事をしながら小聲で彼女の歌ふ感傷的な小唄は、絶えず彼れの耳から彼れの心に淸凉劑を送つてよこした。

彼れとヂュリヤが本統に親しく交際し出したのは、正月休暇中のある晴れた日に、M教授が二人の娘と彼れとを伴つてコンコードに遊んだ時からだつた。教授とヂユリヤとは橇の前座に坐り、彼れと妹娘のフロラとは後座に坐つた。

風もなく、日も華やかに照りながら、耳も鼻も押つぶしさうに寒さのひしひしと逼る、恰好な橇日和で、教授の操る逞しい馬は、停留所に止つては走る電車を追ひ拔いて、しなやかな鋼鐵のような脚を輕々と動かした。わざと何も被らないヂュリヤの少し赤味を帶びた金髪は、引張られるように後ろに靡いて、形のいゝ耳朶は珊瑚色に赤らんでゐた。右の手を父の肩に廻して、疏くなつた父の耳許に口をよせて、何かいつて二人でどつと笑ふかと思ふと、高い美しい聲でシェレーの小詩などを心ゆくまで歌つたりした。而して時々後ろを振りかへつて、彼れに、好意に溢れた、少しいたづらしい、完全に美しい流眄

を盗つてよこす事も忘れなかつた。それが少しも迎情的ではなかつた。そこには藝術家の有つ、小島の快活さがあると彼れは思つた。彼れの悒鬱な心は火を見つけたようにそれに暖まらふとした。彼れの注意はいつともなくヂユリヤの耳の後ろの生へ際に引かれてゐた。

臘虎の帽子と襟卷をしたフロラは、正面に顔を向けたまゝ、静かな眼を擧げて森や野の景色を眺めてゐた。彼れはヂュリヤに心を牽かれながらも、時々フロラの横顔を盗み見ないではゐられなかつた。それほど彼女の顔は可憐だつた。深い嘆美と愛着とを受くべき身でありながら、何かの魔障の爲めにそれを受けられないでゐる、そんな可憐さがあると彼れは思つた。フロラは殆んど彼れに話しかけなかつた。彼れもフロラには何もいはなかつた。然し二人の間には、少しのぎごちなさもかけ隔てもなかつた。何時でも話せるから話さないまでだといふ親しみが感ぜられた。

小さな村が見えた。その入口の、三叉に道の分れた所に、銃を腰にあてがつて上衣をぬいだ小さな銅像が立つてゐた。

「レキシングトン」

眞直に手を延ばして村をさしながらヂュリヤは彼れの方に振向いた。

「御存じね獨立戰爭の火蓋を切つた所。フロラ、あなた何故もつと〇〇さんにお話してあげないの。困るわね。いゝ〳〵妾今度そつちに乗るわ。プロフエスサーM、どうぞ橇をおとめ下さい」

ヂュリヤとフロラとは乗りかわつた。ヂュリヤは「寒い寒い」といひながら、ぴつたりと彼れに寄添つて座をしめた。厚い膝掛けの下からは、血ぶとりな彼女の體の暖味が遠慮なく彼れに傳はつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さあ澤山々々お話しませう、普段は仕事が忙しいもんだから隣りにゐる癖に異邦人のようでしたものね。貴方の御仕事お進みになつて？」

チュリヤはもう道の案内なぞはしなかつた。

「えゝ、少しは。今ライムの寺院をやつてゐます」

「ライム！ライム！！」

チュリヤは喜び勇んで手を打合せた。

「ライムのマリヤ、聖ヂョセフ、シバの女王、聖母堂の柱冠（キャピタル）！佛蘭西人に嫉妬（やきもち）を焼かせる程賞めたつて妾はまだ云ひ足りない。行つて御覧なさい。あすこのマリヤの像一つで人は羅馬教徒になつてしまひます。何んといふ信仰でせう。何んといふ美意識でせう。何んといふ獨創と自由でせう。亞米利加にあるものは自由だけです……金腐れ（ティンテフド）の自由」

「僕の國には自由もないんですよ」

チュリヤの顔は眞面目になつた。

「貴方の顔を見てゐると私は始終悲しくなります。大學にお國の留學生は澤山ゐますけれども、貴方見たいな、考深い顔の方は一人もゐませんわ。何か御心配でもおありになるの。今貴方の御國はほんとに大變ですわね」

「大變です……色々な意味で」

「妾貴方のお書きになるものは澤山讀みましてよ。貴方は隨分亂暴な方ね。妾思つたまゝしかいへな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いのですもの」

「今に貴方の所の研究室からも追出されるんだ」

彼れは豫覺を以ていつた。彼れはそれをつらく思つた。

「反對に、反對に、」

彼女は熱意をこめて彼れの手をしつかりと握つた。

「妾共の父は大變貴方に感心しておりますよ。貴方にはいゝ素質が潤澤におありになるつて。けれども少し亂暴すぎるつて。而して貴方のして下さる仕事は大變父の爲めになるんですの。貴方の聽講を斷つた人があるんですつてね。私は大學の爲めに耻しく思ひますわ。ほんとに。……あ、この上はスリーピー、ホローの墓地です。エマァソンやホーソーンの墓のある所です。そら、あすこに森が見えるでせう。まあ奇麗、奇麗、あの森が雪に落す紫色の影は如何です。こんな景色を見ると私父の手傳をして摸寫なんぞするのが咀はれますわ。畫が描きたいなあ。あの奧の方にワルデンがあるんです。……ソーローもあの理解のいゝ眼でこの景色を見たんでせうね。ソーローは少し氣狂ひぢみてるけれどもエマアソンより偉いとはお思ひにならない？　エマアソンは始終外界からばかり自分を見てゐますわね。そら、あすこで道が二つに分れてるでせう。その右の方に見えるのが鼻の大きい哲學者の家です。エマアソンの顏はほんとに鼻と口ばかり見たいね」

彼れは思はずヂュリヤの饒舌にほゝゑんでゐた。ヂュリヤは彼れの微笑をじつと大きな眼を開いて見詰めてゐたが、彼れが笑いやむと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もつと、もつと、もつと、……もつ一度笑つて見せて頂戴。さあ、よ」

とすねるようにいつて彼れの手をふり動かした。彼れの心はいつの間にか心から快活にされてゐた。彼れは又微笑んだ。

「何故貴方は始終その顏をしていらつしやらないの。そんないゝ笑顏を持ちながら」

ヂュリヤの大きな眼は躍るように輝いて彼れを熟視した……彼れが眼を伏せてしまつてもまだ。

歸途にもヂュリヤは彼れと同座した。途中まで相變らず元氣だつた彼女は、如何してかふと默つてしまつた。夕暮の催すにつれて募つて來た風は眞向から吹きつけた。ヂュリヤは外套にしまつてゐた黑の肩掛けで頭を包んだ。夫れが恐ろしく圓顏で色白の彼女を美しく見せた。フロラの場合とちがつて、彼れはヂュリヤの沈默をぎごちなく思つた。何か起りさうな不安が暫く續いた。

橇がM教授の家近く來た時、ヂュリヤは突然彼れの耳近く顏をよせた。

「フロラは心から貴方を愛してゐるんですよ。御存じ？あの子はほんとに神のような子ですわ、ね。あんなでゐる癖に隨分進步した考へ方もしてゐるんですのよ」

彼れの心は暗かつた。彼れは何んとも答へなかつた。

「何しろ私達は貴方にほんとに御同情申してる事を信じて下さいましよ。決して決してどんな事があつても失望なさつてはいけませんよ。私（私達は私に變つてゐた）は貴方に伺つて敎へられる事の澤山あるのを知つてますわ。どうぞ私にだけは貴方もつとお饒舌になつて下さいまし。よござんすか。眞實な心は眞實な心がよつく解りますわ。こんな生溫い自由國にゐるより、私は露西亞のような思想と

藝術と而して壓制のある國に生れて思ふ存分ほんとに生きて見たい。貴方が始終あの美しい微笑を湛へていらつしやる時の來るのを、私は神樣……こんな時にこそ使ふ言葉ですわね……神樣に祈りますわ」

ヂュリヤの眼には涙があつた。「あゝ何年、彼れはこんな愛に充ち滿ちた言葉に觸れずに過してゐたらう。彼れは生れて以來嘗て知らなかつた不思議な感激に戰いてゐた。

彼れは醉ひしれた人のようになつて歸つて來た。Kは仕事を終つて、パンを肴に葡萄酒を飮んでゐた彼れを見ると、

「やあ、もうやつて來たな。然し一杯つきあへ」

といつて、飮み乾したコップを彼れにさした。彼れはいきなり机の上に腰をかけて、帽子を部屋の隅に放りなげた。而してチョッキのボタンを外して胸を開けるだけ開いて、手を頭の上で振廻した。

「そんな酒が飮めるか。僕は酒を飮まないで今日は醉つてるんだ。醉つてゝ正氣なんだ。僕は皆んな解つた。愛だK！　愛だつたんだ探してゐたのは。僕は今日から生れ代つて見せる。君なんぞは通り越してしまつたぞ。今日こそ僕の爲めに祝杯を擧げろ。僕は乞食の子一人の爲めにも死んで見せる、乾度。サン、シモンと呼ぶなら呼んで見ろ。もうそんな名にびく〳〵はしないから。K！K！僕は君に何をすればいゝんだ。いつてくれ、いつてくれ。僕は何んでもする。何んでもする。何かさせてくれ」

さういつて彼れは叫んだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さすがにKも駭いた様子をした。而して、暫くしてから皮肉に落付いて、

「させろといふならさせてやらう。今日君の所に手紙が來てね。女文字だつたから一寸好奇心で開封したら、見ろ、P夫人から難問題が來てゐらあ。したゝか働きをするがいゝ」

といひながら小さな封筒を彼れの手に渡した。P夫人と聞くと忘れかけてゐた過去の惡夢が眞暗に彼れの澄み切つた心を塞いでしまつた。讀んでゐる中に彼れの手はびり／＼と震へ出した。今まで醉つたように紅かつた彼の頰は一時に血の氣を失つてKよりも青くなつた。P夫人が懷姙してゐるといふのだ。

Kは彼れの瞋りようの激しさを見ながら、又皮肉に笑つて薄荷酒を乾した。

「今日は働くだけ働いたからこれから賣女の所に出かけるんだ。おいサン、シモン。今夜一晩苦んで見給へ。智慧が出なかつたら明日の朝僕が授けてやるからな。……おいその外套を脱いでくれ。この寒空に出れば又咯血だ。一つ女の面にでも吐きかけてくれやう」

彼れはぼんやりしたまゝ外套を脱いでKに渡した。Kの出て行くのをとめやうともしなかつた。

彼れは夕食の用意もせずにストーブの前に椅子を引よせて腰かけた。しびれたような彼れの頭には、不思議な幻像の斷片が通り過ぎるばかりだつた。

ヂュリヤの手だけが現はれて彼れの手を暖く握つた……彼れはときめいた……彼れは部屋を見廻はした……大きな黒い影がはつきりと彼れの動く通りに動いた……P夫人の蟲惑的な鼻から顎にかけてのプロフィールが見えた……彼れはなつかしげにそれを見詰めた……Pの顏の全輪廓が現れた……彼は思はず立上つた。而してよろけた……知らない一人の後向きの赤子が……黒い髮の毛に物凄いほど濃く被は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れた赤子の後頭が‥‥彼れは椅子の背をしつかりと掴んだ‥‥啼く聲が‥‥女の赤子の‥‥彼れの母が彼れを抱いて‥‥フロラの靜かな輕蔑した顏が‥‥彼れは椅子に腰を下してその背の所に顏を埋めた‥‥彼れは躊躇した‥‥P夫人の所に行く彼れが‥‥赤子の喉にまかれた紐が‥‥彼れの手が紐の一端を捕へた‥‥女の手が他の端を捕へた‥‥頸が見る〳〵縊れて行く‥‥

「あッ」

彼れは刀を浴せられたような聲をたてゝ椅子から飛上つた。髮の毛をむしつた彼れはさうしたまゝで恐ろしげに四周を見廻した。彼れの眼の前で床は高く低く波をうつた。而して床を見つめたまゝ彼れは全く放心の狀態に陷つた。

彼れは寒さに氣が付いて、始めて顏を上げて見た。ストーブの火は遠に消えてゐた。彼れの頭はしーんと澄み切つてゐたけれども、何を考へていゝのか判らなかつた。彼れは周圍のものから考へていかねばならなかつた。寒いのに氣が付いて見ると外套を着てゐなかつた。外套はKに返したのだ。「Kの事だつたな」と思つて見た。然しさうらしくはなかつた。赤子を殺すんぢやなかつたな‥‥さう彼れは無關心に考へた。と　突然ぶちまけたように凡ての事が明らかになつて彼れの心に現はれ出た。彼れはぎよつとした。然しその澄んだ理性はいやがる彼れを無理に一歩々々考へさした。

曉方近くに彼れは漸くしつかりした結論に達した。

「P夫人の懷姙は、夫人自身が責任の大部分を負ふべきだ。夫人の宿したものが彼れの子であると誰れがいへよう。夫人は彼れを不幸にした。墮落させた。ヂュリヤは彼れを幸福にし彼れの行くべき道

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を暗示した。彼れは彼女を失ふ事が出來ない。如何しても出來ない。彼れは夫人に何等の返事をしない。而してヂユリヤに自分の過去を秘し通さう」

彼れはこの決心を二度三度心に繰返した。彼れはいゝと思つた。同時にいけないと思つた。新しく踏み出した生活が崩れてしまふと思つた。

然し彼れの心はヂユリヤを離れる事が出來なかつた。

「弱い奴だ」

彼れはさうつぶやいた。その聲が彼れの耳に這入つた。彼れの眼からは始めて苦い涙が留度なく頬を傳つて流れ落ちた。

七

かの恐ろしい一夜の翌日、彼れが研究室に這入つて行くと、ヂユリヤは既に來てゐて、いきなり飛んで來て彼れと堅い握手をした。而して驚いた顔をして心配氣に彼れを見やりながらいつた。

「また貴方は一晩の中にそんな顔になつてしまつて。妾か昨日懸命に創作しておいた顔は何所に置いていらしつたの。昨日のが假面なら、その假面を被つて下さい。今日のが假面なら、そんな假面は捨てゝ下さい。妾には醜い顔よりも美しい假面の方がいゝんですもの」

彼れはヂユリヤが秘密を知らないのを却て訝るやうに、その顔を恐る〳〵見守つた。ヂユリヤの顔には何んのこだはりもなかつた。明らさまな好意だけが見やられた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その二人の間の親しみは日に日に加はつた。ヂュリヤの顏が懸しくなつて、彼れが彼女の方を向くと申合したように彼女も彼れを見やつてゐた。而して二人は溶け合ふように微笑んだ。

二人はよくわざと仕事をしつゞけて、教授や助手の歸る後まで殘つてゐた。而して電燈を灯して椅子を引寄せながら、歷史や、藝術や、演劇の話などに語り耽つた。ヂュリヤはよくフロラの噂をして彼れのロうらを引かうとした。姉の妹に對する輕い嫉妬だと思ふと、それが却てヂュリヤをおぼこにして見せた。

彼れは時々圖書館に出入するので實際フロラにも度々遇つた。フロラはいつでも靜かな女だつた。姉とちがつて稍細面な彼女には眞中で分けた黑味勝ちな髮がよく似合つた。彼れが行くと親切によく世話をしてくれた。然し何所といつて特別に彼れがこの處女を引つけてゐるようには見えなかつた。たゞ一度こんな事があつた。フロラが彼れの爲めに書物を探して、書棚の高い所に見付けた時、フロラでは手が屆かなかつたので、彼れがその後ろからのし上つて左手を彼女の肩に置いて力にしながら、右手を高く延ばすと、突然彼女が後ろに倒れるようになつて、彼れに寄りかゝつて來た。見るとフロラは眞靑だつた。而して眼を上づるようにして、激しく小刻みに震へてゐた。彼れが如何したのだと聞くと、彼女はさつと紅くなつて、眩暈がしたのだといつた。それからは彼れとは握手さへ成るべく避けるようになつた。若しヂュリヤがゐなかつたら、彼れはフロラに對して、ヂュリヤに對するよりも自然に自由に愛を運んでゐたかも知れない。然しヂュリヤによつて愛に眼ざめ、ヂュリヤによつて愛に育つてゐる彼れには、フロラは唯落魄した王女のように淑かな可憐な處女として寫るのみだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼れは夜となく晝となくヂュリヤを思ひ慕つた。家に歸つても彼れは成るべくKを避けて天氣さへ惡くなければ戸外で夜を過すやうになつた。而してKの惡所通ひを極端に嫌つて、兎もすると、强意見をしたりした。彼れとKとは何所となく疎みあふやうな所が出來た。

ある時Kは‥‥雜誌に掲つた彼れの論文を讀んで、

「おい、サン、シモン。この頃の君の文章の調子は何んだ。まるで學者か資本主見たやうぢやないか。莊重で圓曲で。喰ひ入るやうな、押しつけるやうな文體はどうしてしまつたんだ。ヂュリヤの功德も恐ろしいもんだね」

と嘲つたりした。Kの健康は冬から春に向ふに從つて惡くばかりなつた。從つて恐ろしく機嫌の惡い事もあつた。

彼れは心の奧底では、非常にKを憐んだ。然しKの粗野なのが氣になつてならなかつた。是れまで少しも構はなかつた病菌の傳播といふやうな事も、恐ろしく思はれ出した。生命が彼れには尊くなつた。彼れの健康も何んとなくいゝ方ではなかつた。譯もなく涙ぐましい夕方が來たり、怒りつぽい朝が來たりした。夜中に起きて、M教授の家の邊を寒風に吹きさらされながら歩いてゐるのを見た人も尠くなかつた。

こんな激しいヂュリヤに對する思慕の間にも、彼れの心はP夫人の胎の内にある肉塊に對して、やむにやまれぬ愛情を感ずる事があつた。それが彼れを一層不機嫌にした。唯ヂュリヤと顏を合せてゐる時だけ、彼れは白熱した平安を感ずるのだつた。P夫人の手紙の爲めに痛ましく破られかけた彼れの底力

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、ヂュリヤの手がやさしく養ひ立てゝくれた。

時の進むにつれてこの葛藤は激しくなつた。ヂュリヤに對する愛は育つた。K夫人の胎の肉塊も育つた。

雪が消えた。土が乾いた。草が萠えた。蕾葉が開いた。雲が空を弄ぶ代りに、空が雲を弄び始めた。ライラックの生垣はその梢に重い花をつけて、花はうなだれながら喘ぐように濃艶な香を擴げた。畠の林檎畑では郭公が啼き始めた。若者の額は汗ばみ、少女の瞳は潤つた。……春が來た。迷ひと苦しみの中に彼れにも春が來た。

うづくする悩ましさが彼れの若い心と肉とをさいなみ虐げた。彼れはもう忍んでゐる事が出來なかつた。

散光ばかりを受ける研究室の北向きの窓からは、夕方の日に映へる樹木の間にちらほらと立つ家の屋根だけが見渡された。その厨の煙筒から昇る炊煙は紫に煙つて眞直に空に登つて行つた。薄い着物に着かへた學生達が、研究室や實驗室から、四人五人と組んで足並を揃へながら、高い聲で語り合ひつゝ下宿に急ぐのがよく見えた。

M教授が書物をばたんと伏せて、煙草に火を移すためにマッチを探る音が長閑かに聞こえた。

ヂュリヤは深い溜息をした。處女の已みがたない心の悩ましさをそのまゝ歎くように、その溜息は慄へて長かつた。彼れはそつとヂュリヤを見た。ヂュリヤは上氣した顔で彼れを見返つた。二人は互を理解して微笑んだ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やがてM教授は立つて來た。ヂユリヤの肩に手をかけて覗きこみながら、
「ヂユリヤ行かうかな。外の方々ももう歸りませう」
ヂユリヤはちらつと彼れの方を見てから、
「も少し、ね。こゝまで濟ましたらやめますから、どうかお先きに」
といつて又彼れを見た。彼れは笑へなかつた。
教授と助手とは歸つて行つた。研究室には階下に小使がゐるだけで、二階には彼れとヂユリヤだけだつた。
彼れは恐ろしい胸苦しさを感じてゐた。救はれるか救はれないか、彼れの運命は今定るのだと思つた。
「さあお仕舞にしましようね」
教授が歸つてから二十分程してヂユリヤはかういつて立上つた。而して彼れがその邊を整頓して窓掛けを引き終はる間に、ヂユリヤは製圖具を片付けてしまつてゐた。
二人はいつものように椅子を近づけて向ひ合つた。ヂユリヤはほてつた頬を手の平で撫でながら平氣で笑つてゐた。彼れは又笑へなかつた。
「今日は貴方にいゝものを見せて上げますわ。是れを御覽なさい」
それはフロラの日記だつた。ヂユリヤの開いて出した所を彼れは讀んで見た。細かい字で丹念に書いたペーヂの上には至る所に彼れの名が見出された。
「その次ぎを御覽なさい」

彼女は頸で指圖した。彼れは手帳をめくつて見た。そこにも彼れの名が至る至る所にかゝれてゐた。

彼れは驚くよりもヂュリヤが何んでこんなものをこゝに持出したのかを怪まずにはゐられなかつた。

「何んだつて貴女はこんなものを僕に見せるんです」

「フロラがどれ程貴方を愛してゐるかをお知らせする爲めに。貴方はフロラを憐れとはお思ひにならない？」

「思ひます」

「そら、そうでしやう」

ヂュリヤは思ふ圖を云はしたといふように微笑んだ……人の心を探るような、惡戲らしい、蠱惑的な微笑を……と思ふと、やゝ俯向けにした彼女の顔は見る〱中に濃く曇つた。

彼れは追ひすがるようにいつた。

「憐れと思ふのは當然です。僕は寧ろ深い感激をさへ感じます。僕に若し僕の愛を占領してゐる人がなかつたならば、僕は恐らくはフロラよりも先きにロフラに愛を抱いたでせう」

ヂュリヤは忽ちもとの笑顔になつて上を向いた。

「まあ貴方にそんな方がいらしつたの？。それはちつとも知りませんでしたね。どなた？」

彼れの全身はぎゆつと引しまつて氷のような寒さを感じた。凡てを打明けなければならない尊い時が來たのを感じた。彼れが立上つてヂュリヤの手首を取らふとしたその刹那、

「待つて下さい。妾も呑氣ですわね。そんな貴方の御大事の方の名を粗忽にも伺はふとしたりなんか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して。その方は矢張り日本の東京にお住ひなんですか」
彼れはせき込んでゐた。
「東京ぢやないてゝです。ヂュリヤ」
彼れは立上つた。彼れが立上ると同時にヂュリヤも立上つた。彼れは熱意のために狂するばかりだつた。
ヂュリヤは氷のように冷靜に彼れを見据えてゐた。
彼れは飛びかゝるようにヂュリヤに近づいた。而してヂュリヤのしなやかな白い手を握らふとした。その素早い動作をひらりと裏切つて、彼女はもう彼れからは二三歩の後ろにゐた。
「何をなさるの」
彼れは一寸たぢろいだ。
「貴方は東洋の方ですよ。よござんすか。忘れたんぢやありますまいね」
彼れはそんな事では引込んでゐなかつた。彼れの生涯の別れ目はてゝにあつた。彼れは又踏み出した。彼れの手に柔いヂュリヤの手首が觸れた。彼れはそれをつかんだ。血走つた眼はヂュリヤを嚙んで飮み込むように輝いた。
「どうぞヂュリヤ！僕を助けて下さい。貴女のない僕は陰だ、暗闇だ、死だ。信じて下さい。貴女は僕を穴から谷から……死の谷から……」
彼れは感極つてその先きを續ける事が出來なかつた。彼れはヂュリヤの手を握手するように振つた。而して聲を立てゝ男泣きに泣いた。

「お放し下さい。私は婦人です。而して一人です」

彼れは一人の貴女に對して脅迫に近い激しさを以て愛を求めてゐるのに氣が付くとはつと思つてヂュリヤの手を放した。その瞬間にヂュリヤは身も輕く彼れから遠ざかつて出口のハンドルを握つてゐた。

「ヂュリヤ」

捨鉢に彼れの呼んだ聲は吹へるように空しい研究室の中に響いた。次の瞬間にヂュリヤの姿はもう見えなかつた。小使を呼びながら駈けて行く靴音のみが、雷のように彼れの耳朶を撲つた。

火の旋風のようなものが彼れの頭を突通して去つた。彼れは狂氣の如く階段を下つて戸外に出た。春の夕暮の街は事もなげに靜かに穏かだつた。

咄嗟に彼れの頭に閃いたものはフロラだつた。難破船が燈臺を求めるように彼れは圖書館を目がけて急いだ。彼れの足は空を踏んでゐた。

「俺れはまだ生きる……生きる……俺れの眼が盲ひてゐたんだ。俺れの求めねばならぬものはフロラだつたんだ。ア、、畜生！ 俺れの力には何故眼がないんだ。フロラ！ 俺れをどうか……どうか、愛に生かしてくれ。俺れは惡人ぢやない。何んといふ俺れは馬鹿だ。ヂュリヤは貴女と僕との戀を妨げようとしたんだ。物好きから僕を弄んだんだ。俺れの哀れな盲目を許して、本統に生かしてくれ。本統な生き方をさしてくれ。賴む。俺れは乾度乾度男になるから。フロラ！ フロラ！」

彼れは心の中でこう叫んだ。

彼れは圖書館の階段を一足飛びに駈け上つた。そこで恐ろしい躊躇が彼れを襲つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「若しフロラが家に歸つた後だつたら！　ヂュリヤは如何なる事でもその父とフロラとにいつて聞かせる事が出來るのだ。若しフロラがこゝにゐなかつたら！」

彼れはそつと戶を開いて中に這入つた。電氣燈の煌々とともつた閲覧室には、ぎつしり閲覧者がつまつてゐた。然し女の事務員は一人殘らず男の事務員と代つてゐた。

彼れはそつとそこを出た。廊下に出ると激しい動悸が一時に彼れの胸を襲つて來た。今にも心臓が破裂しはしないかと思ひながら、彼れは壁に凭れて、暫く兩手を左の肋骨の上に置き添へてゐた。眼の前が間を置いて暗くなつた。彼れの顏は一時にやつれてゐた。大きさのちがつた左と右との眼はぎよつと見開いたまゝに大きく、凹んだ頰の下にある口尻は、べそでもかきそうに小刻みに震へてゐた。

彼れは靜かに歩き出した。彼れは階段の手欄に身をもたせかけながら、膝頭のがくつく脚を踏みしめ〳〵靜かに降りて行つた。

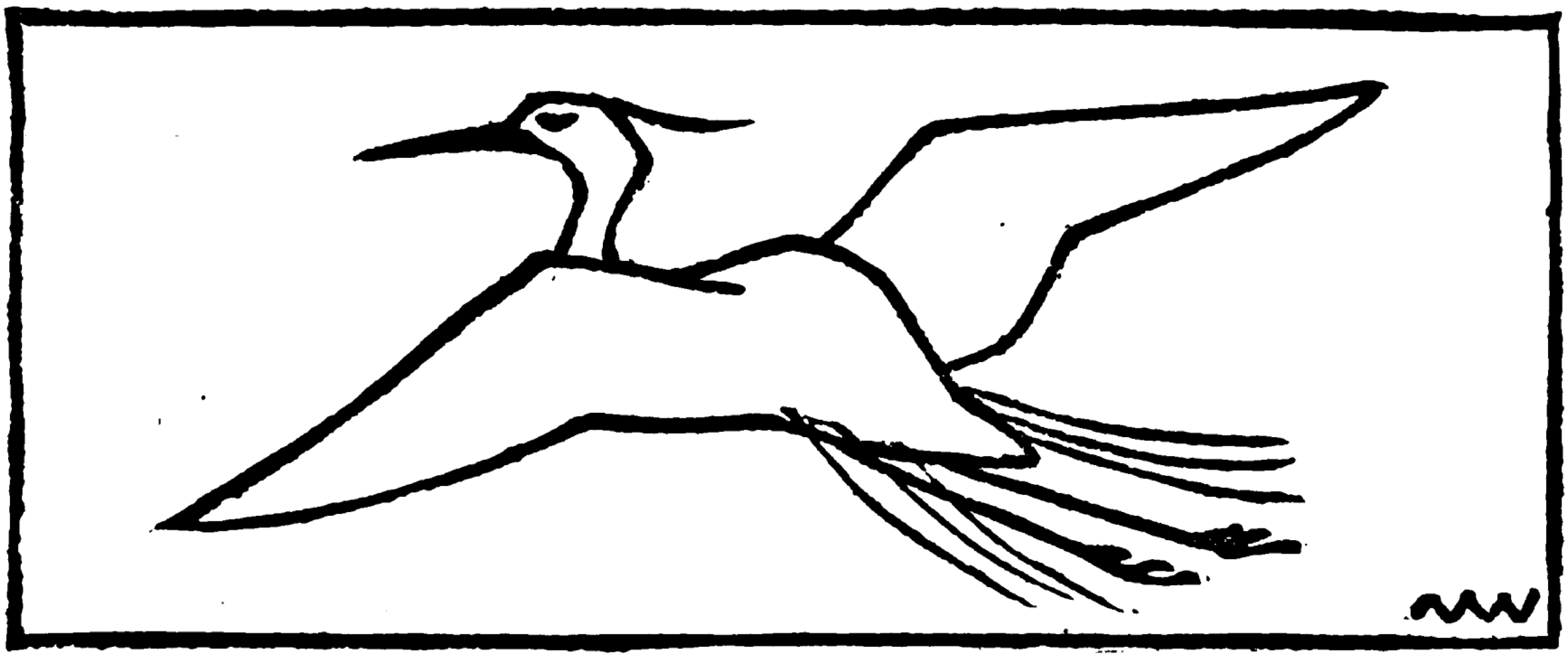
「なあに」

と芝生に出てから彼れは獨語ちた。彼れは然し自分で何をいつてゐるのかを知らなかつた。

八

その夜おそく、酩酊した彼れはP夫人の家の門口に立つて呼鈴を押してゐた。（終）

（一九一七、十、十九夜稿了）



父となる前

谷崎精二

一

もう五六日で年も暮れやうと云ふ十二月の末であつた。勇作は旅行をするからと云つて母親にせびつてやつと貰つた金の中でおふさにお召の羽織を一枚買つてやる爲めに彼の女の家を訪れた。

お房は元勇作の家の小間使であつたが、彼と戀に落ちた事が彼の兩親に發見されて二年前親許へ下げられた。だが彼はどうしてもおふさを思ひきる事が出來なくつて二人の交情は二年越しの今日迄依然として續いて居た。彼の兩親が許さない限り、二人はいつ公然と結婚する事が出來るのやらわからなかつたが、其れでもおふさや、おふさの兩親は彼の實意に絆されていつも彼を愛想よく迎へてくれた。而して今はもう彼の女は勇作の胤を宿して來月が臨月と云ふ大きな腹を抱へて居た。

おふさの家は本郷の大きな劇場の裏手になつて居るごみ〳〵した露地の中

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にあつた。父親は書間近所の或る病院の賄方に勤めて居るので、家にはおふさと母親だけしか居なかつた。而して勇作が訪れるといつも母親は風呂へ行つたり、買物に出たりして若い二人の爲めに座を外すのが例であつた。

其の日母親とおふさは佛壇の前の、小さい、枠の取れた長火鉢の兩側にぼんやり座り乍ら默り込んで居た。勇作が格子を開けて室へ這入つて行くと、おふさは急に立ち上つて彼を迎へた。母親は膝許に擴げてあつた新聞を丁度今讀み終へたかの様に疊んで傍へ置いた。

「何か爭ひでもして居たのかしらん。」

或る不自然な沈默を母子があわてゝ隱さうとした擧動を素早く認め乍ら勇作はさう思つた。小さい時分から陰氣で、引込思案で、家庭内に許り閉ぢ籠つては父母の眼色を窺つて居た彼は、早くから他處の家庭の、折に觸れて變つて行く氣分の色調を唯一眼で看破する病的の鋭さを持つて居た。長火鉢の縁に片肘を掛けて、だらりと下げた片手が途中で引掛つたまゝに羽織の紐をいぢり乍らぼんやり火鉢の灰の中を覗いて居る母親の横顔にほんの一瞥を與へたゞけで、もう彼の女が何を考へて居るかゞ彼にははつきりわかる様に思はれた。

勇作は此の親子の爭ひの種となるものが常に彼自身である事をよく知つて居た。だが今の場合彼が其れをどうする事も出來なかつた。知つて知らない振りをする事が假りと見えても尙且つ彼の執るべき唯一つの態度なのであつた。

「僕は明日たつて旅行するつもりだよ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は座蒲團の上へ腰を下すと直ぐから云つておふさを見上げた。

「まあ、何處へいらつしやるの？」

おふさは言葉にだけ驚きの調子を持たせて、だが顔は靜かに俯むけたまゝお茶をつぎ乍ら問ひ返した。

「信州の方へ行くつもりだ。」

「いつ頃お歸りなさるの？」

「七草が過ぎてからだらう。」

母親がそつと臺所の方へ去つたのを見て勇作は急に語を繼いだ。

「今日はお母さんに留守番をして居てお貰ひ。之れからお前の着物を買ひに行くから。――家でお母さんにせびつて澤山旅費を貰つたんだ。」

「でも私こんなお腹をして晝間外へ出るのは極まりが惡いんですよ。」

さう云つておふさは淋しく微笑し乍ら帶の上からお腹を撫でたが、平常から瘦せぎすの彼の女は九の月になつてもお腹がさう目立つ程大きくならなかつた。

「でも私のはさうみつともない程大きくならないでせう、常腹の人は身持になると餘計大きくなるんですつて。」

「じやうばらつて何の事だい？」

「平常からお腹が脹らんで居る人の事よ。」

やがておふさは立ち上つて着物を着替へ始めた。縞お召の綿入にコート、縮緬の長繻絆、其れは皆勇作が今迄工面をしてはぽつ〳〵造へてやつた品であつた。彼は晴着を着たおふさの姿をしげ〳〵眺める事を好んだ。丁度畫家が無色な、輪廓の朧ろげな下繪へ漸々と己が苦心の鮮かな色彩を塗りつけて行く様に、彼は貧しい、質素な少女の姿を次第に麗はしく飾り立てゝ華やかな戀人の像を造り上げやうとした。今日彼の女は四年前十六の時に買つたと云ふ、縞の粗い、古ぼけた羽織を脱いで又一つ新しい装ひを身に着ける事となつた。だがお腹の脹れた、而して眼の縁が曇つた彼の女の元氣の無い姿が麗はしい晴着には餘りに不調和に見えた。而して其れが勇作の氣持を悲しませた。彼の女の外見を飾り立てた事も、彼の女の肉體を衰へさせた事も、共に彼の仕業であつたからである。

おふさはコートを着込んで髪を大急ぎで撫でつけてから懐中へ大きな風呂敷を捻ぢ込んでわざと胸を脹らませた。

「かうするとお腹の方もさう目立たないでせう。」

さう云つてコートの脹らみを平らにする様に彼の女は胸から腹の上をそつと撫で廻した。

母親に留守居を頼んで二人が外へ出ると、未だ三時頃でいつもなら明るいのに朝から曇つた日は曇つたまゝにもう暮れかゝつて、家々の店先にはちらほら燈火がつき始めた。歳暮大賣出しの樂隊の音が賑かな電車通りを二人はぶら〳〵上野の廣小路へ出て新築の松坂屋へ這入らうとすると後ろから「もし〳〵」と呼びかける若い女の聲が聞えたので勇作が振り返ると、其れは海老茶の袴を穿いた太つた、赤ら顔の救世軍の女であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうぞ貧しき方にお惠みを願ひます。皆さんの御寄附の金で貧民がお正月お雜煮を食べられます。」

其の女は恐らく今朝から幾十人目かに同じ言葉を繰返して二人に寄附を說き勸めた。新しい木の蓋がしてある大きな鐵鍋が三脚架に載せて吳服店の前に据えてあつたが、通る人は皆其の前を避けて步いて居た。

「ほんのお志だけでよろしうございますからお惠みを願ひます。」

もう一度さう云つて二人の前で其の女がお辭儀をしやうとしたので、勇作はあわてゝおふさを促して松坂屋の玄關へ馳け込んでしまつた。

往來をぞろ〳〵步いて居る時はさう苦しさうでもなかつたおふさも長い階段を二階へ三階へと漸々に昇つて行く時はかなり疲れる樣に見えて、時々途中で足を留めてはほつと息をついた。萬一足を踏み外して轉ぶやうな事を防ぐ爲めに彼の女は片手でしかと欄干に握つて居た。而して急ぎ足でどか〳〵と上つたり下りたりする人の足音が聞えるとあわてゝ身體をぴつたり欄干の側へ擦り寄せて急ぎの人々が通り過ぎるのを待つた。貴重な器を兩手で捧げた人の樣に足取りの緩やかな、注意深い彼の女の動作が勇作の心に或るいぢらしさを誘つた。

「階段を上るのは苦しいかい。苦しければ下で待つておいで。」

彼はおふさの後ろから寄り添つてさう云ふと、おふさは『いゝえ。』と答へてコートの襟を掻き合せた。

彼の女が一番氣になるのはコートの下から古ぼけた、紛ひのお召の羽織の襟がはみ出て來やしまいかと云ふ事らしかつた。店員や、買物に來た若い婦人達に擦れ違ふ度に彼の女は其の人々の視線が先づ彼の

女の姿のどの部分に注がれるかを見極めやうとした。

二人は二階のお召の陳列場へ行つたが氣に入つた柄の物が無いので更に三階の見切物場へ行つてみたが、其處には尚氣に入らない物許りだつた。

「困つたねえ、電車で三越か白木へでも行かうか。」

「私電車へは今乘れない身體ですわ。」

おふさは小聲でさう云つて淋しい笑みを洩した。

「ぢやあ兎に角少し休まう。餘り歩くとお前の身體に毒だらう。」

勇作はおふさを連れて三階の休憩室へ這入り、窓際の椅子へ腰を下してしることを誂へた。丁度隣のテーブルには藝者を連れた商人風の中年の男が睦まじげに語らひ乍ら鮨を食べて居たが、やがて女が甘へる樣に首を曲げて男の顏を覗き込み乍ら何か云ふと、男は笑ひ乍ら箸を伸ばして自分の皿にあつた鮪の鮨を女の方の小鰭の鮨と取り替へてやつた。而して二つの鮨は顏を見合せて笑みを浮べた各自の口へ其のまゝ運び込まれた。

おつと其の樣子を見て居た勇作がおふさの方へ振り返つて何か云はうとすると、彼の女も先刻から二人の擧動を注視して居た樣子で、默つて笑ひ乍ら彼の眼を見返した。其處へ小さい女中が汁粉の碗を運んで來たので、二人は其のまゝ何も云はずに箸を執り上げた。

暫く休んでから二人は其處を出て長い階段を下迄降りた。而して裏の出口から往來へ出て又四つ角の方へ行きかゝると、其處に先刻の救世軍の女が二人を待ち構へて居るのに氣が付いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いけない〳〵、又鍋に引掛るよ。」
勇作があわてゝおふさを制して引返さうとすると救世軍の女はくす〳〵笑ひ出した。而して其れが何と云ふ譯もなく彼の氣持をほつと息つかせた。

二人は其れから夕暮の雜然とした物騷がしい往來を今川橋の松屋迄ぶら〳〵歩いて行つた。おふさはもう歩きくたびれてともすれば勇作から五六尺後へ距つてしまひ、彼が足を留めて待ち受けてやつても自分の方から足を早めて追ひ付かうとする元氣も無い樣だつた。

「だがこんなに歩かせて良いかしら。」

彼はおふさの疲れた足取りを眺めやつてさう思つた。而して若しや彼の女が行き交ふ人と突當りはしまいかと氣遣つて、丁度馬方が馬を牽いて歩き乍ら荷馬車の後部を他の車と衝突させまいと氣を配る樣に、時々彼は振返つておふさの左右を見守つた。小さい子供をつい泣かせた後の樣な、淋しい悔恨が彼の氣持の何處かに附き纏つて居た。

松屋では好い鹽梅に氣に入つた柄のお召が見つかつたので其れを買つて出口へ降りると、おふさはちよいと便所へ行くからと云つて彼を買上品の受渡所へ待たせて置いて直ぐ側の便所へ這入つたが、どうしたのか仲々出て來なかつた。後から陳列場を出て來た人達がどん〳〵品物を受取つて下足場の方へ去つてしまふのに彼一人はいつ迄も壁に寄り掛り乍らぼんやりおふさを待受けて居た。終ひに彼は其處に控へて居る店員に對して極りが惡くなつたのでぶら〳〵又陳列所の方へ歩き廻つたりして居る中に、ふと彼は恐ろしい疑惑に捉へられた。おふさは若しや便所の中でどうかしたのではあるまいか。もう

が臨月だと云ふのに餘り歩かせた爲め急に身體に異狀が起つて、ひよつとしたら流産でもしたのではあるまいか？　さう思ふと彼は急に心配になつて來て直ぐ便所の扉を開けた。

男の便所には一人も居ず、女の便所は皆戸を閉されてあつて何處におふさが這入つて居るかわからない。彼は聲を揚げておふさを呼ばうか、其れとも片端から戸を叩いてみやうかと思つたが、不意に他の人が這入つて來て其れを見られた時を想像するとどちらも極りが惡くつて容易に出來なかつた。仕方が無くぢつと苛立たしさを堪へて幾度も便所の戸の前を往來し乍ら今に何處からか彼の女の呻き聲が聞えて來やしないかと氣遣つて居ると、やがておふさは隅の方の戸を開けてひよつくり無事の姿を現した。

「どうしたんだい、大變心配したよ。」

「まあ濟みません、少しお腹が痛いの。でも何でもないんですよ。唯の食べ過ぎなの。」

勇作はやつと安心しておふさを伴つて下足場へ出た。

外はもうすつかり暮れて師走の夜には附物の寒い風がぴゆう〳〵吹き荒んで居た。彼は空腹と疲勞とでもう歩くのが厭やになつたが、其れでもおふさを一人で家へ歸すのは心許なかつたので又一緒に電車通りをぶら〳〵歩いて行つた。而して須田町の角迄來ると一軒の洋食屋が眼に着いたので彼はおふさを促して其の二階へ上つた。

丁度晩飯時で狹い二階はかなり混雜して居たが、二人はやつと窓際のテーブルに空席を見出して腰を下した。室の中央のテーブルには何處か近所の會社へでも勤めの歸りらしい、背廣服を着た若い男が二三人の女中を集めて卑しい微笑を浮べ乍ら何やら小聲で話をして居た。女中達が其の話に聞き惚れて居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、勇作の處へ注文を聞きに來ないのが彼の氣を苛立せた。
「どうして今日はこんなに苛々するのだらう。」
彼はさう思ひ乍ら努めて氣を落着ける爲め、窓の方へ身を向けてぼんやり夜の街を見下した。直ぐ眼の下の電車通りからは烈しい電車の警鈴と、カーヴに軋る車輪の音とが絶間無く聞えて來て、室内で起る物音の半ば以上は戸外から流れ込む喋音の中に溺れてしまつた。小さい、人懷かしい、幾千の燈火が或ひは固まつて、或ひは散らばつて、硝子窓を透して見える長方形の前方の空間に一杯撒がつて居た。而して其の夥しい光輝の中から彼が明日見捨てやうとする此の大都會が大きな、悲しい眼を見開いて彼をそつと見上げて居る樣に思はれた。
やがて女中がやつて來て注文の品を聞いたので彼は酒と料理を二三品誂へた。おふさは彼の買物のお伴に來た昔のまゝの小間使である樣に、而して其れ以上に自分を價値づける望みを持たない樣に、料理が來る迄殆ど無言で愼ましやかに彼の前に控へて居た。
「お酒を一杯飮まないか？」
勇作はさう云つて女中が持つて來た正宗の壜を取り上げた。
「いゝえ、私よしますわ、身體にさわるといけませんから。」
おふさはさう云ひ乍ら手酌をしやうとした彼の手から壜を奪つて彼の盃へ浪々とついだ。
「あなた、何故旅行になんかいらつしやるの？」
「何故つて別に譯は無いさ。唯行きたいから行くだけの事さ。」

「私何だかあなたが居て下さらないと心配なの。若しか難産で明日にも死にかゝる様な事があつてもあなたが東京に居らつしやれば直ぐ來て頂く事が出來るでせう。」
「大丈夫だよ、そんな事があるもんか。難産で死ぬ人なんか千人に一人あるか無しだ。」
「では旅先から是非毎日手紙を下さいね。而して明日立つ時間がわかつて居るのなら私お見送りに參りますわ。」
「そんな事をしては却つて困るよ。其れに事に依ると家でお母さんが僕を監視させる爲めに誰か女中を停車場迄附添はせて來るかも知れないから。」
「さうね、奧様はさう云ふ事をなさりさうね。何にも口では仰有らないけれども方々へ氣を配つて居らつしやる方ですわ。」
おふさはさう云つて諦めた樣に淋しく口を噤んでしまつた。彼の女に執つて優しい奧様だつた人を公然母と呼ぶ日がいつ廻つて來るかは今のおふさには豫期さるべくもない事だつた。彼の女は唯曾ての優しい奧樣としての其の人の記憶をいつ迄も淸らかに保つて傷けまいとした。
「赤ん坊が生れる時分迄には屹度歸つて來るから身體を大切にしてお暮し。」
彼はさう云つておふさの兩親へお歲暮の代りに五圓紙幣を紙に包んで彼の女に渡した。
勘定を拂つて二人が外へ出るともう七時過ぎだつた。勇作はおふさの家の近く迄彼の女を送つて行つて明日の天氣を氣遣ひ乍ら電車で麹町の家へ歸つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

翌朝勇作が眼を覺したのは八時頃であつた。彼は八時五十五分に飯田町を出る汽車に乘るつもりだつたけれども、而して急げば未だ間に合ひさうにも思はれたけれども、急ぐ旅でもなかつたので其のまゝ二三十分寢床の中にもご〳〵して居ると、やがて母親が二階へ上つて來て窓の戸を一枚そつと開けた。彼は明るい光線を顏一杯に浴びて今眼を覺した許りの樣な眠むたげな表情をし乍ら母を見上げた。

「もう九時だよ、起きなくつても良いのかい。何時の汽車に乘るの?」

「十一時だから未だよいんです。」

彼は寢返りを打つて窓から流れ込む明るい光線と寒風とに顏を反け乍ら又眼を閉ぢた。母親は窓の障子をぴつたり閉めて下へ降りて行つてしまつた。

二度目に勇作が眼を覺したのはもう十時近かつた。顏を洗ひに下へ行くと、母は女中を相手に緣側でせつせと張物をして居た。

「もう五六日たてばお正月ぢやないか。三が日濟んでから行けば良いのにねえ。」

母は彼の顏を見上げてさう云つたが、彼の强情な事をよく知つて居るので强いて決心を翻へさせやうとはせず、今度は鞄の中へ詰める身の周りの諸道具などの世話をやき始めた。

何處の母親も恐らくさうであるかも知れないが、彼の母は彼に對して何物をも容れる海の樣な廣やかな愛情を持つて居る事を勇作はよく知つて居た。例へば彼が或る處へ赴かうとする。母は大變其れを好まなくつてどうか見合せてくれゝば良いと其れ許りを思ひ煩つて居る。だが愈々彼が出掛けて行くとなると、母はそんな不平は胸へ押し包んで晴れやかな笑顏を示し乍ら「さうかい。ぢやあ緩くり行つてお

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いで。」と云ふ。而して彼の姿が見えなくなると唯一人おつと茶の間の長火鉢の前へ蹲つていつ迄も熱い涙を兩眼に湛へて居る……………其れが母の彼に對する愛情の表白であつた。

彼は顔を洗つて鞄の荷造りをしてから遲い朝飯の膳に座ると、母は今洋食を誂へたから少し待つ樣にと云つた。何と云ふ譯も無く彼は苛々して居たので、「そんな物はいりません。」と答へ乍ら香の物で御飯をどん〳〵食べ始めた。

「今電話で催促したのだから直ぐ來るよ。十一時の汽車なら未だ澤山間に合ふぢやないか。」

母はさう云つて彼を止めたが、勇作は返事もしなかつた。母に對して何の不滿の理由の見出せなかつたに拘らず、漸々彼の苛立つた態度が母の氣持に働きかけて行きさうになつた。彼はあてつける樣にわざと箸や茶碗をかち〳〵鳴らしたり、香の物へ醬油をうんと掛け過ぎたりした。而して台所の方で何か物音が聞える度に彼はびつくりして耳を澄まし乍ら、其れが洋食屋の出前持の聲でない事を心に祈つた。堅意地な彼はもうどうあつても誂へた洋食が來ない中に飯を濟ませてしまはうとあせつた。

だが彼が二膳目の飯を食べ終へない中に女中が急いで台所から黑い洋食屋の出前の箱を持つて來た。溫かい湯氣の立つたロールキャベツと、ホットシチウの皿が膳の上へ並べられと多少食慾を惹きつけられないではなかつたが、彼はやつぱり香の物許りをお菜にして洋食の皿には見向きもしなかつた。

「さあ、來たぢやないか。食べておいで。」

母がさう云つても彼は尙知らん顔をして居たので、――彼には其れが何となく愉快だつた――母は到頭怒り出した。

「お前みたいな意氣地な者は本當にありやしないよ。人が折角誂へた物が來たのにわざと食べないで居る。間に合ふんだから一箸でもつけるが良いぢやないか。」

『いりません。』

彼はあわてゝ飯を掻き込んでお茶にしてしまつた。而して自分も急に腹が立つて何か大聲で怒鳴りつけたい様な氣になつた。「一箸でもつけろと云ふんならかうすれば良いでせう。」さう云つてナイフの先で滅茶々々に皿の中を掻き廻して料理を室の中へ投げつけてみたくなつたのを彼はぢつと堪へて居た。

「折角お母さんが誂へてやつたのだから洋食が來る迄御飯を待つて居るのが當り前だ。食べかけたのなら食べかけたで良いけれど間に合つたら少しでも食べて行くが良いぢやないか。本當にお前みたいな氣難かしやの子はありはしない。一體何がそんなに氣にさわるのだい。」

「誰が洋食を誂へろと云つたんです。其れはお母さんの勝手ぢやありませんか。食べやうと食べまいと大きなお世話です。間に合はないから食べないのに不思議はありません。」

「間に合はないよ。澤山間に合つて居るぢやないか。」

「間に合ひません。よく見てごらんなさい。もう僕はおしまひです。」

彼はさう云ひ乍ら荒々しく席を蹴つて二階の居間へ馳け上つた。だがもう其處に烈しい悔悟の情が彼を待受けて居た。何故自分は母の親切をあんな邪慳な行動で裏切つたのであらう？　彼には其の理由がわからなかつた。唯此の僅かな爭ひの爲めに母が今日一日中、或ひは明日迄も、明後日迄もふさいだ氣分を持ち續けて、さながら彼の女自身が惡い事をした時の様に一人くよ〳〵自分を責めつけて居るだらう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云ふ結果だけが明瞭に豫想された。而して其の憂鬱と自責の念とは母親其のまゝの神經質な氣持を受け繼いだ勇作自身にも適當な配分を與へられて、遠い旅の空で執拗に彼を惱まし續けるに違ひなかつた。

『今の自分にはいつそかうした悲しい氣持を持ち續けて旅に出る方が良いかも知れない。』

彼はさう思つて鞄を抱へ乍ら玄關へ出た。呼び寄せて置いた車に乘つて『飯田町の停車場迄。』と命ずると、車夫は直ぐ梶棒を揭げて勢好く走り出した。勇作が車の上からそつと振返ると母親が玄關先へ見送りに出た女中の後ろに佇んでそつと彼の姿を眺めて居た。見る見る車が遠ざかつてしまつたので彼は母かどんな表情をして居るかを見極める事が出來なかつたが、白い淋しい其の顏がぢつと彼の方を向き乍ら暫く動かなかつたのを見出した事が大變彼の氣持を輕くさせた。

年末の休暇を利用して歸省する學生や官吏の群で停車場の構内は混雜を極めて居た。勇作は車から降りて鞄を抱へたまゝ一人ぼんやり長椅子の上へ腰を下して切符賣場の附近へ寄り集ふあわたゞしい人の流れを見つめて居た。彼は急に昨夜別れた許りのおふさに一目會ひたくなつた。而して母と僅かな爭ひをした爲めに急に悲しく荒み果てた氣持を彼の女によつて再び和やかに靜めて貰ひたくなつた。だが發車の時刻が切迫した事が彼をさうした無氣力な、沈思的な狀態に永く差し置かなかつた。『どうせいつになつても悔ゐは殘るんだ。』彼はさう思ひ乍らあわたゞしく切符を買ひ求めて鹽尻行の列車に乘込んだ。

三

スチームの通つた溫かい列車の腰掛けに腰を下し乍ら鞄の中から雜誌を取り出してぽつ〳〵拾ひ讀みをして居る中にいつしか勇作は疲れが出てうと〳〵眼瀉みに落ちた。だが本當にぐつすり寢込んだので

はなくなつて時々列車が停車場へ止つてプラットフォームを車掌が驛の名を呼んで通り過ぎるのや、向側の腰掛に座つた人が立ち上つて彼の前を行つたり來たりするのを朧ろげ乍ら彼は意識して居た。而して又さうした現實の刺戟が消え失せると淋しく微笑したおふさの顔だの、蒼白い顔をして長火鉢に凭れた母親の姿だのが夢の中で彼を襲つた。彼は强ひて眠らうともせず、又眼を覺さうともせず、絶間無い列車の動搖に身を任せ乍らいつ迄も唯ぢつと物憂い氣分を持ち續けて列車が目的地へ着くのを待つた。

　或る山間の淋しい停車場で乘客が十二三人どや〳〵と勇作の乘つた客車へ詰め込んだので、車内が急に騷がしくなつた。一人の爺さんが勇作の隣へ割り込んで、彼の鞄を押しやり乍ら『どうぞ少し腰を掛けさせて下さい。』と云つたので彼はぱつちり眼を覺した。列車はもう停車場を後にして黑煙を吐き乍ら進行して居る。彼は白雪を頂いた窓外の山々や、野の上に薄れて行く夕日の斜光をぼんやり眺め乍ら今發車した停車場が何驛であつたかを知らうとして懷中時計を出してみると四時十分程過ぎであつた。鞄の中から旅行案内を出して時間を照し合せると、今出た停車場は初鹿野であつた事が知れた。勇作は眼の縁が痺れて不快だつたので、立ち上つて洗面所へ顔を洗ひに行かうかと思つたが、わざ〳〵立ち上るのも面倒なので見合せた。彼は寧ろ今のまゝの物憂い、不快な氣持からもう一度快よい、前後不覺の眠蕩みに落ち込む事を望んで居た。

『それや大したもんさ。何しろ一つ造へるに何十萬兩と云ふ金がかゝるんだからな。』

　突然彼の後ろでかう云ふ聲が聞えたので、振り返つてみると、筒袖の外套を着て鳥打帽を冠つた行商風の男が頻りに向ひ合つた大きな坊主頭の男に話して居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『おいらは横須賀に一月許り居たので船が出來上つた時進水式つて云ふのを見せて貰つたが、全くはあ豪儀なもんさ。造船所の大將(てえしやう)がちよいと綱を切ると山の樣なでけえ船がする〳〵と水の中へ辷り込んだからな。うまく出來て居るもんぢやねえか。』

『へーえ、一體どう云ふ仕掛になつて居るもんでせうな？』

坊主頭の男は如何にも感心した樣に頷き乍らちよいと質問を挿んだ。

『さあ、おいらも不思議だつたから後で聞いてみたら船の底へ蝦蟇の油と豚の油とをまぜた奴をうんと塗つて置くんだとよ。』

『成程な。而して其のでけえ船は何にするんです？　やつぱり運送に使ふんでせうかな？』

『まあ商船さ。だけどももう軍艦と云つても良い位素敵に立派な物だ。』

此處で會話が途切れたので、今迄微笑し乍ら二人の話に聞き入つて居た勇作は急に注意の對象を失つてぼんやりしてしまつた。顏を窓硝子へ押しつけて車外を見渡すと、列車は今高い崖の上を通つて居て、直ぐ眼の下の小川に架つた、板一枚の狹い橋の上で兩方から來合せた二人の者が行き止ってぢつと稍や暫し動かずに居る。向側の川岸に立つた、子供だか大人だかわからない小さい二三人の人影は確かに列車の方を見上げて居るらしかつたが、橋の上で行き會つた二人は見向きもしないで立つて居る。狹くつて通れないので互に道を讓つて居るのかと思ふと、さうではなくつて二人が其處で寄り添つて立ち話をして居るのらしい。一人の胴がちよいと赤く見えるので女である事が察せられる。勇作はもつとはつきりもつと鮮かに、此の二人の男女の樣子を見たいと思つた。二人は未だぢつと立ち止つたまゝであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どんな場面が續いて現はれるだらう？」さう思つて彼は尙も倦かずに漸々遠のいて行く列車の窓からぢつと此の小さい男女の姿を見つめて居た。だが急に列車は一方へ反れかゝつて、反對の側の丘の突端が今迄眼の下に見えた小川の景色をすつかり隱してしまつた。

彼は又ぼんやり視線を列車の中へ戻した。だが何處を見廻しても新たに彼の興味を繋ぎとめる物は見當らなかつた。暫くすると彼は又眼を閉ぢて薄暗い車内でうと〳〵眠り始めた。

汽車が上諏訪へ着いたのは八時過ぎだつた。勇作はプラットフォームから寒い、雪が積つた停車場の廣場へ出て、直ぐ近くの大きな旅館へ足を運んだ。導かれた三階の室には爐の中に溫かい炭火が用意されてあつた。久しぶりで氣持の好い溫泉へ這入つて晩飯を食べてから、彼は疲れた身體を直ぐ寢床へ投げた。

勇作はぶら〳〵と何の爲す事も無く、三日許り此の溫泉宿で暮してしまつた。だが彼は始めから何の目的も無く、幾日を此處で費さうと云ふ豫定も無かつたので、無爲の日が昨日も今日も同じ樣に空しくたつて行く事が何の悔ひも殘さなかつた。彼は宿の褞袍を着込んで爐に當り乍ら時間が來ると湯へ這入つては飯を食ひ、退屈になるとぶら〳〵町へ散步に出かけた。而して夜は二合許り晩酌をやつて早くから寢床へもぐり込んだ。

四日目の午後、雪がやんで、だが直ぐ又降り出しさうなどんよりした空模樣の中を彼は汽車で下諏訪の町へ遊びに出かけた。停車場から町の中心へとぶら〳〵步いて行くと處々に製絲工場の白壁の建物が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

並んで、垣根の中の空地では工女が洗濯でもして居るらしく、ざあつと水を流し込む音や、抑揚の緩やかな、悲しい鄙唄を謡つて居る聲だのが洩れて來た。工女の寄宿舎は板葺きの見すぼらしい二階建ての長屋で、小さい一つ一つの室に設けられた窓には嚴重に金網が張つてあり、大きな、赤い煙突が其等の建物を威壓する樣に幾本も高く中空へ聳え立つて居た。或る大きな工場の門の中からは病後の樣に面窶れがした十六七の少女が銀貨を二つ三つお手玉の樣に掌中で投げ交はし乍ら往來へ出て來て、淋しい後姿を勇作の前にちらつかせ乍ら傍目もふらず泥濘の中をずん／＼歩いて行つてしまつた。

町には怪しげな小料理屋と、工女達の安價な好奇心を牽く樣な髮飾りの道具を賣る小間物屋などが處々に散在するだけで、何處にも勇作が腰を下して一休みする樣な場所が見當らなかつた。彼は用も無いまゝにぶらぶら町端れの方へ歩いて行くと、『大日本弓術會下諏訪支部。』と書いた看板が出て居る一軒の大弓場が見つかつた。外側の破れ障子の間からそつと中を覗くと、四人の男が交る／＼弓を引いて居るが、前掛をかけた小柄の老人が一番上手で、一つの矢を引く毎に空を見上げて鈍い日ざしを氣遣ひ乍ら古の武將の樣に何か心中で祈願をこめる樣な敬虔な表情をする。而して狙ひを定めてひゆうと放つと必ずすぱりと的を射る音が聞えた。髮を分けたハイカラの若い男が一番下手で、殆ど一本も命中せず、一勝負が濟む度にいつも下駄を履いて的場へ矢を拔きに行く役目を勤めて居る。雪が眞白に積つた長方形の庭は片側の塀に沿うた處だけが幾度となく的場への往復に踏みつけられる爲め、道が平らにならされて、煙草の吸殼だの、蜜柑の皮だのが散らばつて居る。若い男が拔いて來た矢は布で鏃を拭かれてセメントの空樽の中へ投げ込まれ、又新たに競技が始まる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勇作は何の大した興味も無いのにも拘らず氣がぽかんとして居たのでいつ迄も障子の外に立つて大弓場をぢつと覗き込んで居た。いつのまにか薄い日光が洩れて來て、正面の黒い幕へ掛けられた小さな金的が微かに輝き出した。ひゆう〳〵とひつきりなしに唸りを續けて飛んで行く矢の響に交つて、何處か近所から工女達の悲しい唄聲が聞えて來た。唄の文句はわからなくつて唯單調な、うら悲しい抑揚だけしか聞きわけられなかつたが、其れは別々の處で生れて偶然同じ場處へ落ち合つた不幸な少女達が遠く隔たつた各自の故郷を戀ひ慕ふ情を謡つたものらしかつた。ぢつと其の唄聲に耳を澄ませて居ると勇作は急に懐しいおふさの事や、母親の事が思ひ出されて、直ぐに東京へ馳け戻りたくなつて來た。此の感傷的な、甘い、悲しい情緒は彼が屹度旅の終りに味はねばならぬ事を豫期して居たのであつた。而して其れは或る意味で彼の淋しい孤獨の旅の一つの目的でさへもあつた。

『さうだ、明日此處を立つて是非東京へ歸るとしやう。』

彼はさう思ひ乍ら又ぶら〳〵歩き出した。

四

翌日の朝上諏訪を立つときめて荷物を鞄へ押し込んでしまつた彼は宿を出て停車場で汽車を待つ間に急に又此のまゝ東京へ歸るのがつまらなくなり、幸ひ未だ旅費が多少餘つて居るので鎌倉へ廻る事にした。其處には伴田と云ふ彼の親しい畫家も住んで居たし、今迄幾年も春や夏の休暇を送つた事がある土地だけに彼は常に特殊の親しみと思ひ出とを持つて居た。

八王子で汽車を乘り換へて鎌倉へ着いたのはもう七時だつた。勇作は直ぐ停車場から車を走らせて海

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

岸の大きな旅館へ投宿した。鹽の湯の風呂へ這入つて温まつてから晩飯を濟ませ、彼はぶら〳〵散歩がてら二三年來此の近くに住つて居る友人の伴田を訪問に出かけた。空は曇つて居たが上諏訪に比べて外氣はずつと温かく、外套も着ず、帽子も冠らずに、海から眞正面に吹いて來る潮風に當つても殆ど冬らしい寒さを感じない程であつた。往來は綺麗に掃かれ、處々の別莊風の家の前にはもう松飾りが出來て樂しげな笑聲が門の中から洩れて來るのが如何にも都會らしい、華やかな氣分を勇作の心に誘ひかけた。電車の踏切を越えて長谷の町へ這入ると伴田の家は直きだつた。

伴田は勇作と中學時代からの親友で、資産家の家に生れた勇作がのらくらいつ迄も遊んで居る間に、彼は子供の頃から好きな繪を熱心に研究して此の頃では新進の洋畫家としてかなり世間から認められて居た。而して二三年前から肺を病んで湘南の地に療養して居る中に、彼はふと同じ病に惱んで居る美しい少女と戀に落ちて結婚した。彼の健康が日に日に衰へて行くにつれて、彼の油繪には異常な生氣と、至純な情感とが益々色濃く加へられて來た。而して伴田は今、彼が生きて居る間に一枚でも多く優れた傑作を描かせたいとして彼を責めつける彼の藝術の愛好者の前に生命と藝との何れを選んで享樂すべきかのディレンマに陷つて居た。

勇作は伴田の家の格子戸を開けて薄暗い土間に立ち乍ら案内を求めると、痩せた身體に温袍を着込んだ伴田が次の間の唐紙を開けて電燈の紐を伸ばし乍ら遲い夜の客を怪しむ樣に上り框へ現れた。

「伴田君、僕だよ。」

勇作はさう云ひ乍ら微笑して帽子を取つた。伴田は電燈の光の後ろに立つて居たので其の顏が見えな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かつたが、恐らく同じ様に懐しげに微笑したであらう事が勇作に推察された。

「やあ、之れは珍らしい人だ。さあ上り給へ。」

さう云ひ乍ら伴田は勇作を奥の間へ案内した。風邪をひいたと見えて蒼白い顔をし乍ら咽喉に濕布を當てゝ火鉢の前に蹲つて居た細君も彼の姿を見ると、急に淋しい夜を賑やかに過す的が出來た様に喜んで立ち上つた。

「本當に暫くだつたね、だが何だつて今時分鎌倉へやつて來たんだい？」

「なあに、今朝迄諏訪に居たんだがね。急に思ひ立つて此處へ來たんだ。」

「すは鎌倉と云ふ譯だね。」

伴田がさう云ふと細君が晴れやかに笑ひ出した。彼の女は製作を控へた家庭の中で常に寡言で憂鬱な夫が、第三者が加はると急に快活になつて元氣好く喋り出す癖があるのをよく知つて居て、其れを巧みに利用し乍ら室内の氣分を賑かにしやうと努めて居るらしかつた。

「どうぞお緩くりなすつて下さいましな。本當に此方へ參りますと淋しくつて、晝間でも夜でも、滅多に來て下さる方なんかありませんですの。」

さう云つて細君は紅茶やウイスキイなどを勇作に勸めた。眼の縁が紫がゝつた、以前よりは一層窶れて肩で苦しげに息をして居る彼の女の様子を見やつて、勇作は若しや妊娠して居るのではあるまいかと云ふ疑ひを起させられた。だが肺病の父と母とを持つた不幸な嬰兒の出產と云ふ事は想像するさへも傷ましい事であつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京の友達の話、諏訪の寒い話、一人旅の退屈の話、そんな談話が一通り濟んでしまふと、伴田は近作を見せやうと云つて畫室になつて居る次の室へ彼を案內した。

「何しろ鎌倉は要塞地帶だから寫生一つ勝手に出來ないで困つて居るんだよ。」

そんな事を云ひ乍ら彼は靜物だの、海岸の松林だのを描いた大小數枚の油繪を順々に見せてくれた。夜の事とて細かい色調がよくわからなかつたが、全體に著しく暗色が殖えて作の基調が陰鬱になり、今迄の純な、平明な畫風が一變して、林檎一つ描いても、花瓶一つ描いても、何處か異樣(グロテスク)な陰翳が附き纏つて暗夜に現れる錯覺の樣な感じを與へた。

多くの製作の中で勇作は壁に立てかけてある大きな百號のカンヷスに眼を留めた。近寄つて電燈の前へ引出して熟視すると、海岸の松林の端れの小砂丘の前に二人のうら若い男女が松の根に左右から寄り添つて佇んで居る。海の面は未だ日の光を受けて弱い反射を投げて居るので日は尙全く暮れきらない事が示されてあるのだが、砂濱一帶は夕闇の樣に薄暗くつて唯二人の男女の顏だけが薄明るい海と照し合ふ樣にほんのり白く浮き出て居る。膝を曲げて蹲つた男の方は眼を細く閉ぢて何事かを觀念した樣な淋しい顏を俯むけて居たが、並んで立つた女の方は未だ夢を追ふ樣な眼つきをして半身を前へ伸ばし乍ら名殘り惜しげに漸々光が薄れて行く太洋の果を見つめて居る。松の枝に掛けた彼の女の白い、美しい手にも、薄赤い下駄の鼻緒を踏張つた力の籠つた足先にも、暗い死を厭うて明るい生を求めやうとする彼の女の未練と愛着とがはつきりと現れて居た。云ふ迄もなく伴田は此の大作によつて彼等夫婦が漸く迫り來る死の前に於ける覺悟を示さうとしたものらしかつた。だが不思議にも畫中の人物の容貌は男の方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が伴田の妻に似て居て、女の方が却つて伴田自身に似て居た。而して其の女の顔は「私は未だ死ねません。未だ諦めがつきません。こんなに若く、こんなに多くの仕事を殘して、どうして今此の世を去る事が出來ませう。今日の日は暮れても又明日私は鮮かな日の光を拜みたい。而してあさつても、しあさつても、もつと何年も何年も後迄も。」と云つて居る樣に見えた。

「之れはねえ、今年の秋の展覽會へ出すつもりだつたが、書いて居る中に氣が變つてよしてしまつたのさ。今では構圖(コムポジシヨン)にも、筆觸(タツチ)にも大分飽き足らない處が出來たので全部描き直さうと思つて居る。人物の姿勢(ポーズ)なんか殊に此のまゝでは不滿だ。」

勇作が稍や暫くぢつと無言で此の繪を見つめて居ると、伴田はかう云つて說明した。

「でも大變面白い作ぢやないか。君にしては珍らしい行き方だ。――何と云ふ題をつけたんだね?」

「始め「永遠の夕」と附けたんだがね。如何にも概念的で面白くないので、「暮れ行く海」と變へてみたんだ。然し全然書き直すとなると又此の題では不適當になるかも知れない。」

繪を片づけて茶の間へ戻るともう十時近かつた。勇作が暇を告げて歸らうとすると伴田は途中迄送つて行くと云ひ出して一緖に外へ出た。

「海岸へ出やう。夜風に吹かれると僕は身體に惡いんだが、今夜は溫かい樣だから。」

伴田は外套の襟を立てゝ咽喉を蔽ひ乍ら先へ立つて漁夫町の間から海岸へ出た。砂濱はしつとり濕つて平らにならされた砂が音も無く二人の足の下に沈んで行つた。月の無い夜の海は鉛の樣に鈍く光つて漸々淺瀨へ迫り寄つて勢ひの失せた浪は苦しい、疲れた樣な浪頭をどさり〳〵と渚に崩しては引いて行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く。暗い夜、暗い空、而して暗い海、勇作は今不治の病に惱んで居る不幸な友人と砂丘の上に足を留めてぢつと默したまゝ、太洋の果を瞰んだ。而して闇が、空漠たる空と水が、彼にも増して此の不幸な友人を威嚇して居るに違ひない事を感じた。

「生きると云ふ事は良い事だ、本當に良い事だ。」

突然伴田は感傷的な聲を揚げてかう叫んだ。勇作は彼が更に言葉を續けるだらうと思つたので、默つて其の顔を見返したゞけであつた。

「かうしてぢつと暗い海と空に對して居ると今更に大自然と云ふ物が恐ろしくなるね。此の空漠とした取り留めもない奴が始終人類や、動物や、木や、草の運命を洩れ無く司どつて一刻一刻に或る者を殺し或る者を生かしては全體の調和を計つて居るのだ。僕などはもう眼を着けられて近い中に生活の總勘定をさせられさうだ。僕の妻も永い事はあるまい。だが自然は俺達の肉體を此のまゝ捨てゝしまふのは惜しいと思つたか、妻の腹の中へ新しい存在の芽を播いてくれた。恐らく俺達と同じ樣に病弱な肉體を以つて生れて來るに違ひない赤兒の事を思ふと、僕は恨んで良いのだが、感謝して良いのだかわからない。——僕はほんの僅かの間父親の愛情を味つてみやうとも思はない。戀はしたが夫婦の愛も欲しくはない。子の愛、父の愛、夫の愛、さうした個々の愛を皆自然に捧げてしまつて其れで僕の安心が得られるならちつとも惜しいとは思はない。」

「だが妻や、子に對する個々の愛を捨てなくたつて、さうした特殊的な愛を通じて自然に親しむ途がある筈ではないか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勇作は伴田の長い言葉の後、やつとかう口をきいた。

『でも自然は僕に其れだけの時日を貸してくれない。子を愛さうとする意志だけで、其の愛情が實際の形を取つて現れない中にもう暗い大きな手が僕の行手を遮ぎつてしまふかも知れない。』

勇作は再び默つて彼の言葉を聞いた。夜更けの砂濱にぢつと佇んで居るのは唯二人だけであつた。而して彼がそんなにも恐れて居る自然の前で、海と空との永遠の姿の前で、急に全身を戰かせる樣な孤獨の感が二人の心に襲つて來た。

五

翌日勇作は東京のおふさと母親の許へ鎌倉へ來た事を知らせる葉書を出して、其の次ぎの日の元旦は伴田の家へ招かれて屠蘇と雜煮を祝はれ、骨牌をして一日遊び暮した。元日も二日も晴天であつた爲め東京から江の島詣でや別莊通ひの男女が多勢入り込んで鎌倉の町中はかなり賑はつた。

三日の晝近く、勇作は金が無くなつたので旅館の居間で母親へ宛てた無心の手紙を書きかけて居るところへ、思ひがけなく横濱に居る妹夫婦が赤ん坊を連れて訪れて來た。

『やあ暫く。おめでたう。實は昨日東京へ年始に行つたら勇さんが鎌倉へ來て居ると云ふ話をお母さんに聞いてね。丁度今日は休日だし、天氣が好いから皆で遊びに來たんですよ。』

義弟はそんな事を云つて妻の手から赤ん坊を抱き取り乍ら日が當つた緣側の近くへ腰を下した。彼は勇作より二つ年上で、高等商業を出てから横濱の或る商館へ勤めてゐた。人が好くつて、子煩惱で、妻を大事にする、誰にも氣に入られさうな青年紳士であつた。勇作は二人が這入つて來たのを一眼見ると其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れは母から命ぜられて彼の動靜を探りに來たのである事を悟つた。母は彼がおふさと全然手を切つて居るのではない事をよく知つて居た。用心深い勇作は二人の關係が現存して居る事を證據立てる樣な擧動を何一つ見せなかつたにも拘らず、母は其の母である事の直覺から堅く其れを信じて居た。而して家庭を一歩外へ出てからの勇作の行動を悉くおふさと結びつけて想像せずには居なかつた。彼の女は曾て小間使として使つた經驗からおふさが溫順な、極く人の好い少女である事を知つて、其の點では安心して居たけれども、唯勇作の愛情と希望とをいつも、彼が母の傍に居る時でさへも、彼の女の手から奪ひ取るが故に憎んで居た。

「淋しいでせう唯一人で。何故兄さんは東京へお歸りなさらないの？」

妹はさう云ひ乍ら胡散臭げに室内を彼方此方見廻した。だが彼の女が秘かに心に描いて居たかも知れない想像を實證する樣な物は何一つ見當らなかつた。手拭、帽子、外套、鞄、其れは皆勇作一人だけの所持品に過ぎなかつた。彼の女は輕い失望と、其れを裏切る安心とを同時に感じ乍ら微笑して夫の顏を見返した。

「なあに淋しいものかね、旅は一人に限るさ。子供や女房を連れて歩いたら其れこそうるさくつてたまりやしない、ねえ勇さん。」

義弟は一度切れた會話の緒を又繫ぎつけて勇作の氣持を辯解する樣にかう云つた。溫順な彼は此の淋しさうな、氣難かしやの義兄の前で、なるべく自分達ののんきな、賑やかな氣持を隱さうと努めるらしかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

表通りを自動車が通る音が聞えると妹は急に赤ん坊を抱き上げて、「坊や、自動車だよ、ブッ、ブーをしてごらんよ、そらブッ、ブヌ、ブー」と囃し立てると、父親に似て肥つた、圓まつちい眼を持つた赤ん坊は母親の顔を見つめ乍ら口を尖らせて『ブッ、ブッ、ブー」と云ひ出した。

「其れは自動車が好きな兒でしてね、未だうまくもろくに云へない癖に自動車の眞似だけはするんですよ。此の間の日曜に商館の自動車へ乘せてやつたら大喜びてお父さんの膝で暴れ廻つて其の騒ぎと云つたらないんですよ。」

若い母親はさう云ひ乍ら如何にも愛着の情を制しきれない様に赤兒の顔に首を押しつけて頬擦りをした。

『今度は伯父さんにてんくどんくをしてみせてごらん、そら、てんくどんく。」

義弟が赤兒を自分の方を向かせてかう云ふと、今度は赤い坊は小さい拳を固めた兩手を伸ばして體操の様に振り動かした。而して父と母とは左右から赤ん坊の顔を覗き込み乍ら『てんくどんく、てんくどんく。」をいつ迄も繰返した。

『隨分厄介なものだね。子供が唯無心に拳固を振つて居るだけなのにお父さんとお母さんはいつ迄も聲を合せて「てんくどんく、」を繰返して居なくつやならないんだね。」

勇作が笑ひ乍らさう云ふと、妹も同じ笑顔を返して、だが未だ赤ん坊の方を向いて『てんくどんどん」を繰返し乍ら答へた。

『でも子供つて者は其れは可愛いものよ。兄さんだつて今にお嫁さんを貰つて生んでみればよくわかる

わ。」

而して其の言葉が勇作の心に或る涙ぐましい連想を呼び起した。彼は默つて、誰も見る者が無い海の方へと暗い顏を向けた。

二人は勇作の宿で晝飯を食べ、暫く休んでから江の島へ行くと云つて彼の許を辭した。

「ぢやあ兄さん、なるたけ早く東京へお歸んなさい、お母さんが淋しがつて居ますから。」

義弟は彼が今度の旅行に全く一人である事を見屆けて安心したと同時に幾分同情の念を起したらしく、から云つて慇懃に別れを告げた。

妹夫婦に勸められなくつても勇作は旅館の拂ひが出來次第早く東京へ歸りたかつた。あんなに彼に別れる事を辛がつて居たおふさから何の便りが來ない事も氣懸りだつた。若しかするとおふさは難產で死んでしまつて、貧しい、不幸な兩親が死骸を抱へて途方に暮れて居るのかも知れない。さう思ふと彼は一刻も猶豫して居られない樣な氣がしたので、直ぐ書きかけた母への無心狀を書き終つて散步がてらポストへ入れに出た。

丁度彼が旅館の玄關を出やうとすると女中が郵便が參りましたと云つて一通の封書を渡した。差出人の名は書いてなかつたが、細い、たど〳〵しい筆蹟で直ぐおふさからの手紙である事がわかつた。彼はわざと何氣無い風を裝つて手紙を懷中へ納め、往來へ出てから封を切つてあわてゝ讀み下した。

「あなた樣はいつ歸つて來て下さるのです。お產が心配でなりませんからどうぞ早く歸つて來て下さい。昨日も夕方お腹が急に痛み出しましたのであわてゝ床を敷いて寢たんですが痛みは直きとまつてし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まひました。そんな事では未だなか〳〵だからとお母さんは云ふんですが私は心配で、心配で、坐つたきり動く事も出來ません。あなたは大丈夫だと仰しやいましたが、私はどうも難産で死ぬ様な氣がしてなりません。死ぬ前にたつた一目あなたに合ひたい。此の世でたつた一時、あなたと、赤ん坊と私と三人でぢつと顔を見合せてから死にたうござんす。どうぞ歸つて來て下さい。今一目會ふ爲めに未來永刧に私を捨てると仰しやつても構ひませぬ。どうぞ直ぐ歸つて來て下さい。不仕合せな私にせめてあなたの前で最後の息を引取らせて下さい……」

讀んで居る中に勇作の兩眼には忽ち熱い涙が溢れ出した。而しておふさの暗い想像通り、彼の女が難産で死ぬに違いない様な氣がして來た。

「可哀さうな事をしてしまつた。何故おふさを振り棄てゝ旅へなんか出て來たのだらう？」

悔恨が肉體の苛責の様に彼の胸や、頭を締めつけた。彼は赤く涙で滲んだ眼をし乍らポストへ手紙を入れる事も忘れてあてもなくぶらぶら歩き出した。

長谷の通りの裏側へ這入ると、彼の足はふと庭の板塀から小松が四五本覗き出た平家建ての小綺麗な家の前で止つた。其れは三年前、おふさが始めて彼の家へ小間使として雇はれて來てから間も無い頃、彼の一家がおふさ達を連れて一夏を送つた貸別莊であつた。或る日の眞晝頃、勇作が海から上つて海水帽に浴衣を引掛け乍ら跣足で我が家の前迄歸つて來て、熱つた石段へ濡れた足跡をつけ乍ら格子口に上りふと玄關側の彼の居間を覗き込むと、おふさが勇作の妹のお古を貰つた、派手な中形の浴衣を着て、（其れがどんなによく彼の女に似合つたらう？）赤い帶揚げを八ツ口の脇にちよいと覗かせ乍ら何の用

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

があつてか彼の机の前に中腰になつたまゝ、何やら机の上の本を捲くつて見て居る。窓を隔てゝ、二人の間は一間と離れて居なかつた。勇作は急に身體を化石の様にして息の音さへも押し止め、ぢつと惚々とおふさの美しい横顔を見つめた。

彼は始めおふさがいつ迄も彼の方を見ない様にと祈つた。だが漸々其れでは物足りなくなつて來た。彼はおふさを驚かせて、笑はせて、而して最後にぢつと彼の女の黒い、つやゝかな瞳を見入りたかつた。彼はいきなり窓際に近づいて「おふさ！」と叫んだ。おふさは驚いて本を取り落し乍ら立ち上つた。圓い、おど／＼した、憐れみを乞ふ様な眼、口の中から光を發するかと思はれる許りの白い、美しい齒、髪の中に半ば隱された、一筋一筋鑿の先で精巧に刻みつけた様な愛らしい耳、――而して恥づかしさで頬がほんのり薄赤く染められたと思ふと凡てが輝くばかりの艶やかな笑顔の中に溶け込んでしまつた…………

『何と云ふ美しい夢であつたらう！』

彼は昔のまゝの石段をそつと昇つて玄關側の居間を覗き込むと、其處には曾て彼の物だつたのと同じ様な一脚の机が据えてあつて、古い南畫の軸が掛つた床の間にはやつと開きかゝた鉢植の福壽草が黄色い花辨に毛の様な白い埃をかぶり乍ら淋しく置かれてあつた。

人通りの無い靜かな道を彼が海岸へと出ると日は丁度地平線の近くに沈みかゝつて、海と空とは未だ明るい光を湛へて居たにも拘らず、近くの小さい山々の襞の間からは早くも夕靄が帯の様にすう／＼と解けて出て麓の町に靡びかゝつて居た。廣々とした海一面に浮び上つた幾千の浪は各自角度と位地に從

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて或ひは眞紅の、或ひは薄赤い、落日の光を波頭に反射させ乍ら陸へ陸へと突き進んで來る。海岸の砂濱には處々に獸の死骸程の大きさの砂丘が出來て、海から吹き寄せる風の爲めに砂の表面が丁度何處からか脈搏を通はせて居る樣に絕えず微かに顫へて居る。

「おふさ！　おふさ！」

　彼は過ぎ去つた時と思ひ出とを追ひ求める樣に天涯に沈む落日に向つてかう叫んだ。世界の一隅に今新たなる生命が產み出されやうとして居る。而して罪無き可憐なる少女が死の恐怖の前に何の助けを求むる人も無く唯顫へ戰いて居る。凡ては彼一人の責任であつた。今彼が母の前へ一切を打ち開け、悔恨と戀愛との淚を流しておふさと結婚する事の許可を乞ふたなら、恐らく母は承諾を與へるであらう。而して彼も、おふさも、今生れ出やうとしつゝある赤兒も、凡てが幸福になれるのだ。おふさは無智な、單純な、あらゆる意味で舊式の女に違ひなかつた。だがあの善良な、あの慈しみ深い、彼の母親がやはり其の通りの女性である事を思ひ合せてみたなら、彼の妻となるべき者に何の其の上の求むべき事があらう……

「さうだ、今直ぐ行けば未だ間に合ふ。おふさは死ぬ譯はない。赤兒も、おふさも、屹度恙なく幸福に生き續ける運命を持つて居るに違いない。」

　勇作はさう考へて濕つた砂を蹴立て乍ら一散に長谷の通りへ馳けつけた。而して伴田の家の格子をがらりと押し開け、勢込んで伴田を呼んだ。

「何だい、大きな聲を出して。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夕飯の膳に向つて居た伴田は緩くり立ち上つて格子戸へ出て來た。

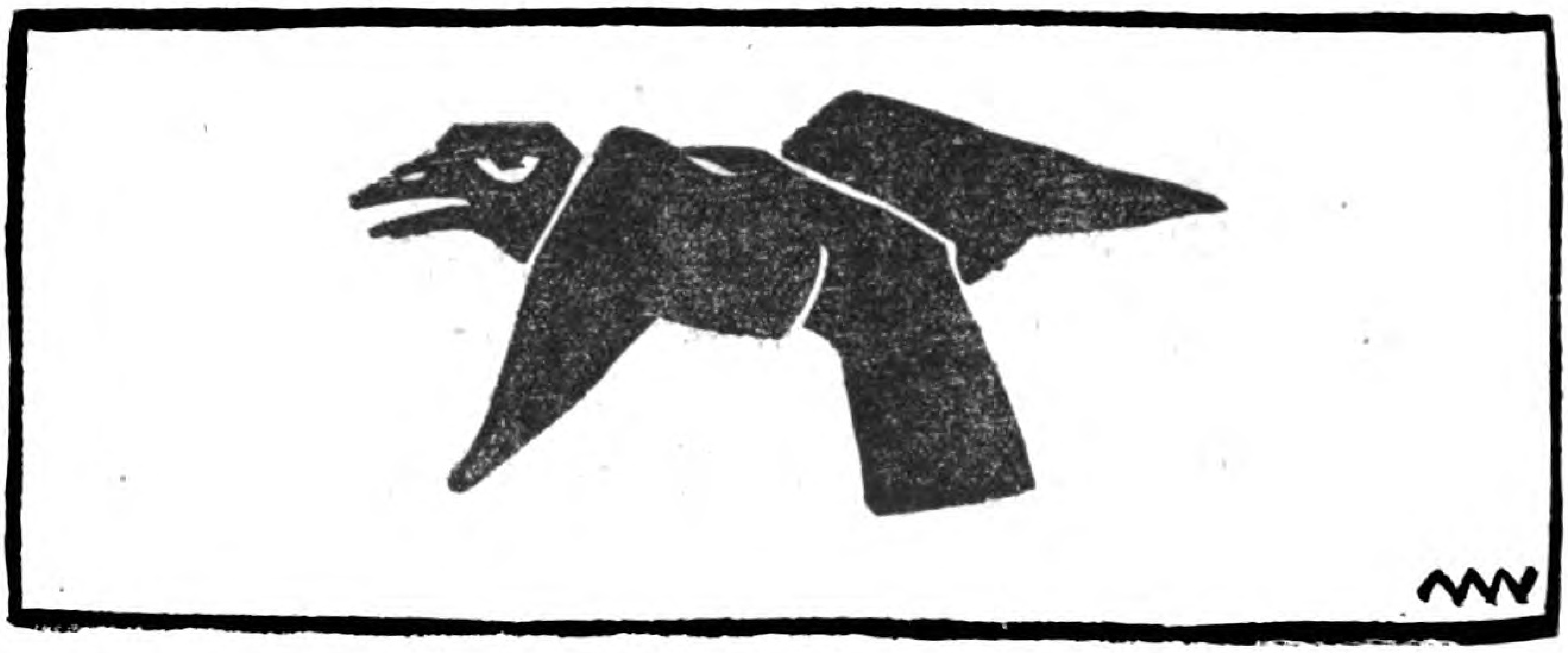
「おい、伴田君、僕は急に用が出來て之れから東京へ歸りたいんだが汽車賃を貸してくれないか。」

勇作は未だ息を喘ぎ續け乍ら伴田の顏を見上げてかう頼んだ。

「馬鹿に急な話ぢやないか。東京が戀しくなつたな。」

笑ひ乍ら伴田は紙入から一圓紙幣を取り出して彼に渡した。勇作は旅館へも歸らずに其のまゝ電車で停車場へ着くと、直ぐ切符を買つて發車間際の上り列車に乘り込んだ。而して乘客が込み合つた客車の片隅にやつと空席を見出して腰を下す間もなく、笛が鳴つて列車は徐々に動き出した。

氣持を靜めやうとてし彼が腕を組み乍らそつと眼を閉ぢると、蒼白い顏をして彼の名を呼び求め乍ら陣痛の惱みに身悶えして居るおふさの姿が眼瞼の裏の薄黃ろい世界へぼんやり浮んで又消えた。(完)



ハッサン・カンの妖術

谷崎潤一郎

今から三四十年前に、ハッサン・カンと云ふ有名な魔法使ひが、印度のカルカッタに住んで居て、土地の人は無論のこと、あの邊を旅行する歐米人の驚異の的になつて居た事は、予もかねてから話に聞いて知つて居た。しかし、予が彼に就いて稍詳細な智識を得るに至つたのは、つい近頃で、ジョン・キャメル・オーマン氏の印度教に關する著書の中に、此の魔術者の記事を見出してからである。

此の書の著者は、嘗てラホールの專門學校に博物學の教授を勤め、印度の宗教や文學や風俗に就いて、數種の著述を試みた人であるから、其の云ふところは充分に信頼するに足りると思ふ。著著はハッサン・カンの事を、先づ次のやうに書き出して居る。——

Some thirty years ago, or thereabouts, Calcutta knew and took much intere-st in one Hassan Khan, who had the reputation of being a great wonder-wor-

ker, ...Several European friends of mine had been acquainted with Hassan Khan, and witnessed his performances in their own homes. It is directly from these gentlemen and not from Indian sources, that I derived the details which I now reproduce..................

オーマン氏は、歐羅巴人の目擊した妖術の實例を、二つ三つ列擧した末に、ハッサン・カンが自ら人に語つたと云ふ言葉を引いて、彼が神通力を體得するやうになつた由來を述べて居る。傳ふる所に依ると、此の妖術者は生れながらに其のやうな力を持つて居たのではなく、少年の頃はたゞ平凡な、一箇の回教の信徒であつたが、或る日偶然、自分の村へさまようて來た印度教の僧侶に見込まれて、術を授かつたのだと云ふ。僧侶は最初、ハッサン・カンに極めて嚴格な四十日の斷食を課し、さまざまな禁厭の方法や咒文の唱へ方を敎へた後、とある山陰の洞穴の前に連れて行つて、窟の中にあるものを見て來いと云ふ命令を下した。――"With much trepidation I obeyed his behests, and returned with the information that the only thing visible to me in the gloom was a huge flaming eye."―― 彼は其の時のことを斯う話して居るが、物凄い、眞暗な洞穴の奧には、一箇の、爛々と燃え輝く巨大な眼球が見えたのである。すると僧侶は、「それでよろしい。もうお前には神通力が備はつて居る。」と宣告して、試みに大道の石ころに向つて一つ一つ印を結ばせた。さうして更に斯う云つた。「さあ此れから内へ歸つて、お前の部屋の戸を締めて置いて、此の大道の石ころを室内へ運んで來るやうに、お前の眷屬に命令して見るがいゝよ お前には人間の眼に見えぬ眷屬が附いて居て、いつでもお前の用を足すのだ。」―― ハッサン・カンは云はれるまゝに家へ歸つて、自分の部屋の戸を閉ぢて、口の内で眷屬に命令を云ひ渡すと、その言葉がま

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ終るか終らぬうち、彼は不思議にも、例の石ころが忽然と自分の足もとに橫はつて居るのを發見して、云ひ知れぬ恐怖と驚愕とに打たれたと云ふ。

以上の話でも分るやうに、彼の魔法は主として彼の影身に添うて居る或るスピリット、即ちデジン（djinn）と稱する魔神の眷屬が媒介となるのであつた。而も此のデジンは、必ずしも彼に對して常に柔順な家來ではなく、どうかすると其の命令に腹を立てたりするらしかつた。現に、オーマン氏の知つて居る四五人の歐羅巴人が、或る時彼と共に食卓を圍みながら、此の場へ直ちに一壜のシャンパンを出して見ろと云ふ注文を、冷やかし半分に提出した事があつた。彼は冷やかされたのが癪に觸つたのか、ひどく昂奮した調子で、何やらぶつぶつとしやべつて居たが、やがて憤然と席を離れてヱランダに立ち、虛空に向つて聲を荒らげつゝ二たび三たび命令を傳へた。すると三度目の言葉が終るや否や、空中からシャンパンの壜がつぶての如く飛んで來て、鋭い勢でハッサン・カンの胸に中り、床に落ちて粉微塵に碎けてしまつた。

「どうです、此れで私の魔法の力が分つたでせう。しかし私はあまり性急に云ひつけたので、デジンを怒らせてしまつたのです。」

と、彼はその折一座を顧みて、息を彈ませながら云つた。

まだ此の外にも、オーマン氏は彼に關する奇怪な逸話を紹介して居るが、予は今こゝで、其れを讀者に取り次がうとするのではない。予が此の小說の中で、特に諸君に語りたいと思ふのは、近ごろハッサン・カンの衣鉢を傳へた印度人が、わが日本へやつて來て、而も東京に住んで居ること、並びに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の印度人と懇意になつて、親しく幻術を實驗したことである。それを諸君に話す前に豫め諸君の好奇心を唆つて置く必要から、予はたゞちよいと、オーマン氏の著書を引用したに過ぎないのである。

予が初めてあの印度人に會つたのは、たしか今年の二月の末か三月の上旬であつたらう。ちやうど中央公論の四月の定期增刊號へ、玄奘三藏の物語を寄稿する事になつて、そろそろ執筆しかけて居る時分であつた。或る日の朝、予はあの物語を書く爲めに、アレキサンダア、カニンハム氏の印度古代地理とヰンセント・スミス氏の「玄奘の旅行日誌」(The itineracy of Yuan Chwang)とを調べたくなつて、上野の圖書館の特別閱覽室へ出かけて行つた。その折、予は予の隣に席を占めて、英語の政治經濟の書籍を傍に堆く積み上げたまゝ、熱心に讀書して居る一人の黑人を見たのである。勿論當時の予は彼に就いて格別の注意を拂はなかつたが、たま〳〵予の繙いて居る物が印度に關する書冊であつた爲めに、彼の方では多少の好奇心を起したらしく、予の風采や擧動などを、頻りにちらちらと窃み視るやうな樣子であつた。予はそれから暫く圖書館に通つて、每日朝の十時頃から午後の二時頃まで、相變らず印度古代の地理や風俗を調べて居ると、例の印度人も必ず近くの椅子に陣取つて、時々何か話しかけたさうに、おづつと予の方を見詰めて居るらしかつた。年配は三十五六かと思はれる、小太りに太つた、やゝ背の低い體格の男であつた。豐かな漆黑の髮の毛を綺麗に分けて、いつも紺羅紗の背廣服を着て、一日は暗綠色のネクタイにラツキー、ピーンのピンを飾り、他の日には黃橙色の羽二重のネクタイにブラツクストーンのピンを刺して居た。兎に角、その服裝は餘り上品な感じを與へなかつたにも拘らず、そのでつぷりした圓顏の中にある、冴えた大きな瞳と、濃い長い眉毛と、厚い唇の上に伸びて居る入字髯と、それか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら小鼻の兩側に刻まれた深い皺とは、ラジプトのプリンスが所藏して居ると云ふ中世印度の肖像畫の、タメルランの容貌に髣髴とした趣があつて、一種の威厳と柔和とを含んで居るやうに思はれないでもなかつた。

予は二日目あたりから、いつか此の印度人と懇意になつてしまひさうな、ぼんやりした期待を抱き始めたが、しかし三日目までは別段さう云ふ機會もなくて濟んで居た。ところがちやうど其の日の朝のことである。特別閲覧室に隣接して居る目錄室の、欧文のカード、キャタローグの"In……"の部の抽き出しを明けて、予が専ら"Indian mythology"の參考書を漁つて居ると、例の黒人は其處から少し隔つた"R……"の部の抽き出しを開いて、何か書物を捜し求めて居るらしかつた。予は其の時咄嗟の間に彼が"R……"の中で調べて居るのは、"Revolution"の項ではなからうかと思つたりした。——さう思つたのは、多分彼が印度人であつて、此の間から重に政治經濟の書を讀んで居た事を、うすうす知つて居たせゐであらう。——するとやがて、彼は"R……"の抽き出しを閉ぢて"P……"を開いた。予は又其の時も"Politics"若しくは"Political economy"の文字を聯想させられた。彼は幾冊かの書物の名を、鉛筆で紙片へ書き留めながら、間もなく更に"P……"を閉ぢて"K……"に移り、アルファベットの順に並んで居る目錄の抽き出しを、次第に逆に遡つて、だんだん"I……"の方へ近づいて來るのであつた。さうしてしまひに予と擦れ擦れになつて、現在予が手をかけて居る筐の中の、而も同じく"Ind……"の部分を覗き込むやうにしながら、極めて突然、

「私も此のケースの中に見たい物があるのですが、あなたは何をお調べになりますか。」

と云ふやうな言葉を、もう少し拙い日本語で、可なり落ち着いた態度で話しかけた。

「私は此の Indian mythology の所を調べて居ますが、大分手間がとれますから何卒お先へ御覧なさい。」

予はかう答へて目錄から首を擡げた際に、眼の前に立つて居る印度人の、鼻端の兩側の窪んだ所が、さながら煤が溜つたやうに眞黑であるのを見つけ出して、頗る奇異に感じた事を覺えて居る。

「あゝさうですか。私は Industry のところをちよいと見せて貰へばいゝのです。直きに濟みますからちよいと私に借して下さい。」

彼は「ちよいと」と云ふ度每に、にこにこしながら輕く頭を下げて、其の抽き出しを讓り受けた。

こんな出來事が緣になつて、それから一日二日の間に、二人はとうたう懇意になつてしまつたのである。予は最初彼が印度人である事に興味を感じて、一時の好奇心から附き合つて居るに過ぎなかつたが、だんだん話をして見ると、思ひの外に多方面な趣味と知識とを備へて居るらしかつた。殊に驚いたのは宗教や美術に關する造詣の深い事で、予が印度古代の建築や風俗を知る爲めに、適當な參考資料はないかと云ふと、彼は言下にデギス、カニンハム、フウシエエなどの著書の名を五つ六つすらすらと擧げて、予を少からず煙に卷いた。何でも生れはパンヂヤブのアムリツアルで、婆羅門敎を奉ずる商人の息子であるが、四五年前に、高等工業學校へ入學する目的で日本へやつて來たのだと云つた。

「しかしあなたは、先日政治經濟の本を頻りに讀んで居ましたね。」

予が斯う云つて不審がると、彼は言葉を曖昧にして、

「なあに別段、政治經濟と限つた事はありません。私は何でも手あたり次第にいろいろの物を讀むので

す。――實は工業學校の方を去年卒業してしまつたのですが、印度へ歸つても面白い事もありませんから、斯うしてぶらぶら遊んで居ます。一つ日本の文學でも研究して見ませうかね。」

などゝ、いかにも隣人らしい口吻を弄する樣子が、何處となく普通の留學生と違つて居て、事に依つたら「印度の獨立」を念頭に置く憂國の志士ではあるまいかと、思はれるやうな節もあつた。

もう一つ、彼に就いて意外に感じたのは、互ひに名乘り合ふ以前から、彼が豫め予の名や職業を心得て居た事である。

「あゝ、さうですか、あなたが谷崎さんですか。私はあなたの小說を讀んだ事があります。」

と、彼は云つた。聞けば宮森麻太郎氏のリプレゼンタティヴ、テエルス、オブ、ジャパンを繙いた時卷頭に載つて居た英譯の「刺靑」を非常に面白く讀んだので、それ以來「タニザキ」と云ふ名を覺えて居たのださうである。

「――それで分りました。あなたは今度、何か印度の物語を書かうとして居るのでせう。此の間から印度の事を大分精しく調べて居るから、私は妙だと思つて居ました。失禮ですが、あなたは印度へ入らしつた事があるのですか。」

予が「いゝえ」と答へると、彼は眼を圓くして、詰るやうな句調で云つた。

「なぜ行かないのです？ 此の頃は宗教家や畫家が盛んに日本から出かけて行くのに、あなたはどうして行かないのです。印度を見ないで印度の物語を書く？ 少し大膽過ぎますね。」

予は彼に攻撃されて、耳の附け根まで眞赤にしながら、慌てゝ苦しい辯解をした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私が印度の物語を書くのは、印度へ行かれない爲めなんです。かう云ふとあなたに笑はれるかも知れないが、實は印度に憧れて居ながら、いまだに漫遊の機會がないので、せめて空想の力を使つて、印度と云ふ國を描いて見たくなつたのです。あなたの國では二十世紀の今日でも、依然として奇蹟が行はれたり、ヱダの神々が暴威を振つたりして居ると云ふぢやありませんか。さう云ふ怪しい熱帶國の、豐饒な色彩に包まれた自然の光景や人間の生活が、私には戀ひしくて戀ひしくて溜らなくなつたのです。それで私は、あの有名な玄弉三藏を主人公にして、千年以前の時代を借りて、印度の不思議を幾分なりとも描いて見ようと思つたのです。」

「成る程、玄弉三藏はいゝ思ひ附きですね。いかにもあなたが云ふやうに、印度の不思議は二十世紀の今日でも、玄弉三藏が歩いた時代と餘り違つては居ないでせう。私の生れたパンヂヤブの地方へ行けば科學の力で道破することの出來ないやうな神秘な出來事が、未だに殆んど毎日のやうに起つて居ます。……」

二人がこんな話をしたのは、天氣の好い或る日の午後、晝飯を濟ませて圖書館の裏庭を散歩して居る折であつた。前にも云つたやうに、それ程日本語の巧みでない彼は、少し込み入つて來ると知らず識らず英語を交へて、マホガニイのパイプを握つた右の手頸を上げ下げしつゝ、靜かな、しかし力のある語氣で云つた。

予の好奇心は其の時いよいよ盛んになつた。恰も玄弉三藏の物語を書かうとして居る際に、此の印度人と相知るやうになつたのは、願うてもない仕合はせである。彼の故郷のパンヂャブ地方に、現在行は

れつゝある不思議と云ふのは如何なる事か、予は直ちに質問を試みないでは居られなかつた。

「神秘な事件と云ふと、たとへばどんな事でせうか。參考のために伺ひたいと思ひますが……」

予はかう云ひかけて、ふと、彼の顏色を窺つたが、まだ何か知ら云ひたい事があつたにも拘らず、それきり次ぎの言葉を出さずに、默つて凝視を續けるべく餘儀なくされた。なぜかと云ふと、今まで機嫌よくしやべつて居た彼の相貌が、予の質問を發する瞬間に恐ろしく變つてしまつた事を發見したからである。彼は火の消えかゝつたパイプを口に咬へたまゝ、南向きの、日あたりのいゝ樹木の幹に凭れて、兩腕を固く組んで俯向きながら、上眼づかひにぢつと一方を眺めて居る。――その眼はいつの間にか、眉毛の下の、深く窪んで居た眼窩の中に這入り切らぬほど、大きく一杯に押し擴がつて、黑眼と白眼との境界がくつきりと分るやうに冴え返つて居た。其の眼は、陰翳と云ふもの丶微塵もない、西洋料理に使ふ磁器の皿のやうな地色と硬さとを持つ眼であつた。眞白な西洋紙のまん中へ濃い圓い斑點を打つたやうな、全く潤ほひのない、鋭い光と云ふよりも底氣味の惡い明るさを持つ眼であつた。さうして何處か遙かな所で聞える物音に注意を凝らすが如くであつた。また額には、上眼を使つて居る爲めに、太いだぶだぶした皺が重疊として起伏して居た。予は其の皺の夥しい數と逞ましい波狀とに就いても、普通の人の額に刻まれるものとは非常に違つて居る事を看取せずには居られなかつた。要するに全體の表情が沈鬱、恍惚、悔恨、などの孰れをも含んで居るやうな、孰れとも異なつて居るやうな、一見して甚だ奇異の感じを抱かせるものであつた。

彼の怪しい瞳は、予が呆然として彼の姿を睨み詰めて居る間、遂に一遍も予の方へ注がれなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

予はそれでも、あまり長く沈默するのを不自然であると悟つたので、暫くしてから、

「ねえ、どうでせう、その話を私に聞かせてくれませんか。」

と、遠慮深く尋ねて見た。

すると、遠くを眺めて居た彼の瞳は、やがてくるりと眼窩の中で一廻轉して、予の方へ向けられたが、其れは予の顔に注意すると云ふよりも、以前の物音が、予の顔の中に聞えるのであるらしかつた。而も依然として上眼を使つて居て、例の額の皺の數は、洗ひ出しの木目の如く、微動だもする樣子がない。

「…ねえ、どうでせう。その話を……」

重ねて斯う云ひながら、予は口元に作り笑ひを浮べて、彼の鼻先へ乘り出して行つた。けれども彼は相變らず默々として、たゞ飽く迄も視線を予の方に注いで居る。さうするうちに、彼の眼球はますます大いさと明るさとを増して來て、予の胸の奧の、何かひやりとしたものに觸れたやうであつた。予は何等の理由も豫感もなしに、突然かすかな身ぶるひが襲つて來るのを覺えた。

とうたう其の日は、それきり彼と話をする機會がなかつた。予が裏庭から閲覽室へ戻ると、程なく彼も這入つて來たが、始終濟まし込んで、無愛憎な面つきをして居た。どう云ふ譯で、彼の態度はこんなに急變したのであらう。予は彼に視詰められた時、何故戰慄を感じたのであらう。――かう云ふ疑問は當然予の心を囚へたけれど、しかし其れ程いつ迄も予を惱ましはしなかつた。恐らく彼は、世間によくある氣むづかしやの人間で、一日の内に二度も三度も機嫌の變る性分なのに違ひない。彼の瞳が予を怯えさせたのは、此の頃神經衰弱に罹つて居る予の感覺が、たまたま珍しい人種の眼の色に接した爲めに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あり得べからざる幻影を見たに違ひない。予はさう云ふ風に簡單に解釋した。

然るに、彼の不機嫌は思ひの外長く續いて、その後毎朝閲覽室で出遇つても、まるきり予の顏を忘れてしまつたやうに、一言の挨拶をもしなかつた。今日は機嫌が直るだらう、明日はきつと直るだらう。——予は圖書館を往復する道すがら、さう云ふ期待を抱かずには居られなかつたが、一日立ち、二日立つうちに、だんだん望みが絶えて行つて、結局此のまゝ交際が斷たれてしまひさうな、覺つかない心地もした。運よく彼と懇意になつたのに、雜誌の締切りが近づいて來る結果、折角の話を聞く暇もなく、稿を起さなければならない事が、予には此の上なく口惜しかつた。正直を云ふと、予はもう大略參考書を調べ終つて、圖書館の必要もなくなつて居ながら、何とかして彼の話を聞きたさに上野へ通つて居るのであつた。さうして、ちやうど四日目の朝になつた時、予は是非とも今日のうちに話を聞くか、或ひはあきらめて筆を執るか、孰れかに極めてしまはうと思つた。

その日は、長らく吹き續いた北風が止んで、今年になつて初めての春らしい陽氣であつた。小石川の予の家からは、電車の便が惡いので、俥で往くことにして居た予は、團子坂を走らせながら、遙かに上野の森を望むと、其處にはもう、霞が棚引いて居るのかとさへ訝しまれる程の、うらゝかな青空が、暖かさうに晴れ渡つて居た。櫻木町邊の、新築の家が並んで居る一廓には、ところ〲の邸の塀越しに蕾を破つた梅の花が眞珠のやうに日に映えて居た。予は何となしに、毎年季節の變り目に感ずるやうな生き生きとした喜びが、疲れた腦髓に泌み込んで行くのを覺えた。

その喜びは、圖書館の前に俥を乘り捨てた後迄も、猶暫く續いて居るらしかつた。予は威勢よく階段

を馳せ上つて、閲覧室へ這入つて行くと、先づ何よりも大きな洋館の窓の外の、紺碧の色に心を惹かれて、一番壁に近い方の空席を占領した。さうして、外から忍び込む爽やかな氣流を深く深く吸ひながら、ぢつと大空を仰いで居ると、白い柔かい雲の塊が、巍然として聳え立つ圖書館の三階の屋根の上を、緩く絶間なく超えて行くのであつた。予の眼は本を讀む事を忘れて、長い間其れをうつとりと眺めて居た、しまひには雲が動かないで、圖書館の屋根の方が蒼穹を渡つて行くやうに見えた。

例の印度人は、大分離れた場所に席を取つて、予の方へ背中を向けて、英字新聞の綴ぢ込みらしいものを餘念もなく筆記して居たが、やがて、煙草でも飲みたくなつたのであらう、ふいと立ち上つて室の外へ姿を消したきり、容易に戻つて來なかつた。

「――さうだ、きつと裏庭を散歩して居るに相違ない。彼を摑まへるのは今のうちだ。」

かう氣がつくと、予は急いで裏庭へ降りて行つた。

上野の圖書館へ通つたことのある人は、多分知つて居るだらう。その裏庭は音樂學校に隣接して居て、境界の所にさゝやかな土手が築かれて居る。予は、とある植ゑ込みの蔭に身を寄せて、忍びやかにあたりを見廻すと、今しも印度人が土手の下に蹲踞りつゝ、マホガニイのパイプから、鮮やかな煙を吐いて居るのを認めたのである。煙は、まるで粘つこい飴のやうに、しつとりと凝り固まつて、眞赤な彼の唇を絹絲の如く流れ落ちて、靜かな朝の、澄み切つた大氣の中に浮かんで行つた。彼の顔色は此の四五日來の曇りが取れて、繪に畫いた達磨のやうに圓々と穏和であつた。ちやうど其の折、音樂學校の教室の方から、慵げに響いて來る甘い柔かい唱歌の音につり込まれながら、半ば無意識に爪先で足拍子を蹈ん

で居るのが、機嫌のよい證據であるやうに感ぜられた。予はつかつかと彼の傍に姿を現はして、わざと平然たる態度を裝ひ、

「お早う。」

と、快活な調子で云つた。

彼は素直に項を擡げて、しげしげと予の額のあたりを注視して居るやうであつたが、晴れやかな眉の間には、見る見るうちに疑り深い表情が色濃く湛へられた。その眼つきの激しい變りかたは、日向ぼつこをして居る猫が、物に驚いた時の様子によく似て居た。予は心中に「しまつた」と思ひながら、强ひて馴れ馴れしい眸をして、猶も何事をか云はうとすると、恰も其れを制するが如く、俄かに彼はぷうッと面を膨らせて徐ろに首を左右に振つた。

何と云ふ妙な男だらう。何か予に對して感情を害して居るのか知らん。――予はいろいろに考へて見たけれど、別段そんな覺えはなかつた。寧ろ印度と云ふ國の不思議さが、此の男に乘り移つて居るやうな心地がした。予は漠然と、彼の持つて居る奇怪な性癖が、一般の印度人に共通なものであつて、而もわれわれ日本人には到底理解することの出來ない、心理作用であるかのやうに想像した。

兎にも角にも、その時まで僅かに望みを囑して居た予の計劃は、全然畫餅に歸したのである。もう此の上は斷念して、明日から早速執筆するより仕方がなかつた。折角圖書館へ來たついでに、參考の足しになりさうな書籍を二三冊繙いた後、戸外へ出たのは日暮れ方の五時過ぎであつたらう。地上の夕闇が刻一刻に、舞臺の電氣仕掛けのやうに濃くなつて、見て居るうちに夜に變らうとする刻限であつた。山下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から電車に乘る積りで、公園の森の中をさまようて行つた予は、周圍が暗くなるのではなくて、自分の視力が衰へつゝあるやうな心細さに襲はれた。遠くきらきらと瞬いて居る動物園のアーク燈の光を視詰めて居ると、鬱蒼とした園内の樹木の陰から、丹頂の鋭い啼き聲が一二遍聞えて、さながら空谷に谺するやうに、反響を全山に傳へて行く。予は駱駝のモオニングに厚い羅紗の外套を纏うて居たが、晝間の温度に引き換へて、冷え冷えとした氣流の襟もとに沁み入るのを覺えた。今朝家を出る時に、「晩の御飯には大根のほろふきを拵へませう。」と云つた妻の言葉が想ひ出されると、急に疲勞と空腹とを感じて、予の足取りは自ら遠くなつた。

ふと、自分が今歩いて居る路は、上野の公園ではなくて、何處か人里を離れた、深山の奥ではあるまいかと云ふやうな、取り止めのない考へが朦朧と予の念頭に浮かんだ。現在自分の身邊を包んで居る闇黒と寂寥と、亭々たる無數の大木とは、予に此のやうな空想を起させるのに充分であつた。予は暗闇を辿つて居るうちに、自分の服裝や容貌までが、全然別箇の人間に變つて居るやうな氣分になつた。自分が今朝、俥に乘つて出て來た小石川の家や、つい先まで本を讀んで居た圖書館や、さう云ふ物の在る世界は、此處から非常に隔つた、遠い彼世の幻であつて、其處へ行けば以前の自分が今頃大根のほろふきを喰べて居るのではなからうか。或ひは又、人間の肉體から魂の拔け出す事があるとしたら、今の自分は魂だけになつて居るのではあるまいか。それとも自分は、現在夢を見て居るのだらうか。——予は念の爲めに、今來た路をもう一遍引返して、圖書館の前まで戻つて見ようか知らんと思つた。いくら戻つても戻つても、圖書館などはある筈がないやうな心地がした。今から僅か十分か十五分の後に、賑かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論　5580

灯の街へ出て、電車に乘つて、多數の人間と肩を擦り合ひながら、小石川の家へ歸る事が出來るとすれば、其れこそ却つて夢に違ひない。……

その時、予の後ろから、妙にもぐもぐと口籠つた、曖昧な聲で、予の名を呼びかける者があつた。予の

「谷崎さん、……」

妄想は突然破れた。

「谷崎さん、……あなたは今お歸りですか。」

予は殊更に路のない林の中を縫つて居たのに、相手は斯かる暗闇で、いかにして予を認めることが出來たのか、其れが第一に不思議であつた。予は簡單に「えゝ」と答へたまゝ、物に襲はれたやうになつて、急ぎ足で東照宮の鳥居の傍の、アーク燈の明るみの方へ出て行つた。

振り返つて見ると、相手は彼の印度人であつた。茶の中折を眼深に被つて、寒さうに外套の襟を立て、いつの間にか予と殆んど肩を並べて居る。予が彼の聲を判じ得られなかつたのは、彼の唇に黑びろうどの襟卷が纏はつて居る爲めに、發音がはつきりしなかつたせゐであらう。

暫くの間、二人は默つて瓜先を視詰めながら歩いて居た。ちやうど精養軒の前から、淸水堂の下あたりまで行く内に、彼は一遍ごほんと咳をしただけであつた。予は勿論、度び度び失敗を重ねて居るので、充分に相手の意圖をたしかめずには、横眼で見る氣にもなれなかつた。

「タニザキさん、私は大變失禮しました。……」

彼が斯う云つたのは、もう公園の出口へ近づいた時分である。語り出すと同時に、彼は俄かに活氣づ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いて、携へて居たステッキを振り上げて、頭の上の櫻の枝を拂つたりした。

「私は以前、どうかすると、不意に氣分が憂鬱になつて、人と話をするのが嫌になる事がありました。その憂鬱は三日も四日も、或る時は一と月も續きました。しかし先年日本へ來てから、さつぱり其れがなくなつて居たのに、此の四五日來、久し振りで發作がやつて來たのです。私は非常に失禮しました。あなたが私に話があるのを知つて居ながら、私は全くどうする事も出來ませんでした。」

「あゝさうでしたか、其れならほんたうに安心しました。私は又、あなたが何か私に對して、感情を害して居られるのかと思つて、此の間から心配して居たのです。」

予は欣然として答へたのであつた。實際、その日は甚しく落膽して、到底明日から創作に從事する氣力がなく、いつも執筆の間際になつて感ずるやうな、精神の緊張が失はれて居たのであつた。予は廣小路の時計臺を眺めながら、

「どうです、今ちやうど六時ですが、少し其の邊を散歩して、一緒に晩飯をたべてくれませんか。お察しの通り、私は至急に、あなたにいろいろ伺ひたい事があるのです。」

から云ふと、彼は早口に「よろしい、よろしい。」と、愉快さうな聲で應じた。

その晩、「玄弉三藏」を書き上げるのに必要な事項を、予が一と通り聽き取つた場所は、池の端の「いづ榮」の二階であつた。最初は何處かの洋食屋へ行く積りであつたが、入れ込みの座敷では萬事に都合

中央公論 5580

が惡いので、此處の一室を擇んだのである。印度人とは云ひながら、彼は頗る精密に、祖國に關する諸方面の事情を知悉して居た。予は豫め、質問の要領を手帳に列記して置いて、歷史、宗敎、地理、植物等の、廣汎な範圍に涉つて、片端から尋ねて行くと、彼は立ち所に逐一說明を與へてくれた。やがて話題は所謂「現代印度の奇蹟」に移つて、彼が親しく目擊したと云ふ、パンヂャブ地方の預言者や仙人の、不思議な妖術や物凄い苦行の實例が、滔々として彼の唇から縷述された。凡そ二時間ばかりと云ふもの、予は殆んど息をもつかずに、無限の感興に浸りながら耳を欹てた。

「……一體、印度人の信仰からと云ふと、Asceticism と云ふこと、つまり難行苦行の法は、人間が神に合體する爲めに、是非とも必要なものなんです。我れ我れの持つて居る『惡』は、凡て我れ我れの物質的要素、――即ち此の肉體から來るのですから、能ふ限り肉體を苦しめる事に依つて、われわれの靈魂は段々宇宙の絕對的實在と一致します。此れを佛敎の言葉で云へば、起信論に所謂淨法熏習と云ふ事です。われわれの肉體を苦しめる度が、より强ければ强いだけ、それだけ高く靈魂は神の領域に上つて行きます。そこで今度は、斯う云ふ事が云はれるやうになりました。――今迄肉體の牢獄に繫がれて居た魂が、次第に宇宙の精靈に熏習するに從つて、遂には反對に、物質の世界を支配するやうになる。自分の肉體は勿論のこと、其れを包んで居るあらゆる現象の上に、絕對無限の自在力を持つやうになる。結局どんな云人間でも、難行に服しさへすれば、此の世の中の事は、必らず自分の思ふがまゝになると云ふのです。」

彼はしやべつて居るうちに、盛んに日本酒の杯を擧げた。さうして、いつの間にか予の質問を其方(そつち)除

けに、まるで演說のやうな句調で、止めどもなく雄辯になつた。

「……だから玆に或る人間があつて、何か一つの神通力を得たいと思へば、難行の功德で其の目的を達する事が出來るのです。あなたは多分、マハバアラタの中にある二人の兄弟の話を覺えて居るでせう。彼等は三世(スリーワールド)を支配しようと云ふ祈願を立てゝ、さまざまの難行に服しました。たとへば頭の頂邊(てつぺん)から足の先まで、體中に泥土を塗つて、木の皮の衣(ころも)を着て、人跡稀なるヸンディヤの山巓に閉ぢ籠つたり、爪先で立つたきり數年間も眼瞬きをせずに眼を開いて居たり、斷食斷水を行つたり、それでも目的が遂げられないので、最後には自分の體の肉を割いて、火に投じたりしたのでした。その時ヸンディヤの山は燃ゆるが如き兄弟の信仰の爲めに熱を發し、天地の神々は兄弟の宿願の大規模なのに恐怖を感じて、能ふ限りの迫害を加へました。しかし彼等は終に此れ等の困苦に打ち克つて、梵天(ブラアマ)から望み通りの權力を授けられたのです。以上の神話でも分るやうに、難行の目的は必ずしも罪障消滅にあるのではなく、寧ろ此の世で擅なる暴威を振ひ、若しくは敵を征服したいと云ふやうな、反道德的の動機のものが多いのです。畢竟、不屈不撓の意志を以て、飽くまで苦行を續けさへすれば、その人間はどんなに偉大な宿願をも成就する事が出來るのですから、一と度びさう云ふ行者が現はれると、外の者は、人間でも神樣でも大恐慌を來たします。その證據には昔ウッタナパダ王の王子で、僅か五歲の少年が大願を發した爲めに、世界中の神々が大騷ぎをしたと云ふ傳說があります。少年は繼母の妃に虐待されて、國王の位を繼ぐことが出來ない代りに、宇宙第一の權力を得ようとして、天人、夜叉、阿修羅などの妨害を物ともせず、執拗に難行を繼續しました。すると神々は驚き惶てゝヰシュヌの大神の救ひを求め、漸く大神の調

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

侍に依つて、少年の希望に制限を加へたのです。そこで、少年の魂は天に昇つて北極星となりました。斯くの如く、人間の難行苦行は神々の脅威となるばかりでなく、神々自身も亦難行を必要とする場合があつて、かの造物主の梵天さへ、行を修めなければならないのです。……」

だんだん酔ひが循るにつれて、彼の大きな冴えた瞳は、ねつとりと油を滴らしたやうに潤ほつて居た。彼は非常に物をよく喰ふ男であつた。器用な手つきで箸を使ひながら、二人前の中串の鰻を見る見るうちに平げてしまつたが、片手は絶えず杯に觸れて居た。さうして、たま〳〵話に身が入つて來ると、忽ち箸と杯とを捨てゝ、あぐらを掻いて居る兩足の親指の先を、兩手で頻りにぐいぐいと引張るやうな癖があつた。

「いや、有り難う。此れだけ話を伺へば、私は大きに助かります。どうぞ今夜はゆつくりと飲んで下さい。」

予はノート、ブックを閉ぢて、料理と酒とを更に追加しなければならなかつた。

「私はカバヤキが大好きなのです。それに酒なら日本酒でも西洋酒でも、何でも構はず飲むのです。――印度人は愛國心がない代りに、コスモポリタンですからな。」

こんな皮肉らしい冗談を云つて、大聲で笑ひ出した時分には、彼はもう泥醉に近くなつて居た。予はその眞黒な、觸ると埃が手に着きさうな襟頸の邊が、火照つて光つて居るのを見た。

「タニザキさん、私は今夜は非常に愉快です。日本へ來てから今日まで一人も友達がなく、始終孤獨で暮らして居たのに、あなたのやうな有名な小說家と、親密になる事が出來たのは此の上もない光榮で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

す。ねえ、タニザキさん、どうぞ私の酒を飮むのを許して下さい。私は元來酒飮みで、毎晩ヰスキーをやるのですが、今夜のやうに醉つ拂つたことはめつたにありません。あなたは多少迷惑かも知れませんが、多分勘忍してくれるでせう。」

予はたしかに迷惑であつた。此の印度人と懇意になる事を願つては居たもの丶、今夜は成るべく、一二時間で用談を濟ませて、感興の消えやらぬ間に、一枚でも半枚でも稿を起して見たかつたのである。然るに彼は予にいつ迄でも相手をさせて、一と晩中しやべり續けさうな氣勢であつた。しまひには膳を押し除けて、その髯面(ひげづら)を殆んど頰擦りせんばかりに近寄せながら、予の右の手をしつかりと捕へた。

「……ねえ、タニザキさん、私は今夜あなたと友達になつた證據に、自分の身の上を話さうと思ふのです。私は此の間、商人の息子だと云ひましたが、あれは全く嘘なんです。實は商人の息子でもなく、婆羅門敎の信者でもありません。私は今はフリー、シンカアです。さうして私の父と云ふのは、パンヂヤブの國王、デユリーブ・シングの家臣でした。――かう云たらばあなたは恐らく、私がどんな人間だかお分りになつたでせう。

彼は予の手頸をぐいと引張つて、何か謎をかけるやうな眼つきで、暫く予の瞳を見据えて居た。予はデユリーブ・シングの名を聞くと同時に、果して彼が曲者(くせもの)である事を、――革命黨の志士である事を推量せずには居られなかつた。なぜかと云ふと、デユリーブ・シングと云ふのは、千八百四十九年に、パンヂヤブが英國に併呑された時の國王であつて、彼はその後、英國に對して一と度び叛旗を飜した事を、つい此の間參考書の中で讀んで居たからである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「分りました。私は初めから、あなたがさう云ふ人間ではないかと、想像して居たのです。やつぱり私の考へて居た通りでした。」

「ふん、あなたはえらい、あなたはさすがに小說家だ。」

彼は斯う云つて輕く予の肩を叩きながら、詳細に自分の閱歷を語り出した。その話に依ると、彼の父親はデュリープ王に寵愛された侍從であつて、祖國が併合の厄難に會つた時、王に隨行して歐羅巴に渡り、長らく英國に逗まつて居た。その頃國王はまだ頑是ない少年であつて、父も漸く二十を越した靑年に過ぎなかつた。二人は彼の地で泰西の教育を受け、基督教の信徒となつたが、數年の後、全くイギリス風の紳士と化して、父は再び印度に歸つて來たのである。さうして、二度目の妻を娶つて、カルカッタに住んで居た間に、生れたのが彼であつた。

「……歐羅巴の文明の空氣を吸つて來た父の思想は、その時分からだんだんオリエンタリズムに復歸し始めたやうでした。私は早くから父に英語を習つて居ましたが、やがて英語よりもサンスクリットが必要だと云ひ出して、ヹダの經文を覺えさせられました。子供のことで、ハッキリした事情は分りませんでしたが、父は何でも晚年に及んで、不平と煩悶と野心との爲めに、始終いらいらした、面白くない餘生を送つて居たやうです。彼は英國人の政治のしかたを、いや、寧ろ一般に西洋の科學的文明と云ふものを、恐ろしく咀つて居ました。その結果一旦歸依した基督教の信仰を捨てゝ、婆羅門教に改宗したくらゐでした。」

彼は更に言葉をついで、最後に父が國王の叛亂に加擔した折の、幼い記憶を予に語つた。さうして、

祖國の獨立に關する意圖と劃策とは、自分が父から受け繼いだ唯一の遺産であると云つた。

「……たとへ失敗に終つたとは云へ、私は父の事業に對して、滿腔の同情を持つて居ますが、たゞあの時分の、父の思想の傾向に就いては、多少間違つて居る所があつたゞらうと思ふんです。私は父が餘り極端な西洋嫌ひになつたのが、惡かつたのだと思ひます。つまり、歐羅巴の物質的文明を輕蔑し過ぎた事、就中科學の價値を否定した事、此れはたしかに父の大きな誤りでした。今日印度の大陸が英國人に蹂躙せられて、容易に獨立の機運を作り得ないのは、みんな我れ我れの同胞が私の父と同樣に、科學的文明の力を覺らない結果なのです。東洋流の虛無思想に惑溺して、物質の世界を閑却して居る結果なのです。……」

彼の話題は、漸く彼の最も興味を有するらしい方面に落ちて行つた。予は眼前に、酒を呷つて國事の非なるを慨嘆する燕趙悲歌の士を見たのである。彼は口を極めて祖國の人民の無氣力を罵倒し、迷信を呪咀し、社會制度を批難した。印度に立派な宗教や、文學や、藝術などが存在したのは、遠い昔の夢であつて、今ではたゞ懶惰なる邪教と妄昧なる妖法との榮えて居る、「あなたの小說の材料にしかならない國土」だと云つたりした。

「私は勿論、精神よりも物質の方が貴いと云ふのではありません。東洋の哲學が、西洋の其れに劣つて居ると云ふのでもありません。しかし、兎に角、祖國が完全に獨立する爲めには、徒らに政權を回復しようと焦るよりも、寧ろ人民の間に科學的智識を鼓吹し、經濟思想の開發を促すのが急務だらうと信ずるのです。さうして、全印度の人民が物質的文明の恩澤を知り、充分に其れを消化し利用するやうにな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたらば、獨立の機運は自然に熟して來る譯で、日本帝國の勃興は其の適例だらうと思ふのです。」

彼は斯う云ふ見地から、一つには又英國官憲の監視を逃れる必要から、成る可く露骨なる政治運動に關係する事を避けて、專ら電氣工業や化學工業に關する學術を研究した。それで日本へやつて來て、高等工業學校の電氣科を卒業したのであるが、實は此れからどうしたものかと、目下の處方針に迷つて居る。最初の計劃では、卒業後直ちに歸國したらば、普く同胞の資本家を糾合して、西洋人の財力や智識を藉らずに、何か殖產興業の株式會社を起さうと云ふ考へであつたけれど、とても自分の力では、今から急にさう云ふ仕事が出來さうもない。結局。もう一二年日本に滯在する事にして、現在では諸方面の工業會社の經營方法を、實地に就いて視察したり見學したりする傍、各國の法律や、歷史や、制度文物を出來得る限り精細に調べて居る。自分は飽く迄も實業を手段とし、獨立運動の傳播の方を本來の目的とする者で、あまり迂遠な道を取りたくないから、將來國へ歸つたら會社を組織する一面に、多數の技師を養成して、彼等に理科學以外の學問――政治經濟の智識をも注入し、隱密の間に愛國心を喚起して、革命の種子を植ゑ付けようと企てゝ居る。

「どうです、私は可なり遠大な計劃を持つて居るでせう。ちやうど日本の賴山陽が「歷史」に依つて尊王討幕のムーヴメントを刺戟したやうに、私は「實業」に依つて獨立の機運を導かうと云ふのです。いくら革命々々と云つて騷いだつて、金がなければ全く手も足も出ませんからね。――どうです、私の考へは間違つては居ないでせう。私は度び度び友達から夢想家だと云つて笑はれますが、そんな事はないでせう。あなたは一體どう思ひますね。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さあ、あなたの事はよく分らないが、一般に印度人は空想の力が豐富に過ぎるやうですね。たとへば經文や叙事詩の中に現れて居る空想は、美しいには美しいけれど、あまり荒唐無稽で、際限もなく雄大で、放埒に流れて居るやうですね。」

予はせめても、問題を宗教や文學の方面へ引き戻さうとして、内々話頭を轉じたのであつた。然るに予の謀略は見事に失敗して、彼の談柄はますます岐路に入り、ます〳〵饒舌に奔放になつた。要するに彼は、夢想家と云はれるのを非道く氣にかけて、自分にだけは印度人の通弊がない事を、極力辯護するのであつた。革命家はアイディアリストであつてはならない。自分は吉田松陰よりも西郷南洲を取り、マッチニよりもカブールを愛し、孫逸仙よりも蔡鍔を尊敬する、などゝ云つた。それからしまひにフィリッピンのアギナルドを散々に貶しつけた。

「いや、お蔭で今夜は非常に面白く過しました。私とあなたとは大分立ち場が違ふけれども、お互ひに東洋の一國に生れた以上は、同情と理解とを持ち合つて、双方の事業を扶け合ふ事が出來ると思ひます。此れから時々、かうして一緒に飯でも喰つて、意見を交換するやうにしようぢやありませんか。」

予は斯う云つて、そろそろ歸り支度をし始めながら、殊更に懷中時計を出して見た。もう十一時近くであつた。

女中が勘定書きを持つて來る間、膳の上には食ふ物も飲む物もなくなつて居るのに、彼はまだ何か知らしやべつて居た。さうして、予が五圓なにがしかの金を支拂ふべく、蟇口の蓋を明けようとすると、彼はいきなり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「勘定は私が拂ひます、私があなたを奢ります。」

と云ふや否や、ズボンのポケットへ手を突込んで、カチンと音をさせながら、膳の上に五圓の金貨を二枚投げ出した。

予が無理やりに金貨を引込めさせて、自分の金を拂ふ迄には、長い間押し問答をしなければならなかつた。すると今度は、「折角私も金を出したのだから、此れで今夜は吉原へ行かう。」と云ひ張つて、又候私を梃擦らせた。驚いた事には、彼は大概一週に一度は吉原へ行くので、角海老の何とか云ふ華魁とは古い馴染であるといつた。

「それにしても、どう云ふ譯であなたは金貨を持つて居るんです。」

「私は金貨が大好きなんです。いつも日本銀行へ行つて、札を金貨に取り換へて貰つて、ざくざくとポケットに入れて歩くのが、何だか馬鹿に好い氣持ちなんです。此れ御覧なさい、此の通りですよ。」

かう云つて、彼は片手の掌に一杯の金貨を載せて予の眼の前で振つて見せた。予には其の額がどれ程あるか、ちよいと想像もつかなかつた。

「ね、こんなにあるから大丈夫です。此れから直ぐ自働車へ乗つて出かけやうぢやありませんか。」

予は明日の仕事を控へても居るし、それに此の頃、遊びの興味を覺えなくなつたので、どうしても附き合ふ氣にはなれなかつた。予は彼を引き立てるやうにして、兎も角も「いづ榮」の門口を出た。

「あなたが行かないのは殘念ですが、そんなら私一人でも行きます。私の家は遠方ですから、此れから歸るのは大變です。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は上野の停車場前の、タキシーの溜りまで予を連れ込んだが、其處でたうとうあきらめたらしく、獨りで自働車に乘つて、角海老へ走らせたやうであつた。

別れる時、念の爲めに住所を尋ねると、彼は車臺の窓から首を出して、「此の頃に是非來てくれろ。」と繰り返しながら、予の掌に一葉の名刺を殘して行つた。「府下荏原郡大森山王〇〇〇番地、印度人　マテラム、キスラ、（Matira Misra）」――名刺に日本字と英字とで、かう刷つてあつた。

予は其の明くる日から圖書館通ひを止めにして、半月ばかり家に籠つて「玄奘三藏」を脱稿した。何分後れて書き始めたので、締め切りの期日に追はれた爲めに、餘り滿足な出來榮えではなかつたが、四月の中央公論に其れが發表せられると、早速大森のミスラ氏へ宛てゝ、雜誌と禮狀とを送つて置いた。いづれ暇を見て、一遍訪ねる積りで居ながら、伊香保へ旅行したり、母の喪に會つたり、いろいろと用事にかまけて忘れて居た。

すると、五月の下旬になつて、或る日ミスラ氏から一封の手紙が着いた。此の頃、予が母の死を時事新報の記事で讀んだと云つて、變な日本文の悔み狀をよこしたのである。予は早速返辭を書いて彼の好意を謝した上に、近々御伺ひしようと思ふが、御都合はどうかと云ふやうな意味を認めてやつた。

それに對する彼の答は、直ちに予の手許に屆いた。「自分は大抵、午後の六時か七時過ぎには在宅して居るから、いつでも遊びに來て貰ひたい。たゞし、運惡く角海老などへ出かけた留守に、御來訪にあづかると恐縮するから、成るべく前に御通知を願ひます。」と云ふのであつた。にも拘らず、予は豫め通知を出さずに、突然思ひ立つて、或日の夕方大森へ出かけて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論 5580

ミスラ氏の家へ着いた時分には、もう表は眞暗になつて居た。それに、ちやうど六月の十日頃の事で、空はいつの間にか入梅らしくどんよりと曇り、濕潤な夜風と共に細かい雨を降らして居た。彼の住居は、院線の鐵路に添うた山の手に立つて居る、小じんまりとした、アメリカン、コッテエヂ風の構へであつた。一體西洋館の邸宅と云ふものは、こんな晩には妙に陰鬱に見えるもので、彼の家も矢張りさう云ふ感じを起させた。門の左右に低いかなめの生垣があつて、さゝやかな庭を隔てゝ、二階建ての木造の母屋が控へて居る。さうして、全體に蔦の葉が若芽のやうに絡まつて居て、往來に面する窓からは一つも明りが洩れて居ない。纔かに門燈のしよんぼりと灯つて居るのが、植ゑ込みの芭蕉の新芽を葉の裏から照らして、その葉が風に搖ぐ度毎に、しとしとと滴り落つる雨垂れが、夜目にも鮮かに光つて居る。予は玄關の呼鈴のボタンを捜すのに大分手間を取つて夥しく雨に濡れた。

出て來たのは年の若い、日本人の下女であつた。刺を通ずると、程なくミスラ氏が自ら現れて、なつかしさうに予の手を強く振りながら、

「さあどうぞお上り下さい。こんなお天氣に、今夜あなたが來てくれようとは全く意外でした。ほんたうに暫く振りでしたね。」

と云つて、玄關の右手の一室へ案内しかけたが、ふと思ひ付いたらしく、

「あなた、應接間よりも私の書齋を見てくれませんか。彼處の方が落ち着いて話が出來ます。」

かう云つて、予を二階へ導いて行つた。

廊下から室內へ招ぜられた時、予が最初に眼に觸れたものは、部屋の中央の、著しく大きなデスクで

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつた。天井に吊るされた電燈の、綠色の絹のシェエドから落ちる光線が、ちやうど眞下にある机の表面をくつきりと照らして、其處だけが幻のやうに明るくなつて居た。主人は今まで、何か製圖のやうな仕事をして居たと見えて、机の上には一杯に圖面が擴げられ、定規だのコムパスだの繪の具だのが散ばつて居た。

「突然お訪ねして、勉强の邪魔になりはしませんかね。お忙しければ今度ゆつくり伺ひますが……」

予が斯う云ふと、

「忙しい事があるもんですか。あんまり暇で退屈だから、ドロウイングをやつて居るんです。ね、あなた、ちよいと此れを見て下さい。」

と、彼はパイプを握つた手で圖面の上を指しながら、

「此れをあなたは何だと思ひます。――此れが其の、私が國へ歸つてから設立しようと云ふ水力電氣の會社の圖面です。此の土地の廣さが大凡そ十エーカーばかりあつて、森林を切り開いた、山の中腹にあるのです。さうして、此處に湖水があつて、此の水で電氣を起さうと云ふのです。……」

その會社の資本が何百萬圓で、何ヲルトの電氣を作るとか、此處には社員が何百人働いて居て、此の部屋では何をするとか、予が仕方なしに聽いて居ると、彼は一々精密なプランに就いて、熱心に說明するのであつた。圖は大型の二枚の紙へ、平面と立體と別々に引いてあつて、丹念に彩色を施され、「パンヤブ州水力電氣株式會社設計圖」と云ふやうな文句が、英文で麗々しく記入されて居た。兎に角見た所は、立派な建築の大會社であるらしかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「……するとあなたの計畫は、いよいよ實現されるのですね。いつ頃印度へお歸りになるのです。」

「なにまだ歸りはしませんよ。此れは皆空想ですよ。あつはゝゝゝ。」

彼はいきなり、ドシンと椅子へ腰を落して大聲に笑ひ出した。

「資本金も湖水も十エーカーの土地も、殘らず私の空想ですよ。私はたゞ紙の上へ、墨と繪の具で大會社を建てゝ見たのです。同じ空想でも、此のくらゐ頭と勢力を使ふと、なか〳〵立派なものが出來ますな。つまり一種の藝術ですな。あッはゝゝゝ。」

予は思はず竦然として、彼の顏色を窺はずには居られなかつた。「事に依つたら此の男は、發狂したのではあるまいか。」――かう云ふ考へが、その瞬間に予の腦中に閃いたのである。

予は内々、彼の素振りや部屋の樣子に眼を配つた。二人はその時、デスクを隔てゝ向ひ合つて居たが、ちやうどミスラ氏の口髯から上は、ラムプの傘の影に隱れて、突きあたりの本箱の邊は暗さが一番濃くなつて居た。室内の廣さは十五疊ぐらゐあつたであらう。書齋としては可なり贅澤で、裝飾や設備なども整つて居るやうに見えた。本箱の左側の壁にガスストーヴが切つてあつて、右側には護謨の樹の植木鉢の向うに、一間の硝子戸が嵌まつて居た。硝子戸の外には、大森の海を遠望するバルコニーがあるらしく、折々其れへ南風がばたばたと打突かつて居た。

下女が紅茶を運んで來た間に、ミスラ氏は製圖の器具を一切片附けて、再び機嫌よく語り始めた。その擧動には別段不審な點はない。以前よりもいくらか話し振りが性急になつて、眼の働きが鋭くなつたかと、感ぜられるだけであつた。黑つぽいセルの背廣を着て、素敵に大きいエメラルドの指輪を嵌め

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、相變らず達磨然たる容貌を持つて居た。

「私は今でも、毎日午前中は上野の圖書館に通つて居ます。近頃は政治經濟にも飽きてしまつたので、此の間ショウペンハウエルとスウェエデンボルグとを讀んで見ました。あゝ云ふ物もたまには面白い氣がしますね。」

話はさう云ふ方面から、だんだん宗教や哲學の領域に這入つて行つた。彼は西洋のメタフィジックと大乘佛教の唯心論とを比較して、東洋人の考へ方は科學的でないけれども、事物の核心を把握する直覺力に至つては、西洋人の及ぶ所でないなどと云つた。

「だから哲學や宗教の極致が、現象の奥に潜んで居る靈的實在を洞觀して、大悟徹底する事にあるのだとすれば、東洋の方が西洋よりも遙かに進んで居るやうです。西洋人の得意とする分析だとか歸納だとか云ふ方法を以て、現象以外の世界を見る事は出來ない譯です。……」

彼は直ぐに例の演說句調を出して、いつぞや「いづ榮」の二階で會つた時のやうに、雄辯になり饒舌になつた。その論旨は必ずしも彼の獨創の見ではなく、隨分此れ迄に云ひ古るされた說であつたが、いかにも舌端に精氣が溢れて、ぱつと見開いた瞳の中に脅かすやうな力があつて、予を飽く迄も傾聽させずには措かなかつた。

「ですがあなたは、此の前ひどく東洋の虛無思想を攻擊して、科學を謳歌して居たぢやありませんか。近頃はオリエンタリズムが好きになつたんですね。」

予はやつとの事で隙を狙つて、此の質問を彼の長廣舌の間に挾んだ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いや、私は先からオリエンタリズムが嫌ひではありません。私は嘗て一遍でも、科學萬能論を唱へた覺えはありません。……」

彼は威丈高になつて、机を叩きながら云つた。

「私が東洋の虛無思想を攻擊したのは、愛國者としての立場からです。私の意見に從へば、物質と靈魂とは徹頭徹尾反對なもので、何處まで行つても一致する筈はないのだから、人間は是非とも二つの內の、孰れか一つを撰ばなければならないのです。從つて一個の民族が、國家としての繁榮を望み、權力を持ちたいと願ふならば、靈魂を捨てゝ物質に就くより外はないでせう。その點に於いて、科學的文明を築き上げた歐羅巴人は物質界の優者です。若しも印度人が、人間の住む此の地上に於いて、歐羅巴人と覇を爭はうとするならば、婆羅門敎や佛敎の哲學は有害にして無益なものです。――さう云ふ譯で、祖國の獨立を生涯の事業にして居る私としては、東洋流の厭世觀を攻擊せずには居られませんが、一旦自分の立ち場を離れれば、印度人の抱いて居る思想や哲學は、古來人間の頭の中で考へられたものの內で、一番幽玄な、一番深遠な、科學の力で突き破ることの出來ない眞理だらうと思ひます。われわれは長らく西洋流の敎育を受けて來た結果、科學的に證明された眞理でなければ、眞理でないやうに考へる癖がありますが、しかし未だに、印度人の說の方が、正しくはないかと思ふ事が屢々あります。われわれは、物質の世界を支配する法則だけを科學に敎はるので、心靈界の祕密を知つて居る者は、たゞ印度人だけなのです。物質と物質との關係は、科學に依つて說明されるかも分りませんが、物質と靈魂との交涉は、印度人でなければ說明する事は出來ません。此の間もあなたにお話ししたやうに、今日印

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度の行者の中には、科學者に解けない謎を解いて、奇蹟を證明する事の出來る人々が、決して少くはないのです。現に、私がまだ五つか六つの子供の時分、カルカッタに住んで居た頃に、度び度び會つた事のあるハッサン・カンと云ふ男などは、實に不思議な術を行ふ坊主でした。……」

此の妖術者の名を聞くと同時に、予は胸を躍らせて、我知らず膝を進めたのであつた。

「あゝそのハッサン・カンの事です！私はとうから其れをあなたに聞かうと思つて居たのです。」

予は手を擧げて、猶もしやべり續けようとするミスラ氏を制した。

「…實は此の前『いづ榮』の時にも、尋ねて見ようと思ひながら、外の話に紛れてしまつたので、今夜は忘れずに居たのでした。私は其の魔法使ひの傳記を、或る本の中で讀んだのですが、もの少し精しい事蹟を知りたかつたのです。それにしても、あなたか彼に會つた事があるのは、ほんたうに意外でした。」

「いや、それよりもあなたがハッサン・カンの名を知つて居る方が意外ですよ。お望みとあればお話ししてもようござんすがね、……」

彼は不意に横を向いて、硝子戸の外の暗闇を眺めた。その時彼の眼は眩しい物を視詰めるやうに細かく瞬いて、小鼻の周圍には得意らしい、或は又狡猾らしい奇態な微笑が浮かんで居た。

「…何分子供の時分の事で、はつきりとは覺えて居ませんが、私の父がハッサン・カンの信者になつた爲めに、彼は折々私の家へやつて來ました。あなたは今、彼の事を魔法使ひだと云ひましたが、決して單純な魔法使ひではないのです。彼は一派の宗教を開いた聖僧なのです。」

「私の讀んだ本の中には、彼を回教の信者としてあつて、時には隨分、魔術を使つて惡事を働いた人物のやうに書いてありますが、其れは間違つて居るんですね。」

「いや、間違ひと云ふ譯でもありません。」

彼の句調は、次第に以前ほど雄辯でなくなつて、遠い記憶を辿りながら、もの靜かに、考へ考へ言葉を足して居るやうであつた。

「ハッサン・カンは若い頃には、回教を信じて居た事があるのです。彼が時々魔法を使つて、惡事を働いたと云ふのも、全然噓ではありませんが、其れはたまたま彼の宗旨を誹謗した者に、懲罰を加へる爲めだつたのです。つまり宗旨を擴める爲めに得意の魔法を利用したので、決して何の理由もなしに、惡事を働きはしませんでした。元來、われわれ印度人の考へて居る魔法――Sorcery と云ふものは、人間が難行を修めて解脱の妙境に達した時に、自然に體得する神通力であつて、基督教徒が惡魔の使ひとして斥けて居る巫術とは、大變に趣が違つて居ます。支那でも孔子は、怪力亂神を語らずなどと云つて居ますが、印度に於ける魔法の地位は此れと全く反對で、アタルヷ、ヱダの經典を見ても分る通り、數千年の昔から、宗教上非常に重大な要素となつて居るのです。われわれの云ふ魔法使ひは、世間普通の奇術師や巫覡（いつこ）の類を指すのではなく、現象の世界を乘り超えて宇宙の神靈と交通し得る、聖僧の事を意味するのです。ハッサン・カンはつまりさう云ふ人だつたのです。殊に彼の宗旨では、魔法は一層重大なもので、その宗教の、殆んど全部であつたと云つてもいゝくらゐでした。彼の教義にしろ、哲學にしろ、宇宙觀にしろ、悉く皆魔法に依つて解決されるのでした。……」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「すると、その魔法と云ふのは、たとへばどんな事をするのでせう。何かあなたが御覽になつた實例に就いて、說明を願ひたいのですが。」

頂點に達した予の好奇心は、予を極端に性急にさせた。動ともすると、抽象的の議論になりたがる彼の談話を、時々正しい方角へ向き直させるのに、予は油斷なく努力しなければならなかつた。

「まあ、待つて下さい。追ひ追ひ實例をお話ししますが、彼の魔法を說明するには、先づどうしても、彼の宗教から說明しないといけないのです。」

ミスラ氏は斯う云つて、悠々と紅茶を飮んで、その茶碗の中へ眼を落したまゝ、暫く何事をか沈思するやうであつた。

相手の一言半句をも逃すまいとして、緊張し切つて居た予の聽覺は、折柄戶外にざあと云ふ響きを立てゝ、土砂降りになり始めた雨の音に心付いた。蒸し暑い、息の詰まるやうな部屋の中はひつそりとして、家の周圍を流れる點滴が、室內の物を濡らしはせぬかと思はれるほど、親しみ深く間近く聞えて居る。遙かに大森の停車場の方で、汽車の汽笛が濛々たる雨聲の底から、奈落へ沈んで行くやうに悲しげに鳴つて居る。

「……精しく云ふと非常に長くなりますが、大體の要領だけを話しませう。彼の宗旨と云つたところで、やはり佛教や印度教の哲學に胚胎して居るのですから、われわれにはさほど珍しい思想ではないのです。」

やがて、ミスラ氏は机の上に一枚のレタア、ペエパアを擴げて、其れに鉛筆で圖を畫きながら言葉を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

續けた。

ハツサン・カンの説に從ふと、宇宙には七つの元素があつて、其れが此の現象世界を形作つて居ると云ふのです。所謂七つの元素とは、第一が燃土質、第二が活力體、第三が星雲的體形、第四が動物的靈魂、第五が地上的睿知、第六が神的靈魂、さうして第七が太一生命とも名づくべきものです。ところが此れ等の七つの元素は、始めから箇々別々に存在して居たものではなく、更に其の上にある涅槃(ニルヴアーナ)に歸してしまひます。つまり世界萬有の根源は涅槃(ニルヴアーナ)であつて、涅槃だけが永遠不滅の、眞の實在だと云ふ事になります。涅槃がどうして七つの元素を生み、生滅流轉(しやうめつるてん)の世界を作るかと云ふのに、其れは佛教や數論派の哲學と同じく、無明の働きに依るものだとしてあります。無明が涅槃を牽制して始めて太一生命を生み、太一生命が又無明に感染して神的靈魂を生み、それからだんだん第五、第四、第三の元素が分派するのです。ですから太一生命は、宇宙の大主觀たる涅槃の海に、無明の影がほんのりとかゝつた狀態なので、まだ認識の主體もなく、對境もない場合を云ふのです。さて、その次ぎの第六元素――即ち神的靈魂と云ふのは、太一生命が箇々の小主觀に分裂した最初の形で、其れはただ『無象の相』若しくは生存の意志だけを持つて居ます。次ぎの第五元素たる地上的睿知になつて漸く認識の對象たる客觀を生じます。それから第四の動物的靈魂では、外境に對する喜怒哀樂の感情が激しくなつて、種々雜多なる欲望や執着が增して來るのです、ハツサン・カンは第七元素の太一生命を、純主觀的存在と名づけ、第六元素から第四元素動物的靈魂までを、半客觀的存在と名づけました。畢竟、無明の涅槃に感染する度が、濃くなれば濃くなる程、物質は精神に打ち勝つて、客觀性が強くなつて行くのです。それで第三元

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

素から第一元素までは、精神的分子の最も稀薄な狀態であつて、此れを純客觀的存在と名づけます。一切の無生物は此の部類に屬するもので、日月星辰は第三元素から成り、風、火、水等は第二元素から成り、其の他多くの礦物は、第一元素から成つて居ます。以上でざつと、實在及び現象に關する彼の見解を、說明した積りですが、猶一言、重要な點を附け加へると、ハッサン・カンは一元論者であつて、二元論者ではないと云ふ事です。涅槃を精神とし、無明を物質だとすれば、二元論者のやうにも考へられますが、無明も元來は、涅槃の內に含まれて居るので、恰も金屬に銹の生ずるやうに、淸淨靜寂なる涅槃の表面の曇つて來たものが、無明だと云ふ事になります。……」

「いや、お蔭で大變よく分りました。するとハッサン・カンの說は、馬鳴菩薩の唯心論に近い所があるやうですね。第七元素の太一生命と云ふのは、佛敎の阿梨耶識だと解釋すれば、間違ひはないでせう。」

「まあ、もう少し辛抱して聞いて下さい。此れからが愈〻彼の世界觀――Cosmologyに這入るのです。此れもやつぱり、印度古代の傳說に依つた者で、先づ宇宙を永遠不滅の世界と、生滅輪廻の世界との二つに分けます。不滅の世界は、蒼天の最上層に位する涅槃と、その下層にある無色界、色界の二世界で、無色界には太一生命が遍滿し、色界には神的靈魂が浮動して居ます。さて、色界の下層には欲界があり、その下層には須彌山の世界があつて、此等の世界は摩訶劫波の間に一遍壞滅に歸し、空劫を經て再び形成せられる所の、生滅の世界です。生滅界の最高級にある欲界は、須彌山の頂邊（てつぺん）から色界に至る迄の、空間を占めて居る世界で、其處には、神的靈魂と地上的睿知との化合物たる諸天人や、低級の神々が住

んで居ます。欲界以下の須彌山の構造は、普通に知れ渡つて居るものと大差はありませんから、極く簡單に説明してしまひませう。此の山は宇宙の中央に屹立して居て、高さが八萬由旬、周圍が三十二萬由旬。山の北面は黃金から成り、東面は白銀から成り、南面は瑠璃、西面は玻璃から成ると云はれて居ます。須彌山の外側には、七內海と七金山とを隔てゝ鹹海があり、その又外廓に大鐵圍山が繞つて居て、世界全體を包んで居ます。此等の九山八海は、その底にある金輪水輪風輪の三輪に依つて支持せられ、金輪と水輪の厚さは併せて十一億二萬由旬、風輪の厚さは十六億由旬です。ところで、我れ我れ人間は、此の世界の何處に住んで居るかと云ふと、須彌山を取り巻く鹹海の四方に、各々四つの洲があつて、南方にある閻浮提洲が、人間の棲息して居る國土なのです。卽ち閻浮提洲は地球上の大陸に相當する譯で、日本や印度や歐羅巴は、皆此の洲に屬して居るのでせう。その他の三洲にも、一種の人類が住んで居るのださうですが、我れ我れとは容貌や形狀が大變違つて居ると云ふ事です。人間以外の生物の內で、龍鬼、夜叉、阿修羅、緊那羅等の惡神惡鬼は、欲界の下方にある須彌山の中腹から、山麓に亘つて散在し、畜生は大海を主なる住處とし、餓鬼は閻浮提洲の地下五百由旬の所に住み、地獄は四大洲の地下、一千由旬の所にあります。――ハッサン・カンの世界構成說は、大凡そこんなもので、今も度び度び云ふやうに、別段新しい敎義ではありませんが、此れを魔法と結び付けるに從つて、一大異彩を放つて來るのです。」

しやべつて居るうちに、ミスラ氏は知らず識らず鉛筆を動かして、レタアペエパアの上に立派な須彌山の圖を描いた。その圖は彼の談話よりも一層綿密で、山頂から山麓に到る間の、輪廻の世界の種々相

や、其處に生へて居る植物や、宮殿の景色や、ところ〴〵に聳え立つ峰巒の名前や、山腹の中天を□する日や月や星までも附け加へてあつた。

「…われ〳〵は涅槃や須彌山の世界を、傳說に依つてぼんやり想像して居るだけで、實際に見た者もなければ、信じて居る者もありません。殊に科學的智識を備へた現代の人間には、たゞ滑稽な、矛盾に充ちた、古代人の妄想として、考へられるばかりです。然るにハッサン・カンは、自分の說に疑を挿む者があれば、いつでも其の人に須彌山の世界を見せてくれるのです。どうして見せるかと云ふと、最初に先づ、魔法に依つて、其の人の心身を分解し、精神を虛空に遊離させてしまひます。斷つて置きますが、人間の精神は神的靈魂と、地上的睿知と、動物的靈魂との、三元素から形成されて居るのですから、一旦遊離した精神は、更に此れ等の元素に分れます。その時、その人の精神は第六元素の神的靈魂のみとなり、次第に淨化されて、無色界の太一生命に復歸し、遂に昇騰して最上層の涅槃界に還入るのです。もう其の折は、其の人の精神は卽ち宇宙の大主觀と同一であつて、『其の人』は直ちに涅槃なのです。然るに、涅槃は無明の薰染を受けて、今度は反對に下層世界へ沈澱し始めます。第一に無色界へ降り、次ぎには色界へ降り、次ぎには欲界へ降つて、抽象的存在がだんだん具象的存在に變り、たうとう須彌山の頂上へ降つて來る迄に、再び其の人の精神が、神的靈魂に依つて形作られます。こゝで其の人は、欲界の住者たる天人の形體と、性質とを備へる樣になり、遊行自在の通力を得て、或ひは天空に飛翔し、或ひは奈落に潛入し、須彌山の山腹にある惡神の世界から、海底の地獄、餓鬼の世界を洽く經廻つて、六道の有樣を仔細に見る事が出來るのです。かうして結局、四大洲を巡覽して、鹹海中の閻浮提

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洲に辿り着くと、ハッサン・カンが中途まで迎へに出て、其の人を地上のもとの住み家へ連れて行きます。同時に其の人は、いつの間にか天人の通力を失つて、全く以前の『其の人』の姿に復つて居るのです。――

此れがハッサン・カンの魔法の内の、最も重要な、最も驚くべき術なのです。其れは一種の催眠術だと云ふ人があるかも知れません。しかし、催眠術だとすれば、少くとも天人から人間に戻つた瞬間に、夢から覺めた云ふ感じを伴ふ筈ですが、彼の魔法にかゝつた人々は、遂に最後まで、さう云ふ感じを抱かないのです。第一、須彌山の世界へ迎へに出て來たハッサン・カンが、人間になつた後までも、ちやんと眼の前に控へて居るくらゐですから、夢と現實との境界らしいものは、何處にも見付からないのです。世間では魔法だと云ひますが、ハッサン・カン自身に云はせれば、其れは難行の功徳に依つて、體得せられる正法でなければなりません。此の正法を學んだ人は、生きながら輪廻の世界を解脱し、自分は勿論、他人の靈魂をも、自由に須彌山上の涅槃界へ、導く力を持つやうになるのです。さうして此れが、宗教の極致であると云ふのです。」

「成る程、其れでハッサン・カンの魔法と云ふものが、始めて私に分りました。今のあなたのお話がほんたうだとすれば、いかにも其れは驚くべき、宇宙その物のやうに偉大なる魔術です。恐らく彼の魔術の前には、他の一切科學も哲學も、何等の權威をも持たないでせう。――私は實は、そんなに素晴らしい、そんなにサブライムなものだらうとは、少しも豫想して居ませんでした。私の讀んだ本の中には、彼が時折デジンと稱する魔神を呼び出して、不思議な術を行ふ事だけが記してあつたに過ぎないのです。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あゝさうですか、その本の中にはデジンの事が書いてありましたか。」

かう云ひながら、ミスラ氏は何故か非常にあはだゝしげに、突然椅子を立ち上つたが、頭痛でもするやうに片手で額を抑へたまゝ、部屋の四方を緩やかに歩き始めた。

「どうしたのです、何處か氣持ちが惡いのですか。」

「いや、」

と云つて、彼はちよいと首を振つて、何となく切なさうな、或る感情を押し隱くして居るらしい様子で、

「…そのデジンと云ふのは、須彌山の中腹の、夜叉の世界に住んで居る魔神なのです。…」

と、無理に平靜を裝ふやうな聲で云つた。

「ハッサン・カンは、假りに人間の姿に變じて、閻浮提洲へ降りて來ましたが、彼は其の實、色界に住んで居る大梵天の神であつて、先年裟婆を死去した後は、自分の舊の世界に歸り、もろもろの光明佛の間に交つて、未だに其處に生きて居るのです。ところでデジンと云ふ魔神は、大梵天に奉持する家來ですから、ハッサン・カンが人間界に居た間は、いつでも彼の影身に添うて居たのでした。さうして、今でも往々、大梵天の使者となつて、神のお告げを傳へる爲めに、人間界へ降りて來ますが、デジンの聲を聞く事の出來る者は、ハンサン・カンの信者だけなのです。彼の宗旨を信ずる者には、デジンの聲が聞えるばかりでなく、その姿までも、――あの物凄い姿までも、眼に見えるやうになるのです。…」

予は、ミスラ氏が、「その姿」と云つてから更にまた、「あの物凄い姿」と云ひ直したのを、不審に思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はずには居られなかつた。そればかりではない、今迄室内を漫歩して居たミスラ氏はさう云ひ切つて直いて、ぴたりと立ち止まつて、相手の返答を待つて居るやうに、しげしげと予の顔色を窺つて居るのである。

「あの物凄い姿と云ふと、――それでは、あなたはデジンを見たことがあるのでせうか。」

かう云つた予の聲は、かすかなふるへを帶びて居た。予は此の質問を發するのに、何だか心が進まなかつた。此の質問の後に來るものは、恐らしい事實であるやうに感ぜられた。

「さうです。――私は見た事があるのです。私は以前、ハッサン・カンの信者だつたのです。」

ミスラ氏は斯う云つて、漸う少し落ち着いたやうに腰を卸ろした。

「私は正直を云ふと、此の問題に觸れるのが不安なやうでもあり、愉快なやうでもあるのです。それで先から、云はうか云ふまいかと躊躇して居たのですが、話が此處まで進んだ以上、今更隱す必要もありませんから、白狀してしまひませう。――私の覺えて居るハッサン・カンと云ふ人は、意地の惡さうな眼つきをした、吃りの癖のある、前齒のぼろぼろに缺け落ちた爺さんでした。しかし私は、その爺さんから直接に敎化されたのではなく、彼の熱烈なる崇拜者であつた私の父から、信仰を授けられたのです。その時分私の父はハッサン・カンの第一の高弟であつて、殆んど其の師に劣らぬ位の、魔法の達人になつて居ました。父は己れの魔法に依つて、印度の獨立を成就するのだと云つて居ました。私は屢々父の魔法にかけられて、須彌山の世界に遊び、兜率天から八熱地獄の底までも、經めぐつたことがありました。さうして、たしか八つになつた歲に、父は私に魔法を傳授してやると云つて、ヒマラヤの山奥に連

て行つて、パスパティナアトや、ゲダルナアトの靈場を巡禮し、遂にベルチスタンのヒンガラヂの寺院までお參りをしました。それからカルカッタへ歸つて來て、一箇月間の斷食をした後、私はたうとう魔法の秘術を敎へられたのです。私は自由に、デジンを呼び出す事も出來れば、自分や他人の魂を、須彌山の世界へ遊ばせる事も、出來るやうになつたのです。父は死んでから天人になつて、須彌山の最頂上の、善見城に住んで居ますが、私は折々其處へ行つて、戀ひしい父に會つた事がありました。」

予とミラス氏と二人の顏は、明るいデスクの面を隔てゝ、ランプの傘の暗がりの中に相對して居た。予はミスラ氏の、異樣に燃えて輝いて居る瞳の光が、急に氣味惡く感ぜられて俯向いてしまつた。予の眼は自然と、デスクの上の須彌山の圖面を見た。その圖は既に、單なる古人の妄想ではなく、歐洲やアメリカの地圖と同樣に、實在世界の縮圖であるかと考へると、予はもう半分、魔法にかゝつて居るやうな心地がした。

「……その後私は、成人するに從つて、此の間池の端の鰻屋でお話した通り、印度人の宗敎的傾向を、甚しく呪ふやうになりました。父の事業の失敗は、宗敎熱にかぶれた爲めだと、信ずるやうになりました。私は心の底から、ハッサン・カンの邪敎を憎み、民を愚にする妖法であると斷定しました。そして折角覺え込んだ魔法や敎義を、殊更に忘れるやうに努力して、成る可く西洋の科學的思想に親しみ、自分の頭腦を改造しようと試みたのです。此の改造は隨分骨が折れましたが、それでも結局、成効を擧げたやうに思はれました。いや、一時はたしかに、成効したに相違ありませんでした。最近二十年の間と云ふもの、私の心はもう全く印度的でなくなつて、思想は元より感情の作用までも、西洋流に變

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つてしまつたと、信じ切つて居たのでした。すると、つい今から二三箇月前、ちやうどあなたに初めて圖書館で會つた時分です。或る晩のこと、不意に私の眼の前に、デジンの姿が現はれたのです。それから續いて一週間ばかり、デジンは毎日私の傍へやつて來て、天に昇つたハッサン・カンや、私の父の命令を傳へるのです。「お前は何と云ふ心得違な人間だ。お前は決して、お前の頭腦を改造する事は出來ないのだ。お前はもう、昔の信仰や宗教を捨てゝしまつた積りで居るが、お前の父や、お前の教祖は、未だにお前を見放しはしない。その證據には、お前は今でも神通力を持つて居るのだ。噓だと思ふなら、驗して見るがいゝ。さうして、一日も早く、お前の使命を自覺するがいゝ。」――デジンは始終、かう云ふ言葉を私の耳に囁きました。あなたはあの頃、私がひどく憂鬱になつて、沈んで居たのを覺えて居るでせう。私は以前、子供の時代に、デジンを見ると必ず憂鬱になる癖がありました。それを私は、あの時久し振りで味はつたのです。たしかあなたは、二人で鰻屋へ行つた日の朝、圖書館の庭で、何か私に話をしかけたでせう。すると私が、俄かに不機嫌になつて、遠くの方を睨んで居たのを、よもやお忘れにはなりますまい。あの折私は、あなたの聲を聞くと同時に、デジンの聲を聞いたのでした。……」

ミスラ氏は自分で自分の言葉の恐ろしさに堪へざるものゝ如く、肩を縮めて、兩手をしつかりと胸にあてゝ、總身をぶるぶると戰かせつゝ語るのであつた。彼の兩眼は風癲病者の其れのやうに、無意味に虚空に見開かれ、頤は激しい痙攣を起し、額の生へ際には汗がびつしよりと濁滲んで居た。

「……あの時から今日になるまで、私は絶えず、十日に一度ぐらゐづゝ、デジンの襲撃を受けて居るのです。デジンはいつも、「魔法を試して見ろ。」と云つて、執拗に私を促すのです。私は隨分長い間、彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の忠告に反抗して居ましたが、此の頃になつて、自分の心に少年時代の神通力が、現在殘つて居るかうかと云ふ事を、一遍試めして見なければ、不安心のやうな氣になりました。それで、十日程前、先月の末の或る晩のこと、私はたうとう思ひ切つて、此の部屋の中に閉ぢ籠つて、二十年來一度も口に上せなかつた、秘密の呪文を唱へて見たのです。すると、どうでせう、私の身體は忽ち分解作用を起し、第六元素に還元した私の靈魂は、飄々と天空に舞ひ上り、涅槃界から無色界に降り、無色界から色界欲界と順々に降つて、一瞬の間に善見城の父の住所に着いたのです。父は豫め私の來るのを知つて居て、涙を流して私に意見を加へました。それから先は精しく説明する迄もありません。幼い時分に、幾度も巡歷した事のある六道の世界を、父に案内されながら通り過ぎて、途中で父に別れを告げ、難なく人間界へ戻つて來ました。――結局私は、未だに通力を備へて居ると云ふ事を、證據立てられてしまつたのです。私の頭を組み立てゝ居る科學的智識は、その根底から動搖し出したのです。あなたは多分、目下の私が、どれ程煩悶して居るかと云ふ事を、推量して下さるでせう。私はどうして、私の習つた化學や、天文學や、物理學や、生理學と、此の須彌山の世界とを調和させたらいゝでせう。科學は我れ我れに經驗を重んじる事を敎へます。而も須彌山の世界の光景は、私に取つては實に確かな經驗なのです。科學上の事實よりも、更に明かな事實なのです。私の腦髓は、何處までも印度人の腦髓でした。私はやはり、非科學的な人間に生れて居たのでした。」

さう云つて、ミスラ氏は腹たしげに髮の毛を掻き毟りながら、机の上に突俯してしまつた。

こゝまで書いて來れば、讀者は恐らく、それから以後に起つた其の晩の出來事を、既に想像したであらう。最初に魔法の說明を聽き、次ぎに魔法の實驗談を聽いた予は、最後に自ら、實驗する事が出來たのである。

予はミスラ氏に、斯う云つたのであつた。

「あなたは今、自分の神通力に依つて、遍歷して來た須彌山の世界を、たしかな事實だと信じて居る。斷じて夢や妄想ではないと主張して居る。さうして、夢でないが爲めに、あなたは煩悶して居るのである。就いては其の須彌山の世界を、私にも一つ見せてもらひたい。果して其れが催眠術でないかどうか、今度は私に判斷させて貰ひたい。若しも私が、自分の經驗から、催眠術である事を證據立てたら、あなたの煩悶は全く消滅するだらう。」

予の發案に對して、ミスラ氏は强ひて反對を唱へなかつた。のみならず、彼は自分の魔法を、此の間から他人に試しては見なかつたので、彼の方にも充分な好奇心があるらしかつた。そこで直ちに、實驗が行はれたのである。

予は其の晩の經驗を、——一生忘れる事の出來ないあの經驗を、いかにして讀者に傳へたらいゝであらう。あの時の世界の有樣や、予の心持ちを、今になつて考へて見ても、予はやつぱりミスラ氏と同樣に、事實であるとしか思はれない。少くとも、其れは決して夢や催眠術ではない。

予が目擊した須彌山の世界を、詳細に語らうとすれば、何年かゝつても語り盡す事は出來ないだら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

う。其れは殆んど、宇宙と同量の紙數を要し、文字を要するに極まつて居る。こゝでは單に、その內最も興味ある、最も重な經驗の二三を、簡單に記載するだけにして置かう。

予は先づ、ミスラ氏と向ひ合つて、倚子に腰かけたまゝ、能ふ限り呼吸を止めて居るやうに命ぜられた。予には其れが寸毫も苦痛でなく、いつ迄でも、極めて愉快に續けられた。予の感覺は、第一に嗅覺から、味覺、觸覺、視覺と云ふ順序に消滅して行つて、聽覺だけがやゝ暫く殘つて居た。予の耳には長い間、ミスラ氏の咒文の聲が聞え、置き時計の十一時の鳴るのが聞えた。やがて、聽覺も全然消滅してしまつたが、意識は極めて明瞭で、五感以外の、或る一種の內感覺が保たれて居た。予は確實に、自分が今何をされつつあり、いかなる狀態にあるかを知つて居た。予の存在の全體は、たゞ清淨なる恍惚感だけであつた。予はもう、神的靈魂になつたらしく、だんだんに上方に向つて昇騰しつゝある事が、內感覺に依つて知覺された。

程なく、太一生命に合して、無色界に達したやうであつた。予は、「予」と云ふものが、稀薄なる微氣的大身體である事を感じた。けれどもしまひには、その感じさへもなくなつてしまつた。恐らく、涅槃界に這入つたのであつたらう。……

……………………………………………

予は再び、おぼろげなる意識を持ち始めた。何か、存在を慕ふ傾向と云ふやうなものが、頻りに予を下方へ、引つ張つて行くらしかつた。

予の周圍に、予と同じやうな、多數の靈魂の浮動するのを知つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

予の内感覺は、次第に元のやうにはつきりして來た。予はいつの間にか、『予』と云ふものが、密着不離の皮衣に包まれて居る事に心付いた。予は今までの内感覺の外に、運動感覺を持つやうになつた。皮ふの裡には、既に筋肉があり、内臓があるらしかつた。須臾にして、五感が一つ一つ、嗅覺を先にして恢復して行つた。予の瞳は光線を見、色彩を見、自分の身體を見た。予は、欲界の下層にある、須彌山の頂上に住む天人であつた。予は狂喜して躍り起つた。……

……………………………………………………

予は天空を飛行して、山頂から山麓へ下つた。須彌山の四方を形成する四種の地質は、各々その色を虚空に反射して、北方の空は金色に輝き、東方の空は白銀の光に燃えて居た。四天王の世界を過ぎて、廣目天や持國天等の風貌に接した時、予は圖らずも、奈良東大寺の戒壇院にある彼等の彫刻を想ひ浮べた。

諸佛と惡魔との戰が到る所に演ぜられて居た。持軸山の頂に立つて、數萬由旬の高さから、下界に放尿して居る阿修羅もあつた。日輪と月輪とを迫害して居る惡神もあつた。予は、その外無數の莊嚴な世界や暗憺たる世界を見たが、就中、最も予の心を傷ましめたものは、鹹海中の弗婆提の洲に住んで居る、我が亡き母の輪廻の姿であつた。

母は一羽の美しい鳩となつて、その島の空を舞つて居た。さうして、たま〳〵通りかかつた予の肩の上に翼を休めて、不思議にも人語を囀りながら、予に忠告を與へるのであつた。「わたしはお前のやうな惡德の子を生んだ爲めに、その罰を受けて、未だに佛に成れないのです。私を憐れだと思つたら、どうぞ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此れから心を入れかへて、正しい人間になつておくれ。お前が善人になりさへすれば、私は直ぐにも天に昇れます。」――から云つて啼く鳩の聲は、今年の五月まで此の世に生きて居た、我が母の聲そつくりであつた。

「お母さん、私はきつと、あなたを佛にして差上げます。」

予は斯く答へて、彼女の柔かい胸の毛を、頰に擦り寄せたきり、いつ迄もいつ迄も其處を動かうとしなかつた。

(完)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

面白愉快な十一月號

面白倶樂部

頁數大增加
體裁頗優雅

■特別大懸賞募集■

人情小說 朝顏日記……長谷川時雨

■八百屋の娘（秘史）本田美禪
■相馬大作（歷史小說）武田仰天子
■變つた娘（新小說）北島春石
■池底の金鞍（傳說）稻岡奴之助
■幻惑（新小說）竹の島人
■烈女さつ（新講談）大白川
■ふるいけ（落語）鈴家雨
■安政五人男（講談）大河內翠山
■權八小紫（情詩）花兒玉外
■女の心底（活動）山鳥平

▼結婚ローマンス
▼怪傑情話
▼御存じですか
▼新聞の新聞
▼少年少女欄
▼婦人たから帳
▼學校及び學生
▼兵舍の窓から
▼活動寫眞
▼詠史川柳

歷史小說 運命の花……平井晚村

■骨相學より見たる婦人の顏

■冥途の綾菊（清水冠者）

定價 十五錢 郵稅一錢五厘 振替東京六六二九

發行所 東京本鄉 講談社

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

主幹
醫學博士 文學博士 富士川
醫學博士 永井
醫學博士 藤浪剛

本邦唯一學術雜誌

人性

月刊雜誌 毎月一回二十日發行

一部定價 金貳拾五錢 郵税壹錢

六冊（半ヶ年）前金郵税共金壹圓五拾錢　十二冊（一ヶ年）前金郵税共金貳圓八拾錢

本誌の一大改良

本誌ハ時代ノ進歩トソノ神精的要求トニ顧ミ本號ヨリ大刷新ヲ斷行シ共ノ内容ノ充實ト平易トヲ謀リ紙數ヲ倍大ニ増加シ一部定價金貳拾五錢ニ改正セリ冀クハ舊ニ倍シ愛讀ヲ乞フ

第十三巻第拾號（十月二十日發行）目次

論説

早教育の根據　文學士 木村久一

余の戀愛觀（中）　醫學士 森田正篤

叢談

雙兒の話　理學士 阿部余四男

色像の諸學説　ラツキイエシユ

老若の標準　莊司秋次郎

身體考　富士川一我

彙報

藝術的能力の遺傳●遺傳の中心問題●親の年齢及び智能と兒子數との關係●日本人及アイノ人の掌蹠皮膚隆線に就て●遺傳と教育●北海道に於ける土偶の分布●錯覺と幻覺との價値●盲人の精神檢査●盲兵と農業●貧民の感覺と感情●獨逸に於ける化學の發達●日本の食物問題●アルコホリスムスと救濟事業●未成熟者に對する社會の態度

雜錄及び新著批評

東京市本郷區龍岡町三十四番地

發行所　振替口座東京三八二二二番　電話下谷一六七二番・四〇七九番　人性發行所

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA